明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

明治三十九年十月五日発行
毎月一回五日発行

女學世界



第六巻
第十三號

博文館發行

女學世界 目次

第六巻 第拾參號

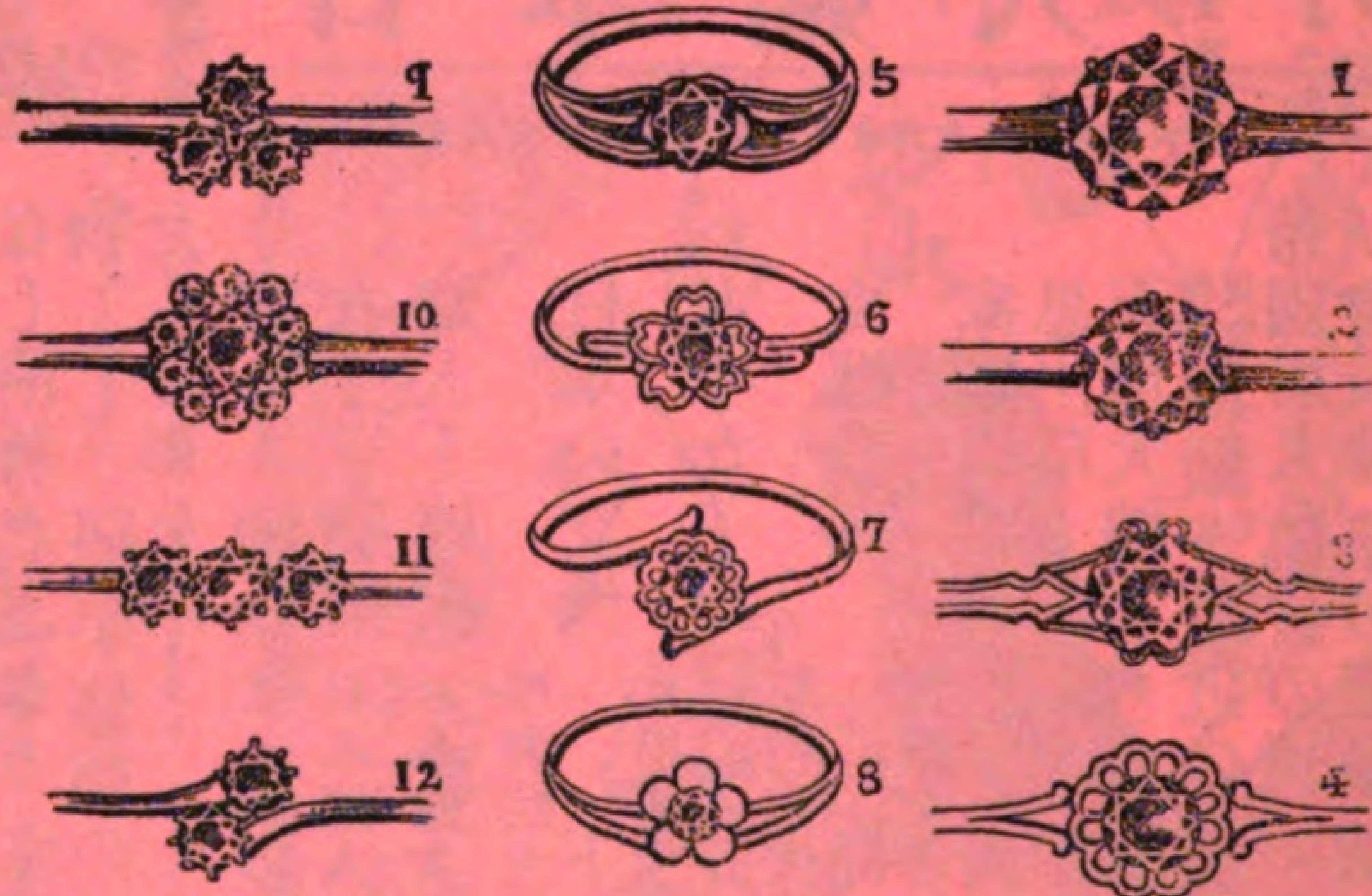
雜錄

詞藻

小說

口繪

寫眞版



金剛石入金指輪

(1)甲價貳千圓(2)甲價九百五拾圓乙價八百圓丙價七百五拾圓(3)甲價七百五拾圓乙價六百圓丙價五百圓(4)甲價參百圓乙價貳百五拾圓丙價貳百圓(5)甲價貳百圓乙價百八拾圓丙價百六拾圓(6)甲價五拾圓乙價百卅五圓丙價百廿圓(7)甲價壹百圓乙價八拾五圓丙價七拾圓(8)甲價六拾圓乙價五拾五圓丙價五拾圓(9)甲價貳百廿圓(10)甲價參百七拾五圓(11)甲價參百六拾圓(12)甲價貳百圓乙價百五拾圓

(附記)

當店調製のダイヤモンド入製作品は何時にても原價にて他店と交換又は些少の割引にて買戻し候

貴金屬宝石
美術携帯品商
婦人粧飾品

東京市京橋區南傳馬町三丁目

大西白牡丹

特 電話本局三十番

(甲の一)

第八年第一號

日本婦人

十月五日發行

大刷新の本誌を見よ！

本誌は本月を以て大刷新をなし清新高潔なる家庭の讀物として研學修德の好侶伴たらむ事を期す

主要なる讀物は左の如し

女子と職業（日本婦人）
婦人と娯樂（日本婦人）
日本の女性　學習院女學部長　下田歌子
古今女子比較論　文學博士　井上賴圀
文藝講話　早稻田大學講師　島村抱月
家庭の讀物　實踐女學校副校長　青木文造
思出草　中島孤島
天照大神（口繪）　吉川準
常宮周宮兩殿下最近の御眞影（寫眞版）
帝國婦人協會の規則書及び會員募集の記事細則あり

一部定價金廿錢郵稅二錢
郵代壹割增

第五號

趣味

十月一日發行

本誌の主要なる記事

小說に於ける女性の變遷　水谷不倒
繪馬の名畫　饗庭篁村
雁次郎論　桃栗山人
繪畫に音樂　村田丹陵
野球雜感　安部磯雄
露西亞文學談　長谷川二葉亭
活人形の話　安本龜八
悲慘なる畫家の半世　鉛筆生
五二共進會評　薄田斬雲
お伽劇吹雲の夜　中島孤島
秋の夜（口繪）　吉川靈華
オテロ（原色版）

定價壹部廿貳錢郵稅貳錢
郵代一割增

發行所　彩雲閣　東京神田表神保町

女（甲の二）

廿 丁目

女（甲の三）

秋興



川崎蘭香筆

東京府立職工學校長　今景彦君著

理科世界 木の研究

（既成發行）

全一册洋裝美麗書
表紙紙數百六十頁
正價金貳拾五錢
郵税六錢

曩に水の研究として五行讀本の第一册を出版せり今回は木の研究として今校長の著述に成れり木の世界の如何に森羅萬象に關係あるかは大に研究を要すべきなり、今氏先づ一本の木からして説開き**林の木、伐りたる木、加工したる木**に及ぼし終りに**百種**の木を羅列して**其特質應用を細説**せり挿圖數多讀者の趣味を得る鮮少にあらざるべし

東京 博文館 本町

博愛 赤十字石鹼

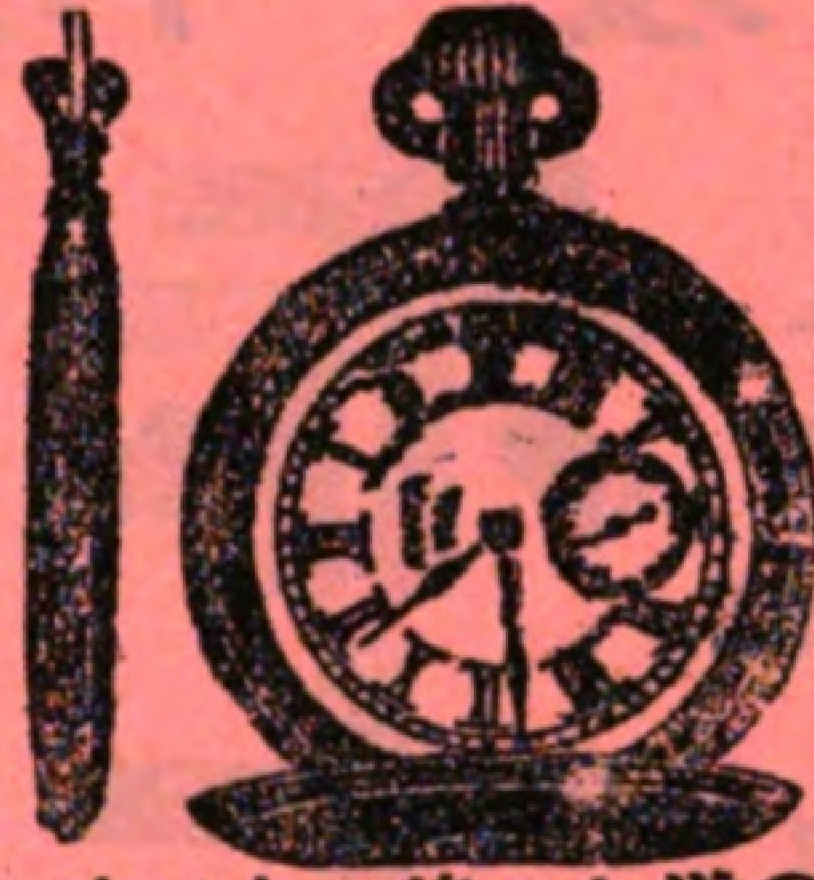
◎二十世紀◎

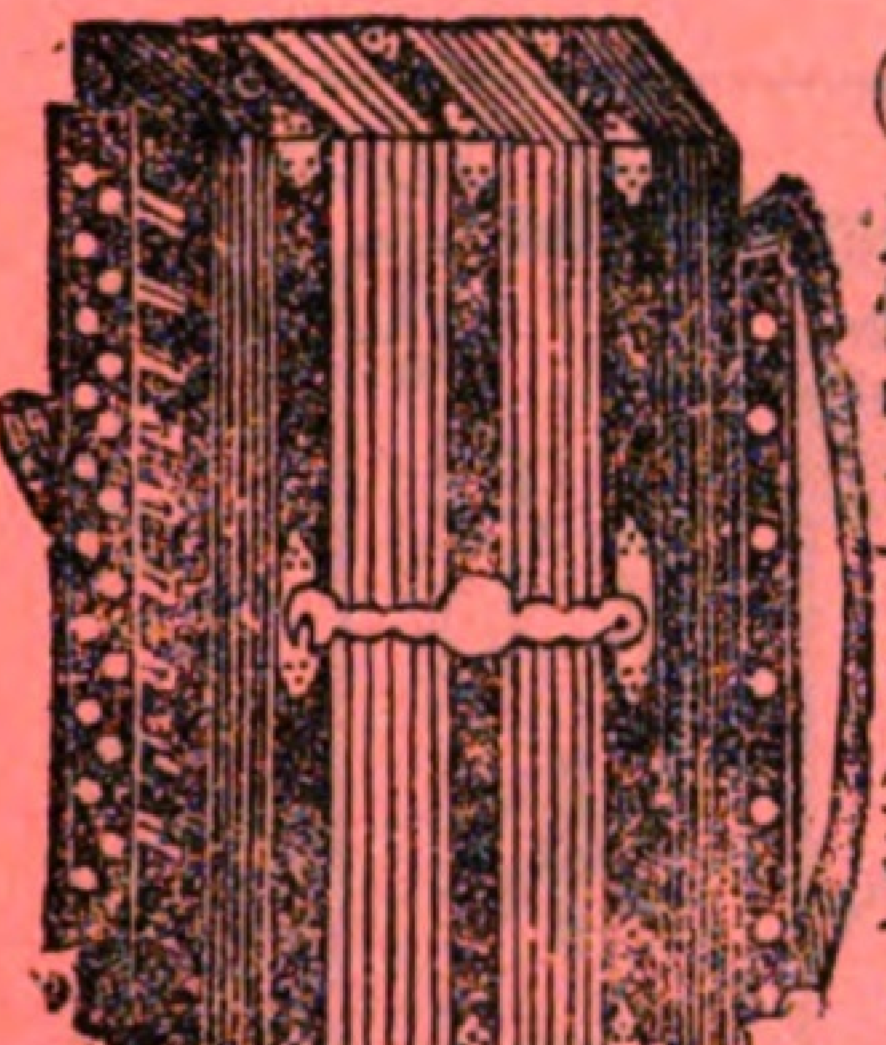
◎貴紳淑女用◎

我社の發賣に掛る**博愛赤十字**石鹼は創業以來拾數年間苦心慘憺の結果我社獨得の技術を以て製出せし所最純良品にして**衛生上**實に缺く可からざるもの也**博愛赤十字石鹼**は體裁芳香共に他に比類なく高尚優美にして**進物**用として最適切品なり

東京市本所區柳島梅森町　**井村整興社**　電話下谷五十二番

女(乙の一)





女(乙の二)

東京京橋區大鋸町十二

女子文壇社發行書目

（電話本局六百七番）

（郵便振替口座第壹七貳九番）

報知新聞記者中村木公君編

實地精査 女子遊學便覽

（新刊好評）

全一冊中判
女學校長寫眞版官像入
正價參拾錢
郵稅四錢

萬朝報評　都下各女學校の世評と、其校則の概要を掲ぐ、坊間幾多の遊學案内が、麗々しく改版と稱し訂正增補と號しながら、數年前の舊規則を掲げたるものに比すれば、調査は善く行届けり、尚ほ職業案内及學資の概算をも加へ、殊に無鐵砲に東京遊學を鼓吹せずして、東京遊學の危險なるを說き、嘗て都下の新聞に連載せられたる女學生誘惑の手段等をも書き添へたれば、上京に念ある女學生と其父兄とには頗る便なるべし。

皇太子妃殿下賜上覽

每月一日發行

作文練習雜誌

女子文壇

價　見本十戔　半年七十六戔

東京京橋大鋸町　女子文壇社發兌

毎號木彩畫、寫眞版の口繪數葉入は優美

二卷拾三號　十一月一日發行

女子文學全書第一編

本居東宮侍講、小杉文學博士序文
下田學習院女學部長題詠
國學院學士小森松風君著

（好評）

美文作法

大判二百三十頁　洋裝
改正
正價四拾錢
郵稅不要

詩と美文

河井醉茗君著　山中古洞君畫

（好評）

玉蟲（たまむし）

製本新式
上製優雅
實價五拾錢
郵稅不要

小說美文

鈴木秋風君著　太田三郎君密畫入

（好評）

朝晴（あさはれ）

最新式製本
實價四拾錢
郵稅不要

女子懸賞文集

中内文學士序文　名家選評

（好評三版）

全一冊
四百廿頁
上紙刷美
正價廿五錢
郵稅不要

女子文學全書二編

坪井理學博士、山田美妙兩君序文
小森松風君編

（製本出來）

大判二百卅頁

言文一致文範

正價四拾錢
郵稅不要

論より實地明治式の新文章言文一致體の好モデルを各部門每に掲げ傍ら起原發達種類熟練法等迄面白く說いてありますから是で充分練習試作が出來ます文範作例は皆當代名家の粹英實用雅美兼帶の言文一致體は淸新の思想を發揮すべき明治女性の必要機關又家庭文房の珍としても錦簇花園の觀ある此文範をおすゝめします

各書の詳告は每號の女子文壇に就て一覽を願ひます

（最寄書店に無くば郵便振替貯金法により直接本社へ御注文を乞ふ）

（乙の三）

◎衛生無二殺菌防腐之三種石鹼

登録商標

ホルマリン石鹼 東京圓城
WHOLESALE DRUGGIST TOKYO

消毒 化粧 洗濯

◎定價
消毒用 金二十錢
化粧用 金十五錢
洗濯用 金五錢

今般弊店創製發賣のホルマリン石鹼ハ現今醫學藥學兩社界に於て無害にして卓絶なる防腐藥として賞用さるゝ「ホルマリン」を適量に含有せしめたるものなれば其効力の顯著なるハ彼の諸病原菌中に於て最頑強の脾脫疽菌も本品二萬倍の稀薄液に因て死滅すと日本藥局法註解に下山藥學博士の記述せられ有をと以ても明かなり故にシラクモ田虫水虫シツ、ヒゼン、ニキビ、ソバカスの如きハ勿論痳病、癩病、等の諸毒を消ス殊に本石鹼の特色は如斯効用に兼ぬるに優美高尚最も世人の嗜好に適する高貴の香料を配伍しあれは其佳香云はん方なく馥郁として使用後と雖ども長く衣体に薰るべし請ふ論より証據御試みありて必ず衛生保健の完全を期せられんことを

官許本舗 東京市日本橋區本町三丁目七番地

登記商號 圓城商店

初秋



三宅克己筆

女（丙の一）

女(丙の二)

女（四の三）

謹告

弊店一手販賣の山葉風琴及鈴木ヴワイオリンは本年十月一日より定價を下記の通り改定し一層品質を精選し博く御需用に應じ可申此段謹告候也



山葉風琴改正定價表

第壹號	一八、〇〇
第貳號	二六、〇〇
第參號	三三、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	三七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾參號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷用オルガン壹號	一三〇、〇〇
同貳號	一七〇、〇〇

鈴木ヴワイオリン改正定價表

號外A品	二、〇〇
同B品	三、〇〇
同C品	四、〇〇
壹號品	五、〇〇
貳號品	六、〇〇
參號品	七、〇〇
四號品	八、〇〇
五號品	一〇、〇〇
六號品	一二、〇〇
七號品	一五、〇〇
八號品	一八、〇〇
九號品	二三、〇〇
拾號品	二六、〇〇
拾壹號品	三〇、〇〇
拾貳號品	三五、〇〇
拾參號品	四〇、〇〇
特製壹號品	五〇、〇〇
同貳號品	六〇、〇〇
同參號品	七〇、〇〇
同四號品	八〇、〇〇
同五號品	一一〇、〇〇
同六號品	一三〇、〇〇

弓

號外品	、七〇
壹號品	一、〇〇
貳號品	一、五〇
參號品	二、〇〇
四號品	二、五〇
五號品	三、〇〇
六號品	三、五〇
七號品	六、〇〇
八號品	八、〇〇
九號品	一〇、〇〇

箱

壹號品	一、五〇
貳號品	二、〇〇
參號品	二、五〇
四號品	三、〇〇
五號品	三、五〇
六號品	四、五〇
七號品	七、〇〇
八號品	八、〇〇

東京市京橋區竹川町十三番地
合資會社 共益商社樂器店
電話新橋五二九
電信略語〔ヨキ〕

女（丙の四）

清香



跡見玉枝筆

朝つゆ



市川秀方筆

女(丁の一)

高須梅溪著

新刊

青春雜筆

（菊版美裝）

萬朝報評傳記あり評論あり美文あり書簡文あり飜譯あり漫筆あり當代青年社會に持て囃さるゝ著者が熱血熱情を披瀝したる諸篇中最も粋なるを集めたるものなり一文一章いづれも棄て難き心地せらるれど中にも卷頭青年の煩悶と當代の小説一卷尾過度時代の露伴氏の如きは論理精透觀察鋭利著者の著作中格段趣味あるものと看たり其文才その筆鋒蓋し巨匠の壘を摩するの概ある者乎

定價金七拾錢
郵税金拾錢

宮田秋堂作譜

新曲

琵琶歌

（曲譜入石版貳度摺美裝）

全三冊
各金廿五錢
郵税金四錢

句は古今名家の粋を集め　調は斯界に聲譽を博せる　秋堂宮田氏の譜　卷頭獨習者の爲に詳細なる彈琴法を附す今や月高く秋風清涼を覺ゆるの候　壯烈の調悲哀の句以て諸君の精神に美妙なる欣感を與ふるもの有るべし希愛誦を賜へ

鏑木清方畫

菊池幽芳原作
溝口白羊作歌

己が罪歌

クロース綴
頗美一本
全一冊
定價金四拾錢
郵税金四錢

既に童幼の口にも膾炙せる「己が罪」は新に清楚哀婉の調となりて世に出たり箕輪環の煩悶塚口虔三の悔恨櫻戸子爵の高潔何れか當代人士の胸に新らしき追想を呼起さざる情思纏綿の趣は玆に清新の形を備へて現はれ來りたり希愛誦を賜へ

發兌元

東京市京橋區五郎兵衛町廿二番地
美也古書房

大阪市東區南渡邊町四拾參番地
振替貯金口座二八二三
杉本書店

（丁の二）

丸山晩霞先生主幹

水彩畫講義録

滿壹ヶ年卒業（第壹號 十月發刊）

本會は地方邊陬の地にありて良師を求め難き者の爲に水彩畫法の通信敎授をなす、本會に入會する者は都下紅塵の裡に良師を求めて却て『自然』の恩師と千里隔つるの憾なく親しく其温懐に抱かれて詩心を養ひつゝ座作ら其技を習得することを得ん而して三色版の利用と色彩及畫法に關する丸山先生の講話とは他に類を見る可らざる本會の特色として誇る所のものなり。

本會清規

△本會々員たらんとする諸君は住所姓名を詳記したる申込書を差出さるべし△本會修業年限は一年とす△會員は會費（一ヶ月六十錢）を前納すること（東修不要）△會員には毎月一回講義錄を發送す△會員は月一回自作繪畫の修正を乞ひ或は繪畫上質問をなす事を得（此場合會員は返信料を負擔せらるべき事）

發行所 東京京橋區五郎兵衛町廿二 水彩畫研究會

中村春雨著 小説 **無花果** 定價 金七十錢 郵税八錢

無花果は在米の陳腐なる舊套を脱して材を宗敎に執り、信仰と人情の衝突、家庭と社會の撞着より生ずるあらゆる悲劇が眞の好味の如き女主人公の溫情と及び希望と眞心との復活とによりて遂に愛と信仰とに滿ちて和氣靄々たる樂天地になり行く光明小説にして百讀愛誦措く能はざるもの、讀む者亦此樂天地の一人となるべく家庭最良の讀み物也

木下尚江著 小説 **火の柱** 金卅五錢 郵税六錢

阿部磯雄著 **理想の人** 金七十錢 郵税八錢

靑柳有美外數十家 **戀愛觀** 金三十錢 郵税六錢

木下尚江著 小説 **良人の自白**（全四册） 上中下各卅五錢 續篇五十五錢 郵税各六錢

伊藤銀月著（第三版） **男女觀** 定價 金十五錢 郵税二錢

（目次大要）

●男女容貌の近似●蕩婦と淫婦●女丈夫は淫婦也●吝なる男に對する女●善き意味に於て男の如き女●物食ふ顔の美醜●女の手管と男の手管●老人虐待贊論●男の遊びと女の遊び●女學生の腐敗を喜ぶ●處女觀●今のハイカラ式細君は女權を放擲する者なり●男の腹とは如何なる者ぞ●男女雜觀●生れ月と容貌性格

嚴谷小波 **喜劇七草**（小説） 金八十錢 郵税八錢

中村春雨 **密航婦**（小説） 金七十錢 郵税八錢

柳川春葉 **緣の糸**（小説） 金六十錢 郵税八錢

與謝野晶子 **夢の華**（詩集） 金八十錢 郵税六錢

薄田泣菫 **白羊宮**（詩集） 金壹圓 郵税十錢

女（丁ら三）

發兌元 東京京橋區五郎兵衛町 金尾文淵堂

(丁の四)

●一圓の舶來石鹸よりもクラブ洗粉は衞生美身術に適合す

●千種以上ある洗粉の中にもクラブ洗粉のみは石鹸に優れる特點あり



總代理店

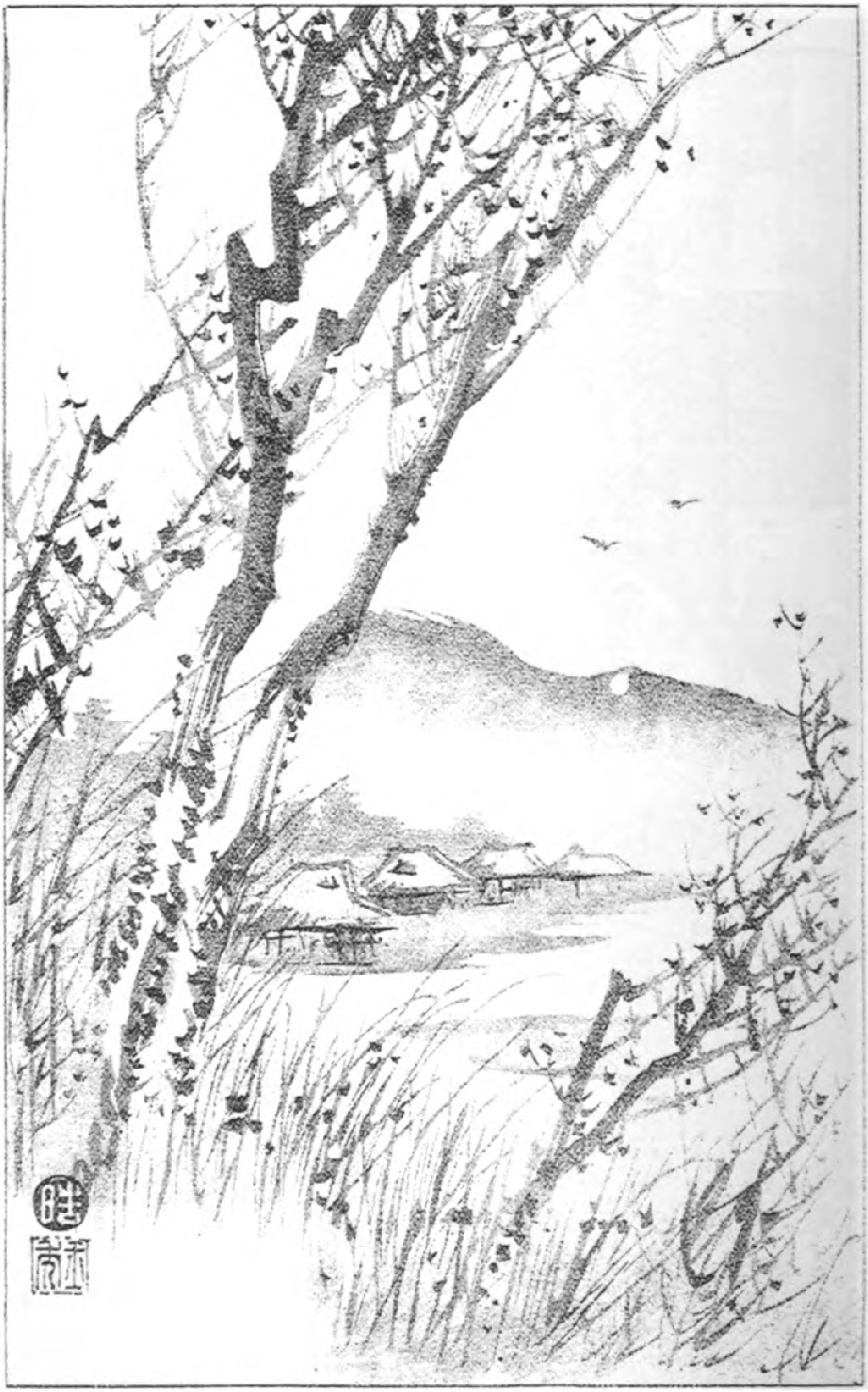
總輸出入雜貨 化粧品問屋

中山太陽堂

神戸本店 大阪支店

●内外各地の信用ある小間物化粧品店及呉服店にて販賣せられつゝ有之候御便宜御用命相成度候

晩秋



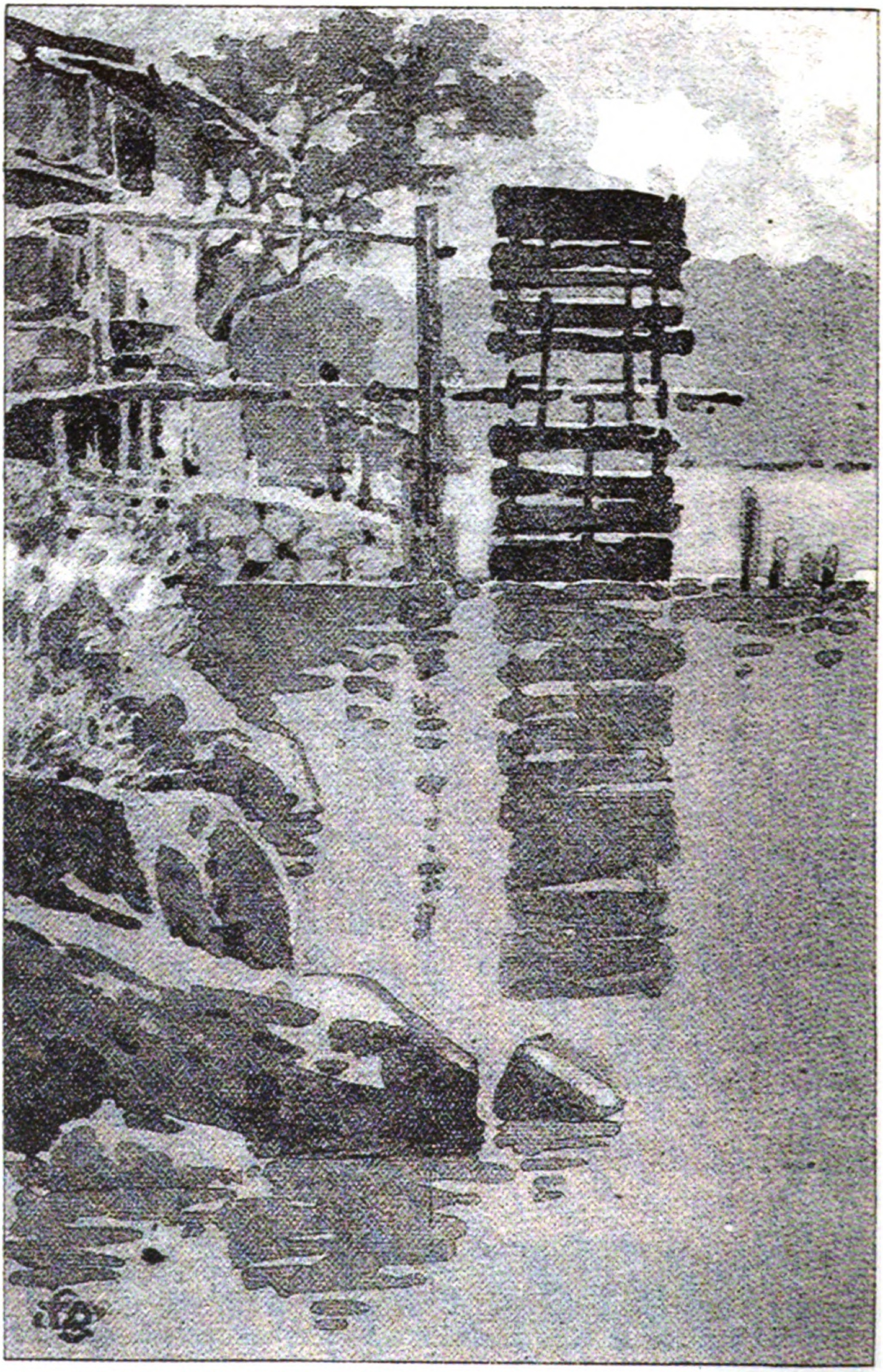
戸田玉秀筆

はつ袷



柴崎美方筆

秋の夕



大下藤次郎筆

霧



川崎蘭香筆



各女學校御用

附屬品並に造花器械類一式

東京市日本橋區横山町二丁目十六番地

天野卯兵衛

電話(長)浪花一六四三番

（切取線）

營業目錄御入用ナレバ此切取ヲ添ヘ御申越被下度候

縣　郡　町村

女學世界　第六卷第十三號

（戊の一）

山島亭主人著

事物見立料理

菊版優美製本全壹册●賣價金五拾錢●郵稅六錢

料理に意匠を凝らして嘉賓を招請するは渉からぬ興味ある事なり此書は彼の意匠家を以て自ら任ずる山島亭主人が其豐富の意匠を以て得意の庖刀を揮はれたる一種無類の料理法を懇切丁寧に記述したる希代の奇書也卷中載する所凡て三十二題何れも其見立の新穎にして趣向の輕妙なる人をして歎賞已まざらしむ世の好事家宜しく速に一本を購讀して花晨月夕嘉賓を招請する意匠料理の摸範と爲すべし

（目錄）雪づくし、雨づくし、十二月、五節句、花がるた、十二支、昔噺づくし、七福神、大物づくし、長物づくし、英雄かゞみ、歴史ばなし、都名所、江戸名所、近江八景、名古屋東照宮祭の山車づくし、橋づくし、川づくし、大津繪、流行歌づくし、男おどり、假名手本忠臣藏、花車姿元祿模樣、菅原傳授手習鑑、義太夫寄席番組、同當太夫語物番組、同金襖づくし、始づくし、六歌仙、名吟發句集、征露戰記、銀づくし、金づくし、

名古屋市鐵砲町二丁目

發行所 玉潤堂 三輪文次郎

振替貯金口座一八七九番 （長）電話五百十三番

賣捌所 東京日本橋通大倉、中橋文榮閣、林平、神田神保町中西屋、上田屋、修學堂、大阪吉岡平助

前田閑亭君著

全一册洋裝菊判
正價貳拾八錢
郵稅六錢

口繪石版畫挿入
紙數百五十頁



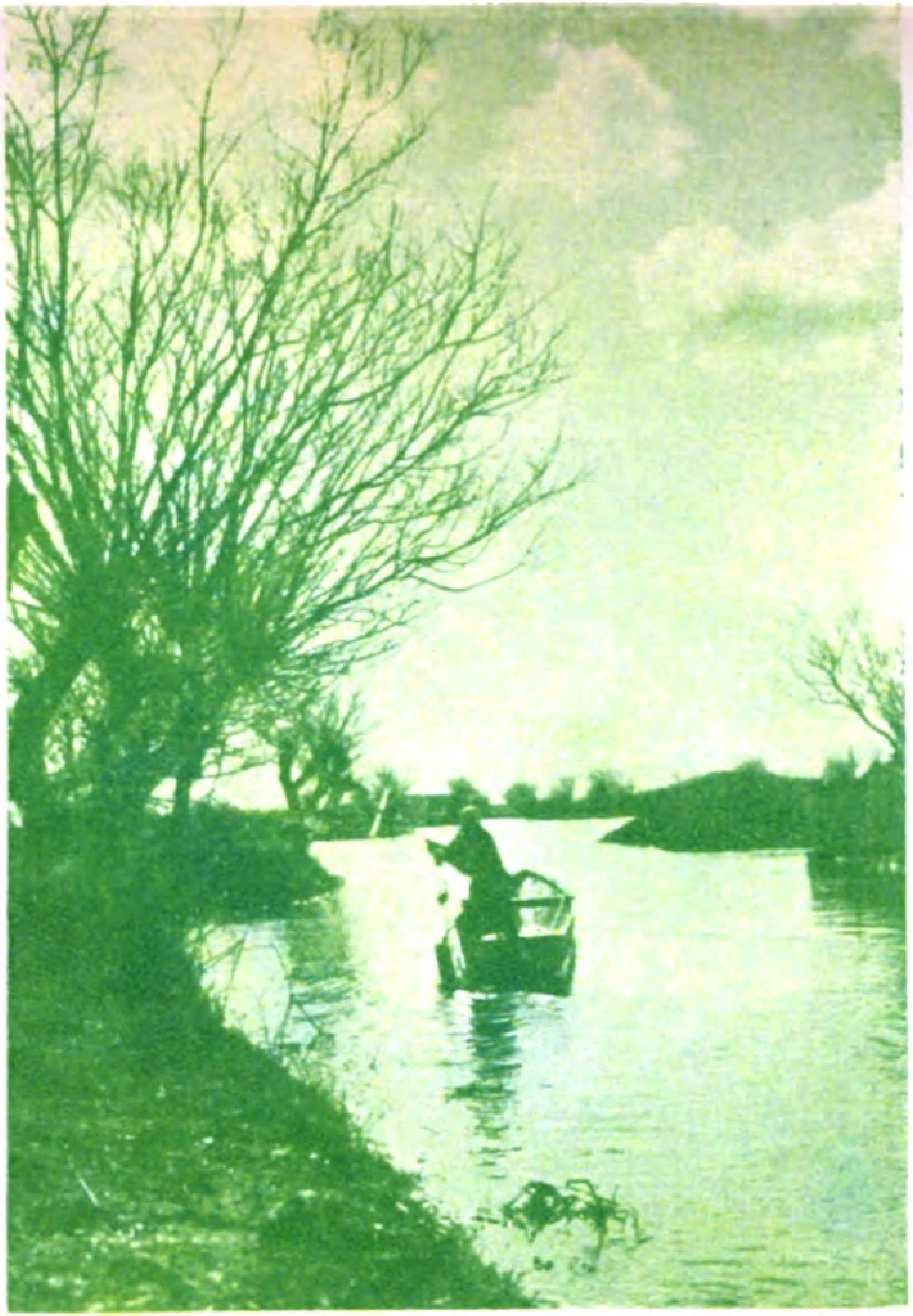
抑も小獸鳥魚の飼養は、家庭娛樂に最も好適し且つ高尚の品性を陶冶するの等諸多の方面に益すること尠なからず、就中淸靜にして優雅なるを金魚の飼養とす、蓋し金魚は池沼汚泥中の一產物なりと雖も、容姿纖麗にして、嬌柔愛すべく、圖池の美觀、室內の裝飾上缺くべからざるものなり、近時歐米各國此魚の飼養流行し、一尾數十金にのぼるものありと聞く、然れども金魚は飼養宜しきを得ざれば、忽ちにして斃死すべきに依り之が飼育には頗る注意を要す、著者は父祖以來此等の娛樂を好み、古來よりの傳說と實驗とに基ける飼養の方法を記錄したるもの一冊をなせり、今之を輯補して世に公にす、幸に養魚家の參考となり、併て家庭娛樂を裨益する一端とならば足れり。

東京本町 博文館

靜寂



伊勢の二見浦近傍



江州八幡附近



西四辻男令孃正子（歩兵大尉山内豊男氏に嫁す）



池田侯爵令妹嚴子（南部利淳伯に嫁す）

西洋祭りの飾り物



佐藤愛麿氏の家庭



文藝俱樂部 第拾貳卷第拾四號 定期增刊

拾月拾五日發行

全一冊 正價貳拾五錢 郵税貳錢五厘



秋の夜の寂しさを慰むるもの、肩の張らぬ面白き書を讀むに如かじとて、こゝに此の一巻を公けにす。今の代に名高き講談師と落語家とを選び、おの〳〵得意の辯を揮ひしを其の儘速記す。しかも其の話題を古今の美人に採り、諸名家が競ひに競ひて其の特技を發揮す。世の才子佳人は必ず一本を購ひ求むべき稀代の珍書なり。左に目次の概畧を記し置くべければ、來る十五日の發市を待ちつゝ、賣切れざる内愛讀を祈る！

目次概要

東京 博文館

（己の一）

中邨秋香先生監修

文章まなび

東京神田小川町 大野書店

四六判二四形七百四十四頁美本特製定價壹圓郵稅金六錢

東京堂●目黒書店●中西屋●林平次郎●松邑三松堂●文林堂●

十月二十日限賣價金九拾錢

此書は女子が師につき教へを請はずとも將た學び舍の裏にありて獨り此書を傍にせばいかなる文も立ち所に成れる良書なり其内容は首めに類題類語をかゝげ類語を起句叙句結句に分ち各類語に次て作例を示し左の部門を七百四十餘頁に包括す現時の淑女才媛はこの豐富潤澤なる文語を見初め賜ふを得ば知らず識らずの間想ひ湧き文の成れるは言はずもがな

○●消息文 賀儀●招待●哀悼●慰問●依賴●報知●誘引●謝禮●請求●紹介●音物

記遊文 春●夏●秋●冬●其他 送迎文●祝祭文等各種●○●○

高等女學科講義

目下入會の好機也

高等女學校代用通信教授

本會講義錄は言文一致を以て極めて分り易くし且難字には一々註解を施し又挿畫を多くし獨習字の遺憾なきを期す▲入會金貳拾錢會費六ヶ月分貳圓五拾錢▲講義錄第八卷既刊▲組織は規則に詳也規則入用の方は二錢郵券送附の事

會長 伯爵夫人 澤 麟子　副會長 板倉種子

東京市麴町區富士見町四丁目三番地 帝國高等女學會

女(己の三)

御料 御園白粉（みそのおしろい）

畏き邊りの
御料に召させ給ふ

完全無鉛　高貴御化粧料

御料御園白粉（みそのおしろい）

◉ねり製　御園の雪
◉水製　御園の月
◉粉製　御園の花
◉クリーム　御園のつぼみ
◉高貴化粧水　御園の露
◉打白粉　御園なでしこ
◉濃厚化粧水　四季の花

製造元　東京芝　胡蝶園
東京市日本橋區橘町四丁目
發賣元　特電浪花四四八番　丸見屋

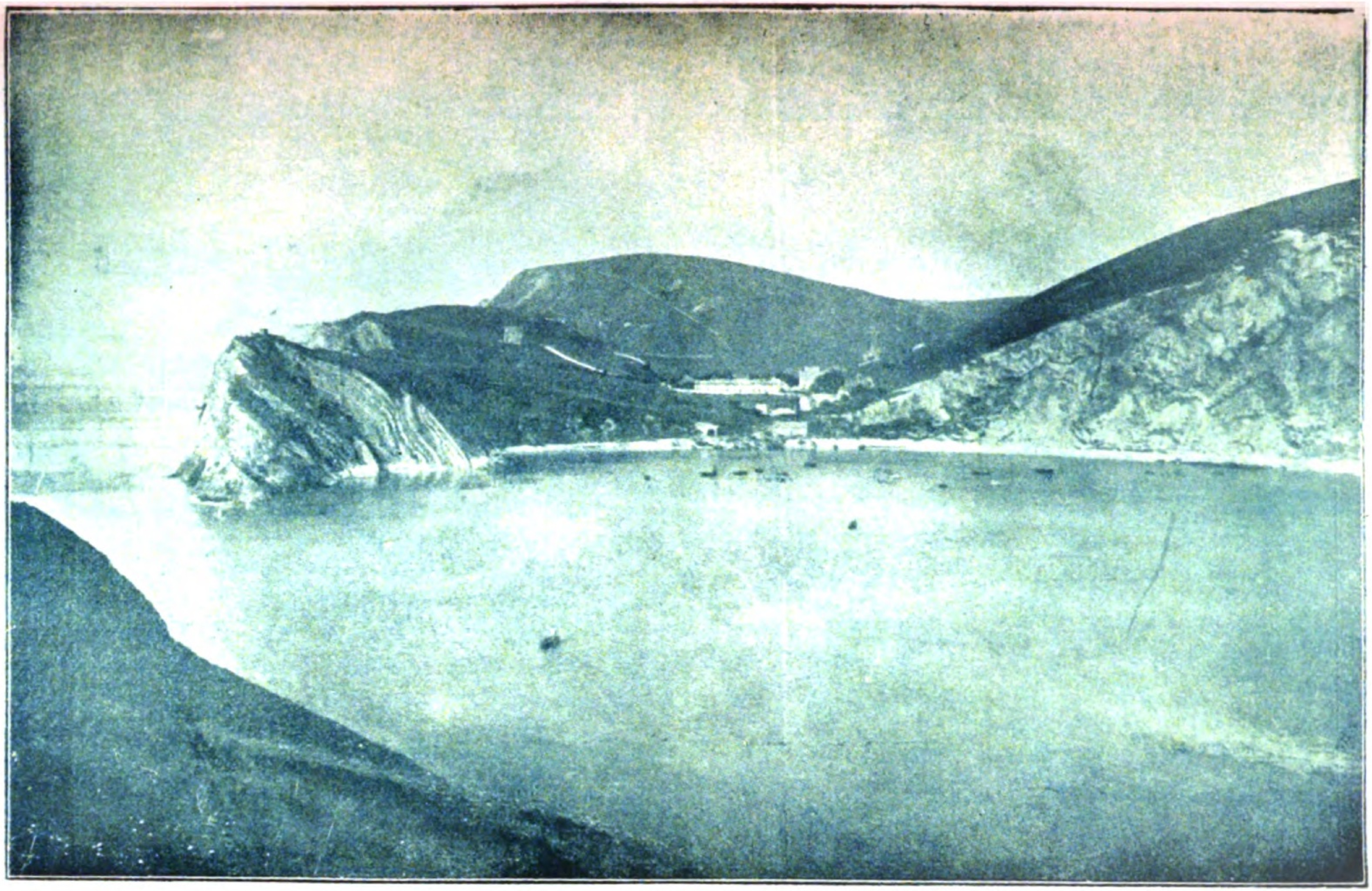
釀造元
千葉縣野田町
茂木佐平治

天下一品
最上醬油

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

（己の四）

環山抱水



英國ラルウオーズ灣と村落

女(廣の一)

（庚の二）

女（庚の四）

音樂の稽古



函館音樂傳習所の唱歌會

マスター、オブ、ロース

宮本桂仙君著



全一册洋裝三六判紙數二百卅頁
正價參拾錢　郵稅六錢（既刊）

西洋人が日本服を着けたる者を見れば何だか不格好にして見苦しきと同じく日本人が洋服を着用する時は等しく變なものが多い樣なり、其は身體の姿勢が各々異なることが第一の原因であるけれども第二の原因は其着用法を知らざるに在り然るに身體の姿勢を急に變化せしむるとは不可能の事なれば先づ洋服を着るには洋服の着用法は是非一通り心得ねばならない。洋服には日本よりも複雜なる種類が多くして時と場合により種類を異にするが故に少くとも禮服の種類だけでも覺えて置く必要がある、著者は歐米に學ぶと十年能く彼地の風俗に馴れ禮儀に通ず曩に男女交際法を著はし女子に必要なる事柄を叙述したるが今又た紳士の心得を公にし就中洋服に附いて晩餐會、舞踏會等に於ける詳細の事項を我が國の紳士に紹介せんとす、新日本の紳士として社交を重ずる人一本を座右に供へ時と場合の顧問となさば其益する所蓋し大なるものあらん、加之ならず文章平易にして趣味津々たるが上に斬新の議論も所々に散見す、是れ實に紳士として缺く可らざる良書なり。

本書目次

發兌元
東京本町
博文館

（辛の一）

森次太郎君著

歐米書生旅行

全一册洋裝三六判
紙數三百三十頁
正價　三拾五錢
郵稅　六錢
既刊

本書は著者が留學中、學業の餘暇を以つて歐米各地の名勝舊蹟を歷訪し此れを著したるものなり、書中輯むる所、自然の大景壯觀あり英雄豪傑、詩人文士の遺跡あり、宮殿あり古城あり、大學校あり、古寺院あり、古戰場あり、文章の平明輕快なる趣味の津々たる、數多の旅行記中一異彩を放つものあり、加ふるに本館特得の銅版寫眞數葉を以てせり、青年學生は之を讀んで海外壯遊の志を起すべく、老人婦女子は之を繙かば座して歐米を巡遊するの感あらん。

大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入
●歐山米水　全一册大判　正價壹圓五拾錢　郵稅八錢

大橋乙羽君著　寫眞版挿入
●歐米小觀　全一册小判　正價四拾錢　郵稅四錢

鈴田榮吉君著　寫眞版挿入
●歐米漫遊雜記　全一册小判　正價四拾錢　郵稅六錢

松井慶吉君著　寫眞版十六枚挿入
●米國漫遊雜記　全一册小判　正價參拾八錢　郵稅六錢

安部磯雄君著
●北米の新日本　全一册中判　正價參拾五錢　郵稅四錢

飯島榮太郎君著　寫眞版挿入
●米國渡航案内　全一册小判　正價四拾錢　郵稅六錢

東京本町　博文館

（辛の二）

繪畫研究會



跡見玉枝女史私塾研究會（十三年前撮影）

右より數へて跡見氏母堂千賀子、三人目が佐方鎮子、五人目にて筆を持てる小女の後が跡見玉枝女史、女史の右側にて一番背高きが大塚夫人くすを子、くすを子の前方手を組めるは安藤よれ子、左より數へて四人目馬杉青琴女史、何れも當年の俤を偲ぶべし

根治確證 わきが 治療新藥

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用ひて苦惱を脫せよ

價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗布すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の腋臭症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる Hair Vegene 888 原料 スヘクネ

めはへぎわうすき人●まゆ毛のけ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止

化學製品 色の白くなる ハンドコロン

盛に皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる最も必用の品なり

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝をなし男女交際上

みやくをとろし

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

● 專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確證 梅毒 治療新藥

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒をとり大小如何なる劇烈のばいどく●よこね●そうどく●かさ●ふきでもの●いぼうづ其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

輕症は半劑惡症重症も二劑用ひよ晳て奏效す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

らい病 新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣弊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸藥となしたる者にて其有效確實なる本劑に優る者なし試に一劑分丈け用ひ見よ必ず大效あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

獨逸選方 効驗一夜に顯る

りん病 新治療藥 キーロン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病も忽ち一夜に輕快を覺え膿血速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分

如何なる惡性の頑固慢性病も特製を用ひよ忽ち根治の目的を達す本劑は內服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となりて便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用て病根を斷絕し苦惱を脫せよ

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢二劑頑症用一圓廿錢特製惡性頑固症用二圓卅錢

● 專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

（其の一）

河村有頂君著

（既刊發行）

最近活動 北米事業案内

全一冊

四六判摸皮表紙上製
實況寫眞二十四圖
挿入紙數三百四十頁
正價参拾八錢
郵税八錢

近時雄志を懐き渡米を企つるもの踵を接す然れども彼れ等の多くは米國に在つて其抱負を遂行する能はず往々自暴自棄に流れ甚しきは着るに衣なく住するに家なく遂には無頼の輩と伍し邦家の體面を汚損するが如き行爲に出づるもの比々皆な然るは何ぞや蓋し其志望や如何に雄大なるも徒らに一時の客氣に驅られ空想に奔り能く彼の地の事業の情態生活の程度雇傭の關係等を査覈研究せざるの罪其一大原因たらずんばあらず本著者河村有頂君米國にある數年能く是等の狀態を調査し之を記述すること綿密にして精確以て壯圖を企つるもの丶良指導たらんことを期す其内容の如きは乞ふ目次に就て覩よ。

目次概要

▲業務と種類
▲業務別と賃銀の等差
▲賃銀別と我同胞の業務範圍
▲業務上の體力關係
▲業務と場所
▲場所と賃銀

▲賃銀と季節
▲季節と就業者の拂底
▲業務と時間
▲時間と賃銀
▲賃銀と浪費關係
▲米國雇傭事情
▲就業中の生活狀態

▲各業務の性質と發展
▲關係
▲季節順序
▲就業手續交涉順序
▲就業方法順序
▲就業實況

發兌元
東京本町
博文館

（其の二）

毎月一回 一日發行

ハガキ文學

見本 郵券十錢

一冊十錢 八冊七十錢 郵稅五錢 一錢

入會 規定 無代 通呈

青年文藝の友?!

- 常綠（表紙畫） 太田三郎
- 行く秋（石版極彩色） 和田三造
- 信越スケッチ十五面 太田三郎
- アカデミー展覧會傑作 數面
- 結婚（石版刷） ホガース

第三卷第十一號 十月一日發行

- ▲草のかをり 相馬御風
- ▲白楊 前田夕暮
- ▲今春アカデミー展覧會 文學士 長沙漁郎
- ▲湖のほとり 大下藤次郎
- ▲雲のいろ／＼ 文學士 渡邊江風
- ▲戀の川波 山本迷羊
- ▲雛丸 野尻抱影
- ▲ターナーの作畫法 鵜澤四丁
- ▲川柳と史傳 渡邊虹衣
- ▲繪葉書便り 福田太一
- ▲最も人の好む繪 法學士 藤井青波
- ▲草屋の秋 河村湘山

懸賞

普通文、新體詩、和歌、俳句、川柳、ハガキ小說、お伽讀者通信等

本誌を見て委細を知られよ

發行元 東京小石川 日本葉書會

賣捌 東京、東海堂、全國各書林に在

橋元春郊君譯 太田三郎君裝

繪画講話

中判金文字入 三百六十餘頁 泰西名畫十數葉挿入頗美本 正價六十五錢 郵稅金十錢

此書は『ヴァン、ダイク』教授が繪葉書に關する講話一卷を平易懇切に飜譯せるものにして畫家及び繪畫研究者に取りては無二の良書なり譯者は美學專攻の學者にして、かねて能文の譽あり、宜哉譯文玲瓏如玉意味暢達、童卒にも解し得べし

繪葉書趣味

好評再版出來

▲中判二百五十頁 口繪三色版挿繪十數葉

▲表裝體裁頗美形 定價三十五錢郵稅二錢

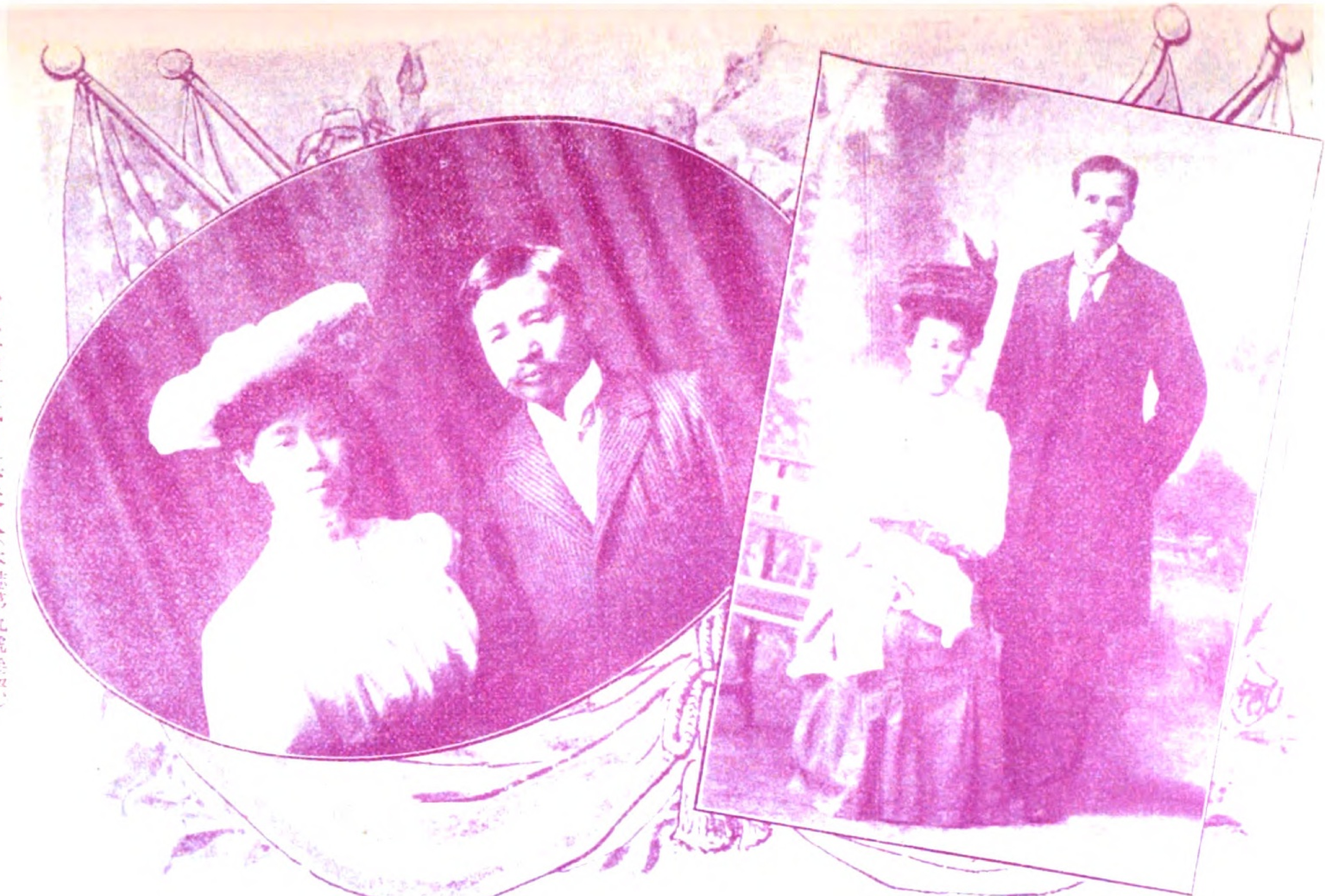
瓢逸輕妙の語滑稽洒脫の文讀むものをして思はず頤を解しむ、文壇知名の大家六十名の筆よりなる繪葉書觀なり、繪葉書の好不好を問ふなく何人も一本を備へよ

發行元 東京小石川 日本葉書會

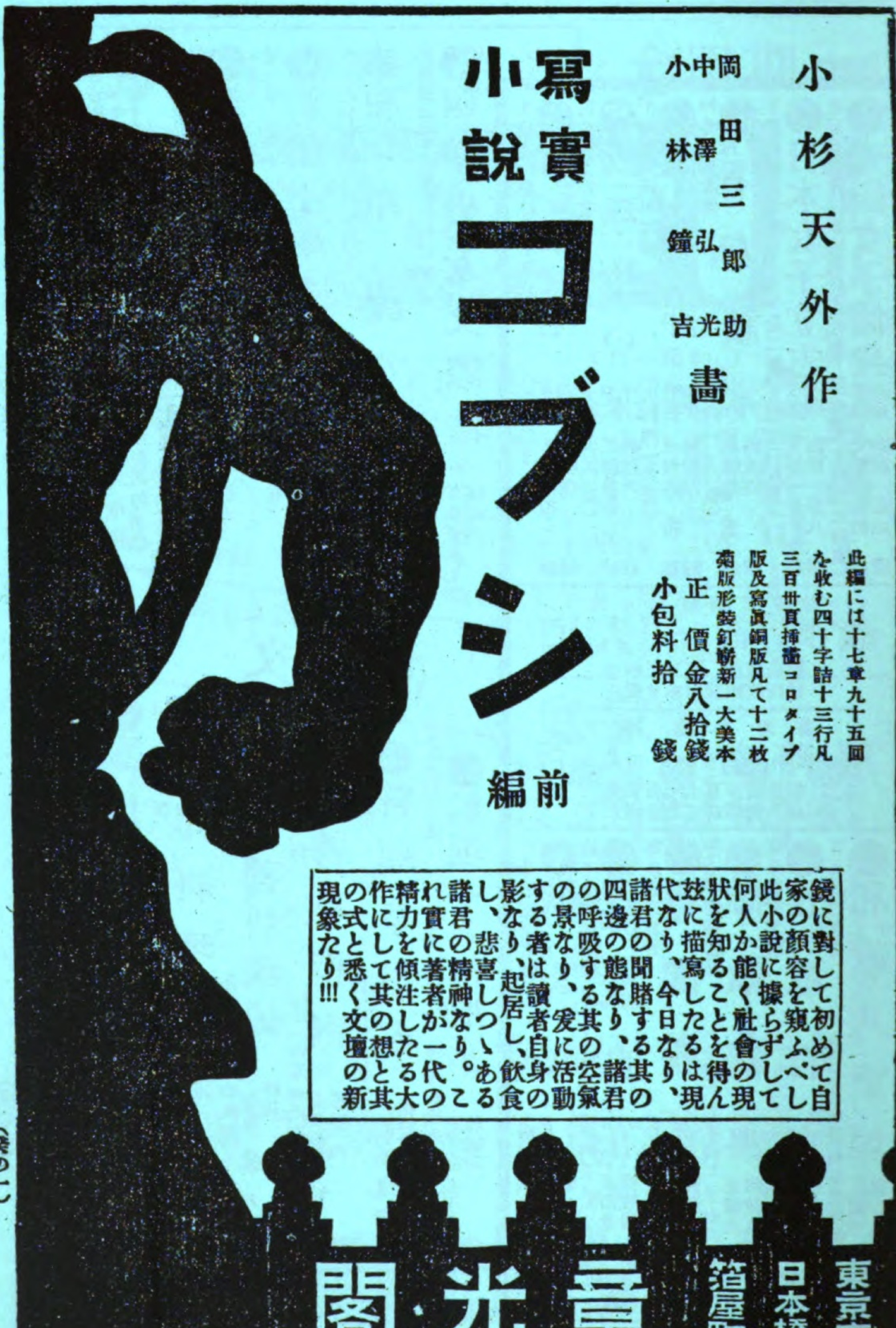
發賣元 東京本町 博文館

（其の三）

島貫兵太夫氏と其夫人（本號記事參照）



小林官吾氏と其夫人（本誌第九號參照）


小杉天外作
岡田三郎助
中澤弘光
小林鐘吉
畫
寫實小說
コブシ
前編
此編には十七章九十五回を收む四十字詰十三行凡三百卌頁挿畫コロタイプ版及寫眞銅版凡て十二枚菊版形裝釘嶄新一大美本
正價金八拾錢
小包料拾錢
鏡に對して初めて自家の顔容を窺ふべし此小說に據らずして何人か能く社會の現狀を知ることを得ん茲に描寫したるは現代なり、今日なり、諸君の聞賭するは其四邊の態なり、諸君の呼吸する其空氣の景なり、愛の活動する者は讀者自身の影なり、起居し、飲食し、悲喜しつゝある諸君の精神なり。これ實に著者が一代の精力を傾注したる大作にして其想と其の式と悉く文壇の新現象たり!!!
東京市日本橋箔屋町
章光閣

（其の一）

期限愈々迫る!!!好機不可逸

俳句 賞金五百圓 大懸賞

●大好評應募俳句數萬に上る!!!

▲四季混題俳句互選

○出句規定●入花料一組七句金廿五錢二組以上は一組増す毎に十錢宛△郵劵代用一割増△詠草半紙△應募句は〆切後直に印刷して送本す△其句中より諸君の好句と認むるものを十句撰拔して本會に送れ△其高點者に規定の賞を呈す且つ當選句集は美本として出句者全體に無代進呈◉照會必往復葉書

賞金壹等百卅圓二等七拾圓三等三十五圓四等廿圓五等十圓六等五圓七等二圓八等一圓九等五十錢十等卅錢(計一一九八人)…

△非常の盛況と諸君の希望により〆切を延期せり

▲〆切十月廿日限り

▲當選發表は十一月卅一日

△同點先着順=十日以後の消印あるは採用せず

東京市神田區表神保町十

◉俳句奬勵會

(家庭必須書類)

● 學習院女子部長下田歌子女史著全二冊(大判四三〇頁) 家政學 正價一冊參拾錢 郵稅一冊六錢

● 岸上操君著 家政案內(大判二五六頁) 正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 博文館記者近藤正一君著 新撰家事問答(小判二六六頁) 正價貳拾錢 郵稅四錢

● 飯田呉服店裁縫部小岩井主任 黒田副主任合著 實用裁縫全書(大判二六六頁) 正價五拾錢 郵稅八錢

● 刺繡術專門 磯村大次郎君著 實用刺繡術(大判一二四頁) 正價貳拾五錢 郵稅四錢

● 山田興松君著 實用造花術指南(大判一〇〇頁) 正價貳拾五錢 郵稅四錢

● 吉田調子君著 裁縫と編物(大判二六二頁) 正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 曾我部純一君著 最新家計簿記(大判一三四頁) 正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 博文館編輯局編纂 衣服と流行(大判二三六頁) 正價貳拾五錢 郵稅六錢

● 濱本茂顯君著 婦女教育明治姫鏡(大判木版一六五頁) 正價六拾錢 郵稅八錢

● 讀賣新聞記者關如來君著 明治の令孃(中判一八二頁) 正價參拾錢 郵稅六錢

東京博文館

女(裝の三)

女（癸の四）

楠田病院長
楠田謙藏君校閱
產科婦人專門醫
稻生鑑次郎君纂著

實習產婆學 上卷

通常產

洋裝大判美本紙數三百餘頁
正價金七拾錢 郵稅拾錢

本書は斯道の專門醫にして、多年產婆養成の經驗ある著者が、其平素講述の稿本を基礎とし、之に佛國ペナール、アデヲン兩氏の著書を始め、多くの佛獨兩國の學者の著述を參考として記述したるものにして、其說從來我國に行はるゝ產婆書に比して異彩を放てるもの多く挿圖甚だ多くして、文章將た初學者をして了解し易からしめんと務めたれば產婆生徒の講習用としても、開業產婆の參考用としても、實に間然する所なき良書なり。

西田敬止君著

育兒と衞生

正價廿五錢郵稅六錢

隱岐敬次郎君譯

女子衞生學

正價三拾錢郵稅四錢

醫學博士 濱田玄達先生校閱
醫學士 伊庭秀榮君著

複習問答 簡明產婆學



全一冊四六判
紙數約二百頁
十月中旬發行

婦人の職業中最も其任に適するものを產婆學とす方今斯學に關する新書少きにあらずと雖も多くは其書長篇に亘り其文硬澁に傾き以て平易通俗に解を與へたるものなし伊庭氏茲に見る所あり**產婆學研究生**の爲め其講餘の**複習本**たらしめん事を期し最も**平易**なる**問答體**を以て**斯學**の**要義**を說述せり而して斯學の**泰斗濱田玄達先生**の**懇篤**なる**校閱**を受くるを以て本書の**精確**を證するに足るべし請ふ續々愛讀を賜はらんことを。

東京 博文館 本町

博文館

博文館出版當用懐中日記の實用正確たるや多年世人の認容する所今茲に喋々を要せず而して今回發行の四十年度日記より更に一層の特點を添えて日記の眞價を倍せり即ち**陰暦の記入**是なり以前印刷局に發行せられし頃は陰暦も記入ありしが事民業に屬して以來絶て之を記入せず是れ陰暦の必要を知れども陰暦計算の至難なるに由つて余儀なく之を略す弊館久しく之を遺憾とし研究の結果其精確を得て今回より記入を實行せり是れ他の日記になくして弊館日記のみにあるの一大特點にあらずや請ふ續々御愛購あらんことを。

明治四十年

當用日記

四種

◉卷頭　皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷とし掲ぐ

大形　菊判　**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）　▲正價金五拾錢　郵税拾四錢

中形　四六判　**特製**（舶來洋紙脊皮美製金文字入）　▲正價金五拾錢　郵税拾貳錢

中形　四六判　**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）　▲正價金三拾五錢　郵税拾錢

小形　菊判半截　**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）　▲正價金三拾錢　郵税八錢

◉紙數　大判中形共五百四拾餘頁　小形五百三拾餘頁

▶賣捌所は全國各地の書籍雜誌店

▶取次望みの方は御申込次第

日記類

明治四十年 懷中日記

三種

新形（舶來洋紙頗美本總クロース 金文字入細長形携帶至便）
▲正價金貳拾錢　郵税貳錢

上製（舶來洋紙頗美本總クロース 金文字入紙數三百餘頁）
▲正價金拾八錢　郵税貳錢

並製（舶來洋紙總クロース表紙 金文字入紙數三百餘頁）
▲正價金拾貳錢　郵税貳錢

右三種共卷頭には皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は脊面に他の二種は腹部に鉛筆挾みを設く

及紙類文具店等到る所にあり◀
精々御便利に御相談可仕候◀

博文館日記の特色

用紙　印刷　製本　趣向　體裁

何れも海外製紙會社へ特に注文漉製せし特別上等紙を用ゆ
日記印刷の爲新鑄せし活字を以て注意印刷す頗る鮮明なり
弊館が特に英國より輸入せし新機械を以て堅牢美麗に製本す

（**當用日記**）日々欄には舊暦對照過去同月日の重要歷史、日露戰役重要紀念、七曜、干支等を錄し天氣、寒暖、發信欄の外往訪及起床時就蓐時の記入欄を新設す尚各月の初めには、其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新作し、毎日の記入欄には細罫を附し秩序ある記錄たらしむるに適せり。附錄としては紙數十二頁の補遺金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、露伴先生旅行の心得、某醫學士の衛生心得及び最新重要統計及日常必須の諸規則を網羅せり。

（**懷中日記**）毎月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案内、陰暦氣節等を掲げ日々欄に過去同月日の歷史、七曜、干支、天氣、寒暖、起床、就蓐時欄等當用日記の如く卷末には日記補遺錄日常有用の事項諸税則及最新重要の統計表等百頁を附す。

（癸の七）



女學世界

第六巻　第拾参號

十月五日發行

家庭暦

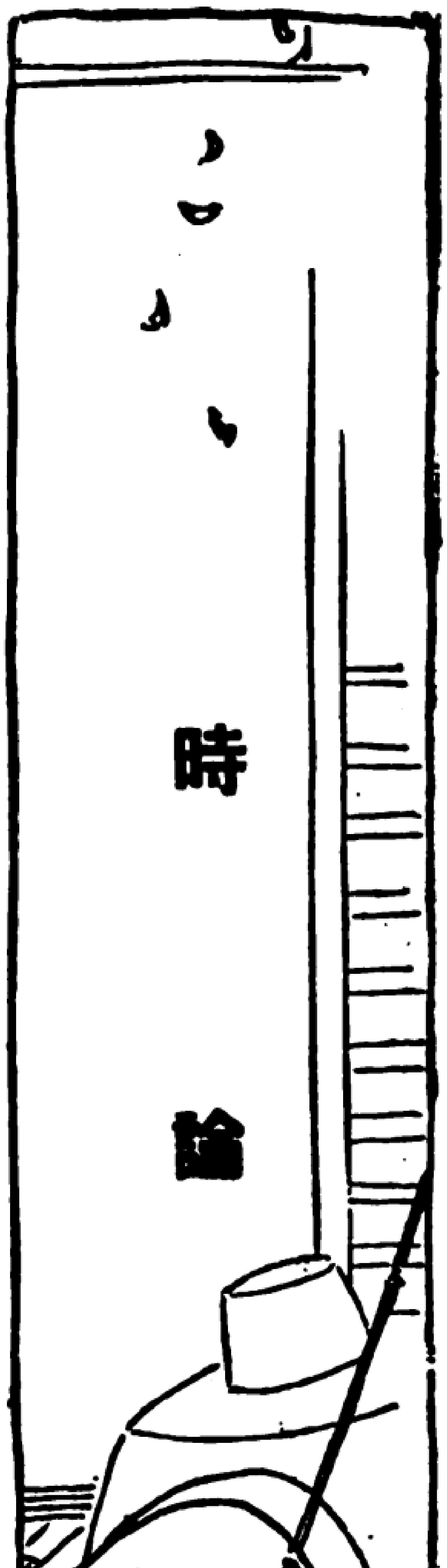
休日｛日曜　七日、十四日、廿一日、廿八日
　　　祭日　神嘗祭十七日

●行　事＝季節は寒露降つて陰暦九月の節に入り階前の梧桐秋聲を告げて郊外散策の好時節なり○全國各女學校にては日曜或は祭日を以て秋季運動會又は遠足旅行をなす○十七日は神嘗祭にて新穀を伊勢大廟に進めたまふ祭式あり○茶屋にては風爐を廢して爐開をなす○二十日惠比須講と稱して商家にては惠比須神を祭る式あり○月の十五日より銃獵期となり併せて茸狩の樂しみあり最寄の名所に臨時汽車を出す

●遊　覽＝菊見は團子坂○淺草公園○本所植文○仙花園○京都圓山○下野小山○茸狩は京阪地方の林野尤もよろし○散策には小春日和の好天氣黄稻野に充てる畦畔と辿の快塵俗を脱するの思ひあり

●節　物＝秋雨○秋夕○菊○稻干○栗○柿○鹿○鵜○後月○京菜○小松菜○大小麥○人參の播種

●料　理＝ほうれん〳〵○さんま○松茸○初茸○しめじ茸○新蕎麥○新芋○細根大根○柚子○栗○柿



男女青年の風紀問題

海老名彈正君

青年男女の風儀問題は、今や新聞雜誌上の論議たるに止まらず、亦た當局者間の留意する處となりて曩日の如き文部大臣の訓令を見るに至りたるが、今日の青年が往昔の青年に比して、果して一層の墮落をなし居るや否やは予の大に疑問とするところ也。

蓋し今日の青年男女も始めて此世に生れ出でし時は無病健全にして極めて神聖なる嬰兒に外ならざりき。然るに社會の全面を掩ひつゝある、各種の無量なる精神的惡魔はこの淸く美しき嬰兒を擁して罪惡の淵に誘はんとし、無垢なる青年亦た此等の病魔に圍繞せられて盛にその病毒に感染しつゝあり。社會は濫りに青年男女の墮落を罵倒すれど、社會其物こそ却て神聖なる青年を過らしむる媒介者に非ざるなき乎。予は寧ろ其多くの罪、社會にありて青年は唯だ社會の惡風に感染したるにすぎざるものと斷定するの至當なるを信ぜんと欲す。

顧みて之を過去の歷史に對照せば、從來日本に於ける男女の關係が今日よりも紊亂し居りしを知るに足るべ

く、寧ろ現代の青年が往年のそれに比して、多くの美點を有するとも、決して墮落し居らずと言ふ事を得べし、しかのみならず、今日の青年は從來曾てなかりし向上的新理想を有し、之が爲に古人の夢想だに及ばざる煩悶を重ねつゝあり、若し吾人にして此新理想を有するなくむば、今日の如き淫卑なる社會をも決して不思議とは思はず看過せしならんも、唯だこれあるが故に一層強く青年の墮落を感ずるに至れる也。今にして唯だ徒らに男女學生の風儀墮落を絶叫するは既に愚なり、吾人は鋭意此新理想を現實せしめて、精神的にあらゆる病弊を救濟するの外に途なきを知ると共に、一面には古今の風俗を對比して讀者の一考を煩はさんとす。若し今日の時代を極端に汚れたりとせば、之に比すべき何れの時代か眞に清かりしぞ、或は武士の封建時代こそ然りと云ふ者あれど、試みに彼の徳川文學を見よ、東洋のセキスピヤと稱さるゝ近松の著作の如き、其文章如何に巧妙を極むるとも、之を家庭の讀物として一家團欒の間に音讀なし得る篇は何れにありや、又一世の名文家として聞えたる西鶴の如き、若くは爲永春水の著作の如き、何れも○○を附せざれば刊行を許されざる言語道斷の物のみ也。而も此等の猥褻極まる文字が徳川文學を代表するものなりと云ふに至つては、明かに今日の社會よりも風儀の亂れたるを證據立つるものならずや。

更に平安時代を見よ、源氏物語、枕の草紙、落窪物語等悉く戀愛と色情に關したる文字に依て充たされ、家庭に於て繙讀なし得るもの殆んど絶無なるを看ても容易に當時の社會狀態を想像する事を得べし。

予は九州柳川藩の舊士なるが當時我藩の士氣は幕末の天下を風靡し尙武の氣風一藩に横溢せしが翻つて其裏面に於ける男女の關係を見れば實に醜態を極めたるものありき。又熊本藩は志士の群出と風俗の無骨なるを以て聞えたる土地なりしが、猶且風儀の紊亂は動物よりも甚だしきものあり、更に鹿兒島に至つては一層名狀すべからざるものありし也。然らば徳川初世の頃は如何、彼の春日の局は婦人の龜鑑とまで云ひ囃されたる者な

れど、其實は將軍の側妾にして、三代將軍の生母なりとは歴史家の證するところ、以つて其他の一般を知るべきなり。

斯の如く我邦の暗黒面は羅馬の天下に於ける上下の事情、風俗、文物等及び希臘衰亡の經路と其形式の甚だ相似たるものありて、上は將軍の宮殿より下は賤が伏屋に至るまで、穢れざるものとては一もなく、宮も寺も武士の家庭も農民の小舍も、悉く醜態を演ぜざるなきは殆んど徳川の末路と同一のものなりき。而も斯くまで淫風盛んなる時代に於て、惟り有夫姦に對する制裁は非常に峻嚴なるものありて聞くだに酸鼻の物語り少なからず。

其一例は曾て岡山に於ける出來事なり一門閥家の娘、武士の家に嫁して後幾干もなく姦通罪を犯すに至りしが確實なる證據の擧らざるより夫は一時其妻を親里に預けおき、密に動靜を窺ひ居る中、間もなく其嫌疑ある情夫の脱走したるより、愈よ事實と確定し、嫁を親里より呼戻して良人自ら之を手打となすことに決したり、其當日の光景は最も悲慘なるものにて、嫁の里より兩親及び實兄の三人が列席し、若盛りの良人は白の襷鉢卷に刀を携へて我妻の後部に立ち、姦婦は白衣の裝束に、黒髪長く後に垂れ、愁顔先づ恭しく父母に不孝の罪を謝したる後、徐ろに刑蓆の上に端座して觀念の眼を瞑づれば、良人が振上ぐる白刃の閃めきと共に、可惜花の如き新婦の首は兩親の面前に斬落されたり。斯くて實兄は慄き乍ら言葉嚴かに、「お手際でムいました」と挨拶すれば、屍體はやがて荒菰に包まれて兩親が携へ歸りしと云ふ。

此一事を以てするも、如何に當時の有夫姦に對する刑罰の峻嚴なりしかを知るに足るべく、而して今日も尚ほ此遺風を殘せるは、道義上聊か快とするに足るものなれど、此以外男女の關係に就いて深刻なる社會制裁なかりしが故に其餘弊は滔々として現社會に波及したるに外ならず。

因て予は重ねて言はん、今の社會は墮落せりと雖も昔の社會に比すれば稍や清淨なり、今の青年墮落せりと

雖も現社會の墮落に比すれば其罪や輕微なり。況んや歐米の文學とキリスト教の思想とが紹介したる高潔の新理想は將に青年男女の行くべき道を指示して明かなるに於てをや。既に我青年は新思想を得たり、之に依て鋭意自ら守り、自ら修め、自ら信じ、自ら行ふて時流に誘惑さるゝなくんば、必ずや近き將來に於て、今の非難者を慚愧せしむるの時あるべし。

唯だ青年男女の間に於て、最も危險なるは、戀愛及び結婚問題なり。こは素より人生の大問題なれば之に就いて何人も考へを要するは、勿論のことなれど、今の青年は餘りに無分別なり、餘りに輕躁なり。惟ふに男女交際も可し、自由結婚亦た不可ならざれど、今の男女は餘りに急性なり。男女交際と云へば直ちに戀愛を豫想し、會合僅に兩三回にして早くも結婚の約束をなし、自ら好んで悲慘の結果に了るが如き、又自由結婚と云へば即ち野合の如く心得、父兄の許諾も得ずして行當りばつたりの緣を結び、他日悔いても及ばざる禍を招くが如きは之皆な彼等が、戀愛に盲目にして、結婚に急性なる誤解より生ずるものなりとす。即ち彼等が墮落の深因は此處にあり、攻擊の中心點も茲にあり、今にして猛省する處なくんば折角の新理想も却て身を毒する凶器たらんのみ。（文責記者にあり）

女子風俗論

山路愛山君

△良風俗も程度問題なり。

昔管仲の書いた「管子」といふ本の中に『民は雜處せしむ可からず、之を雜處せしむれば其志を移して自

己の業に專なる能はず」と云ふ語がある。之は今日の女子の風俗及び服裝問題に就いて、適切なる戒言であらうと思ふ。凡て善風俗に近づき、惡風俗に雜處せぬやうにするのは何人も異論のないところであるが、私の考では、其善風俗といふにも程度があつて、餘りに度外れの高尙な風俗を見習はしむるのも却て可からぬ弊害を伴ひはせぬかと思はれる。御殿女中の如きは平生丁寧な「遊ばせ」言葉で、客の接待も上手であり、其上優美なる諸禮式を心得て、如何にも閑雅ではあるが、さて之を一般に行へと云つたら如何様ものであらう。生活に豐かな中流以上の家庭ならそれも結構であるが、若し小商人や其日稼ぎの內儀が此風を學んだならば恐らく家を亡ぼす基で、折角の良風俗も却て平民社會を疲弊せしむるばかりであるから、各々階級と生活程度とに應じて堤防を築き、所謂高等風俗と劣等風俗とを雜處せしめぬ樣にしなければならぬ。

△子女の交際に階級あり

假に貧乏な家庭にある息子と華族の公達とが交際をするとせば如何樣ものであらう、それは見眞似聞眞似で言葉遣や其他の事が上品になるのは結構な次第であるが、それと同時に金もかゝれば生活程度も引上げねばならず、すると自然兩親の負擔が嵩んで生活の困難を來すやうになる、此塲合父兄の執るべき策は、元々階級の違つた交際であるから、先方は設令絹物づくめであつても此方は木綿物の身分相應なる獨立の體面を維持して可成其贅澤な風俗に感染れさせぬ樣にする事と、今一つは最後の策として斷然其交際を絕たしむることである。或は少し頑固の行方であるか知れぬが、子女の奢侈を防ぎ身分相當な家風を維持するには勢ひ止むを得ぬ次第である、且つ由來高尙に育つべき華族の公達にしても、中流以下の子供のやうに亂暴な服裝をさせ、或は餘りに立入つた下情に通せさするのも是亦た妙であるまいから、之は何方から觀ても貴族と平民との間に高く墻を築いて、子供に獨立の判斷の生ずるまでは互に接近せしめぬのが兩者の爲に得策であらうと信ずる。勿論男子

は獨立心が强いから、平民の子が却て貴族の子供を感化する事もあるか知れぬが、女子に至つては殆んど模倣と虛榮心との結晶で、而も誘惑され易い天性であるから、之に向つて他の美しい服裝を眞似る勿と云つても容易に思止まるものでない。そこで上流と下流との間に堤防を設けるのは女子の爲に特更必要な事である。

△虛榮心と女子の嘘言

然るに此堤防は今日の女學校に於て悉く破壞されて居る。私が曾て信州の飯山へ行つた時、其處の町長の語つて曰ふに、當地の學齡兒童は百分の百といふ比例で悉く就學して居るから教育普及の點から云へば些少も申分はないが、唯だ遺憾なとには其中に藝妓の半玉や賤業婦の玉子などが交つて居るので學校の風紀上聊か懸念な處がある」と、如何にも至當な心配である、それと同じく私は現今の女學校に、華族や富豪の娘達が華美な姿でやつて來て、中流下流社會の娘等にまで度外れな奢侈心を注入しつゝあるのを見て、甚だ危險に思つたのである。第一上流の女子が繻珍の帶を締めて居たのを見れば自分のメレンスが厭になり、先方は流行のハイカラ靴を穿いて居るのに自分のは三十五錢位の下駄である、又先方は立派な馬車で往來するから、責めて自分は人力車にでも乘りたい、と云ふやうに萬事贅澤にのみ流れやうとする。現に某女學校の一女生が毎に其同窓に對つて、「自分の父は非常に立派な家に住んで居る」と吹聽して居た、然るに或時その友達が其處へ遊びに行つて見ると、立派な家と廣言したそれは裏長屋の實に見すぼらしい家であつたので、彼は非常に赤面したといふ事がある。恁の如く女子は虛榮心が强く見榮坊であるから、今日の如く上流の娘と中流以下の娘とが同一の學校に居ては、自然右樣な嘘言を云はなくてはならぬ必要が起るので、而も是等の娘の將來は如何といふに、他日人の妻となるに至つても結局身代壞しとなり了るのである。

△女子の風俗と男子の氣風

そこで女子の風俗が一般に奢侈に流れて來ると共に、彼等が男子に對する華美の念が愈よ強くなつて、香水やコスメチックの嫣男を好むやうになれば男も自然それに同化して服裝に贅を盡すやうになる、一例を云ふと京都女のショナ〳〵歩く風を見れば京都男の氣風が判るやうに、女學生の風俗を見れば青年男子の氣風が略推察されると同時に戀愛が若き男女の一大勢力であるといふ事が發見されるのである。私は久しく學校を見たことがなく頃日不圖或學校を參觀して驚いたのは、十年前までゞ見えた衣服でも何でも「袖腕に至る」的の素朴なる風をした學生は一人もなくなつて、其代り素透し金縁の眼鏡などをかけた優男の多くなつた事である。惟ふに之は女子教育の反照で、女學生の氣風が凡て華奢に流れた結果であらうと考へる。先頃の文部大臣の訓令に、學生は薄志弱行に流れ云々とあつたが、當局者は未だ其原因が女學校にあることに考及ばなかつたらしい。

△風俗矯正の捷徑

世の中には各階級を通じて相當の秩序といふものがある、若し此秩序も外部から攪亂する者がありとすれば我々は當然の義務として之が防遏の策を講せねばならぬ、若し華族や富豪の娘達が普通の女學校へ這入つた爲に以上の如き弊害を伴ふものとすれば、相當の手段を以て其弊を防がねばならぬ、然れば如何にして之を防ぐ可きかといふに、第一は、上流の人々が自分の家庭へ教師を雇ふなり或は別に學校を立てるなりして平民の學校へ來ないことにして貰はねばならぬ。此點から云ふと學習院の女子部の如きを設けておく事に私は大贊成である、國家の經費を支出する事は不贊成だが御自分達の費用を以て建てゝ置くことには贊成である。若しそれが行はれぬとすれば凡ての女學校に於て一切木綿服に限るとして贅澤な服裝は固く禁ず可き事、即ち國民普通の生活程度を標準として適當な學校服を定めるのが最も策の得たるものと考へる之は女學生のみならず國內一般の風俗にも關係ある重大な問題であるから、國家の命令を以てしても是非實行する樣にしたい、若し幸に之が實行せらるゝとなれば中流以下の娘達は上流の娘を見て羨ましく思ふこともなく、且つ今日の如き風俗の上下混亂より生ずる弊害を免がれる事が出來やうと信ずる。（右は氏の口話を筆記したるものなれば文の責は記者に在り）

新天地

渡米女子の成功要訣

島貫しか子女史實驗談

「吾人を愛する神に感謝すると共に活躍奮闘を以てすべし、神に信頼して天職を盡さんがために奮闘せよ、日本の國力を發展するが爲に鋭意猛進するは大和民族の最大急務なり」と絶叫して先づ貧學生に自活勉學の道を與へ、失望の淵より救ふの策を講じて力行會なるものを起し、漸々其規模を擴張して渡米成業の方法を斡旋されつゝあると共に、純清なる宗教心を彼等に吹き込んで品性の陶冶に勉められつゝある島貫兵太夫氏の股肱と爲り、參謀となつて一體の如く働かれつゝあるのは、實に其夫人しか子女史であります。夫人の熱誠沈毅なる天性は神に對する信仰に依つて益々光を現はし、一切婦人の私慾を捨て、良人の事業に貢獻されたのですが、已に渡米力行しつゝある力行會員を慰籍の爲め單身訪問を企て、四人の幼子女を殘して本年一月彼地に渡り精細に視察された結果、殖民成功の内助者たる家庭の女主人を内地より派遣することの急務であることを益々感せられ、五月下旬歸朝後直ちに女子渡米部の設計を創められた處、應募の婦人意外に多く、問合の書簡日々百通に上つた相であります。夫人は此等婦女子の爲めに日夜寢食を忘れて周旋され、彼地に於ける勤儉力行家に純潔なる慰籍を與ふるを喜んで居られます。記者が巣鴨駕籠町の御住居に夫人を訪問した時は丁度十數名の渡米者のために、在米有志の寄附に依つて新たに建設された講堂にて、送別祈禱會を開かれんとする處で、夫人は直に記者を此席に導かれたのでした。

▲送別を受けし男女

演壇を正面として兩側に居流れた渡米希望者は、大抵十七八歳より二十四五歳の靑年で、中に三十餘歳の人も見受けました。其態度服飾は混淆して居ましたが、

勇敢進取の意氣自から眉宇の間に溢れ、希望に充たる愉快嚥かしと察し得られたのです。併し何れも血氣にはやる氣振は無く、堅き信仰と正しき操行によつて成功を期する有樣は感ずべきものです。特に記者の感を深くしたのは、一行に加はれる三名の婦人なので、一人は紫の袴を穿つた十八九歲の女學生風、一人は稍年長せる體格强健な婦人、他の一人は三十歲餘に見受けましたが、夫人の御語に據れば、若き二女子は疾に力行會に入り會員即ち苦學生の衣服、足袋等を洗濯しつゝ自活勉學したるもの、又三十歲餘の婦人は某氏の未亡人で、あらゆる辛酸を嘗めたる人であるとの事でした。今や戰勝の餘澤に醉ひ、星や菫に憧がれて、自己の前途をも父兄の勞力をも忘るゝ薄志弱行者の多い世の中に斯る活躍的の男女を出せる事の嬉しさ、諸氏の目的は境遇が齎したにもせよ、島國根性を脫して三千里外に新版圖を擴げんと企てし健氣さよ、と狹き胸は漫に感に充されしと同時に、島貫氏御夫婦が薰陶の切なるを感謝するの外はありません。斯くて時來り夫人が奏せらるゝ嚠喨たるオルガンに連れて式は開始されました。

▲讃美歌と祈り

惠みの光りは吾が往きなやむ暗路を照せり、神は愛なり、我等も愛せん云々の讃美歌は、先づ渡米者の心を感動せしめ、次で某牧師は滿腔の熱誠を以て、力行會を守る惟一の神に感謝し、倘將に發せんとする男女に恙なく彼土に着くを得せしめ玉へ、彼等の心靈を導き玉ひてあらゆる誘惑に打勝ち、困難と鬪ふの勇氣を與へ玉へ、彼等の信を堅めて恐るべき品性の墮落を救ひ、眞正の事業を成功せしめて大和民族の榮を現はし、皇國の光を輝かさしめ玉へ、云々の祈りは猛き丈夫も數行の熱淚に旅衣の襟を霑された事と存じます。祈り終つて會長島貫兵太夫氏演壇に登り、實驗上より着實懇篤なる忠告を述られました。其大略を紹介しませう。

▲忠告

小生の微衷は神の御旨に適ひ、江湖の賛助を得て、日の淺きに拘らず會は益々盛大と爲り、今年も旣に七

百人の健兒を彼地に送りましたのは誠に感謝に堪へぬ次第であります。今日更に選別を受けらるゝ諸君は、目的方法こそ各々異れ、等しく國力發展の主義に基として蹶起された事と信じます。扨て此賀すべき壯擧に就いて小生の實驗より聊か申し述べたいのは、成功と失敗の原因であります。此二者の原因は甚だ複雑であるに相違ないが、歸着する所は至つて簡單明瞭である。即ち品性の高潔と下劣、此二つの外に決して出ない、これは小生の實驗から確に斷言することが出來るのです。勿論これは分り切つた理窟に考へ



られるが、偖彼地へ往つて見ると墮落の方が自然の勢だと感じられます。何故かと申すに、收入の點は日本で考へた時より多分で懐は暖かくなる、所へ父兄朋友の監督もなく、法律の制裁も寛であるから、あらゆる誘惑を以て充された彼地の逸樂に關係せずに居られない、これを譬ふれば、内地の事に鐵の如き決心を以て郷里を出で東京に遊學する子弟も、郷里の制裁を脱し、幾分の學資を懐ろにして居るから、動もすれば誘惑に抵抗する力を失ふ、僅かに父兄より貰ふ學資でさへ斯様であるの

に、自分で稼ぎ出した多くの金を握つた曉には躓き易い筈であります。其誘惑は種々であるが、多くは賭博即ち彼の馬鹿ぺーと稱するものにかゝつて、支那人の腹を肥すとか、醜業婦に關係するとかの類で、折角の抱負も希望も哀れ果敢なく泡と消へ、殘るは半可通のハイカラと成つて厄介物に了るです。これを防ぐの道は教會に出入して教を聽き、神に信頼するより外はない、斯くすれば米人の信用も深くなり、隨つて成功の道に進むことが出來るのです云々。

倘會員は何地に散在するも、共同一致相助ける事、勞働は神聖てふ語を銘記して、如何なる事業も甘んじて忠實に働らき、時々日本へ通信すべき事、一攫千金の野心を捨てゝ着々順を逐ふて進み、專ら常識ある人物となられよ等、一々成功者の實例を指摘して慈父の愛子に教ふる如く周到な注意を述べられました。

斯くて式終りたる後、夫人は左の通り話されました。

▲女子渡米の旨趣

渡米の旨趣は唯今良人が述べました通りで御座いますが、私が今春實地在米の同胞を訪問致して同情の念に堪へませんでしたのは、家庭の天使即ち慰籍者の缺乏であります。滿腔の企業心を抱いて故國を離れ、朝より夕まで働き寄宿に歸りましても温き言葉にて慰むる妻なく、寂寥の極は挫折の基となり、墮落の緒となる事が多いので、何卒志の確かな婦人を送つて殖民の成功を助けたいものと感じましたのみならず、現に力行會員の中にも頻りに妻君の周旋を私に依頼された人が多う御座いましたので、歸朝後直ちに女子渡米部の擴張に從事いたした處、却々希望者が多く此周旋に忙しくなりました。素より希望者は世界的活動の精神ある婦人には違ひありませんが、一時の好奇心や射利的の者を避け、本當に吾が國民を愛し、貞操勤勉良人を補佐しやうと云ふ獻身的の婦人を送りたい考へであります。左樣でないと迎ふる者も失望し、迎へらるゝ者も失望し、果ては忌はしい墮落に陷るのであります。

▲女子墮落の原因

渡米男子が誘惑せらるゝと同時に婦人も誘惑せられ易いのは彼の醜業婦の跋扈が重なる原因であります。彼等は人間の何物であるかを解せず、堕落漢の膏血を絞つて、多いものは一ヶ月千弗内外の收入を得、豪奢自由に暮して居るのを見ますと、思慮なき婦女子は粒々辛苦が馬鹿らしくなつてツイ邪道に陷るのです。一度これに踏み入れば容易に足を洗ふ事が出來ませんので、實に恐る可き誘惑であります。斯樣な次第ですから、彼地へ行かうと致す婦人は如何程教育の度が低くとも切て人間の品性が分かつて居るものでなければ成りません。それで渡米希望の婦人は暫くの間、私共の會に出入して神の教を聽き、道德を堅めて後渡米されたいものです。

▲豫備の必要

品性の豫備修養の必要なことは申す迄もありませんが、移住後の家庭整理に必要の仕事を慣すのも急務と存じます。先づ語學も一寸修め、西洋料理のざつとした事位慣らして置かなければ不都合でせう。彼地へ參れば日本料理は先づ不必要です。彼地へ渡る婦人は獨身で稼ぐ目的の人は言ふまでもなく、結婚しても餘程の資本家となつた者や商店を構ふる者の他は大抵共稼に出掛けるのが多いのです。夫れは保姆とか料理人とか、雜用を務めるとか一寸仲働き的の仕事に外國人の家へ通ふて給料を得ると云ふ風ですが、仕事に素養のあるものは素養無いものゝ倍以上給料を得て樂に務められるのです。

▲日本婦人の需要

クツクやスクールボーイの需要も無論多いのですが、日本婦人は謹直でよく働らき、手先も器用なので雇主は婦人を尤も欲しがるのです。先頃も此會から四十歲餘の未亡人が渡りましたが、此人は語學も出來ず、何の素養もありませんでしたので、只の働き手に雇はれましたけれども、それでも食べて部屋を貰つて一ヶ月二十圓位の給料を得て居る相です。下婢の他に裁縫の需要も多く、これはズツト收入も多いのです。又田舍へ參りましても良人と共に果物收穫に從事すると

か、種々雜多の職業は溢れて居ますから、内地で徒らに貧に歎く事はないと思ふやうに却々繁盛活潑なものであります。

▲移住者の家庭組織と夫妻の情態

移住者は男女共に收益は多大である代りに、日本に居る時のやうな暢氣安逸な生活をされると思ふと大間違ひで御座います。相當に貯金も出來た者でも夫婦共稼ぎで、住居は部屋一間を借り、三度の食事は外へ出て濟して居ます、子供が出來れば世話する家へ晝の間預けます、一戸を構へて家族食卓を圍み團欒の樂しみを致さうなぞは却々出來難い事です。日本上流の令孃で彼地堂々たる商店の主婦となつてをる年若の方でさへ、一人の下女も置かず終日家事に勞働されてある位ですから他は推して知るべきです。斯う申せば非常に悲觀的に解さるゝ婦人もありませうが、夫妻心を一にして富を得、併せて國益を計らうと云ふ大希望の前には少しの困苦は打消されて了ふものですし。内地の如く家庭の紛紜はないどころか、顧み少なき良人は細君を信愛すること非常で、一寸外を歩くにも子供や重い荷物は必らず良人が抱へるのです。尤もこれは彼地の風習で斯ふなければ笑はれるからでも在りますが、一般夫婦の情誼の細やかなのは眞實で、又移住者は斯くあるべき道理で御座います。それから子供を預けるに就いても西洋婦人が世話するもあれば日本人が監督するのもあり、何れもよく行屆いて憖家に置くより遺憾がない位であります。又女中に雇はれても日本のやうに主從の階級が更になく、同等の權利の下に働らき得られ、其他衞生萬般の設備もよく整つて居ますから、慣れるに從つて愉快に暮せるので御座います。男女に限らず參つた當座は兎角に故鄕懷かしく一旦歸つて見ても、暫くすると詰らなくなつて再び彼地へ戻りたくなるのが一般の情勢であります。

▲結婚に就ての便法

婦人を渴望して居る移住者は健康な婦人でさへあれば、醜美老若を問はず優待歡迎すると云ふ勢ひで、此會へ旅費、仕度金を送つて急速の周旋を賴まるゝ人も

ある位ですが、日本から參る婦人の中には一寸想像の違ひから失望する方がないとも限りません。それは見合の寫眞を見て立派な紳士と認定した男子が、彼地に於て勞働に從事せる汚き姿を一見して失望する事で、淺薄な考へとは申すものゝ又同情すべき點もありますから、此等の弊害を除くために甚だ便宜の方法を設けました。先づ彼地の求婚者から旅費を四百圓送れば、應婚の女子は之れを携へて彼地に渡り、交際の後結婚する事とし、婦人氣儘にして謝絶する場合には旅費を働いて男子に返却すると云ふ事にしました。四百圓位は僅かの間に返せますから



一向苦痛はないでせう。尙あらゆる便法を講究して滿足なる結婚を周旋致す精神で御座います。先頃一人御世話した婦人は相應の敎育ある方でしたが、雙方大喜びで結婚されたのでした

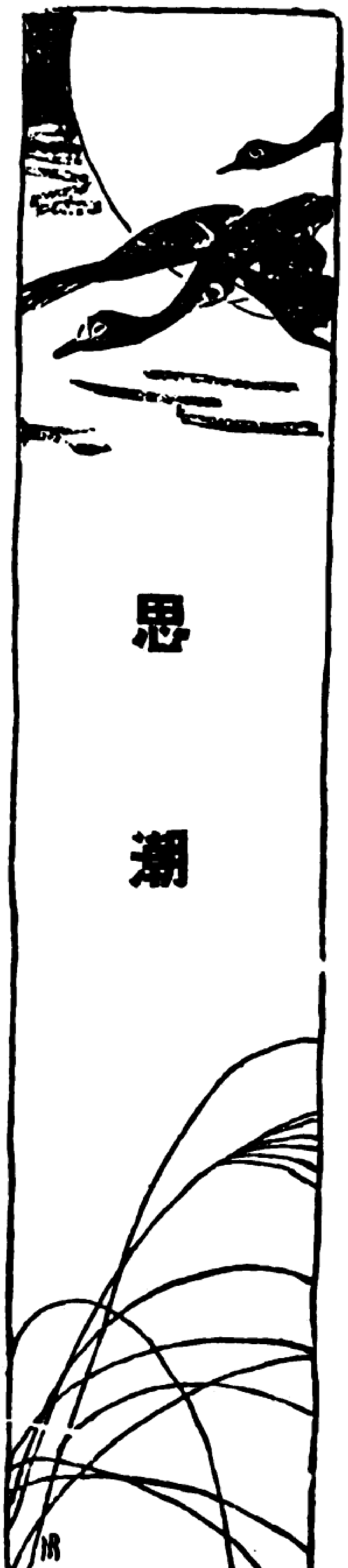
▲奮鬪せる夫人

私の產地は靜岡縣三島で、明治八年に生れたのですが、不幸にして小學の敎育も順當に踏まれず、勉學の希望も却々達する機會もなかつたのですが、圖らず神に導かれて基督敎信徒と爲り、其緣故を以て橫濱の共立女學校に入り得る事となりました、鄕里から橫濱まで徒歩で辿り付いた位、其後の苦學は隨分で御座いました其御蔭で今日苦

學者に對する同情は切で又能く事情を了解する事が出來るのです、卒業後島貫に嫁しましたのは、明治二十七年でしたが、俸給少き牧師の身分なので、世帶の苦勞も隨分甞め盡しました。且良人は當初から苦學生の爲めに盡力して居りましたので、家計は一層窮乏を來たしたのです。私は始終乳呑兒を脊負つて苦學生の賄を致し、其間に自宅で英學を敎へ、夜は針仕事に二時の時計を聞くことが常でした。唯今でこそ事業の奔走に時間を惜んで車にも乘りますけれども、其頃は乘物には一厘の錢も費さず、一錢二錢さへ容易に費ひ得ぬのでした。殊に一昨年頃は此事業の爲めに困厄の極に達し、明日の米さへ心配する事もありましたが、神の愛護の深き爲めに追々同胞の助けを得まして、逐次擴張の緖を開きました。誠に感謝に堪へぬ次第で御座います。御尋に依つて申し上げた下らぬ履歷は何卒御聞捨てに願ひたう御座います。未だ種々渡米に付いて御話し申上たい事が御座いますが、生憎送別で取込みまして、纏らぬ事ばかり申上げて失禮で御座ました。

▲ペリウ殖民地の生活

氣候は一年中我春夏の如くにして、沃野千里に亘り然かも河流清く森林繁茂し、生活に好適の地にて農產物は甘蔗、コーヒー、護謨樹を主要とす。移民は此等を栽培し又は製造工場等にて勞働に從事することとなるが、其賃金は男一人一日一弗五十仙、女一人一日八十仙にて一ケ月中日曜日の外休みなく勞働するときは男三十九弗、女二十一弗の収入あり。而して生活費は十弗乃至十二弗にて足れるを以て、差引少くも男廿五弗以上、女十弗以上を殘すを得、此の內より月に五弗の積金をなし、又雜費に三弗五十仙を費すとするも、正味少からざる殘金ある勘定なるが、又別に請負方法ありて、コーヒー一斤の採取賃一仙なるを以て女子にても勉强すれば一日三百斤を採取して三弗を得、其他日曜及び平日の時間外に働く時は、普通の賃金より五割增を得るを以て、熟練すれば種々合計して一ケ月四十弗以上の収入あり。而して日本の野菜は十分に生育するを以て種子を用意し行く時は胡瓜、南瓜、山東菜、三河菜、赤大根、蔓豆類を栽培して食料に供することを得、米は百斤(三斗三升位)十弗乃至十二弗にて自由に購求して食することを得れども、高價なるを以て常食料としては玉蜀黍(二十五斤一弗)(黑豆二十五斤二弗)馬鈴薯(二十五斤一弗)等を用ひ、其他牛肉は一斤二十五仙、食鹽は二十五斤一弗黑砂糖は一斤十二仙なりと云ふ。



伊國皇太后の婦徳論

在巴里　うまのかみ

△御經歴

伊太利國マルゲリッタ皇太后陛下は非常の日本贔負に在らせられて、日露戰後に日本漫遊を思ひ立たれたけれども、一時障る事の出來たために御中止なされたのは、人のよく知る所、且つは遺憾に思つて居る所のものであります。

陛下は千八百五十一年十一月二十日伊國の舊都チユラン府に生れ給へば今年五十六歳であらせられる、先皇ウンベルト一世にとつぎ給ひしは千八百六十八年で御年十八歳の夏でありました、不幸にして先皇が今より七年前に兇徒の毒手によつて崩御なされた其後は深く謹愼して世間の視聽を避け以て今日に至りました。

されば社會の狀態に就いての御意見など、改まつた事柄に至つては、誰も今日まで伺ふ事が出來なかつたのです、然るに偶然にも數日以前に、一米國記者は、偶然にも拜謁する機會を得て、直接に御意見を拜聽する事が出來ました、今之を我が同胞諸姉妹に御取次ぎ申す事を吾人は榮とするのであります。

△女子教育の根本

『私は世間で女子の獨立と云ひ騒ぐ所の議論には全く反對であります』と云ふのが、陛下の最初の御詞であ

りました、次に其れに就いての理由を御說明になりました「如何なる境遇にある女子にても、其第一の義務は、女子たる本性を失はないやうに心懸ける事であります、故に貴賤貧富を問はず、女子たる者は上述の義務を盡し得るやうに敎育されなければならぬ、女子を敎育して、男子の本性とする所のものに近づかしめるは、少も其必要はありませぬ、女子は其心の欲する所に從つて或は家庭に留り、或は社會に出て、工藝的の事柄に、文學的の事柄に、從事する事を許されます、併しまた、生存の困難を凌ぐ爲めに、其父兄または其良人に、忠告と扶助とを得なければなりませぬ、どうしても女子は、男子の如き廣く大きい經驗を持ちかねる事を、認めなければなりませぬ」陛下更らに、

△女子と家族及び國家

國民即ち國家が如何にして發達するかと云へば女子の生産力に待たなければならぬ、即ち國家は其發達について、まづ女子に家族を作る事を要求する、女子が兒女を作り、家族を作り、そこで國家が發達するのであります、若し女子にして兒女を作る事を避け、家族を作る事を避くる者があるならば、之は國家に對する罪人と云はねばなりませぬ、世間では女子が婚姻する事を以て、生活を助ける爲めの一方便と心得て居る者もある、併し婚姻は國家に對する義務であります、婚姻に因て得られる、家族的の快樂も、生活上の便利も、義務を行ふによつて生ずる所の天惠であつて、其の快樂其便利が婚姻の目的ではありませぬ。

子供を產むは女子たる者の義務であるが、併し子供を產んだ母親の幸福は、子供を持たぬ人の想像し得ない所であります、子供は其母親に對しては一つの詩であります、一つの音樂であります、そして常に無限の感情を其母親に與へます、子供を持たぬ人は不完全の人であります、子供を持たぬ人は、私は思ひ切つて云ひます、子供を持たぬ人は、社會の事情を論議するには一の資格を缺いて居ます、私は故ヴィクトリヤ女王(英國)のこれについての御詞をしばしば伺つて居ました、女王の御詞が英國女子に大きな感動を與へました

はの爭はれない事實であります、次に陛下は

△女子と宗教

すべて女子の道徳のもとは、宗教によらなければなりませぬ、宗教を信ずる女子は、何物をも信じない女子に比べて、其貞淑なる事が、際立つて見えます、此貞淑に見えるところの外貌は、たゞ外貌ばかりでなく、萬事に渉つて其通りであります、無信仰の女子を世間で强氣な人と云ひます、併ら强氣な女も實際には眞正の强氣を缺いて居ます、そして彼女は思ひやりと云ふ事が乏しくあります、そして一旦生活の困難なる場合などに當りましては、眞正の强氣を振つて之に打ち勝つことが出來ず、却つて墮落の淵に沈み易いものです、私は無信仰の女を以て香のない花に譬へませう、香のない花は如何に美しく咲いても、世間の愛と同情とを引くことが出來ませぬ。

△皇室の敎育と英國婦人

陛下は最後に語り給ふやう『私はアングロサクソン人種(英人)を敬重します、我國民も同樣に敬重して居ます、皇帝陛下の御幼少の時には、英國婦人を雇つて敎育してもらひました、其他皇子皇女たちも皆其通りです、英語は我が皇室內の通用語としてあります、併し私共は佛語も話します、又獨逸語も話します。

(をはり)

男子の要求する結婚資格

EK生

此の一篇は「米國に於ける未婚男子の理想的結婚」なる題目の下に、米國婦女雜誌に掲載しありしものなるが、風俗人情を異にする米人の結婚觀を窺ふも亦た一興と思ひて玆に之を抄譯す。

嘗て余は左の四個の問題に對する解答を、種々の方面に活動せる未婚男子百名に向つて求めしに、其の得たる處左の如し(記者)

▲第一問　結婚後の生活に於て幸福を齎すべき主要素は何ぞや。

此の問題に對する解答を見るに、百人中一人として、

「富」を以て其の主要素となさゞるはなし。

(愛情の裡に德義心を含むべき事)　シカゴ大學の一教授は曰く「余は愛を以て其の主要素となすもの也、假令、其愛や近昵性の愛たると溺愛性のものたると、將た奈何なる意味の愛たるとに論なく、苟くも一片愛情の裡に同情の柔しき心と、德義心とを含有せりとせば何ぞ夫れ其の結婚生活の樂しさを疑ふに及ばんや。」と

(人を動かす力)　ウイスコンシンス大學の一教授は書を寄せて曰く『余は東西古今を通じて、最も强固なる社會の原動力は愛にありと信ず、蓋し人は實に愛に依りて動くものにして、幸福亦た是に胚胎するもの也、故に愛念なき男子は、結婚の齎すべき幸福に就て、毫も論評するの資格を有せず、かの徒らに生を送り、單に世上の富と權勢と名譽とにあこがれて、毫末も愛念の如何を顧みざる者　奈何ぞ其の幸福を享受し得べけんや、要するに永久の愛は大なる同情に伴ふに希望と人道と理想を尊重するの念より生ずるもの也』と。

(能く妻を顧みる)　獨身辯護士の意見に曰く『幸福圓滿なる生活は、常に不和を避け、妻が折ふしの過失をば、深く咎むることなくして之を宥恕し、自己を顧みる如く能く妻を顧みて生活するにあり。』と

(三個の要素)　他の某辯護士曰く『愛と常識の具有と、之に加ふるに宗教の温き信仰は、吾等が理想的結婚生活に到るの基礎なり』と。

(愛の結合)　バックネル大學の一卒業生曰く『幸福は、夫婦相互の愛の結合にあり、理性の許す限り、主義に悖反せぬ限り、互に讓歩し合ひ、若し意見を異にする場合に遭遇せば、どちらか一方謙讓の念もて、他に讓るに在り』と。

(妻の利益)　ニューヨークよりの通信に曰く『汝の利益を顧みるが如く、生涯の友たる妻の利益をも顧みよ』と。

(誠實が第一)　篤行家の令聞ある某氏曰く『求婚時代たると、結婚後の生活たるとを問はず、誠實の念慮こそ最も肝要なれ』と。

(苦樂を共にせよ)　某大學教授は曰く『夫の悲みには

妻も泣き、夫の喜ぶ時には妻も共に喜ぶてふ、所謂同情の充溢せる愛に在りと、且つ曰く、此の愛に加ふるに何者か夫婦苦樂を共にすべきもの其間に存せざる可からず」と

(節制の利) 某氏曰く『余の望ましきは、夫婦相互に節制をなすにあり、是れ互に敬愛尊重の念を生ずるの動機にして、相互信賴の念を生ずるも亦是なり、即ち妻は夫に倚り、夫は妻の助力を求むるの念を生ずるこそよけれ』と。

(夫婦は同僚たれ) 彼又た曰く『夫婦互に友と思ひ、共同勞働者と思ふべし、而して苟くも妻をして夫の從屬と思考するが如き念を抱かしむる勿れ、夫婦は正に同僚の如くあるべきもの也』と。

(規則を作れ) 思慮ある某實業家云はく『幸福を享受せんと欲せば、須らく家族日常の生活を律すべき嚴肅の規則を作り、之に則る可し』と。

(愛情が第一、家事は第二) 土木工業家の意見に曰ふ『余は敢て愛情を以て第一の要素とせん、家事の如きは第二位に在るべきものなりとす』と。

第一問に對して、百人より得たる意見を統計したるに、其結果左の如し。

一愛を以て要素とする者　五十人
一夫婦苦樂を共にするにありと云ふ者　二十五人
一意氣投合にありとする者　二十人
一謙讓の念を必要とする者　五人

▲第二問　幾何の收入を以て結婚の時代と爲すや。

此の答案に於て一驚を喫したるは、何人も少許の收入を以て、毫も結婚に妨なしと言ふにありき。

(收入は第二の問題) 教育ある某氏の曰く『生活の必要に備ふべき收入にて足れりとす、思ふに收入の問題の如きは、畢竟第二位に置くべきものなり』と。

(少しの收入あれば可なり) 某老人曰く『一家を維持し行くに必要缺く可からざる經費と、不時の用に備ふべき少許の貯蓄を爲し得らるゝ收入さへあらば結婚して可也』と。

(贅澤の妻ならば持參金を) 近頃結婚したる某會社員

曰く「一人の男子が獨身にて相應に暮し得る丈の收入あらば結婚して可なり、浪費する贅澤の妻ならば、其の惡習慣を敎へ來れる里方より、十分の持參金を持ち來らしむ可し」と。

(三個の事情)　思想堅固なる某氏の曰く「收入問題は三個の事情に因つて定まる、即ち夫たる可き男子の性質と、妻たる婦人の性情と、及び彼等が保持すべき社交の地位如何にあり、特に妻たるべき婦人の性格は最も重大の關係を有す、若し妻にして、萬事に質素にして圓滿和合の生活に趣味を有し、極端に流行を逐ふが如き世の風潮に從はず、家事を專念に能く〱看るとせば、夫たる人何の顧慮する所もなかるべし」と。

(金錢を念頭に置くな)　年若き法律家の曰く「一婦人を不自由なく支ふるに足るの收入を得ば、既に婚姻の資格を有する也、蓋し最も幸福なる生活は、金錢問題の各自の念頭に來らざるにあり」と。

(收入の範圍内にて生活せよ)　某曰氏く「收入問題は、交友の如何によつて定まる也、然れども其の收入の幾許なるかは、豫め結婚に先つて、之を妻たらんとする者に告知し、其の收入の範圍内にて生活するの決心あるべし」と。

(結婚前貯蓄せよ)　マサチユセツトよりの答案に曰く「余は思ふに靑年男子たる者婚姻せんとならば、結婚するに先ち三百弗の貯蓄を用意せざる可からず、又一週凡そ十五弗の收入ある身分たらざる可からず」と。

(一ヶ年六百弗)　某銀行頭取の意見に曰く「都會村落何れにありても、一ヶ年六百弗あらば結婚生活をなすに十分なり、但し西南亞米利加に在りては一千弗を要す可く、東部に到りては尙ほ其の四分一を加へざる可からず」と。

(人物にして金にあらず)　某靑年實業家曰く「余は女子に向つて、一片の忠告を試みんとす、夫れ滿天下の諸孃よ、御身等は其の終生の伴侶を求むるに當り、敢て夫たるべき男子の「富」を顧みることなく須く一定の主義を保持したる品性確固の男子をば選むべし、余は嘗て一人の乙女が貧困の裡に健鬪せる靑年に婚嫁する

を見たり、年若き此の妻は彼の青年に取つて眞に財貨なりき、彼女は主義と、確固たる品性を具有する貧しき夫に配して、忠實なる助力者となつて、彼が日常の健闘苦戰を鼓舞せり、之を以て彼等は現時、宏大なる富有の家庭を作りて、和氣藹々たる幸福の生活をなすに至れり、是に依て之を觀れば、即ち收入の額にあらずして、將來に備へんとて貯蓄するの注意心と、正當に其を散ずる技倆とにありと謂ふを得べし」と。

第二問に對する百人の意見を調査し、統計に示せば左の如し

一、一年六百弗を以て理想的婚姻生活の收入となすもの二十五人
一、社交上の地位と地方經費に關係すと云ふ者二十三人
一、單に生活に必要なる經費と、他に少許の貯蓄あるべしといふ者二十人
一、相互の心掛如何にありといふ者十二人

▲第三問　幾人より成れる家族を理想とする乎

此問題に對する意見を見るに、彼等は多人數の家族を欲せずして、四人を以て理想的なりとなすは、記者の案外とする所也。

（才能の如何にあり）　一大學教授曰く『畢竟家族問題は、家長の才能如何にあり、即ち一家の主人なる者が其の家族を扶持して、兒童に一層高き、且つ出來得べくんば兩親よりも尙高き養修を、兒童に與ふるの資格を備ふるや否やにあり、多數の兒童を有するに於ては、自然、兩親は自己の修養を等閑に附するあるを免れず、二人又は三人の兒童に向つて、國民としての義務を盡すに足る十分の修養を與ふるは、單に何等の修養も與ふる事なくして十二人の兒童を養育するよりも國家に對して利益あり』と。

（多人數の家族が最も幸福）　事理に通曉せる某氏の曰く、兒童賦與の祝福を有する家庭程幸福なるはなかるべし、蓋し經濟的にして而も獻身的の觀念を必要と認め、之に則つて活動する家庭は、實に理想の家庭にして、此の傾向は頓て兩親及び兒童の長所を啓發せしむべし、且つ他人を幸福ならしむるは人類最大の幸福なるを以て多人數の家族を有し、之を養育するは幸福の大なるもの也』と。

（四人の兒童を有せよ）或る人曰く『一家の境遇滿足なるに於ては、一夫婦は須らく四人の兒童を有せざる可からず』と。

（五人の兒童を養ふ可し）某學者曰く『吾人が周圍の生物を觀察するや、必ず自然の法則即ち神の造れる法則としては萬物は其數を增加すべきものなりと信ず、然れども統計表の示す所に依れば、兒童の二分一强は未だ成熟の域に達せざるに夭死すと云ふ、夫れ然り故に斯の如き場合に際して、苟くも人口の退減を防止せんには、一家族に於て少くも四人の兒童を有せざる可からず、然るに四人の兒童にては、人口は增減することなく依然舊態を持續するに止まる譯なれば、苟くも人口の增殖を欲せんか、少くとも一家に五人の兒童を有せざるべからず』と。

第三問に對する百家の意見を統計して左の結果を得たり

一、兒童は四人をよしとする者　三十六人
一、妻の健康如何によつて多少あるべしと云者　三十人
一、二人の兒童にて足れりといふ者　十五人
一、多人數可なりといふ者　十二人
一、家庭の數は兒童の性質によつて定むべしといふ者　七人

▲第四問　妻には小遣錢を與ふべき乎

此の問題に對し、妻には一定の扶持手當を與ふ可してふ答案を、百人全體より得たるは記者の竊かに愉快とする所なり。

（扶持手當を與へよ）某銀行家の意見に曰く『男子たるものは妻に對し、瑣屑の事項にまでも絕對的服從の義務を强ゆるの權利なし、由來結婚とは、男女各自の精神上に一變化を來すべきものなることは言ふまでもなく、又た實に一生涯を通じたる實業的契約に類す、即ち夫たる者と、妻たる者とは共に同等の權利を具有する會社員なり、將た共同勞働者なり、故に妻には夫の收入の許す限りの範圍内に於て扶持手當を與ふ可し』と云ふもの其他種々あれども略す。

第四問に對する百人の意見を統計すれば左の如し

一、一定の小遣を與へよといふ者　六十三人
一、妻をして同等の權力を有するパートナーたらしめよといふ者　三十五人
一、世俗一般の風習に從へといふ者　二人



上野夫人の家政談

蒸パン發明家

婦人記者

杓子定規を頑守して他人の意見を容れぬ褊狹、朝に夕に人の足跡を追ふて猿真似に狂する輕卒、何れも婦人に多い通弊で他の批評を掛念する事の甚だしい爲め偶々新案が浮んでも自から先鞭を着ける勇氣の乏しいのが日本婦人の習ひであるのに、冷靜明快の頭腦を働かして衛生と經濟に利益ある常食用ふかしパン製造法を發明し、先づ自家の便を計り、尚これを冊子として江湖に益しつゝある上野夫人清子の如きは、誠に感ずべき主婦の模範であります。記者は夫人を白山御殿町の御住居に訪問致しましたが、夫人は快く迎へて家政經驗談を語られました。

▲蒸し麵麭の工夫と家人嗜好の變化

家族衛生上の必要から彼様な事を考へ出しました處幸に皆様の御賛成を得まして、意外の事と喜んで居ります。夫れに就いて私が何か家政に巧者であるかの様に思召して、よく記者の方の御尋ねに預りますが實際これぞと申こともなく御耻しい程で、却つて其方々から種々有益な御話を伺ひ有がたい事と存じて居る位で御坐います。このパンを米食に代へました初めは、

燒パン製造を屢々試みて見ましたが、味は實に結構に出來ますけれども、質が堅くて店賣の食麵麭のやうに參らず、外國婦人に聞きますと、夫れで宜しいとは云はれましたが、どうも私には氣がすみませんし、第一燃料が多分に要りまして、常食には不經濟で叶ひませんから、色々工夫致して蒸すことを始めました。家族がよく犯されまする脚氣と胃病には必らず良いに違ひありませんが、老人逹に如何かと心配致した處、案外歡迎して與れまして、亡くなつた老父などは偶々赤の御飯や御茶飯を炊いた時でも、胸に痞へるから厭だと申して餘り頂かぬ位でした。唯今では全く家に米を置きませんで、御寺へ上る御供米を一升買ふだけであります、可笑なもので、御米を一升買ひに參るのも常食でないと思へば、格別耻かしく無いと下婢も申して居るのです。習慣は妙なもので、唯今パンを米食に代へやうと致せば、最初米食をパンに代へたやうに困難を感ずるのです。それは胃の工合が良く、氣分が何時も淸々と致す心持が忘れ難い故であります。ハイ副食物は米食の際と同じやうで少しも不都合は御坐いません、中にも汁物は尤もよくパンに合ふやうで御坐います。

▲下婢の健康

麵麭を厭がつて瘦せるやうな樣子が見えます際は、特に米飯を交へ、漸々と轉化させて居りますが、昨年參つた一下婢は平生便通が惡くつて廿日位ない時もあり、顏色靑くやせて居りました處、麵麭を常食と致し初めてから、通じも良く爲り、見違へる程肥りましたので、當人も大層喜んで居ります。麵麭はメリケン粉一升を大抵拾貳個位に作り、二個を大人の一回分として足りますが、慣れぬ下婢には幾個でも食べたいだけ食べさせて置きますと、其內に自然と腹に定りが付いて參ります。

▲間食の慾を制す

昨年子供と私と二人連れで鎌倉へ參つて居つた際、メリケン粉の有無も分らず、蒸籠其他の道具を調へるのも臆劫と存じて、米の御飯を炊きましたが、丁度寒

い時分で毎日米を磨いで炊くのが、座敷借りでは厄介で堪りませんでした。其内粉のあることも分り、道具も都合致してパンを蒸す事にしました處、一度に四五日分を蒸して置けば、食べる時に一寸御飯蒸で蒸し直しさへ致せば事足り、何の位手數が省けたか知れませんでした。而して一袋（三斗入り）の粉で一ヶ月と一週間もあり。焚物も米を炊く半分位少くてすんだのです。米飯を食べて居ますと子供が間の物を欲しがりまして長谷邊にある饅頭などを折々買ひ、私も餘程此慾が起つて困りましたが、パンに代へてから私も子供もとんと間食が欲しく無くなりました。パンは饅頭なぞに似寄つて居る故でもありませう、何んとなく御腹に



規律が付いて行儀よくなるやうであります。御飯の代りに致しますパンは鹽の外に何も交へぬ方が宜しう御坐いますが、枝豆なぞ生の儘こねませて蒸しますと誠に風味が宜しう御坐います。左様ですチー、宅の家族は八歳の女兒一人に、老母、妹、書生、下婢八人程でありますが、メリケン粉は一ヶ月に三斗入りの袋が四袋程入ります。此代價は一袋二圓二十五錢から二圓五十錢までの相場でありますから、先づ拾圓止りで足りませう。粉はローヤル印、鷲印なぞがよいやうで御坐います。

▲下婢に經濟の奬勵

私は無益の費を省いて、成るべく家族に旨い物を

食べさせたいと始終考へて居ります。下婢も始終此主旨で、『炭薪等を無益に使つたとて誰も禮を云ふ者はないから、成るべく注意して冗のない様に心掛けなさい其代り冗費のない月は皆に御馳走して上げる』と申し聽かせますから、勵んで節約致します。砂糖なぞ一度に澤山求め罐に入れて入用だけ出して置きますが、何卒今月は定量より餘して見たいと下婢が工夫しますので、餘り極端に走つて旦那樣に上る乳の砂糖まで吝まれては困ると私が申して大笑ひをする事もあります。主婦と一體の如く下婢に經濟を計らせるのには、冗費を省いただけを以て下婢を喜ばせる賞與に用ゐて奬勵しなければならぬと存じます。

▲出入り商人と買物

日用品を買ひますのに、唯出入りの商人に任せて、あれを持つて來て呉れと云つて平氣で居ては却々損が御坐います。メリケン粉なぞも常に取り付けだから正直だと存じて居ると何時の間にか割の高い品、粗末な品をよこしますから、時々他店を當つて見ます、併し假令他店の方が廉でも默つて取りかへる事は致しません、一應前の店へ掛け合ひ承知しなければ取り替る事に致しますが、始終油斷なく調査して居れば、商人も猾い事は致しません。又八百屋が參つても一々野菜の出處品質の良否を詳しく私が調べますので、商人は却つて張合があると申して居りますそれから商人の癖で例へば十錢だけ呉れろと申すのに二三錢餘分に置いて參らうと致すことが毎度あつて、其商人の方では人數多の家だから二三錢餘分に置いても差支ないと云ふ考へでせうが、私はこれを斷然退けて餘分に買ひません餘分に買へば下らなく餘分に食べるので、何の益にもならぬ事ですから。魚を買ふにも一々香ひを嗅いで調べますから、自然新鮮の品を持つて參ります。併し何時も家に來る商人ばかりに依賴して居ますと可ませんから、始終自分で店へ買ひに出掛けますので、大抵本郷の通りまで參ります。左樣で御座いますネ、私の足で彼處まで片道四十分位かゝりませう。彼處まで參れば野菜や魚も品の良くて廉い物があり、第一魚なぞは

澤山漁があつたか如何かが魚屋の店先でよく分り、隨つて其時〴〵の魚が分りますから旨い物を求め得られます。魚でも野菜でも此シユンと申す事が大切で御座いますネ。シユン外れの品は高くつて旨くありませんから、此點は始終注意して求めなければなりません。私は下女を多く使ふのを好みませんで、近頃妹が縁付きましてから御客でもありますと、老母の介抱人に困りますので、二人の下女を置きましたが、是迄はズツと一人の下女で通しましたから、買物に決して下女を連れません。それで如何な物でも提げ



て歸りまして先達も四角の蒸籠を求めました時、又人を取りに出すも世話と存じ提げて參りましたが包み下を自慢すると見らるゝのも心苦しく、小さくなつて持て來ました。

▲衣服と豫算

私は衣服を箪笥へ藏つて置のが大嫌ひなのです。婦人が衣服を藏つて置きたいのは天性でもありませうが、良人の職掌も考へなければなりません。軍人方の奥様なぞは餘分な衣服を作るのは間違ひかと思ひます。先づ良人の耻にならぬだけを度として自から物好に求め度ないものです、宅で良人の妹を縁付けまし

た時にも、仕度は豫算よりズッと内輪に調へましたので、婚後親戚往復など諸雜費を加へて丁度豫算額に上つたやうな次第であります。私は未だ完全な簿記法も心得ませんけれども、唯豫算を正確に守るだけは勤めて居ります。日本では物の價を話すことを卑しみ一寸憚るやうな習慣が今でもありますが、如何なる相談でも歸する處は大抵これで、金錢上の話が明白でなければ相談がキチンと纏らぬと思ひます。

▲家族の趣味

私共の姑は極灑然とした氣質で、老人に似合はず私の考へ付いた事毎時賛同して呉れまして、常食改良の際にも率先して贊成致した位で御座います。義妹達も至つて從順ではあり、良人も萬事私に打任せて考へた丈けの事は自由に實行させて呉れますし、總ての相談が何時も手輕に一致しますから、誠に幸福な家庭と怡んで居ります。夫れで私も力の及ぶ限り家族の幸福になる事を働らきたい考へで居ります。

▲夫妻の不平

夫妻互に不平を言ひ出したら、際限は無いものでせうし、又此位家庭の不幸はありますまい。特に妻が夫の收入の少いのを不平に思つてぐづ／＼申すなぞは、夫に取つて何位の苦痛か知れません。收入の少い位の勤は困難であるのに、其上妻にまで攻められては内外の敵に挾撃される樣なもので、遂に失望自棄の淵に陷りませう。一旦緣あつて良人と仰いだ以上は、何事も定まれる、運と諦らめ、少いだけの經費で切り盛りするのが妻の本務ぢや御座いませんか。又男子の方でも案外魯鈍な妻を有つた處で、矢張り天命と諦らめ、少しづゝでも導く樣にせねばならぬと存じます。何樣な人間にも缺點は必ずある者ですから、これを宥し合ふて暮すのが夫妻和合の礎だと存じます。私のやうな何も出來ぬ者が今日安々と暮されますのも全く良人の骨折り一つと感謝して居ますから、良人の希望は出來る限り滿足させたいと存じて居ります。先頃も義妹に彈かせて樂しむ爲めにピアノを買はうかと良人が申しました際、私は直ぐ贊成致したので、姑が左樣一々良人

の云ふ通りに爲なくても可いと申しましたけれども、一旦買はうと云ふ望の起つたものを、一寸なりとも私が頸を傾げれば、良人は必らず不愉快に感ずるに相違なく、不愉快を感じさせてから買つたとて、何の功もない事と存じて直に贊成したので御座いました。

▲怠惰と食物

生意氣な事を申す樣ですが、外國婦人の老實々々しさは日本婦人の及ばぬ處かと存じます。一寸旅行して旅宿へ着きましても、外國婦人は直ぐに身の廻りを始末するとか、手紙を書くとか一向隙がありませんが、日本の奥樣方はあア草臥れた先ア一休みと云ふ氣味がある樣です、これは習慣にも因りませうが、一つは食物の加減かと思ひます。米食は如何しても氣分を重苦しくする傾がありますから、僅々の運動や、骨折にも負けて直ぐに弱るのぢや無いかと思ひます。

▲苦心考慮の價値

女子に學校教育の必要は申す迄もありませんが、只人事のやうに考へたり、又嫁入り道具のやうに考へたりして、上の空で學んでは何にも成りますまい。棚橋さん三輪田さん其他有名の御婦人方の御履歴を伺ひますと、他より學ぶと云ふより御自分で苦心發明された方が多い樣なもので、誰でも苦心して研き出したのが本當の役に立つのであらうと考へます。

我家の家政

星常子女史

星常子女史は故衆議院議員星松三郎氏の未亡人で、三田四國町の御宅に五人の子女を守り育てゝ居られますが、女史は明治二十三年に高等女子師範學校を卒業し、高等女學校に四年間教鞭を執られたる後、星家に縁付かれたのですが、一昨年までは引續き、府立第三高等女學校に、女子師範學校に、前後勤務されてありました。女史は星氏の選擧に後援となつて良人の素志を貫徹せしめた程、勝氣な性であるゝに似合はず、

老幼弱者に同情を寄すること深く、又た家事や裁縫に熱心で敏速で、忙しい公務の傍ら家族の衣類を一枚でも人手に掛けぬ働き振りは、實に敬服すべきであります。特に良人に別れて後は、内外の用務を一身に引き受け、家政整理、子女敎育に盡瘁されて在りますので一日記者の御尋ねに對し、左の通りの御話がありました。

▲故良人の素志

主人は名譽ある職に就きたいと云ふ希望が盛な人でありましたので、國會開設の當初から一遍でも選擧に出ないとは御坐いませんでした。無論失敗は度々でしたけれども、私が嫁しましてからは、二度目の選擧で當選致し、昨年まで持續しまして議員の資格を以て世を終りましたから、先づ主人の素志は貫徹致したと申すものです。併し度々の運動に隨分費用が掛りまして可なりの財産も星家も大方はこれが爲めに傾いたやうな次第で御座いますが、遺族の生計と遺兒の敎育位は何樣にか出來る心算であります。イエ新聞には私が選擧運動に働いた樣に書かれましたが、私は唯だ御懇意の方が御出でにでもなれば願ふ位の事で、別段馳け廻つて運動致したのでは御座いません。

▲家計豫算の準備

家の財政は主人が獨りで擔當して居りまして、私には一向知らせず、私はホンの生活費だけを受取つて、其日暮しを致して居りましたから、別に豫算の規律も設けず、學校で家政學を講義して居りながら、實際は實に御耻かしいほど、空漠とした遣方で御座いましたが、主人が昨年遺言も出來ない位の急病で亡くなりまして以來は、全體の財政を私一人で始末致しますので習慣が習慣だけに一時に錯亂して困りました。以後は家計の豫算等も精確に立てねばなりませぬが、今日までは一向標準が付きませんから、先づ今年一ぱい試驗を致して見る積りで御座います。それは費目を分けまして、費しただけの金高を其費目部へ付け込んで置き年末に決算致して、大凡此目は此位づゝ要ると申すことを確かめ、其上で省けるものは省いて、豫算表を作

りましたなら、精確に出來やうと思ひます。左樣で御座いますネ、子供多の事ですから、食費、敎育費などが、重なる支出で御座いませう歟。被服費などは、當分古物で間に合せますから、ホンの綿や糸の代ぐらゐで濟まうと存じます

▲子供の育て方

子供は男三人女二人で、末の兒は昨年六月に生れましたので御座います。子供の育て方は、私はどちらかと申せば放任主義の方で、食時以外の食物も隨分與へます。絶對に間食は爲せぬと申すのでも無し、又毎日定めて間食させますのでも無く、時と場合によつて種々に致しますが、子供は至つて壯健で御座います。衣服は寒中でも襦袢の長いのを着せて、股引は穿かせませず、暑中寝かすのに腹掛も用ゐませんで、至つて手の掛らぬ方針を取つて居ります。



▲女學校の價値

近頃は大分女學校の批評が八釜しくなつて參りまして緣付いてから實際の役に立たぬとか何とか攻撃されますが、これは畢竟女學校出身の婦人を餘り

豪い者と想像して、其割合に出來ないと云ふ處から、苦情が起るのであらうと思ひます。併し敎育を受けた婦人は、無敎育の婦人に較べると、家政を執るのに巧者であるに相違なく、又一般の男子も自然それを識認して居ると見えまして、私の處へよく嫁を世話てし吳れと賴みに御出の方は、何れも切て高等女學校だけは卒んだ者をと御望みになるので御座います。

▲老人別居說は不可

私が御友達と一緒に編纂致した敎科書の中に、老人同居說を書きました處、其御友達は反對を主張され又婦人雜誌などへ此說を書きました時も、矢張り方々から反對の御手紙を下さいました。成程若い方の側から申せば、別居の方が必ず好都合に違ひありますまいが、又老人の心情を汲んで見なければなりません。尤も私は姑を持ちませんから、よく判らぬのかも知れませんが、宅に同居してある當年九十三歲の祖母の憐れな心情を見まして、一般老人の心を思ひ遣るのであります、此祖母は一家の內でも成るべく若い者や子供の大勢居る賑かな室へばかり來たがりまして、夜分も淸々と別室に寢ることを好みませず、窮屈な思ひをして子供の側へ臥りたがります、これは老先短く心寂しくて耐らぬ故でありませう。而して老人は子供の世話を托するに誠に善く行屆いたもので、此祖母なぞは、唯今以て長子の衣類や萬端の世話を人手に掛けず、一切引受けて居ります。斯樣に愛の深い老人の賴り少い感情を慰めるのは、若い者の義務ですから、漫りに別居論を主張したく無いものと存じます。勿論家庭及び老人の氣風によつて、止むを得ぬ場合もありませうが、一般の可否を申せば、私は別居說に斷然反對致す方で御座います。

▲學校勤めと退職後

亡主人は疾から私に學校勤めを止めろと申して居りましたが、自分が何樣も退きたくないので、遂に一昨年まで出勤致しました。退職後は定めし家の用事が片付くだらう、などゝ申される方も御座いますが、誠に御恥しい次第で、却て勤め中の方が手が廻はつた位で

あります。それで私は遣方一つで毎日の出勤も出來るものと信じます。私は裁縫を人手に任すことが大嫌ひで、出勤中も土曜、日曜、或は暑中休暇に、冬物の洗ひ張りから縫物を悉皆致し主人の袴、子供の足袋まで人手に掛けませんでした。私が斯様な構はぬ風ですから、裁縫に熱心なのを人樣が意外のやうに仰しやいますが、私は幸ひに何事も迅速と云ふ事だけが得意なので、時間の少い割に案外縫物が捗取つたので御座います。

▲小兒服の工夫

斯様な事を申すと、自慢のやうで可笑しう御座いますが、師範學校の生徒であつた時代も總てよくは出來ませんでしたけれども、速い事だけは後れを取りませんでした。其頃の裁縫教師渡邊さんは速いのが好きで、優點は主に速成者に與へられ、私は毎時も勝を得ました。或御友達が私の仕事する處を見られて成程貴女は速い筈だ、大抵の人は脊縫をして折を付けるとチヨツト眺めてから脇を縫ひに掛るのに、貴女は脊縫して折を付けた手を直ぐに脇縫に轉じなさる僅かの事だが、一くぎりづゝ眺める時間を省くだけでも速いのでせう、と斯う仰しやつた事があります。兎に角子供多の勤人といふ忙しい主婦には、此速成法が如何程利益するか知れません。それから子供の衣服などは成るべく手數のかゝらぬ工夫を



致し、四ッ身の空大首を縫はず、大首なしに定めました。斯う致すと大層手間が省け、襟肩から合褄までズーッと斜に襟を付けられ、胸がよく合まして、極都合が宜しいのです。而して子供の常着は腰あげを廢し、打あげにしてツイタケに定めました。晴着は二三年其儘で置くから腰あげを下す必要もありますが、常着は毎年洗ひ張りしますから、この必要もありませず、ツイタケで結構間に合ひ、縫手間も餘り掛りませず、運動も輕快に出來ます、尙は冬の常着は一週に一度づゝ胸や袖口なぞの汚れた場所へ、湯或は水を付け、ブラシで摩り乾かしますから、大汚れは致しませず、寒さの取付から暖かになる迄に、一度脫ぎ更へ致させれば淸潔であります。私は近頃又モッと簡便な工夫を致しました。

▲簡便な上着

更紗の布地で、袴と羽織と一緒にした樣な物を拵へましたが、世間の改良服のやうに面倒なものでなく、極簡單な縫方であります。畢竟筒袖襦袢へ襠を少し取つた袋を縫ひ付けたもので、大幅七尺で着丈け二尺五寸の子供に間に合ひます、男女の子供に皆これを羽織らせ。學校から歸つても其儘着せて置きますから、綿入は少しも汚れません。この上着があれば、冬一ぱい唯一枚づゝの布子で澤山で御座います。洋服も拵へては御座いますが滅多に着せません。普通の日本服の方が慣れて居る故か、裁縫も早く出來ますし、反物の尺なぞも日本服向に出來て居ますから、如何しても便利だと思ひます。何分子供澤山なので、足袋なども一々買ひ立てゝは却々大層ですから、一切宅で縫ふて穿かせます。表だけ新しい布地を用へば、裏は古布地で結構ですし、時間から申しても少しの暇に出來ますので下女の居睡の間にも爲せられるのです。或奥さんが、手の少し離れた子供の守に何かチヨット爲せる仕事は無いでせうか、と御相談でしたから、私は早速足袋が適當でせうと御勸め申しました。

自制力の喚起

藤井靜子

世の中の人、殊に御婦人で以つて、ヒステリーといふ御病氣のない方は、殆んどあるまいと思ひます。御自身では何ともないと思はれても、醫師が診ると大ありのことがあります。また醫師が診察して、何處も身體に惡い處がないと思ふ人でも、自身では、動悸が烈しかつたり、大熱があつたり、呼吸が促迫やうに覺えて、その苦痛を訴へることがあります。斯様なのは、一つの神經の病でありまして、子女の教養上に大關係のあるものであります。この病は生命に關するやうなことは決してありませんが、全治し難い病であります。このヒステリー病に犯されて居る人は、肺結核の患者が醫者が注意しても、遠慮なく多人數の中に於て、唾液を散すと同様で、自分はさうでないと信じて、醫師の言を疑ふことが能くあります。遺傳といつて子孫に傳へられますし、精神病の前兆となつたり致します。

世の事物に對する觀念が、非常に厭世主義であつて、自分の發展せにやならない腦を、心痛に疲勞させて、世を悲觀して、死を急ぐものゝあるは、此の病の致すところであります。華厳の瀧を汚し、淺間の噴火口へ投ずるものの多いのは、そも誰の罪でありませうか。哲學などいふものは、一寸した位で分るものではないのであります。思ふに、生きて落膽の淵にあらうよりは、死んで名を知られる方がましとの考ではありますまいか。とにかく心の大きい人の仕業ではなく、神經的の病者に多い様であります。このヒステリー症の人も、大に世間を厭つたり、閑靜を望んだりして、活氣が少しもありません。

これが治療は、醫學社會でも夙に研究せられる處であつて、化學的にも器械的にも色々の方法が公にされてあります。しかし私はこれを心理學の方面から治療するの必要があると信じます。斯様な必要を感ずると同時に、近來或る一派の間に鼓吹せられる處の病理教育學の上に於ても、これを研究するのが、適當かと思

ひます。しかしながらこれは、專門家に望む處であつて、普通の人には空論に過ぎないのであります。故に私は斯樣な說をなしました責任として、一般のヒステリー病者に希望する處があります。即ちこれは氣の病でありますから、醫師の藥を浴びるよりも、自分で自分の心を活かして行くといふことが第一であります。夫れには、各自精神の制裁力を喚起するといふことが、疲勞も殘さず、藥毒の害をも受けず、安全であつてもしかも確實な治療法と思ひます。彼のヒステリー病者が自分の苦痛を輕くする爲めに用ひた痲醉劑の快きに心まで戀々として、遂に莫兒比涅中毒を起したりするの類は、敢て珍しからぬ事であります。自己精神の制裁即ち私の所謂自制力の喚起といふものは、一朝一夕でなし得られるものでせうか。

　病人に向つて、その病の原因と豫後と、その子女教養上に及ぼす處の弊害を、諄々として說き聞かせても、決して效力のあるものではありません。藥品療法の害あることを說きましても、器械的療法の方が有力だといひ聞かしても決して、この自制力は喚起し得られるものではありません。唯その方法としては、これを俗事に照しつゝ、理論的なのを去つて、比喩的にして、懇々として數年一日の如く說き聞かせ、醫療も廢することなく持續させて、漸次藥量をも減少して、用ひない樣にして行くのが宜しくあります。さうして、腦力相應の仕事を與へて、病を考ふるの餘地を少くさせるといふ樣にして行くのを良法と致します。

　嘗て私に師事せる處の一婦人が、私の前に手をつかへて、斯樣な事まで恐れ入りますが、主人の待遇に何一つ不足はなく、奴婢もよく私の命を用ひますし、先妻の子も義弟も能く私に服從して居りますけれども、何となく頭が重くてなりませんが、醫療を受けずに治す工夫はありますまいかといふ願を出したことがありました。實にその婦人の家庭には、常に春の如く和氣靄然として堂に滿ちて居りまして、頭のみ疲れさせて居る私は、この家に行くのを一の樂として居る位であります。多分はヒステリー症であらうと思ひまして、

色々の質問をしました處が、皆その通りでありました。依つて私は、左樣に心痛するといふことは、御主人に對しては大不貞であるし、お孃さんに對しても不親であるし、總て家庭の整理上、子女の教養にも大害があるばかりではなく、貴女は間接に自殺の準備をして居られるといつても不可あるまいと思ひますと、申しまして樣子を見ると、その婦人も怪訝な眼で私を見上げました。貴女は、何處となしにこの春よりは瘦せられました。思ふに食事も不味いでせう。衰弱したの



も原因は、その心痛のためで、斯樣な時には、重き病に罹り易く病氣になつてからは、その心痛のためには、治すべきものも不治に陷るやうになつて、一家の悲歎を殘して冥目するやうになりませう。自分では手を下して、命を斷たないのでも、心痛といふものゝ力を借りて自殺するのであります。この身といふものは、父母の身體であつて、嫁して後は主人の身體でありますから、主人の許可なくして死ぬといふことは出來ぬ道理のものであります。私の身は一人の母と私の主義とに

支配されて居りますから、私の生死は一人の母と私の主義とに服從して行かねばならぬのであります。それでも心痛して死期を急ぎますかと說き聞かせました處、大に喜悅の色を滿面に湛へて、分りました、つまらない事を考へた折には、間接の自殺といふ五語を私の戒と致しまして、愉快に月日を送りませうと申しました。この婦人もその後逢ひました折は、血色もよく頭の痛いのがなくなつて、大層快活になられました。斯樣に奏効の早いのは稀でありますが、一度いつてもまだよくない時には、幾度も繰り返しますが、その時こちらの言葉に疑を挾んで、彼是申しても說破してはなりません。暫くこちらのいふことは中止して、時期を待つて臨機の處置を取ります。

逆境にたつといふことは、この病には大毒であります。私の友人も、自ら求めて逆境に立つた結果、重きヒステリー症になつたことがありますが、その爲め醫師の處方以外に麻醉藥の濫用を試みた揚句、自己の制裁力を喚起し得まして、今では起る每に醫藥なしに治して居られます。

ヒステリー症や神經衰弱症に罹つた子女を、醫師の忠告にのみ傾いて、海岸や山間の家に一人轉養させるのは宜しくありません。また、伴ふ所のもの、下婢などであつては同樣であります。自分に定まつた用事のない時には、餘計なことを考へて、却て病氣の妨となります。斯樣な時には、醫師の診察を受けると同時に、心理學や敎育學に最も深い研究を積んである敎育家に御相談なさい、父母の膝下に置かれて、學事を全く廢さないで、却て早く治ることがあります。

衛生上より見たる 美容法

高橋鶴山

▲姿勢矯正の必要

美容術の事は再三記載しましたが、こゝには唯だ從來餘り人の云はなかつた點に就いてお咄致しませう。

之を衛生上から言へば、西洋婦人のコルセットや支那婦人の足部緊束や日本人の坐法の如きは全然有害のものとして排除せねばならぬ。近來我邦の婦人間にもコルセットを用ゐて腹部を緊縮し、所謂細腰蜂の如き風俗を眞似る人もあるさうだが、此弊害は單に脊椎を軟弱ならしむるのみならず、常に内部の臟器を壓迫するから、內臟病に罹り易く下腹部に充血を起して、骨盤の發育を妨げ、爲に難産に陷る等、全く害あるも益ないのである、又た支那婦人の纏足は、外観、衛生共に野蠻時代の悪風として排斥すべく、次に我邦の坐法に至つては、昔からの習慣上俄に改むることが出來ないまでも、何とか之が矯正法を講じなければ、日本人は遂に脊椎脚部共に彎曲したる人工的不具者とならねばならぬ。此習慣は第一姿勢が醜いばかりでなく、可成小供の身體に窮屈なる檢束を加へず、自由活溌に行動せしめて充分に筋肉の發達を計らねばならぬ。殊に一般の婦女子は臀部の大なるを耻ち、腰の細きを以て美人なるかの如く心得てゐるやうですが、之は大なる誤見で、元來婦人の臀部は男子よりも大きいのが生理上の原則に叶つたもので、決して耻づるどころか寧ろ腰太く臀豐なるを以て眞の生理的美人と稱すべきものです。そこで我邦人一般の姿勢を矯正せん



とするには、第一幼少の頃から筋肉を壓迫せざると坐法を椅子に代へること、又學生社會に行はるゝ狂正術體操を盛にすべき事等であるが、要するに美容法の第一義は姿勢を正すことであります。

▲皮膚の衛生

如何に目鼻立の完全な人でも皮膚の色が惡ければ美人たるの資格を缺くものですから、體育に亞いで怠る可からざる注意は皮膚の衛生です、凡て皮膚の强健な人は寒熱濕氣等に對する抵抗力强く、寒冒其他の病氣に罹る憂は少いが、若し之を不潔にして清淨法を怠れば自然肌が荒れ、且つ毛孔が弛んで病氣に冒され易いのみならず、遂には蒼白色又は黑色に變ずるのでありますから、平生適度の入浴をして垢を溜めぬ樣にしなければなりませぬ。そこで如何なる皮膚が最も健全であるかと云ふに、表皮に光澤あつて、皮下に桃色を帶びたのが良好なので、貧血症や又は血液循環の不良なる人には決して然る色艶がないのです、依て此色澤の惡いのを治すのには、第一適宜の運動と食物の衛生に注意するは勿論のこと、蒼白色の人は重に貧血に基するのですから、專ら血を增さねばならぬ藥劑としては滿俺鐵百布頓、或はヘモグロビン等を内服し、食物は可成蛋白質に富んだ滋養分をとらねばならぬ。又皮膚の荒れた人、若くは病氣の爲に蒼黑色を呈する人は、變質藥として皮膚病專門醫に就き、アルセニツキ劑を服用した方が宜しい。

▲皮膚を美化する法

近頃私の知人なる一美容法專門家は、普通化粧法の外に食物及び沐浴等に就いて皮膚衛生の事を言ひました、凡て食物は不消化のものを除いて通常のもので宜しいが、可成は新鮮な物を擇ぶ事、牛乳及び果實は血液を清淨ならしむる効があるから多量に飲用する事、酒類も少量ならば可いが多量には用ゐぬこと、餘り鹽辛きものは宜しからず、糖分は適度に食すべし云々。次に沐浴は皮膚清潔法として是非毎日行はねばならぬ事である、先づ起きたら直ぐ全身に溫浴をするか、或は溫湯摩擦をする、かくて後新鮮の空氣を呼吸しつゝ

適宜の運動をなし多少の發汗するまでに至つて全身の濕氣を拭ひ去り、而して石鹼を溶して皮膚を洗へば身に附着した垢は奇麗に去つて神身の爽快を覺える、之が皮膚を美化する唯一の方法であるが、溫浴は熱度高きにすぎては皮膚を弛緩する虞があるから攝氏三十九度より四十度を以て適度としてある、又之に使用する石鹼は鼈甲石鹼が一番良好で、他の化粧石鹼でもよいが粗製品で皮膚を刺戟するのは宜しくない、寧ろ從來の洗ひ粉か米糠又は米利堅粉を溶いて使用するもよい。



▲皮膚の外傷及發疹治療法

現今一般の人が垢を落すに、吳絽の巾や糸瓜を以てするが、之は徒らに皮膚を損ひ、黴菌浸入の媒介を爲すものであるから可成革か或はタオルを以て摩擦した方が宜しい、又夏期汗疹を發したり、冬期に胼胝、垢切れ、凍傷等に罹る人があるが是等は概ね平生皮膚の養生に注意せぬから起るのである。汗疹は汗の出た時それを拭はずにおくから一種の刺戟酸を發生して皮膚を傷ふに至るのだから、之を癒すには發汗の際直に皮膚を洗滌して亞鉛華澱粉(亞鉛華二分 澱粉八分)を撒布するが

宜しい。又胼胝垢切、凍傷等は寒氣の爲に皮下の血行を防げられ皮膚枯燥するが故に生ずるので、此治療法は、カンフル軟膏カンフル丁幾又は等分のイヒチオール、ラノリーを塗布すれば効がある。それから青年時代によく出來る處の面皰は如何かと云ふに之は皮下の分泌管に脂肪が滯積して其周圍に炎症を起すから發するので、之が簡單の治療法は、百倍のサルチル酸アルコールを洗面の後に塗布するが宜しい。其他皮膚に小さな疹が生じて瘙痒て堪らぬ場合には、一封の四分の一の硫化加里を手桶二杯位の湯に溶して全身浴をするに如くはない、但し之に用ふる湯槽は木製に限ること。(金屬は腐蝕する)。

▲頭髮の清淨法

これは專ら男子に就ての事ですが一體頭髮は家屋の屋根の如きもので、餘り短く刈りすぎては亞鉛葺と同じく、直接寒暑に感じ易いから衛生上宜しくないが、爾かと云つて長々とコスメチックで凝結めた頭髮は第一空氣の流通を妨げて健康に惡るい。之れは長からず短かゝらぬ中庸をとり、毎日手入れをして脫毛を防ぎ、且つ光澤を失はぬ樣にしなければならぬ。其の清潔法は朝洗面前に先づ皮屑を落しブラシをかけ、次によく頭髮を洗滌して香水、又は香油を塗布するのである。洗滌用の石鹼は普通の物よりも水石鹼(之は七倍の藥用石鹼末と五十倍の苛性曹達とを水に溶解したるもの)を用ゐた方が淨潔になる。洗滌後に乾いた巾によく水分を拭ひ去り、而して香水なり香油なりを塗布する、若し又癖の惡い頭髮ならば、其部分だけ少量のコスメチックを塗抹し、其人の顏面と調和ふやうに燒鏝を用ゐて縮らすも延ばすも自由自在になし得るが、之を一枚板の樣に醜くすると、瀟洒にするとは本人の手加減一つである。又非常に皮屑が澤山で、洗つても梳いても益々殖えて痒味を覺えたり、脫毛をしたりする人があるが、之は理髮店から感染つた傳染性の皮膚病に罹つたのであるから速に醫師に就くか或は千倍の昇汞水を用ゐた方が宜しい。

▲婦人の頭髮と帽子の必要

女子の頭髪には在來の丸髷あり、島田あり、銀杏返しあり、稚兒輪あり、又洋式では束髪、英吉利巻、夜會結び、廂髪等、時の變遷、時代の流行につれて種々なる型がある。果して何れが良いかと云ふことは斷定し難いが、近來一部の婦人間に、女子も帽子を用ゐよ、といふ説が大分勢力を占めて來たのは大に欣ぶべき傾向であらうと思ふ、其故は第一衞生上より看て、冬は寒氣を防ぎ夏は日射を避け其砂埃に髪を汚さるゝことがない、のみならず婦人が帽子を冠ると定れば、今日の如く種々雜多の髪型がなくなつて――流行廢りは別問題とし――大體に於て略一定するから、形に就て一々苦心する必要もなく、而も優美で、衞生美容共に適つたものであるから是は是非實行したいものである。尤も古來の習慣上俄に實行も出來まいが、先づ規律の一定したる女學校の生徒等から漸次全般に行渡らせん事こそ望ましい。



▲改良髷の必要

日本式の結髪の種々ある中には頗る美術的のものもあるが多くは髪結の手を藉らなければ、出來す、三日も四日も長いのは一週間餘りも髪結の來るのを待つといふ有様であるから、隨つて髪を洗ふことも自然怠り勝となり、早くて一週間、月に一二回位なのが普通で、甚しきは三月に一度洗ふか洗はぬかと云ふのがある。殊に驚く可きは關西地方の婦人

で、之は半年以上も洗はぬと見えて、我々が旅宿について給仕に出る女、乃至酒席に侍する女までが、其頭髪の臭氣といつたら實に甚だしいもので、殆んど飲食に堪えぬことすらある。是等は凡て其の日〳〵に充分の清潔法が行屆かぬから起るので、之を直すには毎日自分で結ふことの出來る束髪にした方が可からうと思ふ。廂髪よし二百三高地亦た不可なけれど餘り極端に廂が出張つて前髪の中から眼が光るやうでは、第一顏と身體との權衡が取れぬばかりでなく、誰が目にも可笑しく見えるから其邊は程良き加減にして一種の改良髷を案出したら必ず帽子を戴くにも都合が良からうと思ふ。

▲醜女も美人となる

元來日本人の髪は素直であるから、如何樣にも恰好が出來る上に、西洋婦人よりも比較的お凸が少い。歐米の婦人は前髪の處に鬘をつけて上手に化粧をするから一見美人のやうではあるが、サテ鬘を取除けた處を見れば全で人違ひの樣に思はれる。日本婦人はそれ程に生際が拔上つて居らぬから前鬘を附ける必要はないが、若し西洋婦人の如く鬘をつけ上手に化粧をすれば澤山の美人が出來る事は請合、低い鼻を高くし、大きな口許を小さく見せる位は化粧の手心に依て朝飯前の仕事である。又日本式の髷は恰好を作る爲、若くは容易に毀れぬ樣にとて鬢附油の如き硬いものを用ふるけれど之は宜しくない、油は可成粘氣のない淡如としたのが髪の爲に良いので、舶來物では巴里のピノー製にかゝる香油が最上である、又皮屑の澤山出る人には矢張りピノー製のキニーンと云ふ香水が一番である。そこで髪の恰好を作るには鉗子狀の燒鏝を用ゐて如何にでもすることが出來る、鏝の熱はアルコールランプを以て裁縫の時に用ふる程の度にして使へば望むがまゝの型が作られる。

▲男子の顏面衞生

こゝに一つハイカラ好の人に御注意を申上るが、男子の髭髯は一方に於て顏面の裝飾ともなれば、又衞生上鼻口に入る塵埃を防ぎ且つ防寒用ともなるものなれ

ば之を蓄へても不利なことはないが併し之を手入れするには相當に骨が折れる。概して髯を生やす人は兎角長く延ばしたがる癖があるが、薄い髯は延すよりも短く刈つた方が濃く見えるもので、此刈方は上唇縁に添ふて一文字に剪り左右の尖端は四五分位殘しておく方が却て立派である。濃厚の人はカイゼル風でもナポレオン型でも随意に出來るが、手入れを怠つては寧ろ無きに如かずであるから、平生チックで凝めること丶鏝を當てること丶を忘れてはならぬ。又顋髯の長くして濃き人は頰より顋へ自然と長く半圓形に刈るのが丸顔の人に似合ひ、面長の人はポイント形と稱して顋の處を圓錐形に刈るのが最も釣合ふ様である。凡て鬚を剃つた後は必ず顏を洗ひ、香水を振りかけ西洋おしろいを撒布して輕く之を拭ひ去る様にしておけば、決して俗にいふ剃刀かぶれや其他の皮膚病を招ぐ憂は



ない、若し剃つた痕がピリ〳〵痛むやうな事があつたら、それは肌の荒れたのだから、カンフル、パラピン（カンフル二分 パラピン八分）を塗擦したが宜しい、それに鼻や耳の毛を剃るものがあるが、夫は衛生上殊に禁物で是等の孔毛は蟲や塵埃の侵入を防ぐ爲に具へてあるのだから、宜しく保存しなければならぬ。若し五月蠅くて止むを得ぬ時には挾剪を以て刈る樣にしたが良い。

▲齒の養生と清潔法

齒と衛生‖齒と顔面美‖との關係は頗る重大なるもので、平生これが養生を怠れば遂には齲齒となつて食物の消化を害するのみならず、漸次脱落ちて頬肉陥凹み、昨日の紅顔も今日の老相と變ずる等の例は隨分稀らしくない事であるから、幼少の頃から齒の養生は最も大切にしなければならぬ。毎朝齒を磨き含嗽をすることは勿論であるが、三度の食事毎に之を行へば齲齒を豫防することが出來る、又齒間に食物の挾つたのを一々掃除しなければ、其食物が腐敗して乳酸を生じ、それが爲に齒質を腐蝕され、或は齲齒となるのである。そこで齒を磨くに如何なる方法が良いかと云ふに、先づ齒の前面を磨くには、ブラシを横に持ち、齒並と平行して縦に上下すればブラシの毛は齒間にまで達するから食物の殘留は遺憾なく除き去ることが出來る、齒の内面も咀嚼面も右と同樣にブラシを運用すれば宜しい。次に齒磨粉は何を撰ぶべきかと云ふに、磨粉の如き砂、或は石粉を混入したものはよく磨ける代りに齒質を損する弊があり、又嵩を殖さんが爲にメリケン粉や炭酸マグチシヤアの如き、餘り効力のないものを多量に混和したのもあるが、一寸吹けば直ぐ飛び散るやうな輕い齒磨粉は先づ良からぬものと見て差支えない。

▲齒磨粉の製法と齲齒の注意

齒磨粉の主とすべき點は唯だ齒を研くといふに止まらんので、第一に齒を皓潔にして口内のバチルスを滅殺し、且つ粘液を溶解して口中を清涼ならしむるにある。そこで右の意に適つた齒磨粉の製法を示せば左の如し。

一 沈降性炭酸石灰　五十瓦
一 薬用石鹸末　五瓦
一 玫瑰花末　五瓦
一 薄荷油　五滴
一 カルミン色素　〇、五瓦

右をよく研和して製するので、若し之を煉歯磨にしやうと思はゞ、グリセリンを適宜に調合すれば可い。これなら必ず有益無害である。

又平素口中に臭氣のある人は、十五倍の硼酸水に二三滴の薄荷油を加へ、食後及び就眠前後に含嗽すれば必ず効目がある。それに食後歯を掃除するに、普通の小楊枝を用ゐるよりは鳥の羽の軸をペン先の如く尖らして使へば、如何なる小孔でも自由に穿つことが出來る。若し又齲歯の生じた際には決して等閑に附せず、直ちに歯科醫の治療を受けたが宜しい。僅に琺瑯質を侵された位なら治療も極めて容易であるが、深く侵蝕されて了つては治療上の苦痛が劇しいのみならず、動もすれば脳に故障を起して甚だしく美容を損ふ事がある。又俗間には往々歯を白くする爲に酸類をつける人もあるが、之は歯質を溶解するばかりであるから決して用ゐてはならぬ。

美容法の項目は未だ盡きず、次號の誌上に於て、一爪の清潔法、一疾病と美容法、一新式女子化粧法、一服装に就て、一芳香水香油の種類等を具さに説明すべし。

▲石鹸の撰び方

歐洲にては、化粧用乳酪石鹸なるものあり、「グリスリン」等の油類、及び芳香揮發油より製するものにして、之れを使用するときは、皮膚を清潔ならしむるのみならず、皮膚の機能を亢進し、且つ爽快の感覺を與へ、皮膚をして、其淡紅白色なると其柔軟なるとを維持するに適當したる者ありと云ふ。されど我國に於ては、此の如き石鹸なきを以て、「グリスリン」より製造したる所の石鹸を撰び夫を使用すべし、其他及ぶべきだけ寛和にして、決して皮膚を刺戟せざる所の石鹸を使用すべき也。若し粗糙にして皮膚を刺戟し、疼痛を感ぜしむるが如き苛烈なる石鹸を久しく使用するときは、皮膚は漸々脂肪を失ひ、終には枯燥して脱屑となり、甚だしきに至りては皸裂を生じ、又は潰瘍等を生ずるに至ることあるべし、是れ其基礎たる油質の粗惡なると、「アルカリ」剤の多量なるとに由ればなり。

△鏡

鏡には色を黒く見せるのと、白く美しく見せるのとがある、之はガラスの性質や、製法により、又場所に依つて違ふので有る自惚心を起させ様と云ふのでは無いが、多くの人中に出て行く時などに自分は醜いもので有ると云ふ心が常に胸中に蟠まつて居て人と交際するのと、せめて色だけでも白いと思つて人に接するのとは大變に態度が違ふ、人中で自慢らしい態度は誠に片腹痛い見惡いもので有るが應揚にあるべきは最大切な事で、卑屈らしいのは實に見られなひ、之には他に種々の源因もあるが美しく盛装してさて出掛けにのぞいた鏡の面に映つた姿に依つて起つた感情の如何も亦大に關係するのである。

△醜美

美しくして花の如き人も長く交際する内には何となくあき足らぬ樣に感ずる事がある、左程美人でなくとも何となく奥床しく氣高い人もある、之れ皆其形骸の中に包む心の醜美が自然と外に表はれるので、顔や姿が如何に楊貴妃や、小町姫の樣な目出度くあつても其心の邪なものは何處にか厭な處が有つてむある人の尊敬を受ける事が出來ない。

之に反してたとへ形は醜い人でも心正しく、常に公明正大の心掛けを持つて居るものは云ふに云はれぬ氣高さが何となく表はれて何人にも犯しがたい處が有る、花の顔は年を經るに衰へて行くけれども心の内の花は年を經るに從つていよ〳〵其美しさを增して行く、醜なりとて豈悲しむ可けんやである、併し醜にして邪なるものは到底望みなく心なき者も跣足で逃げて行くべし。

△子供

幼子を目の前に置いて、此子は到底末に見込が有りませんとか、惡い子だとか大勢の前でけなすのは大變に惡い。

子供の心には立派な空想が充ちて居る、行末は大臣にならむとして、大將にならんとして、金持にならんとして皆夫々に、其希望は必ず現實されるものと信じて居る、此自信力が誠に貴いので、子供は愉快に夫れに向つて進まうとするのである、夫れを頭からけなしつけると終には自分は到底駄目だ、つまらないと云ふ自暴自棄して遂に役に立たないものになつてしまふ。

併し又之に反してお前は利口だ、好い子だと賞め、人に向つても頻りに自慢すると、もと名譽心に富む子供の心は今度は高慢心と變つて、己程豪いものは無いと云ふ樣になる、人に高慢心が起つたら最後其人はもはや進歩しない、まして一人前にならぬ子供には誠に恐るべき事である子供を育てるの容易ならざるは此一事を以てもおして知られる。

△戀愛は油繪の如く、遠く眺むべし近づきて手に把るべきものに非ず。

△「飛んで火に入る夏の蟲」とは、八百屋お七が辭世の遺言なり。

△味噌の味噌臭きは眞き味噌にあらず、女の女らしきはよき女に非ざるべし。

庖厨

秋の家庭料理

ゆり子

◎松茸飯

飯は通例米一升に醤油猪口に二杯、同じ分量の酒を入れて炊き、別に松茸を短冊に切り味淋醤油にて味をつけ置き右の飯を櫃に移す時間ませにするなり又飯の煮へ上る時短冊に切りたる松茸を打ち入れて炊くもよし。

◎卯の花酢

豆腐の滓を笊にて漉し（漉方は桶の上に笊をのせ滓を入れて其上より水を注ぎながら掻き廻せばよく漉せるものなり）布に包みてよく絞り水氣を去りて鍋に移し、鰹節の煮汁に味淋酢を加へ鹽を以て味をつけ、よく炒りあげて冷し置き、鰯、こはだ、さより、鯵、小鯛何でもよしよく拵へたるものを一寸位に切りて右の滓の上にならべ、梅酢、生姜を添へて出すべし、魚の拵へ方は尾頭を取り、開きて骨を去り、小骨の多きものは毛抜にて抜き去り鹽水にてよく洗ひ、笊にあげて水を切り薄鹽をふり置きて別に酢と味淋とを合せて煮つめたるものに漬け一時間程經て又笊にあげ酢氣をきるなり。

◎鰯うしほ煮

いわしの頭を去りて腸を取りよく洗ひ一寸鹽をふりかけ置き後水にて洗ひ熱湯を上よりかけて其油氣を取り去り常のうしほ煮の如くすべし。

◎けんちん汁

まづ豆腐を薄く切りて油にてザつと揚げ、それに麩木茸（細く切り）銀杏（二つ割り）午蒡（針に切り）菜こま〴〵に刻み）の類を合せて凡そ一升ほどのかさに油一合ばかりの分量にて油をよく煮立たせまづ銀杏、午蒡を入れて炒りつけ次に木くらげ、麩、豆腐を入れうちかへし〳〵して醤油にて鹽梅すべし。

◎栗めし

飯は初より塩少し入れて炊き栗は皮と澁とを去り水に浸して二つ割にして初めより米と混せて炊くなり、又栗は凡そ米の二分の一を入るれば可なり。

◎栗きんとん

まづ生栗の大なるを取りあま皮を能く去り餘り柔か過ぎぬ様に煠りし時、取あげて味淋、砂糖にてくづれぬ様に煮染め置き別にさつま芋の上物を撰み、輪切り水にて度々さらして灰を去り、ゆで、柔らかにし笊にあげ裏漉にして漉しそれを味淋、砂糖に塩を少し入れて能く／＼煉り色の變りたる時火よりおろして右の栗にまぜるなり。

◎田舎なます

大根を短冊に切り、塩もみにしてよく洗ひ、揚豆腐を炙りて二枚に剥ぎ、小口より細く刻み又煎餅麩を細かく刻み又椎茸を薄く拵み、味噌を黒くなる程に燒き擂鉢にてよく摺り、酢と醤油を少し入れて延べ前の品々をあえて出すなり。

◎いもの茶巾

薩摩芋の皮を剥き灰を出し、又は皮つきのまゝ蒸してもよし、毛ずいのうにて裏ごしにし、塩と白砂糖を入れてよくねりだんご程にまるめ、布巾に入れつまみ絞るなり、粉のくづれぬ様布巾をほどき、海老のあしらへに盛りて出す。

◎いも蛸

里芋は小粒なれば丸のまゝ大粒なれば竪に二ッに切り、蛸はゆで、細かに切り、初めより一緒に入れて湯煮し、芋の柔かくなりたる時に醤油と砂糖にて煮つけるなり。

◎初茸汁

初茸を細かにして白水に浸しよく洗ひて擂鉢にてすり鰹節のだしにてとろゝ位にすりのべすいのうにて漉し汁に交せるなりあしらへは摘み菜、柚子。

◎鯊の酢漬

はせを白燒にして三杯酢をかけて蓋をなし、翌日より食すれば骨も柔かになりて、妙なり、又はせは白燒にして暫時醤油と砂糖と鰹節とにてとろ／＼甘く煮れ

ば重詰に尤もよし。

◎松茸ほうろく燒

まづほうろくの中に鹽をふり其上へ海老、松茸、栗鯛の切身、又は鮎などおの〳〵ほうろくにならべ、其上に鹽をふりかけ松の葉も少しふりかけ、同じほうろくを打ちかぶせ、針金にて四方を縛り、竈に薪をもやし置火の多く出來たる火の中に入れ上下によく火をかぶせ、燒たる時分を計り取出しはりがねをとき捨てそのまゝ臺にのせて客の前に出し蓋を取れば松の香氣發し自然の味ひ中々妙なり。

◎風呂吹大根

大根を厚さ五分乃至八分に輪切にして皮を剝き鍋に入れ水をかぶるほど入れ白米を一合ばかり布につゝみこの中へ入れて共に茹るなり但し更に風味よく作らんとせば鍋よりは釜を用ふるをよしとすその茹る時間は凡一時間程にて中頃に鹽少許を加ふべし偖味噌の作り方は初め胡麻を煎り油の出るほど摺りて味噌砂糖を加へて摺り裏濾にかけ煉るなり煉り上りたる時味噌のさめざる様湯煎にかけ置くがよしあたゝかき所を侑むべし分量は味噌百目に胡麻一合五勺砂糖五十目。

◎薩摩汁

鷄又は牛肉半斤ばかり細かく切り水一升位にて二時間ほど煮てスープを作り同時に糸こんにやく、にんじん椎茸其他何品にても菜類二三品を細かに刻みて煮別に胡麻を煎り摺鉢にて能くすり前のスープ少しづゝ入れて溶かし肉と野菜を共に入れ大丼に入れ紫蘇、蓼、唐がらし等刻み皿にもり各々食卓に出し茶碗に飯を盛り、はんぺんを賽の目に切りて入るゝもよし。

◎おから汁

これは芋と蘿蔔と胡蘿蔔、赤豆と油揚との五品を澄汁に入れて煮たるものなり其切方は芋は四分程の賽の目、だいこんは厚さ四分ほど、平目にんじんは厚さ三分の輪切、油揚は細かく切るべしだしは鰹節を使ふべし。

◎精進たのき汁

先づ薩摩芋の皮を剝き大根おろしにて卸し少し許を

しぼり横長く丸め胡麻の油にて揚るなり味噌汁に燒豆腐竪横に切りさゝがし午蒡に千切こんにやく。

季節漬物十種

▲あちやら漬

乾大根を竪に四つに裂き一日乾かし、これを五分位に切り、これに、刀豆、茄子、茗荷、蕃椒等の鹽壓にしたるものを加へ、醬油に少し酒を加へて當座漬にするなり。

▲らつきやう甘漬

夏日らつきやうの鹽漬にしたるものを取り出し、兩端を切りてよく洗ひ、らつきやう一升に酒一合酢一合味淋五合の割合にて交せ合せてよく沸たゝせ、前のらつきやうを壺の中に漬け二週間もたゝば熟れるものなり。

▲紫蘇千枚漬

紫蘇の葉を一枚づゝよく洗ひ、これを百枚より二百枚位重ねて水氣を取り、俎板の上にのせて壓をかけ置き、後これを味噌桶の底へならべ、紫蘇の動かざる、樣に竹を割りて押へ置くなり、かくすれば味噌の溜り浸み込みて鹽梅よく漬かるものなり。

▲松茸の芥子漬

若松茸を取り軸を切捨て砂氣を洗ひ落し鹽を加へて煠で取出して冷し、其ゆでたる鹽水に芥子を揑ね、二三日つけて取出し漬けたる芥子に麹を加へ、醬油をそゝぎてよくまぜて又漬け、蓋に目張りをして來春まで置くべし。

▲茄子の百一漬

中位な漬茄子百に黑米を一升をふかし、麹一升鹽五合の割にて漬けるなり、重石はなるべく重き方をよしとす、秋につければ冬季の始頃までにはよく熟るものなれど、鹽の分量を増せば凡そ一年位は保つものなり。

▲大根の切漬

太き秋大根の莖の軟かなる所を一寸位に細かに刻み

又根は短冊に切り、莖と交ぜ合せて凡そ大根十本に鹽三合位の割合にてよく揉みませ壓石をかけて漬るなり凡そ一週間も經てばよく漬かる故これを取出してざつと洗ひ醬油をかけて用ふべし。

▲越瓜の印籠漬

越瓜のあとさきを切り、中味をへらにてかき出し、半日ほど日光に乾かし、瓜の中に紫蘇の葉、茗荷、蕃椒等の鹽壓したるをつめこみて鹽押づけにするなり、又鹽壓したるを味噌に渡せば一段と風味よきものなり味噌は麥味噌をよしとす。

▲淺漬大根

秋の太き大根を選み、よく洗ひて一日陽に乾かし、花麴と鹽にて酒樽に漬け込むべし、其割合は大根三十本に花麴三枚鹽一升位の割合にてよし鹽と麴とをよくもみ合せて大根を漬ける時に一層づゝそれを振りかけ間に新葉を十五六本づゝ敷くをよしとす、これは葉の中より多少の甘液を出して大根の風味を助け、又其色を良くするものなり。

▲茄子の麴漬

麴漬は秋につくりて冬に食するをよしとす、その材料も茄子に限らず瓜、大根、生姜何でもよし、まづ花麴三枚に味淋凡そ一升をかけて壺に入れ一夜ねかし置きこれに乾瓜、鹽おし茄子、乾大根などを刻み込み、紫蘇の實、蕃椒、生姜等を少しづゝ加へ、目張して凡そ三週間も經てばよく熟るものなり。

▲キャベージの酢漬

甘藍の大きなるを二株を取りまづ其外葉を去り莖を除き一葉を四つ切になし、尚其葉を細長く刻みて桶の中に葉をならべ、鹽をふり、又其の上に葉をならべ、鹽をふりかくして段々に重ねて其上に押蓋をのせ、石を壓石となし、三日間置き、後葉を取り出し其乾きたる布巾の上に列べて水氣を去り、其乾くを待ちて瓶に入れ、夫より酢三合の中に胡椒三匁、生姜、丁子各々二匁を加へ之を沸騰たゝせて蓋をなし其冷へたる頃、更に三合の酢を加へ之を葉の上より注ぎて葉の沒する迄浸し、蓋をして目張し凡そ半月程經て食用に供すべし。

輕便西洋菓子の製法

菊廼屋

▲プレインケーク

分量

粉	コップ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯
卵		二個
バタ	大匙	一杯
レモン又はバニラ		
砂糖	コップ	半杯

始め砂糖と「バタ」とを練り、卵一つゞゝ割りて加へ手にて充分に練り、(少くも十分間位練る)之に粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ、牛乳を少し加へ、「レモン」又は「ワニラ」二三滴を落し、輕く混せ「パン」の中に西洋紙を敷き、其中に入れて「テンピ」にて二十分間に燒き上ぐ。

「レモン」を加へたる時は「レモンケーク」と言ひ、「ワニラ」を加へたる時は「バニラプレーンケーク」と言ふ。

▲マーブルケーク

一個の「プレーンケーク」を色別にして燒きたるものなり。今左に最も簡單なる黒白二種に色別する方法を示さん。

黒の部

分量

粉	コップ	一杯半
ベーキングパウダー	小匙	一杯半
卵の黄味		三個
砂糖	コップ	半杯
チヨコレート粉	小匙	一杯
牛乳		
バタ	大匙	一杯

砂糖と「バタ」とを練り、卵を一つゞゝ割りて加へ、能く能く手にて練り「チヨコレート」粉を加へ、一度攪き回し、次に粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ、牛乳を少し加へて輕く混せる。

白の部

分量

粉	コップ	一杯半
ベーキングパウダー	小匙	一杯半
卵の白味(黒の部の殘り)		三個
砂糖	コップ	半杯
バタ	大匙	一杯
牛乳		
レモン又はバニラ		

「プレーンケンク」と同じ方法に從て混せる。「パン」に西洋紙を敷き、匙にて黒の方と、交る〳〵に入れ、「テンピ」にて二十分間に焼き上ぐ。

▲カレンズケーク

分量

粉	コップ	三杯
ベーキングパウダー	小匙	三杯
卵		三個
砂糖	コップ	二杯
バタ	大匙	四杯
カレンズ	コップ	一杯

卵の黄味三個に砂糖を加へ練り、「バタ」を加へて能く能く練り、コップ一杯の水を加へ、又能く攪き混せ次に「カレンズ」を入れ、(先に「カレンズ」を洗ひ粉少々をまぶし置く)粉と「ベーキングパウダー」を篩ひ、輕く混せ、「パン」に西洋紙を敷き、其れに移して「テンピ」にて一時間に焼き上ぐ。

殘し置きたる白味を充分泡にし、粉砂糖を澤山加へて攪き混せ、どろ〳〵になし、焼き上りたる菓子の温き間に表面に一面に塗り付け、猶其上に新聞紙喇叭にて細く搾り出して色々の模様を畫く時は體裁甚だ美なり。

▲ジンジャーケーク

分量

卵		十個
砂糖	コップ	三杯
粉	コップ	三杯
生姜の砂糖漬		

卵と砂糖を氣長く一時間程攪き混せ、粉を加へて能く攪き混せ、「パン」に西洋紙を敷き、之に移し、生姜の砂糖漬にしたるものを薄く切りて處々にさし入れ、

「テンピ」にて一時間焼く。

▲スポンジケーク

粉	コップ	一杯
卵		十個
砂糖	コップ	三杯
バタ	大匙	三杯

砂糖と「バタ」を煉り、卵を一つづゝ割りて加へ、手にて能く能く煉り混ぜ、粉を篩ひ、輕く混ぜ、「パン」に西洋紙を敷き、其れに入れ、「テンピ」にて一時間に焼き上ぐ。

此菓子を焼く火加減は中々六ケ敷く、強ければ表面直ちに眞黒に焦げ、弱ければ少しも膨れ上らず、屢々扉を開閉すれば必ず仕損ずべし、再三仕損ずる覺悟にて實驗せよ。

▲レデーヒンガー

卵の白味を充分泡にし、粉砂糖を加へどろどろに攪き混せ、「レモン」液を適宜落し、新聞紙の喇叭にて西洋紙の上に一の字に何本も突き出し、其紙を「パン」の底に載せ、其儘「テンピ」に入れ、二十分間に焼き上ぐ焼け上りたる後紙より剝すには、暫く濕布の上に置き、紙を濕して剝ぎ取る。

附。同じく西洋紙の上に圓く突き出し、各々の上に砂糖を振り掛け、紙の兩端を揚げて砂糖を去り、前同樣「パン」の底に載せて焼くを得。

又黄味のみに粉砂糖を加へてどろどろにし、右を同法にて焼くを得

▲ストロベリーショルトケーク

先づ「レヤーケーク」と言ものを焼く、其法左の如し

分量

粉	コップ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	二杯
バタ	大匙	一杯
卵		二個
砂糖	小匙	二杯
鹽		少々
牛乳	コップ	四分の三

卵と、砂糖と「バタ」とを能く練り、鹽少々を加へ粉と「ベーキングパウダー」と「ベーキングソーダ」とを篩ひ牛乳は少し少なき加減に入れ、輕く混せ、厚紙の上に圓く薄く延ばし、(二枚作り得べし)「パン」の底に載せて其儘「チンピ」に入れ、十分以内に燒き上ぐ、之を「レヤーケーク」と言ふ。

此法は下手に行ふ時は「チンピ」の中にて溫まるに從ひ、溶け出し、紙の外へ流れ出る事あり、故に始めの間は二三分の深さの「パン」に入れて燒くを良とす。

右の如くして「レヤーケーク」二枚を燒くべし。

苺を能く洗ひて蔕を去り、一枚の「レヤーケーク」の上に一面に並べ置き、卵の白味を充分泡にし、粉砂糖を加へたるものを以て苺と苺との間を埋め、併びに一面に塗り付け、其上に他の一枚の「レヤーケーク」を掩ひ、又其表面に右の泡を塗り付く。

斯くする時は多量の苺を要する故、略式に「レヤーケーキ」を一人前づゝに切り、其上に苺をつぶしてかけ、其上に白味の泡をかけて出すも可なり。

西洋人は此菓子を非常に上品なる菓子として貴ぶ。

▲チヨコレートレヤーケーキ

「レヤーケーク」二枚を燒く事前と同じ。

卵の白味を充分泡にし、粉砂糖及「チヨコレート」粉を加へどろ〳〵になしたるものを一枚の「レヤーケーク」の上に塗り、其上に他の一枚の「レヤーケーク」を重ね、其上面並に側面周圍殘らず塗り付けて悉く褐色にするなり。

右の塗りつける「チヨコレート」を作る別法あり、即ち「チヨコレート」粉小匙四杯と、砂糖をコップ四杯と「バタ」大匙二杯と、牛乳をコップ一杯とを共になし、十分間煮立て(其間決して攪き回すべからず)後水に浸け乍ら成し得る丈け能く攪き回し、飴の如くなりたる時塗り付けるなり。

▲ジエリーケーク

「レヤーケーク」二枚燒く事前の如し。

一枚の「レヤーケーク」の上に苺「ヂエリー」を塗り、「コヽナッツ」即ち椰子の實を細かく削りたるものを散

らし、其上に他の一枚の「レャーケーク」を重ね、又其上に「チエリー」を塗り、「コヽナッツ」を散らす。

▲ジエリーロール

分量

粉　コップ　一杯
ベーキングパウダー　小匙　一杯半
砂糖　コップ　半杯
バタ　大匙　一杯
卵　一個
牛乳

「バタ」と砂糖とを練り。卵を加へて能く練り、粉と「ベーキングパウダー」とを篩ひ、牛乳を注ぎて輕く軟かく混せ、大なる「パン」に薄く延して二十分間に焼き上げ、直ちに其表面に「ジエリー」を塗り、「コヽナッツ」を散らし、海苔巻酢を巻く如く一方より巻く可し、切りて出す。

▲クリームケーク

分量

牛乳　コップ　四分の一
砂糖　大匙　一杯
卵の黄味　一個

牛乳と砂糖とを煮立て、卵の黄味を攪き立てたる中に加へ、猶之を十五分間程煮つめ、最後に「レモン」又は「ワニラ」二三滴を加ふ、之を「パッチー」の中に詰める。

「パッチー」を作る第一法。食麺麭を五分位の厚さに切り、「パッチー」抜(洋品店にあり)にて抜き、中央を蓋に損せざる様取り、「ヘッド」を沸したる油に入れて揚げるなり。

若し「パッチー」抜なき時は、中徑一寸二三分位に六角乃至八角位に切り、中央に徑八分位の凹みを作る、其際蓋とすべく爲めに損せざる樣拔き取るべし而して揚げる前事の如し。

同第二法　コップ一杯半の粉と、小匙半杯の「ベーキングパウダー」と、鹽小匙一杯と、卵一個とを練り、水氣なければ極少々水を入れ、固く練り、「ヘッド」輕く一摑みを包み、「ローラー」にて敲きつぶしては疊み

數回繰り返し、五分位の厚さに熨し、「パッチー」抜にて抜き取り、「チンピ」にて三十分間燒く「パッチー」の凹みに前の「クリーム」を入れ、其上に蓋をかぶせて出す。

▲ピーレモンケーク

分量

粉	コップ	三杯
ベーキングパウダー	小匙	三杯
卵		三個
バタ	大匙	三杯
砂糖	コップ	二杯
レモンピールを細かにしたるもの	大匙	二杯

卵の黄味と、「バタ」と、砂糖を能く練り「コップ」一杯の水を加へ、能く攪き回し、粉と「ベーキングパウダー」と」を篩ひ、白味を泡にし、「レモンピー」を細かにし、共に加へ、又能く攪き混せ、「パン」に入れて「チンピ」にて、一時間燒く。

燒け上りたる時「チヨコレート」粉を小匙三杯、砂糖を「コップ」四杯「バタ」を大匙二杯、牛乳を「コップ」一杯、共になし、十分間程攪き回さずに煮立て、火より下し、水に浸け乍ら「ホーク」にて出來得る限り早く攪き回し、飴の如くなりたる時上に塗り付ける、而して一人前に一つづゝ杏子を半分に割りて種子を去り、其凹みに「クリーム」を詰めて載せて出すも宜し。

▲フルートケーク

分量

卵		三個
粉	コップ	二杯半
ベーキングパウダー	小匙	三杯
砂糖	コップ	一杯半
バタ	大匙	三杯
セルプ	コップ	半杯
コロープ粉(丁子の粉)	小匙	一杯
レーズン	コップ	一杯
干杏子(細かに刻み)	コップ	一杯

砂糖と「バタ」とを練り、卵を一つづゝ割りて加へ、能く／＼手にて練り、「セルプ」を加へて攪き混せ、其

他の品々を一時に加へ、能く攪き混せ、若し水分少なければ水をコップ四分の一位加へ、輕く攪き混せ「パン」に入れ、弱火にて一時間燒く。

燒け上りたる時砂糖をコップ二杯と、水をコップ四分の一を二十分間程煮詰め、之に卵の白味を能く泡にして加へ、攪き回してどろ〳〵となし、菓子の溫き間に上に塗り付く。

▲レモンターツ

「パイクラスト」を作り、五分位の幅にて條に切り、中徑五分位の圓筒(林檎の心核拔に用ひたる)の周圍にぜんまい昇りに卷き付け、其儘「パン」の中に並べて二十分間「テンピ」にて燒き、燒け上りたる時圓筒を拔き取る。

卵の白味を泡にし。粉砂糖を澤山に入れてどろ〳〵にし、黃色食の顏料を耳かきに二杯計り加へ「レモン」液小匙半杯を入れ、能く攪き回し、新聞紙の喇叭にて太く突き出し、前の「クラスト」の圓筒の中に入れる。

▲クリームターツ

「クラスト」の圓筒を作る事前に同じ。

砂糖をコップ二杯、水をコップ四分の一、共にし、二十分程煮詰め、卵の白味を充分泡にして加へ、能く攪き回しどろ〳〵になし、新聞紙の喇叭にて太く突き出し、前の「クラスト」の圓筒に入れる。

▲卵の白味の菓子

分量

卵の白味		六個
粉	コップ	三杯
バタ	大匙	三杯
砂糖	コップ	二杯
ベーキングパウダー	小匙	三杯
牛乳	コップ	七分目
レモン又はバニラ		二三滴

砂糖と「バタ」とを煉り、牛乳を加へ、香液二三滴落し、攪き混せ、「粉とベーキングパウダー」とを篩ひ、最後に卵の白味を泡にして加へ、輕く攪き混せ「パン」に入れ「テンピ」にて一時間に燒き上ぐ。

速成の麪包とサンドヰッチ

△速成の黒パン

鉢へ酸き牛乳二合半と鹽を小匙に半分とを入れ、別の鉢に赤砂糖蜜入勺とベーキング、ソーダを小匙に一杯入れて泡立つまで攪きまぜ、之を先の牛乳に加へて手にていぢれる程濃からず丁度匙より滴る位を度としてグレーハム粉（黒き粉）を入れ、次にベーキング、パオダーを小匙に一杯入れて能く混合はせ、脂肪をひきたる鍋に移して四十五分間オブンにて焼くべし。

△玉蜀黍の麪包

牛乳二合半を沸騰たせ、其沸騰ち居るうちに玉蜀黍の粉一合半と鹽を小匙に半分入れ、火より下して冷し、冷めたる時鶏卵の黄身二ツを加へてよくまぜ．別の皿にて鶏卵二個の白身を硬くなるまでよくかきたて、それを前のまぜてあるものに加へて輕くかきまはし、次にベーキング、パオダーを小匙に一杯入れ、脂肪のひきある鍋に移し入れて、三十分間火の強きオブンにて焼く可し。

△速成の赤パン

玉蜀黍粉一合と白き麥粉一合と黒き粉一合とソーダを小匙に一杯、鹽小匙に半分大きな鉢に入れてよく混合はせ、之に赤砂糖蜜一合と水一合とを加へてよく混ぜ、脂肪をひきたる鉢か又はベーキング、パオダーの罐に入れて三時間蒸すべし。

△同　蒸したる赤パン

グレーハム粉六合と鹽を小匙に半分とを大きな鉢に入れ、又冷水二合と赤砂糖蜜一合と鶏卵二個の黄身を入れて一緒によくまぜ合はせ、白身を硬くなるまでかきたてゝ加へ、別に小匙に一杯のベーキング、ソーダを熱湯大匙二杯の内にて溶かし之を先の混ぜてある物に加へてよくかきまはし、脂肪のひきある鉢か又はベーキング、パオダーの罐に入て三時間蒸すべし、二合の乾葡萄を蒸す前に加へてもよし。

△肉サンドウヰッチ

煮たる牛肉若くはタング（牛の舌）或はハート（牛の心臟）を極薄く切り、これを薄く切りたるパンにバターをひき、バターの方を内側にして其の肉をはさみてパンの片目を合はせ輕く壓し、端を切り去りて、三角形に切る可し、バターの代りにサラドドレッシングを用ひてもよし。

△ハムサンドウヰッチ

煮て冷へたるハム豚の燻べ肉を極く薄く切り、之をバターを引たるパンとパンとの間にはさみ、パンの端を切り去り三角に切て出す

△鶏肉サンドウヰッチ

煮たる若くは蒸焼にしたる鶏肉の冷めたるを極細かく切りてサランド、トュレッシングに混ぜ、之を薄く切りたるパンの間にはさみ、輕く壓してパンの端を切り去り三角形に切りて出すべし

△鶏卵サンドウヰッチ

二個の固ゆでにしたる鶏卵の白身を極く細かく刻み、黄身を裏漉にかけて之にサラド、ドレッシングを小匙に一杯をまぜ鹽と胡椒にて味をつけ、之を薄切にしたるパンに塗り其上に刻みたる白身を振かけ、パンを合はせて輕く壓し、端を切り三角形に切るべし

△落花生のサンドウヰッチ

煎立ての落花生を極細かに刻み、パンの薄片にサラド、ドレッシングを塗り、其上に落花生をふりかけ、パン片をのせて輕く壓しパンの端を切り去り三角形に切るべし。

食物と營養分

△營養と非營養　日々一人に要する營養分は分析せる表に從ひ衛生學の教ふる如く、水三〇〇〇グラム蛋白質二、八グラムを混和し、之を食せんとするも唯に之を食ふこと能はざるのみならず、その人類たると將た獸類たるとを問はず此の如き方法によりてせる營養物は體組織に吸收せられず、遂に餓死せざるべからざるに至るものなり、故に食物は啻に營養分を含有するのみならず、又他に缺く可からざる一要素を備へざるべからず。

△吸收と美味　從來學者間の說によれば、食物は唯必要の營養分のみを含有すれば足れりとのことなりしも、更に大切なるは食物が味を有せざるべからざることゝなり、人が日々食事するに當りて整して多量にも飽ざる飲食を種々調理の法式を變へ若干の皿に分ちて食ふは全く其の食する所の食物の味を美ならしめんが爲めなり、而して此く食物に味あらしむるは啻に營養分を口に適せしめんとするのみならずして、消化を助け消化管よりの吸收を容易ならしめんとするにあり、即ちその食物の有する味により消化管にある神經を興奮せしめ、其作用を鋭敏ならしむるにあり。

△神經作用　今茲に食物の味により神經作用の興奮する順序を叙すれば、食物の口腔内に入るは其味は先づ味覺を刺戟し、續いて其刺戟を腦の消化中樞に傳へられ、それより其の中樞を中心とせる神經を經て神經力を消化器に及ぼし初めて消化作用を營むに至るなり。

△唾液の分泌　も全く食物に味あるより口腔壁を刺戟する結果にして、嚥下作用の如き又全く食物に味ある爲めなり、味無き食物は決して嚥下せられ得るものにあらず、即ち食物に味と香氣とのあるなくんば、其の食物は腦の中樞部をして消化管に收縮作用を起さしめ、遂に嚥下すること能はざるに至るなり。

△食慾と味　されば食欲の起る所因は食物の味と離るべからざる關係あるものにして、食物の味が腦を刺戟するか、或は其味を想像することによりて生ずる感覺あり、是に至り最とも注意すべきは、食慾と空腹との別なり、空腹の感覺は食慾なく否な寧ろ食物を欲せざるほどの感覺あるも、尙ほ生ずるを得るものなり。

秋の衛生

（糸左近）

今回は十月五日より十一月四日まで、即ち滿一ヶ月間所謂中秋の季節衛生を述べませう。所がこの中秋の氣候は暑くも無く、寒くも無く、實に身體の保ち易い時で、食欲はドン〳〵增して來る、筋肉は次第に太り初めるといふ工合で、少し位の病氣は自然に治つて了はねばならぬ筈、然るにこの好時節に當つて最も多く猖獗を逞しうせんとする病が大凡三つある、それは何々かと云ふと、第一に腸窒扶斯第二に僂麻質斯第三に鬱憂病である、併しながら其中の第一第二は醫者社會一般に認めてゐるけれど、第三に至つては餘り人の言はぬ說だ、言はぬ說だけれど、狹い余の經驗に依れば西洋はいざ知らず、我國では、第一第二の二病よりも寧ろ第三が最も流行するやうである、余の知つてる某醫は三年間新聞紙上の自殺者を統計して見たら、四季中で、秋が最も多かつたといふ、乃で、熟々其の由て來る原因を講究して見るに、其罪は古人にあるのだ、試みに古人の詠んだ秋の詩や歌を繙けば片ッ端から悲觀的で無いのは無い、蟲の聲を聽いても悲しんでゐるし、月や紅葉を眺めても悲しんでゐる、例へば

聲きくときぞ秋は悲しき

とか、愁聽寒蛩淚濕衣。とかいふやうな調子である、だが鹿は嬉しい〳〵と言つてるのかも知れぬし、蟋蟀は可笑しい〳〵と叫んでゐるかも了らぬ、聞きやう見やうに依て何うにでもなるのだ、斯樣に了らぬ事を宜い加減に當推量して淚を溢すとは實に馬鹿の骨頂である、然るに數千年來これに感化せられたる東洋人は、唯秋は悲しいものと先入師になつてる爲に、勿體無くも結構な好時節を悲觀し、遂に爽快を極むべき心身を物淋しく暮すやうになる、これ秋に於て鬱憂病及びこれに類似のヒステリー神經衰弱などが顏出す所以であらう、實に惡む可きは古人である、考へて御覽じませ、秋になれば新米は取れる、初茸松蕈はニヨキニヨキ出る、柿、栗は熟す月は皎々と照す、蟲は喞々賑

かに啼く、紅葉は錦を飾るではありませぬか、若し之を歌に作れば

　　米櫃柿栗月に蟲紅葉
　　　嬉しきことは秋にこそあれ

である、感情に強き御婦人方よ、何うか秋を嬉しいものと思召して、ヒステリーの種を作らぬやう改良して頂きたいものである。

次に窒扶斯は傳染病で、排泄物や飲食等より傳染するものとは言ひながら、又妙なのは精神感動から特發することがある、仲には故郷を思ふの餘り、本病を誘うたる例さへあつて、先輩の醫者は之を鄕思窒扶斯病と名づけてゐる、然れば例の秋を悲しいものだと定め込んでる人が、斯る時に獨上二高樓一故國情など〻、斷腸の思を續ける中に、不知〲本病に罹るであらう、故に何人も秋に限らず、心身を愉快に暮すやうあらまほしきことだ。

次に僂麻質斯の春秋に多く有る理由は、未だ確と研究せられて居らぬ、併し感冒及び濕潤の住居が大いに誘因をなすものなれば、これが持病の人は特に是等の害を招かぬやう、室内の温度を調へ、身も亦温包し、併せて運動を怠らぬやう、且つ、熟眠することが肝要である、冴え渡る月を眺めて「月々に月見ぬ月は無けれども」など〻遊ぶも可いが、夜深して、露に濕はせられて即て寒冒に罹り、「風流に寒冒をひきけり秋の月」と口吟むやうでは、餘り賞めた話しで無い、されば遲くも十時までには臥床に入つて安眠せねばなりませぬ。安眠といふことで思ひ出したが、前號にも申した通り、何ういふ風に臥たら宜からうか、序に附記しておきませう。

▲臥方の研究――私が生理の書を讀み初めるやうになつてから、殆んど二十年程經つが、それ以來何時でも臥床に入ると、何ういふ位置に臥たら宜からうかとの疑問が起つたものだ、それで色々の書物も見るけれど、これに就いて餘り書いても無いし、又幾分說いてあつても成程と思はる〻名論も無い、昔から言ひ傳へたる說に依れば「男は左側臥す可きもので、女は

右側臥す可きものだ」と、併し何故にといふ說明が無い、又小笠原流の禮式家は「左側でも右側でもそれには差支無けれど、幾分膝を曲げて橫に臥ねばならぬ、兎に角仰に臥るは甚だ宜しく無い」と、そこで其の理由を問へば「大の字形になつてるは、如何にも無作法、即ち、下男下女然として見ゆる云々」と、姿容上から說明する、けれども、禮式は社交上にこそ甚だ必要なれ、夜分臥床に入つてまで、さう窮屈な思をせぬとも可からうと、余は手前勝手な議論を懷いてゐる。次は、橫にならうと、伏向にならうと、そは其時の身體の工合で、自由自在名々の勝手たる可し



だ」斯ういふ論もある、併しこれにも余は何と無く物足らぬ氣持がする。次に「男女に拘らず、何人も右側臥す可きものである、何となれば胃より腸に移る口は右の方へ向つてゐるゆゑ、食物の進行上宜しいからである」と、成程これは幾分生理學上に適つてゐるやうだが、退いて能々考ふれば唯胃嚢ばかりを氣遣つた論で、身體一般を標準にはして居らぬ、次に某醫士は「人は仰に臥るが生理上である、猫や犬は仰に寢ようとしても脊柱が突出してる爲に、到底さうは出來ぬ、然るに人間は脊が平たくなつてるから、之を下にす可きは自然の法則である云々」其他人相家は色々の可笑しな說を述べてるが、

餘り取るにも足らぬ議論なれば之を略し、余は最後の仰臥說を最も可とするけれども、唯單純なる仰臥では無くて、これには六つの條件が有る、それは斯うです(1)後頭部は大切なる延髓の在る部なれば、其枕を柔軟なる質にて作らねばならぬ事。(2)夜具の胸にピタリと重く壓せぬやう工夫したき事。(3)手も胸に當て無いで即ち低れて置くやう注意す可き事。何となれば胸を壓すると次第〳〵に呼吸を妨げ、窒息様の苦痛を招くことがあるである。(4)枕の高さは大凡五六寸なる可き事餘り高ければ頸は折れ曲らんとして呼吸苦しく、餘り低ければ胸充血の憂がある。(5)夜具を冠る習慣を附けてはならぬ、夜具を冠ると不潔なる空氣を吸ふやうになり一方ならぬ害になる。(6)膝を立てぬやう、即ちノビ〳〵と筋骨を伸して血液の循環を妨げぬことが肝要である。

右の通り述べたとは云ふもの丶終夜是非共仰臥せよと壓制するのでは無く、其の仰臥のみで疲れたる揚句は自然と横臥することも有らう、唯余は凡ての臥方の中仰臥が自然の生理的だといふことを申したるまでの事で、余一人の經驗上でも、これが最も臥心地善いのであるとは云ふもの丶病氣に依ては種々の臥方をする例へば肋膜炎なら患側を下にし、胃痛ならば伏向になり、ヒステリー者は仰になつて膝を立て腰を少しもち上るやうな姿之を醫道では角弓反張といふが如きはこの限りで無い。

次に附屬として論ず可きは枕の方向であるこれに就いて古人は「東難南病西壽北福」とて、東を枕とすれば色々の災難を招き、南を枕とすれば病氣になる然れども西枕は壽命を長くし、北枕は福祿を得るものなり」とこれは、何から割出した說かも知らぬけれど、何となればの、說明を聞かぬ以上は、何うも駄法螺たるを免れぬやうになる、又或人は「南と東は陽氣西と北は陰氣換言すれば東は朝日の出る場所南は温かき所、故に東か南かを枕にすれば陽氣を呼吸するから宜い」と、余はその陽氣陰氣とは何の事か知らぬが、假りに陽氣は温暖なる善き空氣、陰氣はこれに反する惡しき空氣

と解釋すれば、或人は更に生理の思想無いと謂はねばならぬ、何せと云ふに仰に臥て鼻孔の何れに向ふかを考へて御覽なさへ、西北を枕にしてこそ東南の空氣も呼吸すれ東南では或人の所謂陰氣を呼吸するやうになる、さればこれも一笑に附して可い説だ、乃で余は斯う思ふ、枕の方向は左程衛生上八釜敷云ふ程の價値あるものでも無いが、強ひて言はゞ窓の位置にも依るけれど北或は西を枕として寢れば、朝に光線を感ずることが早いに相違無からうから、先づは北西説に賛成しておかう。

衛生顧問

（問）身丈の伸びる術法は何うしても無きものに候や、又牛込區通寺町のカーチレージ商會の長身器は有効に候や、何れにしても確實なるものに候はゞ如何なる困難も忍耐致す可く候間御教示下され度偏へに御願申し上げ候。（日本橋短身女）

（答）西洋の某學者は穀類を溶解した液體を飲み、ドンドン體操をすれば身長を延すことを得るものなりと云つてる人もあるし、現に我國でも角力を稽古する者は粥を食つては、頻りに腕力を養成するから、先天的とは言ひながら、筋肉も肥え、從つて身長も延びるやうである、されば粥味噌汁魚肉獸肉果實の類を食して、頻りに體操をすれば幾分丈を伸すことを得るものならんと信ず。次にカーチレージ商會の長身器であるが、これは先日同商會より小生へ一器を贈り實驗の上世に紹介してくれとの事、就いてはそれに附屬せる使用法を讀んで見ると、少くも牛乳を一日に五合以上を飲み、他の運動も爲し、運動後は水を飲め云々、偖カーチレージとは如何なる意味かと云ふに Cartiragi 即ち軟骨と云ふことだ、さうして其の器械の構造を見ると之を使用すれば關節々々の軟骨を延ばす工夫になつてゐる、それは偖置、余も生來短身にて、日本男子の丈は平均五尺三寸なるにも拘らず五尺一寸しか無い、又余と現に同居せる門人はこれも五尺二寸即ち余と小男同志だ、それでこれ幸と九月四日よりこの原稿を書く

日（十四日）まで實驗した、又使用書に十歳以上四十五歳以下は必ず効力あると書いてある、乃で余は未だ四十歳にならず、門人は漸く二十歳餘、されば何うしても延びねばならぬ譯だ、併し我等二人は牛乳五合以上を飲むには堪へぬ、何となれば初め二日間丈五合宛を試みしに、他の食量大いに減り、一日四合の飯は二合位になつて了つた、これでは却つて健康を害する、さりとて非常に他の運動をなし、多食するの暇も無い、又一つには健康こそ希望すれ、業を廢してまでも運動を專門にし身長を延ばさねばならぬ必要も無いから、從來の生活法に從ひながら、兎に角半年を經驗し、それで何等の効無き時は、左程貴ぶに足らぬものと假定したのである、斯の如き始末であるから、今半年の間何とも御答申すことは出來ませぬ。但し半年以内に幾分延びる成蹟あらば大いに之を紹介致しませう。

（問）精神上の男的婦を女子的にする矯正法を御教授給はりたし。
（紀伊の二十歳女）

（答）柔和なる婦人と交はり、優美なる學問技藝或は遊戯等を爲す可し、例へば美文和歌などを學んだり音樂活花等を嗜むやうにして見玉へ。

（問）私は十九歳ですが、夜中には、心にも思はぬことを言つては實に困ります、之を治す藥を何卒教へ玉はりたく候。（和歌山春水）

（答）寢言は不熟眠の結果であれば、就寢前に温浴或は運動をなし、又精神を安靜にし、齷齪と物を思はぬやうにして眠れば、寢言を言はぬものです、藥としては幾分有毒であるから、病氣で無い以上は服まぬ方が宜い。

（問）本年四月生の女子睡眠前には頻りとむづかつて困ります、何うしたら治りませうか、但し健康で發育も完全であります。（鳥取縣の平生）

（答）衣服夜具等に窮窟なる傾きなきか、又何か他に睡眠を妨ぐるやうな音響でも無きか、兎に角小兒の心身を刺戟する物を除くことに注意するが肝要でせう。

（問）前に幾度も伺ひましたが、一向に御答無いので不平に堪へませぬ、何卒是非十月の誌上に御記載を乞ふ、それは何かと云ふに目の縁黑くて見苦しいのと、生際うぶけ赤軟柔になる法を御示教願ひ度候。（千代）

（答）問の意味が了りませぬから、今一度詳しく其の經歴等を書かれよ。

（問）本年十九歳、身體健全なれど、餘りデブ〳〵太つてゐますから、この四ヶ月間大いに粗食をしますれど、更に痩せませぬ、何卒これが

治療法を敎へて下さい。（信濃御代田町某女）

（答）粗食ばかりで無く、大いに運動し、液類を可成飮まぬやうにして試玉へ。

（問）常に月經不順の十八歳女が、月經時に旅行致したれば、俄かに止つて、兩脚麻痺するやうになりました、これが全治法を敎へ給はれ。（岩代の他愛女）

（答）月經時に旅行即ち過勞したから、さうなつたのです、今後は斯る時に可成身體を安靜にして居らねばなりませぬ、兎に角便通を調へ毎日腰湯をなして下部を溫めるやうにし玉へ。

（問）近眼鏡は其目に適ふ眼鏡よりも、度數の弱いのが宜いとは本當でありませうか。（近眼の小心女史）

（答）嘘です、其眼に適ふのが宜いのであります。

（問）慈愛深き糸先生よ、妾は本年二十歳或る職業に從事して薄給を得、以て老父母を養はねばならぬものですが、執務中眠を催ふしてなりませぬ、又勉學せんとして書物を見れば、心は矢竹にはやれども、二頁も讀めば早や夢現になります、身體は極めて健全にして何等の異常ありませぬが、これは意志の薄弱なのでせうか、それとも何か病の潜んでゐるのでせうか、御同情を垂れ玉うて御知らせ下され度伏して御願ひ申候。（岡山市森下町長門正子）

（答）病の有無は診察の上ならでは答へ難けれども、兎に角夜は能く熟眠するやうにし、餘りクヨ〜〜物事を案ぜぬが肝要である、例へば執務中に父母の事を思つたり、勉學の事を考へたり、或は我身の來し方行く末を案じたりすると、精神は非常に疲れて遂に睡眠を催ふすやうになります、着々盡す可き道を盡し居れば天下の事何ぞ憂ふるに足らんやです。

（問）私は今年二十歳でありますが、十歳の時關節僂麻質斯に罹り、左足の内側なる筋肉縮まり、爲に十年後の今日も尙眞直に立つこと能はず、嗚呼〜〜先生よ、縱し荒療治をしても治るものなら、都の病院に治療を受けんと存じ候先生の御見込は如何で御座いませうか。（山形縣の山中野菊）

（答）其の程度にも依りますから、診察の上ならでは、何とも答へ難し、墨田の花盛なる頃、見物旁々上京せられて外科專門の名醫に御相談あらば如何です。

（問）從姉の母斑を治さんと存じ、2％の昇汞水を買はんとすれども何れの藥屋も醫師の證明書無くば賣らず、何卒これを賣る藥屋を敎へ給はれ。（麴町の感謝女）

（答）毒藥なれば醫師の證明無くては之を賣る藥屋は三千世界に無し、されば御懇意の醫師に就いて證明書を貰はれたら如何です、又母斑のある御本人が御出であらば、余とても其證明書を上げることも辭しませぬ。

(問)硼酸及び倔里設林を調合致す分量を問ふ。(待居女)

(答)文意を幾様にも解せらる、即ち硼酸とグリスリンと如何なる割合に混ぜるかと問はるゝやうにもあるし、又硼酸やグリスリンは何ういふ分量で水に溶かしたら宜いかと尋ねらるゝやうにもある、然れば其の目的から病氣の模様など今少し詳しく書かれねと、何と答へて宜か了らぬ、何うか貴女に限らず質問は不得要領ならぬやうに書かれたいものだ、中には「私常に苦しくて堪りませぬ、何でせうか」などいふ漠然たる問が往々ある、それで答へぬと大そう不平な訴へたる手紙な遣さるゝのがある、實に困つてゐます。

(問)申し上ぐるも嗚呼がましく候へども、妾は武士氣質の家に生れ、忠臣二君に仕へず貞女兩夫に見えずてふ言の葉を何時とは無くに聞き侍り居り候ひしに、往ぬる年さる人と二方の兩親が妾を許嫁し玉ひ候、それより間も無く、夫は露西亞征伐にゆき玉ひ、幾度の功名も遊はし感謝狀やらといふものも受けられ候ひしにあはれ最後の日本海の戰に討死し玉ひぬ、其時の妾の心は悲しきには悲しかり候へども、其中に何と無う名譽の心も幾分交り候ひしに、日經ち月重なるに從ひ、いとゞ悲しみの增し來り、今は濤の音風の聲だに敵の醜男の攻め來りし、そのかみを思ひ出し、それに伴れても今は世に在さはなど忍ばれ今日この頃になり候ては、身も心も衰へ食も次第に進まず勝になり侍り、如何に賑かなる事も却つて悲觀の種、唯この上は父母の在さぬ身ならばなど、勿體無き事までも考ふる事に候御同情に深き先生よ、この切なる思を忘るゝ御藥の候はぬものに候や惜しからぬ命ながら苦しきまゝに御願ひ申し上るになん(伊豆の濱邊なるあま子)

(答)うつかり讀むと美しい文章で、哀れなる、しかも貞操正しき、所謂我國の優なる古風なるが如くに聞ゆれど、再び之を讀み返せば、面白半分に事實無きことを作つて見たものと余は思ふ、何となれば果して兩夫に見えざる底の賢女ならば、斯る愚痴事多き文句を並べて、藥を問ふなどは決して有る可き筈で無いと信ずるからである、序に申しますが、この頃頻りに失戀の治療など問ふ人がある、(越後の歌子)(本鄕のMО女)など如何に匿名なればとて、心に愧かしと思ひ玉はずや。

修學の栞

如何にせば文章に上達すべきか

元祿姉さん

怎うしたら文章が巧みになれるでせうかとは、能く出る質問で、其の都度多く讀んで多く書くに限ると云ふ事も、亦能く聞く答へであります、成程多く讀んで多く書く、然うすれば文章が上手になれる、之れは御道理千萬な次第で、何樣何か書かうとするには、何か讀むで置きませんでは、丸つ切り筆の動き樣もありませんし、習ふより慣れろとか申しまして、書きさへすれば、練習が積むで行つて漸次文章も上手になれる譯であります、で此の讀むと云ふ事で御座いますが、昔から百聞一見に如かず等と申しますから、何も書物にばかり依賴せずとも、鋭い觀察眼を見開いて生きた世情に通ずるのも、想を練る上に於て非常な助けを爲しませうけれど、之れも唯見ると云ふばかりでは、想が一方に偏して仕舞つて、第一文字の排列が分らぬ、文章の組み立てとか形式とかの勝手が知れぬと云ふ不都合が生ずる、全體

文章とか言語とかと云ふものは、自分の思想を能く他人に發表する事さへ出來れば、其れで其の目的は達せられたのだと致しましたら、一通りの文字さへ心得居りますれば別に先人の作に接する等と云ふ事を致しませんでも、怎うにか意味丈ならば通じられない事は無い筈であるけれど、世の中は然う何事も實用一點張りでは全く殺風景極まるので、御同樣啞者の手眞似よりは流暢なお話し振りの方が聞き善いと云ふ譯、同じ文を書きますにしても、霤水が流れる、花が散るでは甚だ無趣味の場合がある、尤も文章前後の反應上、例へば威勢能く生ひ延びて居る若竹の莖や等を、中程からポッキリ切つた樣な其樣物足らぬ筆法が、時としては却つて餘韻

が籠つて面白い事もありませうが、滅多無上に這麼不自然な胴切りの鉢合せじや、頗る實寫の精緻を缺く恐れがある。同じ花が散ると一口に申しても花が翻れるとか花が崩れるとか、ひら〳〵とか、ほろ〳〵とか時と種類とによつては、一言の注意でもつて、何も事なしに、四邊の光景迄明了となつて、讀む人聞く者に非常な感動を與へる事がある。

扨て這麼事の詳しいお話しは、勿論

修辭學

の領分ではありますが、文章を作る上に於ては之れも多少心得て置く必要が御座いませう。先も申し上げた通り、文章は單に自分の思想を他人に傳へると云ふ實用上の目的以外に進むで美術たらしむるの用意がなければ、名文章とは申されまいかと存じます、尤も文章の種類に依つては今日學者先生方の御書きになつた樣なのも、文章と申すか申さぬか存じませぬが、當節柄男の學生とも云はれる方々でさへ、香水や白粉を御用ゐになると云ふ開けた世の中に、は些と考へものかと思はれます。

實用一點張り

考へても御覽うじませ、斯く申す私共から始め、實用一點張りで濟まされる位ならば、第一重い目をして前髮の下へ枕等入れて額の上へ突き出す世話も要らねば、ピラミット式の二百三高地の、リボンの簪のと騒ぐにも當らなくなるので、怎うにもして束ねて置けば夫れで宜い譯である。一層其れも面倒臭かつたら、つんつるてんの丸坊主になつて居つた方が、却つて衛生法に適つた實用的の伶悧な仕方かも知ないのである。

言語も文章も、一派の學者先生方の樣に修辭の形容のと無駄な贅澤を拔きと云ふ事にする位だつたら、一層序でに小六づかしい副詞や間投詞や等をお止めにして仕舞つて、名詞と動詞との二つで間に合はして置けば宜いではないかとなる、けれど、世の中が進歩して參りますに從つて、迚も然うばかりは致して居られないので、自分の品位體面を保つ上には、猶其の上にも指環も要らう金線の眼鏡も要らう、同じ一言饒舌るに

しても、國語ばかりでは乙に聞こえぬ時は、ラブやハスパンドやエングーヂ位は云はなくてはならぬ樣になつて來る、さあ然うなつて參りますると、厭でも泰西の作も窺はねばならぬと云ふ風に、益々以て修辭裝飾が複雜になつて來る次第で御座います。

　支那には昔から、科擧の制とか申す事がありましたので、勢ひ時代の要求に促されて隨分名文章家が輩出した樣です而して文章を作る上の態度とか、思想を練る上の用意とか、組織とか形式とかに至る迄、餘程苦心もされましたし研究もされました、或る人等は、自分の作つた文章を自分の居間の最も見安い處に掲げて置いて、居常思ひ附くに從つて殆んど原作の形を失ふ迄に、訂正もし添削もしられたと申す事を聞いて居ります。



　之れは尤も其の人々の性質や習慣上、幾らか筆に遲速も御座いませうし、又一氣呵成的なのを喜ぶ人も御座いませうが要するに、字々句句餘り形式に拘泥して練習を積んで出來た作は、所謂六朝風の、巧緻華麗精妙で如何にも虛假嚇しの素人見には持つて來いですけれど、幽遠とか莊嚴とか豪快とかの氣品に乏しくはありますまいか、換言すれば此れ等の作物には生命

がない生氣がない、舉り色も香も風情もない小細工的な淺薄な文章になり終るの傾向はあるまいかと、恩はれるのであります。

私は小供の時でしたけれど、

母の寢物語り

に能く這麼事を聞かせられました、

何でも母の祖父に當たる人は、天性大變字を書く事が好きであつて、別に師に從いて書道を學んだと云ふ譯ではなかつたが、一字一畫其の法に適つて兎に角字を書く事丈は、頗る得意なのであつた相だ。

其れから其の祖父も死なれるし自分の父も死亡られるし、時は陽春四月の始めつ方、丁度鎭守の祭禮の日に旅を渡り歩く或る旅の書家が、行き暮れて古風に一碗の食を乞うた事があつた、其の時其の書家が四方山の話の末に、自分は今其處で一字の大きさが方一間もあらうと云ふ稀代な名筆の大旗を見て來たが、惜しい事には彼れは裸體で書いた文字だと評した、で母は不圖何の氣なしに、出窓の夕暮れを透して町端れに立ててある其の旗を眺めると、幾年月の雨風に曝されて墨の香こそ褪せては居るが、其れは正しく見覺えのある祖父が名殘の筆跡だつたのであつた、何でも其れを書いた時は丁度夏の三伏の暑い時で、殊には其の旗に適當する樣な大筆であるから、迚も片手では持ち切れないで、筆を肩へ掛けながら素つ裸體になつて、書くと云ふよりは體裁よく引つ張つたんだと云ふ事であります。

書道の法に從つて唯

筆先の小器用

に利く丈の人であつたら、寢て書かうが起きて書かうが、謹んで書かうと裸體で書かうと、全體が造り花ですもの、生命が御座いませんのですもの、出來た文字に相違のあらう筈がありません、人間自然の音聲だつたら、寢て物言ふ聲と、起きて饒舌べる聲とでは、隨分變りがありませうけれど、よしや、如何に名人の手になつても人工の樂器は、餘程の黒人でも怎うして違つてるか音色が容易に聞き分けられまいと存じます

此處が即ち文章を作る態度の極意かと考へられるのである。

要するに筆が立つの、筆先が動くの、修辭の形容のと云ふは、抑も枝葉の話しなので、大雄篇とか大傑作とかを作らうとするには、所謂人工の姑息的覊絆を脫して、其れ以上一歩進むで自分の特色を發揮し、サムシングを捉へるの覺悟がなければ、到底生命のある生氣のある名文章が作れるものではありません。

成程、幸田露伴さんにしろ、尾崎紅葉さんにしろ、

明治の作家

と云はれる丈あつて、彼れ程筆の運びも見事に、行文も艶麗で瀟洒で、隨分銳敏な觀察眼を以て、緻密に人情の機微を發き、人の肺腑を突いて一種凄慘の氣の迫る樣な、至妙の警句も澤山にありますけれど、扨て其でもつて、其の人等よりは、學識見聞の數等劣ると云ふ樋口一葉女史の作に接した時や、近くは殊に餘り敍景には巧みでないと云ふ廣津柳浪さんの作に對した時程、感動の與へられないのは何故で御座いませうか。

人に依つては、同じ蟲が啣く鳥が鳴くと云ひながらも、餘韵に云はれぬ深い意味の籠つてる樣に、何となく深沈と人を引き附ける力のあるのと、唯無造作に趣きもなく表面を辷つて行くのとあるは何故で御座いませうか。

此れは、如何に美しく如何に麗しく出來て居つても造り花は何處迄も造り花ですが、例へば怎樣に哀れな瘁零らしい野の花でも、自然の恩惠に育ち天地の大氣に咲いた花は、兎の毛の先で衝いた程の花びらの端の端にも、自然の氣息が通つて居るので御座いますもの。

斯う衝き詰めた處を申し上げますると、餘程話しが面倒になつて、其上とも文章を作るには、

想を尊ぶべきか

文字を重んずべきか

と云ふ問題が起つて參ると云ふ譯であります、隨分世の中には厄介千萬な天才氣取りの人等が、無暗と無理な熟語を使つたり、甚く文法を間違へたり何かして想さへ優れて居つたら文字等は何でも搆はない、文字

は言語の記號に過ぎぬのだから等と、大風呂敷を廣げる方が居らつしやる樣で御座いますが、私は這麼人等に、其の奇拔な所謂神秘的な想を法に適つた美しい文字で發表したら、猶一層宜いではないかと申し上げて遣り度い位に存じて居るのであります。

不幸にして天才ならぬ平凡の私共、奇想天外より飛んで參ると云ふ譯ではなし、文字に人を魅する自然の筆力あると申す譯ではなし、で御座いますから勢ひ、

多く讀む事

に依つて、想を淸新にし文字を豐富にしなければならないのであります。

際どく云へば、筍天才の澤山な今日の場合、先人の作の眞似が早く上手になれさへすれば、今の處、まあまあ蝙蝠位には威張られる譯なのである、一昨年の末頃で御座いましたか、オペラ式のドラマをお書きになつた博士が御座いましたが、一時非常に文壇の注目を引いて、文界未墾の新天地を開拓する先驅者であると迄一部の人の喝采を博したに關はらず、何に、彼れはハウプトマンの沈鐘を旨く影繪に使つた迄さと、冷笑した方もあつた樣に記臆して居ります、兎に角今日の處、

想が嶄新だの陳腐だの

と云ふのは、一體何から標準を取つて居るのか私には、無論分りませぬけれど、何でも、頻りとバタ臭い氣障つた事を並べると想が淸新だとか幽遠だとか云ふ、其の代り其れと反對に日本在來の想に依つて書くと、陳腐だの淺薄だのと云ふ樣に思はれます、だから私は直ちに皆樣に、日本で早く文壇に成功するの秘訣を御傳授申す、其れは唯無暗に泰西の書物に目を曝して、一層無暗に泰西風を振り廻すに限るのであります。

當時、

青年文士の鬼才

想の淸新を以て文壇に鳴つて居る人で、時折御自分の作の種明かしに就いて御說明が有り難い、何々雜誌に載せた彼の作はテニソンの詩によつたのだの、何新

聞の何はシルレルの何を脱化したのだのと御意遊ばして見ますると、横文字には一向駄目の私共は、何位一生懸命に勉強したからとて、迚麽偉い方々の御仲間入りは到底出來ぬ譯であると我れながら情けなく思つた事も御座います、成程當今、女學生社會には大もての何々二三子等の作に對しても、筆致の洗煉、行文の華麗何時もながら感服されますが、要するに規模の小さい讀み去つて何物をも捉へ得られぬ、云はゞ傀儡の蟲干しの樣にしか御見あげ申されん處を見ると、夫れ等に比較すれば、前者の方は或は想も趣向も新しく進んで居るかも知れません、が、想の根據地は洋の東西こそ違へ、畢竟、五十歩に足らぬ差を以て人を笑ひながら、自分も知らず／＼の間に先人の糟粕を舐る可憐な人等ではあるまいかと、私は考へられるのであります。

這麽具合で御座いますから、先づ差し當り早く、

文章に上達しやう

と思つたならば、まあ今の處、古今を問はず東西を論せず、漢文宜し國文宜し、經文宜し淨瑠璃よし、都都一よし讃美歌宜し、況して泰西の傑作と云はれる限りは一通り眼を通して、大に博覽强記を衒ひ大に人を吹き飛ばした方が、一番の捷徑で御座いませう。

併しながら眞面目に想を練り眞面目な文章を書かうとする人は、唯書物を讀むばかりでは可けません、生きた學問は書物以外に幾らも其處等に轉つて居るものです、負うた兒を三年探したと申す事が御座いますが私共は足下に生きた貴重なる書物を持ちながら、博士の學士のと知識の切り賣り問屋へ行つて、高いお錢を拂つて字書と首つ引きして、苦しい辛い思ひをして古人の糟粕を舐むるに之れ日も足らずと汲々としてるのでは御座いますまいか。

阿方方の周圍は決して狹いと思召しますな、阿方方の四邊を圍繞する空氣は、沙翁や近松のと同じい事に阿方方の小さい氣息の一刹那の波動をも逃さず、限り無き大千の六合に傳へて居るでは御座いませんか。

生きた材料は決して平凡だと思召しますな、法外の

法、理外の理の眞味は、却つて日常卑近な場合に多く發見されるものです。

此處の眞味を解して書いた文章こそ眞の生命もあり眞の生氣もあり、而して自ら犯し難い氣品も備はつて、眞の美術品たる事が出來るのであります。

前にも度々申し上げた通り、名文章を作らうとするは、勿論多讀多作の必要も御座いませう、文法や修辭も心得て置くの必要も御座いませう、其の上に、常識にも富まねばなりませんし觀察眼も鋭敏にせねばなりません、けれど、勸工場物位の美術品ならばいざ知らず、眞の美術品は、單に先人の眞似や筆先の小器用位では到底作れるものでないと云ふ事を知るのは、文章に上達するの第一の用意かと存じます。

各國遊戯の濫觴

國々によりて遊戯及娛樂を異にするは其人情風俗を異にするが如きものなれど之が起原又は濫觴を知る人稀なれば、今茲に記して考古家の敎を俟つ。

▲竹馬　は非常に古きものにて、古代の希臘羅馬の少年頻りに此遊戯に耽りたり。

▲隱れん坊　これ又古代より東歐諸國に行はれたるものにて歐洲へは十七世紀の頃に傳はれるものなり。

▲蛙飛び　シエキスピヤもヂョンソンも此遊戯のことを記せり。

▲繩飛び　これは七八世紀の頃旣に歐洲に流行し其當初は繩の代りに葡萄蔓を用ゐたりとぞ。

▲獨樂廻し　これは希臘より始まりヴアーヂルの時旣に行はれつつありしと。

▲紙鳶揚げ　英語のカイト（紙鳶）は鳶と同語にて素と其製作の鳶に似たるより斯く云へるなり、歐洲へは二百年以前に傳はりたれど支那にては五百年前旣に此遊戯流行せるなり。

▲目隱し　古代希臘に初まりて其昔は大人も之に交り遊びたるものなり。

▲庭球　庭球は英國と佛國とにて十六世紀の頃行はれたる遊技にして當時は非常なる大金を賭け競技をなしたるものなれば、之が爲に財產を蕩盡したるもの少なからず、英國のヘンリー七世及び八世は殊に此技に熟達し玉ひたりとぞ。

▲フートボール　之はエドワード三世の時始めて行はれたりしが久しからずして禁止となり、更に復興してゼームス一世の時、其餘りに競技猛烈にして慘酷なる行爲のありしより再び禁止せらるゝに至り十八世紀末の比やうやく今日の狀態に復れるなり。

▲競馬　之は英國ヘンリー二世の頃に始まり、以後これが爲に巨萬の財產を損失する者もありしがゼームス一世の時に至り漸く賭博の性質を異にせり。

婦女雜觀

婦人七去の説（下）

大町桂月

「悋氣深ければ去る」も、また一理あることなり世の皮相者流、動もすれば曰く、深く夫を愛するが故に、悋氣を起す也。妻は、夫を愛すべき筈也。然るに、愛より出でたる悋氣をとがむるは、餘り殘酷なりと。成程、愛は、女の生命也。愛が女乎、女が愛乎。如何なる毒婦も、必ず愛には、もろきもの也。否、惡人なれば、惡人なる程、愛にもろきもの也。他人の子は、ぶんなぐるも、自分の子は、喰ひつくやうに愛する也。姑や、小姑に對しては、鬼のやうな心を有するも、己れに甘き夫は、喰ひつくやうに愛する也。善人とても、愛せざるには非ず。されど、善人は、自愛の外に、他愛の心も深し。小人は、つゆ他愛の心なくして、自愛の心のみを有す。己を愛すると甚し。とても、君國の爲めに、一身一家を擲つといふことは出來ず。他に對しては、心きはめて、冷也。それも、藝者や、町人の女房としては、經濟上、大に都合よきこともあれど、それのみにて、押し通しては、道德上の惡原也。人にうまき汁をすはるゝお人よしが、よしとにはあらねど、方便は、方便也。心中、毫も、慈悲の心なきものは、人として、劣等なるもの也。かゝる女は、唯利己の心よりわり出して、我身の分身なる子を愛すること、深きに過ぎて、却つて子の敎育をあやまり、己れに都合よき夫を愛して、毫も敬意を有せず。その愛するは、眞に、その夫を愛するに非ずして、つまり、己れを愛する也。まことに、夫を愛するならば、普通の人情、少しぐらゐの悋氣は、起るにしても、夫の顏にどろ塗るやうなことはせざる也。やくにしても、たしなみの如何によりては、夫もかはいさうと思ふべけれど、夫の胸倉をつかまへざるまでも、怒鳴りちらし、ふて腐つては、毫も貴女のたしなみは見えず。かくて、妻が、

ふてくさるれば、夫は、家にありても、惡魔の住家にある心地すべし。すべて、やく女は、夫が、たゞ他の女と深切に話してさへ、はや、嫉妬の刄をみがくもの多し。男の悋氣ぶかきは、男だけに、女よりも亂暴にて、刄をふりまはして輕きは、髮を切るに止れど、大抵、女を殺すためし、下等社會に少なからず。嫉妬は、浮世の一大罪惡也。畢竟するに、悋氣ふかきは、夫を敬するを解せずして、夫を愛し、夫を愛せずして、唯己れを愛するより出でたるわざ也。たしなみ無き女也。私利私慾の傀儡也。塲合によりては、燒餅やくも、尤もなるともあれど、かゝる女は、燒餅やく塲合なしとしても、自己中心の人にして、毫も物のあはれと云ふことを知らぬ女也。その下司の根性が、思はず知らず、燒餅やく塲合にあらはれたるもの也。餅燒やくことは、別にしても、その根性のきはめて、いやしきを知るべし。去らざるまでも、紳士の妻としては、頼もしからぬ女也。

茲にしばらく、女の身の方の事を考へて見むに、女は、一生の苦樂を夫に托するもの也。夫は、女の保護者也、神也、佛也。夫に財産あり、智惠もあり、働きもあり、身體壯健にして、己れを愛してくるれば、女は、それで、世に安心立命する也。これ、女の生命也。かくて、夫は、女にとりては、神也、佛也。男は、女を愛してやらざるべからず、即ち、女の爲めに、神佛となりて、女をして往生させてやらねばならず。されど、愛すれば、つきあがりて橫着になるものなれば、そこは、また、男の智惠にて、狎れさせぬやうにせざるべからず。これ夫たるものゝ、第一に覺悟すべき所なれども、智勇一世を葢ふ英雄も、女には、のろくして、女をして、つけあがらしめ易し。此の如きは、夫も惡き也。夫婦の要は、夫は、妻を愛すべし、むしろ、憐れむべし。妻は、夫によりて、安心立命を得べし。夫を敬すべし、愛に狎るべからず。燒く、燒かぬといふ表面の事は、さしおきても、悋氣深きは、愛に犯されて、自己中心をふりまはす我儘者也。燒くとによりて、その陋劣なる心事が見えたるが、燒く塲合なしと

しても、かゝる女は、己れの爲めに、夫を愛する也、異に夫を愛するに非ず。氣に入れば、喰ひつくやうに夫を愛すれども、怒り、もしくは恨めば、心中にては、刃を夫の身に加へ居る也。恐ろしや、恐ろしや外面如菩薩、内心如夜叉とは、古の聖人が、女のかゝる根性を見拔きたる也。誤解する莫れ、余は遊蕩兒の爲めに、燒く妻を咎めたるには非ず。たま〳〵、燒くことによりて、むき出しになりたる、女の陋劣なる根性を咎むる也。かゝる女は、必ず姑につらく當る也。その根性を、表面には出さずとも、腹に有し居り、つゆ、慈悲といふとを解せざる女也。



父母に順はざるも、妬あるも、歸する所は、つまり一にして、自己中心の我儘なる根性を有して、よしや、その顏は、可憐なるも、その心は、鬼也。平生は、その心をつゝみかくすも、嫉妬の場合には、覺えず、知らず、之をむき出しにして、不貞くされる也。

前にも云ひたる如く、七去は、必ずしも、去れとには非ず。おもに、女を戒めたる也。娶りて去るは、おそし。去らざるやうな良妻を娶れ、去らるゝやうな事をするなといふが、七去の精神の存する所也。

西洋の思想、風俗、入るにつれて、何事も西洋がよ

しと思ふもの多けれども、道徳の點に至りては、西洋人が動物に近く、日本人が神に近きこと多し。夫婦相愛する道の如きも、妄りに、西洋人の皮相を愛んで、動物の域に陥るべからず。自己の爲めに、夫を愛する妻ありて、眞に夫を愛する妻なく、夫を敬するの道を解する妻なきは、これ日本の道徳の下落せる也、人の道より、動物の道に下りたる也、日本の道徳の罪人となりたる也。

本能主義と藝娼妓

安部磯雄

日本の社會に藝娼妓と云ふ婦人の一團が有る。而して社會の或部分には、藝娼妓の存在を以て止むを得ざる現象なりとして容認されて居るやうにも見ゆる。蓋し本能主義に依りて然るのである。

本能主義！　本能にも種類あり、食慾も本能であれば性慾も本能である。名譽慾、財産慾、皆本能の一種類といつて良い。余輩は本能の滿足を以て罪惡なりとは言はぬ、然れども本能を滿足せしむる方法にして其の道を得ざれば本能主義は三文の價値も無くなる。盜賊の如きは好個の實例となるであらう。若し本能一點張で言へば盜賊の如きも本能の滿足である。人、生を天地に享く、食はざるべからず、着ざるべからず、盜賊は其の必要に驅られて他の財産に手を加へたるもの、盜賊自身に取つては止むを得ざる本能の滿足であつたのである。然かも本能の滿足といつて社會は盜賊の存在を容認すべき乎。

更に他の例を以て言へば賭博の如きも本能の滿足で有る。普魯西、澳地利、佛蘭西の學者の如きは本能主義より割り出し止むを得ざる現象なりとして政府に公許せんことを望んでゐる。斯くて賭博者より重税を徴せば賭博は減少するといふのである。然かも實際は學者の豫期に反して益々國民をして萬一を僥倖する思想を增長せしめて來たのである。藝娼妓の如きも、其の存

在を容認するは賭博を容認する普魯西澳地利の學者と相似て愚は更に甚しきものである。

本能主義者は公娼は病毒の蔓延を減少すと言つて居る、或は其樣であるかも知れぬ、併しながら藝娼妓の公認は肉眼に見へざる精神上に至大の損害あることを思はねばならぬ、特に青年男女の頭腦に至大の影響あり。男女十五六歲に至れば大抵性慾が起こる、然かも本能の滿足なりと稱して其の性慾の儘に放任すべき乎、或は論者の一部には之を容認する者もあるやうであるが余は斷乎とし



て其の不可なるを主張する者である。

余は本能主義の行はるゝよりして我國民に剛毅の精神乏しく、薄思弱行なることを痛嘆する者である。特に男女節操の場合に於て最も此の感を深くする。所信を明白に表白せん乎余は婦人に節操を言ふと共に男子にも節操を說かんとする者である。米國の文豪ワシントンアーブイングは兼て言ひ換はせる少女が結婚前に死せるを以て其の少女に對して生涯獨身を守り以て男子たるの節操を保つたではない乎、余はワシントンアーブイ

ングの生涯を思ふ毎に其の志操の高潔にして道徳を超へて純美の境に入れるを羨慕する者である。

顧みて藝娼妓を見るに、其の醜惡なるは言ふ迄もなく藝娼妓に接する男子の醜惡は更に一層なるを思ふて余は日本の社會に藝娼妓の存在してゐるのを耻づるのである。

藝娼妓の存在は本能主義の發表であるが、本能主義の行はるゝ我國民は決して剛毅の國民とは言へぬ、薄弱行の國民で有る。嗚呼我國民は何が故に藝娼妓を思ふてアーブイングの氣品を思はざる乎、藝娼妓の醜汚を嫌ひ、其の一身を高潔にして子孫に誇ることを冀はざる乎。（文責記者に在り）

未亡人と人道問題

二葉亭四迷

自分は此頃新聞社の勤務からして、創作に取掛つたが、此の創作は、或は觀察に依りては家庭問題に關連して居るかも知れぬ、最初は女學生を主人公にと娑婆ッ氣を出して、種々と材料を集めて見たが思ふやうに行かず、其れで今度は日露戰役後の大現象である軍人遺族――未亡人を主人公にして、一ッ創作を遣つて見やうと思ふと。

▲浮雲を出して以來、殆んど二十年、頭で創作を拵へつけず飜譯ばかりに浮身を窶してゐたので、寸前暗黑、困つて居る。其れで他の文士諸君の作は如何かと、紅葉、風葉、天外其の他二三の人の作を讀んで見たが、何の人も〳〵、縱横自在の筆を以て、巧みに明治現代の生活を描ひて居らるゝ、中にも風葉氏の青春を讀んで、大に感服した。文章の點は如何かと思ふが、內容から言ふと紅葉氏より、良い。……青春を讀むと、歷然と明治現代の青年男女の傾向が見へて來るではないか。

自分は青春を以て、此の一二年來の大作であると推薦したひ、（尤もまだ新聞に掲載中であるから、如何收

るか知らぬが、……今日の靑年は、男女といはず、本能主義が無意識の間に傳播してゐる。其れを風葉氏は巧みに引ッ捉へて小説に出して居るのが豪い。

▲自分の小説は、鳶が出るか、鷹が出るか、難産中で今日の處は何んとも言へぬが、三十三四の、脂肪切つた未亡人を主人公に、五六十回續けて見やうと思ふが、問題が問題であるから、自分ながら心配でならぬ——一體、僕は貞婦兩夫に見へずといふ在來の道德主義を非とする者で、天下の寡婦は、再婚すべしといふ論者であるのだ、



事情の許さるゝものは兎も角も、いや、普通の事情位は刎ね退けて、再婚すべしと言いたひのであるが、今日の軍人遺族は、恐くは自分の說を容れて呉れまひ、

▲女主人公は、少佐位の未亡人で、男主人公は、學殖のある紳士——先づ資産のある大學教授位の位置とする、女主人公の未亡人と、此の大學教授の細君とは、學校朋輩で、殆んど姉妹同樣の間柄、そして此の教授夫人は、基督教信者の、常に博愛事業などに奔走する

立派な奥方であるのだ。常に妹のやうに親んでゐて軍人の細君は、今度の戰爭で、未亡人と爲つたのであるから、教授夫人は例の氣象とて殆んど自身の不幸のやうに悲み、良人にすゝめて、その未亡人の相談柱に爲せたのが、間違のそも〳〵、遂に此の軍人に未亡人と、教育あり位置あり思慮ある紳士との間に、不正の戀愛が成り立ち、覺へず知らず姦通の罪惡に陷るのだ。在來の道德眼より言へば、隨分非難もあらうが、自分は眞面目に此の徑路を書いて見やうと思ふ。

▲であるが、男主人公は兎に角も社會の上流に在る人であるから、如何に眼の前に、たよりなき美人が兄と親しみ、相談柱として、日々接近するといつて、其樣手輕く戀愛が成り立つものでない、其れが自分のヤマで、此の男主人公と、其の夫人――常に基督の敎訓を眞向に翳して、博愛事業に關係してゐる、先づ世間の眼からは賢夫人とも呼ばるべき令閨との間は、世間の眼には如何でもなく、寧ろ世間體は至極平和な家庭であるが、此の令閨が理想に勝つてゐる丈け其れ丈け那處か情愛が缺けてゐるので、男主人公の大學教授は、自分にも意識しないが、日頃何んだか不滿足を覺へて居るといつて、令閨に那處が缺點ありといふでもないが、何んだか不滿足を覺へてゐる最先、丸ぽちやの、あどけない二十三四の美人が、妻を姉と重んじ、自己を兄と親んで日々遣つて來て、やくたいもない心配事を苦にして縋るので、賢人顏してゐる細君に比ぶれば肩が張らず、氣もすつくり合つて、遂に常道を失するやうに爲る、といふ徑路であるが、此の夫婦の間を書くのが、双方敎育ある人物である丈け、實に困難至極

▲特に其の夫人の描寫が骨が折れる。夫婦間が惡く、若くは細君を惡樣に書いて、姦通を見せるのが困難ではないが、自分の書かうといふ大學教授夫人は、前に言つたやうに、基督敎信者だ、社會事業に從事する歐米の婦人を理想として居る賢夫人だ、亭主をえびる山の神とは違つてゐる。であるから、例令良人に恕し難き大失策があつても、基督の精神を以て其の罪を恕す、と夫人の理想はまア出たいのであるが、一ト抱あれど

柳は柳哉、幾程基督の精神を持つてゐる令夫人でも、いざといふ云ふ塲合に爲ると、基督の精神も何も有つたもので無い、婦人の愚痴に復つて、昨今世間に流行つてゐる煩悶に陷る。僕は萬幅の力を籠めて此塲合に於ける令夫人の心理狀態を描いて見やうと思ふが、旨くゆくか如何か、心元ない。

▲要するに、自分は姦通された此の令夫人よりも、姦通に陷つた未亡人に、讀者の同情を惹かうと考いて居るが、世間が認めて呉れゝは良いが…兎に角も未亡人再婚問題は、座上の空論では無くして、日



露戰爭が戰後に遺こした人道問題――社會問題であるから、世間も浮氣でなく、眞面目に考いて貰いたいものだ。今度の戰爭で、十幾萬人といふ未亡人が出來てゐるからね。

▲自分の小說は未製品であるから、是れ位にして切り上げるが露西亞の小說家も、此頃婦人問題を小說の中に出してゐる。餘り日本に知られてゐないが、ウエルビッツカヤといふ女作家の如きは、自身が婦人である故かして、常に婦人の問題を小說の上に現はしてゐる。左樣さ、ウエルビッツカヤの潔作は何といふか知らぬが、自分の見た中に『幸福』といふ短篇が有つたが、

此の「幸福」を讀んで見ると、露西亞も教育ある一部の婦人の間には、職業が問題と爲つて居るらしいのだ。婚姻しやうとしても持參金が無い、ぢや職業を求めやうとして見れば、教育ある婦人に適した職業が無い、といふ處より教育が有つて職業の無い婦人が、彼方にも此方にも彷徨して居るやうに描いてある——露西亞では、婦人の職業と言ふと、家庭教師であるが、今日の露西亞では、此の家庭教師が、ぎつしりと一杯に爲つて居るらしいのだ、最も品位を落とせば、種々の職業が有らうが其樣は行かぬ……といふので婦人の職業問題が起つて居るらしいが、婚姻に持參金の準備が要る國柄である丈け、日本よりは何んだか酷いやうである。日本はまだ〳〵、女子大學の卒業生が路傍に彷徨しとるといふとを聞かないが、その中に露西亞のやうな慘狀が遣つて來るかも知れぬ。（文責在記者）

△愛の分割　姑と嫁との仲の惡き眞因は、母が從來獨占なし居たる息子の愛を、嫁の爲め占領さるゝが故なり。

外國人の日本婦人觀　リツトナー

英人ジヨルヂーリツトナー氏日本の風光と人情を觀察し、歸つて一書を著はし「日本の印象」と云ふ、左に譯載するは其一節にして日本婦人の觀察なり。

▲男女の關係

日本の婦人が家庭で有する地位は、歐羅巴の婦人の地位とは非常に違つて居て、男女の關係の惡い事は歐羅巴大陸では決して見る事の出來ないものである、歐羅巴の近世の婦人が年々に自由を得つゝある事は確かな事實だが、日本でも其眞似をして、又成功を得て居るそして日本の男子に、女は何時までも今迄のやうな暴横に甘ずるものでないと云ふ事を示して居る、佛蘭西では妻は事務に於て其夫を助け、英國では女自身の職業を求め、獨逸では尙子供の守をする單純な善良な家妻たるに止まつて居る。

日本の婦人の學びつゝある所は、其夫に忠實柔順な

るべき事と云ふ事である、又其兄弟が一家の主權者たるべき場合には、結婚する迄其兄弟に服從すると云ふ事である、併し結婚は萬事を變化せしめる、女は絕對に其生家を捨てゝ夫の家族の一員となる、而して兩親は其娘に少しの權利を有たない事になり、娘は其親に從順の義務を有せず、又子としての愛をも有しないでも可い事になつて、其代りに夫の親にそれだけの事を盡さなければならぬ事になるのである、だから義理の母親に苦しめられて非常なる不幸に陷る事が屢々ある。

▲容易なる離緣

婚約の成立は、結婚後共棲すべき兩人に依てなされるのではなく、其兩親に依てなされるのでもなく、半ば職務的の仲人なるものに依てなさるゝのである、彼れは雙方の友人で、互の利益の爲に談判するのである、若き一組を紹介する事と、結婚後の親の事などを豫め準備するのが彼の事業である。



若し父が娘の小兒時代に放縱氣儘に育てたならば、娘は當然結婚して苦しまなければならぬ、國家の法律が妻をして夫に服從せしむるからである、夫は父が一家を支配するが如く妻を支配する、日本の昔の規則では夫は結婚するが如く平易に妻を離緣する事が出來たのである、女が料理が下等で、小供の育て方が拙

であつたならば、些少の困難もなく倦きた時に何時でも離縁する事が出來る、併し地位を轉倒して女が夫の地位に立た時は決して夫と分れる事は出來ない。

▲第二の妻

上等の社會では男は其樣な事をしない、社會は夫が好むだけの妻を持つ事を許して居るから、盛に妾を蓄へる、法律は蓄妾を公けに許しては居ないが、男は法律上の妻を棚に上げて置いて外の女を妾とする、其大なる目的は家名を相續すべき子を得ると云ふにある、併し夫は妻が子を生む能力がなかつた時は勝手に離縁を宣告する、又妻の同意を得て第二の妻を有する事も屢々ある、それで其第二から子が出來た時は、其子は第一に引取られてそれを母と呼び、第二は單に乳母たるに止まる、下等社會では離縁は更に普通で、妻は單に夫の道具に過ぎず、事實は其奴隷である、夫が其友人を饗應する時でも、妻は二階又は臺所に殘つて、偶々其席へ出る事を許されても裝飾の一種たるのみである。

▲心中と云ふ事

序に茲に述べて置きたい事はシンジユウと云ふ事である、心中とは異性の人々に依てなさるゝ、二人で成立つ自殺に與へられた名である、一人の青年と一人の娘――彼等が十六歳或は十八歳以上の事は稀である――が結婚する事が出來なくて、抱き合つて其生命を終る、或は毒を仰いで死する、或は男が先づ其愛する女を刺して置いて自分も死する、そして奪はれたる結婚の幸福を死に依て恢復するのである。

▲女は繪でなければならぬ

日本人は生れると直ぐ後に至て役に立つ何事かを敎へられる、父が農夫又は美術家であるならば、其後を襲ぐやうに敎育される、そして子供が適當な年齡に逹した時に父を助けて其業務に從事する、一方の娘は兄弟姉妹の守をする、家の事に氣を付ける、田畑に水を引いたり、肥料を施したりするやうに敎へられる、彼等は若い間、彼等自身にも亦社會に對しても美しく見せる事が、彼等の義務であると考へて居るから、似合

はしき衣服を着て、奇麗に髪を捲く、彼等は其丁寧なる態度に於ても、外觀に於ても客を魅する、彼等自身が女は給でなければならぬと考へて居る、衣服は其周圍に衝突しない色を用ひ、談話は聽者を喜ばさなければならぬ。

日本の着物には數種があるけれども衣服の裁方は一つである、だから善い衣服となると次ぎから次ぎと子孫にまで傳へる、少し手を掛けると誰れにでも合ふやうになつて居る、從つて日本人は衣服に非常なる金を掛ける事を失費とは心得えない、年々着る事が出來れば經濟たる事は明かであるから。



流行は變化しないが、人民の衣服は階級に依つて異なつて居る、交際普通の婦人は金色の漆器の櫛と、三つの大きな、ピンと背中で結ぶ帶と稱するものを有する、之れに反して東京の遊廓の女は前で結ぶ腰帶をして、頭はピンだらけである遊廓ばかりではない全國を通じて此種の女の居る處は何れも同じ事である、諸君は其繪を團扇でも寫眞でも見る事が出來る。

▲奇異なる風習

日本の婦人が過去の社會に有したる地位は極めて僅少のものであつた、彼は家に於ては虛無で其意見を陳述する事すらも出來なかつた、其姑は其息子が充分の注意を嫁から受けて居ない

と思ふと其嫁を擲つた、斯して之れに依つて屢々自殺の原因が醸されたのであつた、然れども之れが今非常に進歩して、東京の社交界に於ては、デンナー、バーテーに夫と共に出席する事が出來るやうになつた、婦人に取つて最大の名譽が與へられたものと云はなければならぬ。

數年前までは一種の顏料を以て婦人は其齒を黑くした、それは殊更に其容貌を醜くして其夫より外には美しく見せないが爲めであつた、そして以前の美を彼等の記憶に刻んで了ふが爲めであつた、併し此習慣は今は流行外のものとなつた、現在の皇后陛下がそれをお止めになつたからである、今は唯僅に小地方に於てのみ見る事が出來る。

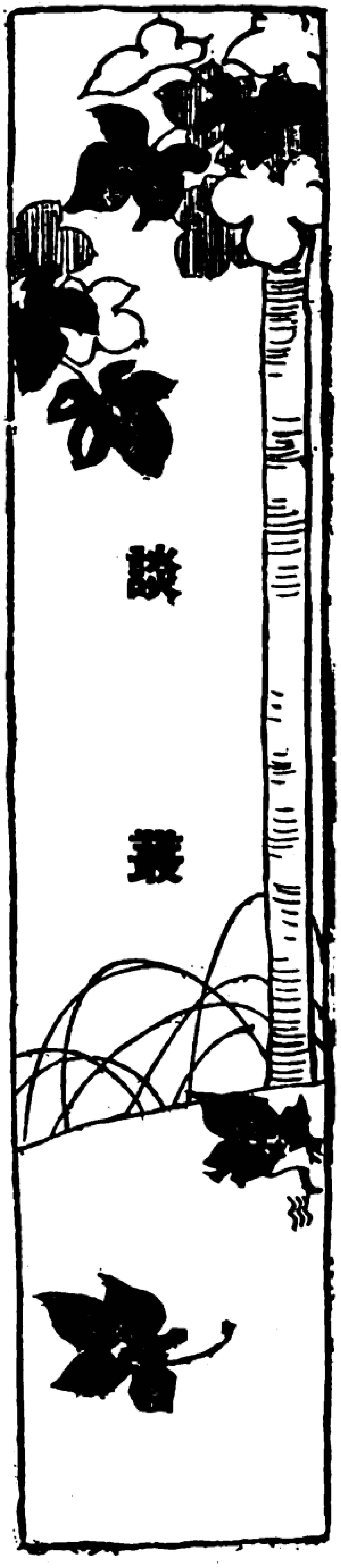
▲生れながらの美術家

日本の女は生れながらにして美術家たるべく教育せられる、小兒が生れると直ぐ母の注意は其兒の衣服の上に注がるゝ若い者ほど輝いたる色が撰ばるゝ、富める者は絹に單純なる模樣の着いたものを用ふる、五六歲の少女は背中に背嚢のやうに弟や妹を負ふて遊ぶ、弟妹のないものは人形を負ふ、所詮小さい時から若いものゝ世話をするやうに教育されるのである。

彼等が結婚するまでの大目的は他人に美く見せて、男女を問はず友人の賞賛を得んとする事である、髮は美術的に結ばれ、十分に油を以て浸して清楚を保つやうに出來、一週間に一度位ひ「髮結ひ」なる專門家がそれを結ひ直す、それから背中に結ばれて居る帶が非常に美くしい、總ての點に於て歐羅巴の女よりも餘程美である。

涙チーフ

これは英國の或地方の慣習なるが、その娘が結婚する爲に都會に行かんとして自分の家を出立する時に、其母親がチーアカーチーフ（涙手巾）と一般に呼びなさせるハンカチーフを與ふるなり、此涙チーフは新に織られて一度も使用せられざるリンネルにて造りたるハンケチなるが娘はこれを以て自分の家を出る時に自然に落つる涙を拭ふものにて、而して結婚後死するまで決して再び之を使用することなく大事に保存し置きて、死したる時その顏の上に掛けて葬り貰ふものなりとぞ。



驕美人三好雪女

須藤鳴門

三好正慶尼、名は雪女、綽名して奴の小萬といひ、大阪の俠女なり。雪女の一生に就きては。諸說紛々として、今尙ほ疑問の中にあるなり、宛然暮春の富士の如し。吾等は、其の秀麗なる姿を見る。然れども其の多分は、霞の衣に包まれつゝあるなり。吾等は、今や其の霞の衣を剝ぎて、其の天眞の姿を觀んと欲する者なり。

大阪の地たる、豐太閤居城の所なれば、昔時氣風雄濶にして、人任俠を尙ぶの風あり。隨つて任俠を以て著るものも多し。されど女子にして任俠なる者は、獨り雪女あるを聞くのみ。雪女は、大阪長堀の豪商、藥舖木津屋五郎兵衞といふ者の女にて、妾腹の出なるを以て、幼き時より出されて。三好氏に養はれたり。三好家も亦富商にして、男子を貰ひ、養ひ育て、雪女に配せんとせしに、雪女は、その尫弱を厭ふて承諾せず因て誓つて復た婿を迎へざりき。既にして義父身まかられしを以て、雪女遂に家を相續せり。雪女資性。穎敏にして濶達なり。既に十二三歲の頃より、書畫詩歌を善くし、家道のゆたかなると、一人娘の事とて。その好めるまゝに、その道々の師を擇びて修業せしめられ。當時、身十八藝に通ずとまで許されたる、かの有名なる柳里恭に書畫を學び。又擊劍柔術をも習ひ。詩

は梁田蛻巖翁に學びたり。雪女人と爲り、名にし負へる白皙にして肥太。肌は氷雪の如く、若し莊周をして評せしめなば、綽約として處士の如し、藐姑射の眞人なかるかともいつゝべき風丰ありて。氷肌凝脂の容姿なるも膂力あくまで强く。平日外出するには、お組お岩といふ。二人の勇婦を伴ひたり。雪女、年紀二八の頃、二女も同じ年頃なりき。無賴の青年等、途中に行きあふて、挑み戲ふるものある時は。やがて雪女は、二女に目くばせして、忽ち搏ち倒せしまゝ、起がたき程に至らしめたること、數次ありしといふ、嘗て天王寺に詣でんとて、下寺町なる蛇兒坂へ通りかゝる。其地は、甚だ荒凉たる僻地にて、都會の內とはいひながら、白晝さへ物凄き有樣なるに。二偸兒不意に躍出て途上に遮り要して、雪女等の所佩を奪去らんとす。雪女手ばやく其腕を摑んで投げ倒せり。二女も亦他の一人を倒せしかば。偸兒等肝を潰し、痛を忍び〳〵逃げ去りぬ。此事はやくも市中に喧傳せられ、人々皆顏見識りて、途上に逢ふときは避けて通りたりといふ。かくて雪女二十歲の頃に至り、旣に夫もなし、豫て、禁裏の內を觀まほしく思ふものから、つひに都に出でゝ宮仕せしが。諧謔に達する中にも、殊に能書なるを以て、長橋局の祐筆となれり。かくて宮中に奉仕すること五年許り、頗る宮闕の內事故典に通じけるが。何思ひけん、急に御暇を願て、浪華に歸り來り。ぬば玉の黑髮を、惜氣もなく剃こぼちて尼と爲り、名さへ自ら正慶尼と稱して、天王寺の邊なる、月光寺に住しぬこれ三好氏は、三好修理大夫長慶に出づといふを以て名つけられたるなりと。又生母の衣號菊水なるを以て衣服皆菊水の紋を用ひ。楠正成の後裔なりと誇稱して喜べり。常時白き法衣を着ながら、矢張、以前の二女をつれて遊び戲ふるゝこと元の如し。一日月光寺に於いて開帳の事あり、士女雲の如くに羣集せしが、會々俄に空模樣變りて大雨となり。人々皆周章狼狽ること言ばかりなし。正慶尼急に人を遣はし、傘一千本餘を買求めさせ、見知らぬ人に、人每に一本づゝ施し與へぬ。又或る時寺を借りて、大法會を營み、伶人を招

て樂を奏し、齋の供物は、山の如く積みけり。人その故を知るものなし、强てその所由を問へば、關白秀次の二百年忌を勤むるのみと答ふ。又、金を京の方廣寺(大佛)に寄附しで曰く。我が爲に、豊太閤の供養をして給はれ、といへり。其の任誕大概かくの如し。斯ること年久しうして、家産稍傾きければ、難波村に室を築て移り住み、此に老いたり。その頃棺を買ふて門頭に懸け。日々客を會て、酒を飲ましぬ。其の高談快論を聞き。自から一盞も手にせず、一言をも發せず。只其間に嬉々として樂めり。一日炎天を冒して外に出て街上に倒れ死す。市人皆、これ正慶尼なるを識て爭て其家に告げ知らせ。やがて屍を、尼が平昔酒を買求めし家に寄せ、例の棺に斂めて、幽樂寺に葬りぬ。享年七十五、時に文化元年の事なり。墓石に雪女と龜と岩との像を彫り付けあり、こは彼の二女をも、同じく此所に葬りしとぞ。

頼山陽曰く、阿雪はいはゆる小萬なり。同時に南曲に歌妓にて尺八を善くす。招く者あり。輙女郎の扮裝を爲し。笛を腰に挿して往けり。阿雪の俠名が都下に喚しくなるに至て、敢て名を斥さず。其母萬と名つくるを以て。呼ふに小萬を以てし。扮して南妓樣を爲し用ふ。是に因て訛り傳へ、畵者は眞を寫し。又之に依るといふ。

嗚呼。阿雪は尋常の婦女爲るを屑とせざる者なり。而るを況んや、名を人に媚びる娼妓に混せんや。之を聞くことあらしめなば。吾れ其目を瞋らし唾ばし罵るを知るなり。世の眞假淆亂、此の如き者多し。菅茶山梁蛻巖等が、阿雪に贈る詩稿を得て之を珍とし。余をして之れが傳を爲らしむ。因て其事を覈にするを得たり。夫れ阿雪の事は。以て訓と爲すべからず。されど其時に當りては、婦女にして丈夫なる者あり。今や則丈夫にして婦女子なる者あり。余是に於て以て氣運の盛衰をトする有り、慨歎すべしと爲す。

阿雪の事を傳ふるもの、昔時より以來、種々雜多の說あり。畢竟するに、一時其事を誇張して、演劇に仕組たるより。眞を取て假と爲し。假を取て眞と爲し。訛

傳百出して。遂に實事の那處に在るを知る者稀なるに至らしめたり。山陽は、古今の史家なり、殊に師の囑托を受けて、其傳を作りたりとある上は。此傳を以て正確なるものと信ず。茶山は、山陽に就て詩を學びたる師なり。豈に疑を容るべけんや。名家略傳（山崎美成著）に曰く。雪女を世人よびて奴と異名せり、（奴とはそのかみ俠者の稱なり）かゝれば、その噂浪華はさらなり、近郷までも聞えしかば。はやく、延享五年正月二日、豐竹座の操芝居にて、「客競出入湊」と云狂言に、奴小萬と云俠女子を取組しは、實は雪女を摸したるなり。かゝれば、雪女が噂ます〳〵高く。後には、雪女が名をばいはで、奴の小萬と呼べりとかや。雪女もこれを自らよきことゝおもひて、俠氣日々に募りしが。文事にも志ありて、梁田蛻巖の門に入り。又、和歌俳諧にもうとからず、いつしか、柳里恭と契りて、遂に妾となりぬ。云々と。演劇に仕組たるも實事なり蛻巖に詩學びたるといふも實事なり妾となりたりとは虚事ならん。そは彼女の氣概にして、豈に此事あらんや。此の如き女傑に、濡衣をきするとは、慘酷なり。果せる哉、芳宜園といふ人あり。近代閨秀美術家談に、



雪女の事をも載せて云へるあり、曰く「此に少し雪女の爲に、寃を雪いでやりたいのは。おほかたの人は、雪女を淇園(柳里恭)の妾であつたやうに云いますが、之はけしからぬ話である。雪女の氣象を見ても、人の妾となるやうな女子でない。それに慥なる證據は、木村巽翁の死を悼める文にも、吾が師柳先生云々、と書てあります。この文は、蒹葭堂雜錄の中にも出てあります。雪女の靈をして、此のごとき事を聞しめたならば泉下でさぞ〳〵くちをしい極みに思ふことであらうよ」云々。此は實に同感である。吾等、賴山陽翁と芳宜園主人の審判を以て。全く高等法院に於けるの破棄と見做すものなり。雪女の身心は、氷雪の如く、潔白にして、全く寃罪否艶罪を雪がれたるものなり。雪女たるもの以て瞑すべし。

曲亭馬琴、嘗て浪華に漫遊して、正慶尼を訪ひ往き、書畫を求む。尼、元來世を厭ふ心ありて、人書を望めども、猥に書かず。馬琴對話の末扇面を乞しに、快く諾して、詩一編と連歌の發句とを書き與へられ。手迹甚た美事なりと云ふ。

早　春

金城春色映丹霞。活氣和風到萬家。
潰笑宴然樓上興。捲簾先見園中花。

又

月落て松かせ寒き野寺かな

詩も大に誦すべし。俳諧亦頗る觀るべし。親らいふ年七十四、顏色既に老衰すと雖も、猶いにしへの餘波見え。言語自から俠氣ありて。慷慨淋漓、古今を談じて傍ら人なきが若しといふ。

今古出産の傳說

清水芳子

第一　妊娠期

▲神佛の祈兒

人智の發達しない時代には婚姻、出産ともに神佛の

加護あるものと思惟し、殊に出產に就ては其作用が如何にも靈妙不可思議なので、妊娠分娩悉く神佛の力に待つものとして是に祈願をかけ、その冥助によつて子を設けることが善良にして然も聰明なる子を得る方便と信じ、茲に神佛の新兒と云ふことが始められました。そこで此方便たるや獨り不妊症の者ばかりに行はれたのではなく、既に幾人かの子を有つてゐる者にも行はれたのです。且つ此ことは敬神の念に富んでゐる我國では太古からあつた習慣で、神代にも其例が澤山にあります、就中英雄とか豪傑とか云はれる人々は其傳記を花々しく飾る必要から、大概妊娠に就て一種神秘的の奇跡を殘してゐます。手近い例を擧げて云ひますれば豐臣秀吉はその母が日輪を呑むと夢みて受胎し德川家康は藥師十二將神のうちなる寅童子の化身と云はれてゐます。分ても秀吉は門閥を尊重する時に當り平民から身を起して天下の政權を執つたので、世の中に自分は凡人でないと云ふことを知らせ、併せて人心の歸服を圖るために常に此受胎の奇跡を吹聴し、支那朝鮮等の諸外國へ往復する文書には必ず日輪の再生なることを書きました。英雄豪傑ですら猶ほ斯かる有樣ですから、是等の人々よりは遙か以上に國民の崇拜を受けてゐる一宗一派の開祖と云はれる名僧、又はそれ以下にしろ苟しくも身を靈界の事業に委ねた人たちで何等かの奇跡傳說を有してゐぬ者はありませむ、日本靈異記、日本高僧傳など云ふ書物の大半は、實に不思議なる妊娠もしくは受胎の記事で埋めてあります。然して此傳說は軈て子を授けるほどの神佛なら安產の守りもすると云ふ迷信と變じて來て、淡島神社、子安觀音、子育觀音等の神佛まで工夫され、此迷信は更に幾多の迷信を生み其煩雜なること他に類例を見ぬほどになつたのです、序に云ふて置きますが從來我國で子安觀音と稱したものは、十中の七八まで聖母マリヤと基督の肖像であります、基督教は德川時代には邪教として嚴禁されてゐましたので、公に是を信仰することが出來ず、聖母が基督を抱いてゐるところから思ひついて、子安觀音と云ふ名で密に祀つてゐたのです。奧州

松島の瑞巖寺にある子安観音の本尊と云ふのは、昔伊達政宗の家來支倉六右衛門が遠く羅馬に使したとき法皇から貰つて來た基督の肖像で、當時歐亞巴の名畫工が丹精を凝して書いたものださうです。

▲子種石

妊娠と石とは餘ほど因縁の深いものと見え、腹帯のことを岩田帯と云ひ、不妊の女のことを石女または石婦と云ふなど、受胎に就ての迷信には石に關するものが多きを占めて居ります。日本書紀に神功皇后が三韓を征伐なさる時に恰も應神帝を御懐胎ことに御臨月なので出發に際し「皇后則ち石を取り腰に挿み祈つて曰く、事竟るの日この土に産まん、其石今に伊都縣道邊にあり』と記してあります、萬葉集にも此石の奇績を詠んだ長歌及び短歌が二首あります。猶ほ傍廂と云ふ書によりますと『此石二つ萬葉集の傳によると筑前國怡土郡深江村子負原の海岸なる岡の上にあり、一は長さ一尺二寸六分、丸さ一尺八寸六分、重さ十八斤五兩、一は長さ一尺一寸、丸さ一尺八寸重さ十六斤十兩、共に楕圓狀にして鷄子の如しとあり、始め神功皇后が御帯に挾める時は二つながら指頭ばかりの小石ならんか、年なるまゝに今は(此書の著者は徳川時代末造の人なり)三尺つゝもある巖となりて苔のむすに至



りたるこそ奇しくも妙なり」とあります。此石が我國に於ける妊娠と石の關係ある傳説の始めで、此外に肥前風土記に「船帆の郷に景行帝御巡狩の時、御船の沈石四顆その津にあり、此うち一顆は高さ六尺徑五尺、一顆は高さ四尺徑五尺、子なき婦女この二石を祈れば必ず姙産を得る」とあります。また准興法親王の廻國雜記には「下野日光に子種石とて長さ五尺ばかりなるが鳥居の前にあり」と載せ、下野國史には「鹽原に子持湯と云ふがあり、此湯の中に長さ三尺ほどの石ありその石に婦人の腹を當て身體を溫めれば必ず妊娠す」と記してあります、此以外にも子種石もしくは子持岩など澤山にありますが今は略すと致します。

▲腹帶のこと

妊婦が着帶することは我國古來からの習慣で、其起原は前に述べました神功皇后の石を帶に挾んだのに初まると云ふてありますが是は信を置くに足りませむ。源氏物語に現はれました王朝時代の腹帶の工合は妊婦の身體に直接に結ぶのではなく、衣服の上から極めて輕く結んだやうであります。且つ着帶の祝は必ず懷胎五ケ月めにすると限られたものではなく、妊婦の都合または其家の都合で六月でも七月でも其時の模様によつたのです。鹽尻と云ふ書に舊記を引用して「足利直義の室、貞和三年二月二十日戌の一天、着帶の祝儀あり、今月七ケ月なり」と例證を擧げて論じてあります又此當時の着帶は必ず其妊婦の夫たるべき人が親しく其式を行ふと云ふのが故實でありました、此ことは天皇御代々の中宮御產部類記に詳しく載せてありますが今その一例を云へば中右記に「元永二年正月五日中宮御懷妊の間、初めて着帶し給ふ、先づ權大進清隆をもつて件の御帶を仁和寺なる寛助僧正の許に遣し加持せしめ、後主上(鳥羽天皇)結び給ふ」とあり、此ほか后宮御着帶部類記と云ふ書にも御代々の御摸樣が記してあります。然して此事は獨り止むことなき高貴の間にのみ行はれた習慣ではなく、臣下にも行はれたことゝ見え東鑑に「治承六年三月九日、御臺所(政子)御着帶、幕下(賴朝のことなり)自ら帶を結ぶ」とあります、

由來帝室中心主義の我國の風俗とて、此こと下々にまで行はれたのは云ふまでもありませむ。腹帶は貴族は白羽二重または白綾を用ゐ民間では白の木綿を用ゐ、長さ八尺を定めとし廣さ一幅を法とし、その結び方は先づ布の兩の耳を中に折り合せ、更にそれを双方から折り合せ夫の右の手から妊婦の左りの袖を通して腹に卷くのを正式としてあります。また戌の日に此式を行ふのは戌は產が輕いとの傳說から來たものですが、此ことは極々近代のことで太古は勿論中古にも定まれる日とてはなく德川時代の元祿五年に出來た女重寶記には帶をする吉日と題し『甲は子と戌の日、乙は丑辰未の日、戊は午子戌の日、己は丑の日』庚は申戌の日、辛は卯酉の日、丙は午戌の日』の十五日はよしと記し、必ず戌の日と限つてはありませぬ。腹帶を岩田帶と云ふに就いては祝ふた帶の心と、岩の如く堅固にあれとの意と、結肌帶の轉訛との三說あります。現今では腹帶には紅白の布を用ゐ媒酌人より贈り五月めの初の戌の日に產婆を招ぎ是に結ばせるやうになり、夫が自身に結ぶことは全く絕えてしまひました。猶ほ古代にあつては出產がすむと其腹帶に蟹と鳥の摸樣を染め、生れた子の產衣を拵へる習慣でしたが、是も何時となく廢れてしまひました。

▲胎兒の男女を知る法

二三の古書に妊娠か否かを知る法と云ふのが載せてありますが、此法は何れも得知れぬ藥を服用するのであるので危險がないとも限らぬと思ひ此處には省きました。さて胎兒の男女を知る法と云ひますもの丶是も全く理窟のない傳說にしか過ぎませぬゆゑ必ず當ると保證は出來ませぬ、唯初產のお方などは男か女かと取越し苦勞するのも夫婦親子の情愛でありますから、此法により推知するのもまた樂みと思ひ抄出すること丶致しました。尤も胎兒の男女を推知することは我國では古い習慣で、神代の折に天照大神と皇弟須佐之男命と是を謀り給ひ、大神は男と云ひ皇弟は女と云ひ、後に生れた御子が男子に御座しより大神には吾勝つの意を以て其御子に正哉吾勝天忍耳命と名をつけ給ひしことか

古事記に記してあります、此ほか人の世となつてからも斯かる例は乏しくありませぬ。所で其推知法はと云ふと是に二種あります、一は擁書漫筆に魏書を引用して『左りはらみは男、右はらみは女と知るべし、此こと支那にもあれば多分同國より來りしものならむ』とあるのと、一は理齋隨筆に『夫婦の年の數を合せて三つに割り、割りきれざるときは男子、割りきれるは女子なり。產月年を越れば一つを其數の中に加へ入れて三にて除するなり、此こと十に八九は違ひなし』とあります。餘り信用は出來ませんが行つて見るも害のないことですから、參考にまで記して置きます。

▲變生男子

男尊女卑は武家時代に於て其極度にまで達し、それがために專ら男子の生れんことを願ひ女子の生れるのは厄介をもうけるのと同視したのです、殊に藤原氏の如き代々外戚の權を恃んで政柄を握つた者にとつては男子の生れ給ふと否とは勢力の上に非常な關係があるので、專ら變生男子の法と云ふを修して男子の生れんことを欲したのです。然しながら此法たるや元より當時の僧侶たちが權門に阿り、且つは自己の利達を求める方便から來た迷信で、奈何に佛力の冥助を仰ぐとするも胎內にゐる女子が男子に變ずべき理由はありませむ唯男子を欲するの弱點に乘じた僧侶の奸策に相違ないのであります。なれども迷信の勢力は常に理窟の外に立つてゐるものですから、其以前は此法にも多大なる權威があつて帝室の御產には必ず執行される慣例となり、それがためには祈願所の爭ひを生じ、稀には賴豪阿闍梨が鳥羽帝の命を承けて此法を行ひ、首尾よく祈願を遂したにも拘らず鳥羽帝が賴豪の要求を斥けたので三井寺に騷動を起したことなぞもありました。

▲產屋

婦女の月水と出產を穢れと思ふ感情は婚姻進化の上から見ますれば、獨り我國にはかり行れたことではなく人智未開の時代にあつては世界各國に共通した感情であります。其なかでも我國は政敎一致の國是を立て敬神の念が熾なりしだけそれだけ此二つを嫌厭するこ

とも強く、婦女の妊娠して臨月になると産屋とて出産にのみ用ゐる家を建て妊婦は其處に移り住んで分娩し産後になつても當時の習慣による百日の日數を經るまで家人と同居は勿論、飲食を調へる火まで別にし（若し流産なれば月を計る者は四ヶ月、日ならば八十八日を定めとす、日數の長短は時によりて異るも今は永正記により他は略す）たのであります。此事は既に神代から行れた習ひで古事記日子火々出見命の妃豐玉比売命が御産の條に『海邊の波限に鵜の羽を葺草にして産屋を造りき、こゝに其産屋いまだ葺合へぬに御腹忍へ



がたくなり給ひければ産屋に入りましき』とあり、猶は此ことは御代々の中宮、宰相などの簾中は云ふまでもなく下々にも行れ、其身分に應じて或は新に家を造り或は里方の家を借りて用を便じたのです。榮華物語にも『中宮（妍子）もたゞにおはしまさねば出させ給ふ齊信大納言の大炊御門（今の京都竹屋町）の家におはします』とあり、東鑑に鎌倉將軍家の妊婦他の大名の屋敷に移ること、足利將軍の北の方のこと蜷川殿中日記に載せてあります。産屋の起りは妊娠の後は人も動物の如くなれとある理法から出たものでしやうが、今は

廢れて纔に多忙の人が病院を產屋として出產するぐらゐになつてしまひました、まだ此外に產屋の建てかた產屋の飾りつけかたなどもありますが、既に廢れたことの詮索ゆゑ略します。

▲妊婦の食物

命は食にあり況して唯ならぬ妊婦の身に毒斷ち食物選みの定めあるは當然のことであります、安齋隨筆に「產婦妊婦もし鮑を食へば小便滯りて水腫となる」とあり、本草綱目には「妊婦慈姑を食するときは流產す」とあります。左に擧げたものは二三の古書から抄出したのですが、其多くは理由もなんにもない、早く云へば駄洒落みたやうな事ばかりではありますが、其むかし醫學の進步しない時代の產婦の食物に就ての傳說を知るよすがにもと思ひ、此處に揭ぐることゝ致しました。

鷄卵と鯉鮎を食ひ合すれば其子疳瘡を生ず。

葱を食ふと腋臭の子ができる。

鷄と糯米を食ひ合すると其子寸白を病む。

鴨の玉子と桑の實を食ひ合すると逆子を產む。

蟹を食ふと橫產をする。

生姜を食ふと指の多い子を產む。

雀と酒を飲み合すると其子放蕩をする。

菌を食ふと其子驚風を病む。

二ツ栗を食ふと二子を生む。

田螺を食ふと難產をする。

鼈を食ふと頸の短い子を生む。

鰻鯰の如き鱗のない魚を食ふと難產する。

鷄卵と乾鮭を一所に食ふと其子瘡を病む。

烏賊を食ふと流產する。

▲妊婦の動作

妊婦の起居に就ては別にこれと云ふほどのこともなく、高いところへ手を擧げると乳の緒がきれる、重い物を提げるな長旅をするな、轉ぶと流產する、寢るには足を伸ばすなどの三四にしか過ぎませむ。婦人養草に「妊娠中物に驚き恐るゝこと多ければ其子生れてのち驚風を病む、又臨月に灸すべからず、若し灸をな

すときは一兩日のうちに必ず產あるべし』とあります此外は誰も知つてゐる妊婦が火事を見て身體を搔くとその搔いところが子の痣になるとか、亦は妊婦が死人に手を觸れるときには身體に鏡をつけてゐぬと腹の子に痣が出來るの二三あるばかりです。

第二　分娩時

▲安產の禁厭

出產は婦人の生死にかゝる大事ゆゑ是が安產の傳說習慣ともに少くはありませむ、孝經樓漫筆に『槐の木の東方にさしたるをとり產婦の手に握らしむれば產し易し、また槐の實五七粒を吞めば產下す、催生の良藥なり』とあり。鹽尻にも槐の木の產婦に効能あることを記し、猶ほ平家物語を引いて『高貴の人々の產滯るとき（此こと徒然草には後の物、即ち胞衣の滯るとき「こしき」を家根より落し、男なれば南の方へ女なれば北の方へ轉ばすとあり）は安產を願ふため甑を家屋より轉ばし落すことあり』と記し、貞丈雜記には『古へは產のとき米を撒く（紫式部日記には產湯のときとあり）ことあり、これ安產の法なり』と載せ。女重寶記には『伊勢と云ふ字を紙に書き水にて吞めば產安し、これ伊勢と云ふ字は人尹生丸力なればなり、又產婦の右の足の小指の先に麥粒ほどの灸三ッすへれば安產なり、また熊の手にて產婦の腹腰を撫でるもよし』と書いてあります。然し各れも傳說にしか過ぎませんから實際に効驗があらうとは思はれませむ。

▲惠方と禁物

產する時の惠方は子午卯酉の日は南のかた、寅申巳亥の日は西北の間、辰戌丑未の日は東南の間をよしとしてあります。また產の時に忌むべきものは無地の衣服及び無紋の衣服、紫、段々染のもの紅しぼり、晒し縮み、しゞらなどは一切着ぬことを法としてあります又女の生れ年によつて產の善惡と云ふことがありますが、是によれば子丑寅卯酉戌亥の女は夏冬の產は安く春秋は重く、辰申未午巳の女は春秋よく夏冬わろしとあり。亦知死期と云ふて人は總て滿潮の時に生れて干

潮の時に死ぬもので、若し此時にはづれて生れると其子は短命であると云ふ傳説があります、此外に產月と子の善惡など云ふこともありますが、是等はあまりに荒唐の迷信ゆゑ今は略します。

▲安產の祈禱

帝室は申すも恐かのこと將軍などでも分娩と云ふと有ゆる祈禱を修行して出產の無事を欲したもので、群書類從の雜の部に御座御祈目錄とて、寛元より弘安に至るまで前後四十年間に於ける數度の御產の祈禱の摸様を記した書物があります、此處には源平盛衰記から安德天皇御誕生の折の御祈りを掲げますが「御驗者には房覺昌雲雨僧正、俊堯法印、豪禪實全兩僧都なり其上法皇も內々御祈りありけり」とあるが如く其有様は實に素晴しいもので、名ある神社佛閣には「御馬十二匹、砂金千兩、南鐐百、御劍七振、御衣二十襲ね」づゝ奉納し、其ほか大赦を行ふて「罪人七十三人」を赦免するなど殆んど人力の有る限りを盡すのであります。石田軍記によると豐臣時代の祈禱のさまが「文祿元年の冬より淀殿懷胎によりて四個の大寺にて高僧を請じ大法秘法を修し變生男子の法を行ひ、明れば文祿二年八月二十日、安產成就のため御祈禱とて大坂城中に連歌の會を催し給ふ、其頃の宗匠花の本紹巴發句に大槃若はらみ女の祈禱かなと詠み、昌叱脇句を、一二は濟んで產の紐とくとつげ、未だ百韻に滿たざるに若君(豐臣秀頼)御誕生あるこそ不思議なれ」とあります他は煩を避けて省きます。

▲產婆のこと

大寶律令(今より約一千二百年前)の醫疾令に「女醫は官戶の婢の年十五以上二十五以下、性識慧丁の者三十人を取りて敎ふるに胎を安ふし難きを產ましめ、及び創腫傷折針灸の法を以てせよ」とあります、是は女醫と云ふものゝ其實際は今日の產婆と異るなく專ら出產の世話をしたものです。伊勢貞丈氏は安齋隨筆に於て產婆のこと古き書物に見えねば近世のものならんと云ふてゐますが、這は博覽なる氏として千慮の一失かと思はれます。勿論產婆と云ふ名は代々の物語もの又

は次々の職人盡歌合せなどにもなきより推せば、其昔は女醫が兼ねたもので産婆として今日のやうに獨立したものではありますまい。現時でも地方へ行きますと産婆はなく纔にそのことに手馴れた者が世話をする位で、恰ど大昔の有様が此やうであつたらうと考へられます。産科醫または産婆が不熟練のために種々なる失策を重ねたことは既に菅茶山の筆のすさびと云ふ書物にも四五の類例を載せ、其ほかの隨筆にも澤山にありますが、世事百談によると『妊婦に安産の符を水初穂にて呑ましむれば、赤兒その符を握りて生るゝと云ふは修驗者と産婆と心を合せてする曲事なり』とあります、



以つて其一班を推し測ることが出來ます。

▲二三の傳說

晝生れる子は父に、夜生れる子は母に似るとか、或は産婦の眼に暈の目または障子のさんの見えるうちは子は生れぬとか或は産婦の力が青竹を握り潰すほどにならぬと分娩せぬとか、袋子を生むのは袋を破らずに捨たゆゑとか、此ほかにも斯かる俚諺めいた傳說がありますが、是等はともに後世産婆の覺悟を勵すために云ひ觸したことで、其實際は左ほどのことはないさうです。

第三　出産後

▲臍の緒

日本書紀に『生れませる子の名は火照命、火須勢理命、火遠理命の三柱、竹刀を以て其子の臍を截る』とありますれば、我國に於て赤兒の臍の緒をきることは神代からの習慣と見えます。竹刀あをひえと訓み篦を二つに割つたものです、臍の緒を銅刀できつたのは康和年間の御產部類記にあるのが始めで、それまでは此竹刀できつたのです、今でも地方では鐵物でなく篦を用ゐて居ります。臍の緒をきると云ふを避けてつぐ云ひますのは源氏物語が初めで、後世は專らつぐとばかり云ふてゐます。

▲產湯のこと

產湯も古代からあつたことで殊に其身分により種々の式禮があるものです、先づ高貴の間では御產があると墓目の法と云ふを行ひ、產神を祭り、豫て設けある產屋のうちなる產棚より湯を引き其湯を盥へ移し、模造した虎の頭(虎は猛獸ゆゑ惡鬼を拂ふと云ふ)の影を寫し、それから椰子の實)此實は解毒の藥なりと)を二つに割つて拵へた柄杓で湯をかけるのであります、產湯が濟むと湯始めの祝ひを擧げます。下々では斯かる面倒なことはありませぬが、產湯には米の洗ひ水に食鹽を入れて用ゐるのを法と致します、然し今日では專ら眞水を遣ふやうになり、湯始めの祝ひなどは廢れてしまひました。

▲產衣のこと

產衣は生ふ衣の轉訛で、其昔は赤兒の誕生致しますと陰陽師に賴んで其子の生れ性に合つた吉い色を考へさせ其色を染めて用ゐ、若し斯かる手數を省くときには白か淺黃を用ゐたものです。產衣の仕立かたの前が短く後の長いのは、陽常にあまり陰常に不足するの意をとつたものと愚雜俎と云ふ書にあります。また是の着せかたは男は左りの手から女は右の手からするのを法だと申します。產衣の名は足利時代に始めて見え着衣の祝ひは大概五夜か七夜のうちに行ふものと安齋隨筆に載せてあります。

▲產剃り

古來赤兒の產剃りをしたか否かに就ては、有職家の間に議論がありますが、兎に角に萬葉集に赤兒を綠り子と詠んだのは產毛を剃つたあとの青々とした意でありますから、旣に此頃には行れたことゝ見て間違ひはないやうです。產剃りの祝ひは七夜のうちに行ひ、三歲になつて深そぎの祝ひを擧げ、七歲になつて髮置きの祝ひと云ふのを行ひましたが、今は三つとも全く廢れてしまひ、たゞ七歲の祝ひが帶の祝ひと名を改めてその面影を殘してゐます。

▲胞　衣

女諸禮集と云ふ書に「胞衣は地を深さ七尺に掘り、產のよごれ物を添へ、鹽六升を加へて埋むべし、これ本性に歸る表儀なり」とあり、松屋筆記に「胞衣を納めて歸るとき笑つて歸るを故實とするよし產所記及び殿中日記に見えたり、此こと殿上にもありと見え、天皇の御胞衣は稻荷山、賀茂山、吉田山の此三ヶ所の人の踏ぬところに納めて三聲笑つて歸るを法とす」とあります。產婦の髮を麻で結ぶのは胞衣の早く下りる禁厭だと嬉遊笑覽にあります

▲命名のこと

太古は生兒に名を命ずるには出產の際にあつた瑞祥を見て名つけたもので、例へば譽田別氣、大鷦鷯の如き是であります。また此頃は母親が命名するのを普通したのです。古事記垂仁天皇の條に「天皇その后に詔らしめたまはく、凡て子の名は必ず母なも名くるをこの子の御名をば何とか稱けむと言り給ひき、后答へ白したまはく、今稻城を燒く折しも火中に生れませれば其御名は火炎智別御子とぞ稱けまつるべきと白しき」とある、是を見ても當時の命名の習慣を知ることが出來ます。又名をつけるのに其子の合性を見るとか、屎とか垢とか云ふ穢い名をつけると其子が丈夫に育つとか、或は子の育たぬときは男ならば赤太郎、女ならばいゝ、あぐりとつけると育つとか、亦は名が過ぎると名負けがするとか云ふ傳說もありますが、是等は誰も知つてゐますゆゑ今は略します。唯母親が子の名を付ける習慣を婚姻史の上から見ますと、是は共同婚とて一人の

女を數人の男が妻とした時代は、母系は判然しますが是に反して父系は不明瞭なので、子は母親の所有としてあつたのです、母が命名するのは此時代の名殘りであります。

▲産養ひ

出產の當日を初夜と云ひ白粥を啜り、三日めを三夜と云ひ五日めを五夜と云ひ共に白粥の祝ひあり、七日めを七夜とて祝儀あり、斯のやうに日每に祝ふのを產養ひの祝と云ふと產所記にあります。

▲宮參り喰初め

現今では宮參りの祝ひは男三十二日、女三十三日に行ふのを法してゐますが、其昔は產婦は百日のあひだは白小袖を着用し、百一日めに色直しとて赤兒も產婦も色小袖を着て此日色直しの祝ひを擧げ、此のち三七日のうちに吉日を選んで宮參りをしたものです、今に二十一日めを枕直しと云ひますするのは出產に用ゐる枕を止して普通の枕を用ゐてもよいと云ふので、床を離れても差支へないと云ふのではありませぬ。喰初の式は男女ともに百二十日が故實で、男百十日、女百二十日と云ふのは略儀であります。此式は餅（小豆餅にもよし）を五ッ買つて來て、土器に母子草を敷きそれへ餅を載せ一つ宛五つに盛つて出し、赤兒に食せる眞似をするのです、勿論齒固めの祝ひとは別であります。

▲枕上に錢を置くこと

源平盛衰記の安德天皇御誕生の條に「小松内大臣には錢九十九文を皇子の枕上に置きならべ、天を以て父とし地を以て母とし、聖壽は唐土東方朔にあやかり千萬歲を保させ給ひと御祝ひ」とありますが、此錢を置くことは獨り高貴の御方にのみ限られた祝儀で、臣下の者には決しないとだと貞丈雜記に記してあります。

▲犬張子

赤兒の枕もとに犬張子を置くことは婦人養草に「犬張子は犬の形したる筥なり、產屋に用ゐる器なり產衣をまづ此筥に着せ初て其のち子に着する、筥のうちへは守り札または產屋にて用ゐる白粉疊紙または眉掃きなどを入るなり、こは大和奈良の法華寺と云ふ尼

寺より天下へ出すものなり」と記し、其効能については世話盡しと云ふ書に『禁中に獅子狛犬を飾らるゝは威儀のためのみにあらず、もと邪を避ける義をとり象ねては几帳簾などの鎮めにもなされたるなり、犬張子もこれらの事によりたるものなり」とあります。猶ほ赤兒の寢て、、、おびゆるを犬の子と唱へて禁厭ふのも、赤兒の額に犬の字を書くのも共に邪を避ける法だと同書にあります。

▲五十日百日の祝ひ

子の生れて五十日めを五十日の祝ひと云ひ、百日めを百日の祝ひと云ふことは古くからあつたことで玉勝間に東鑑の實朝の儀式を擧げ『古へは五十日百日と別々に祝ひしものを、此頃は雙方あはせて百十日に祝ふことゝなれり』とあり、猶ほ山槐記にも此とが載せてあります。又宮參りの日の祝ひにとて强飯を配るとは、其むかしは吉事には白の强飯、凶事に赤の强飯を配つたものですが、今では吉凶ともに赤い强飯ばかり配るやうなりました餘事ではありますが赤飯を配るときに南天の葉を添へ、又は鏡の裏に是の模樣をつけますのは、南天は難轉に音が通ずるので用ゐるのださうです。

▲産婦の養生

産婦の心得については恰も妊婦のそれのやうに澤山の個條があります、先づ産婦を横に寢せることは榮華物語に『女御（後朱雀帝の妃嬉子）には程もなく平にせさせ給へければ、かきふせ奉るほどに』とあり、此ほか狹衣物語、うつぼ物語にも此ことあります、當時は分娩がすむと産婦は横になる習慣があつたものと見えます。飲食物の毒斷ちについては七夜のすまぬうちは生魚を食ては惡い、章魚を食うと血を荒すなど十數ケ條あります、動作にあつては泣き悲しみ驚き恐れるやうなことをするな、早く髮を洗ひ早く湯に入るな、早く爪をきるな七夜のうちに楊枝を遣ひ齒の根をほせるな等これも中々少くはありませむ、猶ほ此他に乳の吟味、乳母のこと乳の子の製造法、赤兒に飲ませるま、くりのこと記すべきものもありますが餘り管々しくなるので、今は總て略します。

（をはり）

秋の美──十月之卷

▲菊──淵明は東籬にこのものを植えて、餘りの歳を樂めりとや。おほやけの秋の御園に、重陽の宴、そもやいつの世か、かゝる過報に逢ひけん。黃菊白菊其ほかの名はなくもがな、洵に此花の美はしさは、品高く香優りて、幾千代を壽ぐ色で、鉢に參差の眺め、簪に一輪の誇りも、榮あるものに定まりける。

▲逍遙──さまよひは秋に限らねども、天高く氣澄みたる野のあたり、裳に露の小草を拂いて、名もなき花の色を賞づるも、書窓に倦みし草臥を慰すべし。富士に斑の雪をとめて、筑波に紫の雲を見るも、いかでか秋に勝すものあらんや。

▲蕎麥の花──ひとつ家のかしこ顔なり蕎麥の花、淋しき花の一つなれど、山際かけて方一二里、眞白の帛を敷きたるは、有繋に風情なしと云はんや、さらでも小雨に憂を啣ちて、風にも脆き花の臺の、實のなる程を苅りとられては、木曾に行脚の馳走かしこし。

▲ローンテニス──我邦の打毬に似たり。塲の中央に網張り渡して、ラッケットの手振やさしう、彼方此方へ毬を投ぐるも、菊の香りに醉ふ庭の、またなき少女の慰みならずや。男一人も打まぢりて、打ちたる毬の塲を外れたる、けやけき笑の種とこそなれ。

▲野分──生繁る萱吹き分くる野分の風よ、いつ凩とならんとやする。凋がれし萩に桔梗に吹いて、しどろもどろの秩埒なし。低く吹けば野分とこそ。高く荒るれば木枯の、いづれ詫しきものながら、吹かで歇みにし秋もなければ!

▲嘘寒──寐もやらで言繙けば、月の雫の露と凝るかも。うそ寒ければ想ひ出づべし。行李の底より一枚の衣を探れば、母の情けも身に餘りて、着ざるに頰の熱さも覺へん、故鄕さへも徐ろ懐かし。

▲繪畫展覽會──春と秋との差別こそあれ、いづれ劣らぬ花紅葉の、畫巧み深き山河の眺め、さては花鳥のとりどりに、紅紫さながら錦に擬はん。觀てわが筆の材ともなさば、畫神御身の上にも宿りて、やがては

こゝに名を連ねべし。

▲栗――栗も今出盛りなり、丹波栗の大きなると、柴栗の小さきと、いづれは毬の中より出でゝ、鍋に入るべき身ならずや。栗飯の栗を拾ひ、橘飩の卓袱を貶すも、晩れ近く秋の遺物と知るべし。栗紫に、柿紅の、秋に二つの色を競へば、山に隠れし人の住居も、これに訪ひよる客もありなん。

▲鳴子――秋もはや水に落たる鳴子かな。田守の役もこゝに了れば、引きたる縄も緩み果てゝ、鳴子も今は鳴らで落ちたり。垂穂もやがて苅取られなば、ありて用なき其身ながら、水に落ちたるまゝは果敢なし。誰ぞ取上げてまた來ん年の、役に立てんと救はずや、功勳こそあれ、幸なきものを。

▲詩集――詩は臈たけき春よりも、淋しき秋に生るるなり。里の小川に露草の愛らしきも、山に妻戀ふ鹿の啼音も、雲の絶間の日の色も、さては釣瓶に蜻蛉の絶れるも、いかでか詩の料たらざらん。かばかり深き詩神の恵みに、生れ出にし詩集を覩よ、想ひは長き夜を守りて、學びの憂さも暫時世の外。

▲柿――小さき流れの道に沿ふて、蓆に風を防ぎし家の、煙詑しく立ちのびれども、瀬戸に實りし柿の美くし。幹にもたせし階子の棧の、一つは缺けて見ゆるなど、都にはなき富ならずや。枝のまゝなる甘柿の、遙々母の文に添へて、こゝに故郷を想へとや、油套包の着きけん時、剝く手のいかに震ふべき、露は情けの身に餘るまで。

▲寫眞――小さきカメラを攜へて野川を渉獵るも此頃ならん。やさしき雲のたゝずまひ、淋しき水のいくうねり、破れし案山子を右にして、赤き鳥居を左に覗けば、遠き犢もレンズに入れて、秋は手札の中に入るべし、ピントに外れし蝶を追ふも、興は有繋に盡きじとこそ。

▲雁――雁來紅の咲くは雁來る兆とや、家の軒端に巣を構へて、兒を育くみし燕は今、海の彼方に歸り去りて、來るや雁の小田游びたり。底澄み渡る秋の水に、暇なき足搔き任さんとは、門の雁一とせぶりに並びけり、果して去年の雁なるべくや。

▲新米――新らしき米に草の實の匂ひありとや。白きは碧のそれにも似て、うまきは栗の味にも優らん、客に馳走のことし米に、豐けき年を語れとぞ。

（雲　塘）

短歌

(天) 虫　　足尾　森照野

秋の野におのがさまぐ〵なく虫も心は同じ秋をなくらむ

評。鳴く虫のと言はずして鳴く虫もと言ふ、虫より外に秋を泣くものあること知るべし。

又同じ人の名所秋夕の歌に、

さびしさのはてこそ知られ夕つく日尾花に沈む武藏野の原。

(地) 夏期歸郷述懐　　淺草　春江

離るすべこそ知られ故郷を忘れぬばかり家土產にせむ

評。つゝましき心見えて奥床しく覺ゆ。ひとり言葉の花のみならず。

(人) 虫　　神戸女學院　脇屋富子

うき秋の嵯峨野の奥をたづぬれば涙さそはぬ虫の音もなし

評。下句に於て、特に用詞の巧妙を見る。

秀逸

〇〇〇薄　　越後　坪井わか子

花すゝき影をうつして里川の水にも秋の色は見えけり

水に秋の色を見る所、特に面白し。

同じ人の他の歌に、

うきにつけ嬉しきにつけて思ふかな生のみ親の世にしまさばと。(をりにふれて)

もち月のかくることなき我世ぞとおもふや缺くるはじめなるらむ。(満月)

住みすてし主の心もしら萩の誰見よとてか花のさくらむ。(廢園萩)

〇〇〇雨の日友と別れて　　紀伊　川俣種子

さらぬだに別れの袖の露けきをなをしぼれとや秋雨の降る

なほしぼれとやの一句ありて、全篇活く。

〇〇〇立秋　　河内　田中八須

捲すだれに昨日の夏をのこしおきて桐の一葉に秋立ちにけり

下句は人皆言ひ得べし。上句は則ち人の最も道破し難しとする所。

〇〇〇萩　　大阪　やす子

さをしかのこゑぞかなしきま萩原露や亂るゝ花やこぼるゝ

下句殊に妙。

〇〇〇萩　　美濃　山田愛子

待ちまちし庭のしら萩花咲きぬ風な吹きそね露ながら見む

古調。

同じ人の霧を詠みたる歌、

朝霧のたえぐ〵殘る畔路山杉生のおくにはとりの鳴く

、〇〇逸題　　岩代　岸野常子

とくこよとみ文にこめしもみぢ葉のあかきこゝろぞまづは嬉しき

、〇〇紅葉　　兵庫　柳田白百合子

山紅葉谷紅葉して家村は水清き處月よき處可羨矣。

、○○なりにふれ　　越後　萩野てる子

あまつ少女月のかつらにそでふれてこぼれしつゆか白き露の花

、○○初秋萩　　京都　四辻まさ子

またの日にゆつりてけふは手折らじな秋またあさき野路のいと萩

、○○失題　　愛知　ますみ

ゆの山は朝霧ふかく立ちこめて小暗き谷に雉子なくなり

、○○むし　　浦和　池田たつ子

おく露にやどれる月の影すみて蟲の音しけし淺ちふのやど

、○○秋の風　　備後　立神峯子

身に泌むもなか〳〵うれし秋風の吹けばぞ草の花となりぬる

、○○折にふれて　　芝浦　しづ

風あまりあけゆく月をながめては背子まつ蟲とともになくなり

、○○題知らず　　愛知　ますみ

豐かなる秋にはあれど何となく哀れもよほす雨の夕ぐれ

能く人情を歌へるもの。

、○○立秋　　岡山　田上濱子

萩の葉の露にきかばや立秋は何れの山や河や越え來し

、○○虹　　和歌山　森紫尾

天の男神地の姫こひてあもりますみちうつくしき虹のきざ橋

着想極めて奇、唯道美くしきの一語再考を待つ。

、○○琴　　熊本　安田文子

佗人のわびてかなつる妻琴はこゝろのうさやかきはらふらむ

着想可見。

、○○煩悶　　八王子　大久保ともみ

思はじな思ひはせじと思ふこそ思ふあまりの思ひなりけり。

、○○失題　　伊賀　服部かつ子

夜もすからこゑさま〳〵になく蟲の涙や今朝の露とおきけん

亦面白し。

、○○露　　青森　智惠子

月姫の涙や落ちしさゝの葉に夜風涼しく露ゆらぐなり

前者とほゞ同じき着想法を用ゆ。

佳調

立秋　　深川　小池富奕子

手にならす扇の風のすゞしさにあき立つ空のちかきをぞしる

○　　下谷　塩田幸子

雲の上をこぎ行く舟と見えぬるは富士をひたせる田子のうら波

南米遊草　　本郷　佐藤磯子

日登れど朝霧とわに消えがたみアマゾナ河口たゞ夢に似たる

○　　下谷　耕露子

にはなつみながるゝ面に月さして蟲の音ながら萩の花ちる

○　　越前　島萬壽子

誰ならん枝折戸くゞるけはひして月あはき夜を鈴のさゝなる

墓前に立ちて　　奈良　奥中かれ

月冴えて夜中も悲しき蟲の音を絶えずや草の陰に聞くらむ

○　　大阪　田中常子

黄昏を秋の雨ふるおばしまにびんの亂れし姫君たゝす

○　越後　しな子

沖遠くいそやま白く波高しまさご路一里秋の夜の月

夕顏　肥前　萩の舍登子

かやり火のけむりしづかにたそがれて、夕顏白し、破垣のもと。

月前の戀　姫路　船戸幽規子

望の夜の月に立つ影恥つかしく我こしかたの跡おもふかな

秋　神奈川　岡野靜子

立ならふ小さき地藏の一人倒れたたれしまゝに秋風ふくも

○　牛込　平塚白百合

櫓やみてかへる入江の船まどに月かたぶきて千鳥なきよる

秋夕　丹波　ふさ子

朝かほのしほれはてたる垣の根に夕凉しき松むしのなく

秋興　京橋　高宮安子

しらくものところさばめず秋の野の花をわけつゝゆくこゝろかな

秋萩　牛込　影山たみ子

ゆく水に萩の花ちる影みえて夕月さむし玉川の里

山上紅葉　兵庫　木村俊子

さぬの織る賤機山の頂ももみぢはかりは錦なりけり

○　神戸　今西操子

忘れてはまたもかこつようたかたの運命なき身の末や如何にと

○　石見　宮内はる子

あえき／＼のほりし峰の古寺に浮世の外の月を見るかな

擣衣　上畑　宮倉歌子

誰か爲にうつらん夜半のから衣きくさへさむき秋の寐さめに

秋碪　福知山　佐藤けい子

風もなく萩のかれ葉のはら／＼とおつるもさびし碪のゆふ暮

○　大阪　琴の音

潮あみてしばしやすらふ松が根に磯の香こもる風かよひくる

野萩　廣島　久子

冴え渡る月に淸しき色見せて野寺がやどに萩の花さく

○　大和　中上まさ

柿の實のしぶきあまきもおしなべて同じ姿によそふ世の中

夕月夜　越後　菊子

夕月夜蝙蝠ひくゝとびかひて門べの柳影おぼろなり

母の枕邊にさもらひて　名古屋　櫻木はな子

父はゆき母はやみふすこの夕べ笛の音ほそき深草の宿

秋月　甲斐　矢野千代

夕でりに空は隈なくうちはれて木の葉もれいづ秋の夜の月

夕ぐれ飾磨津にて　姫路　濱田岱憙子

日の御神神の火熨斗にいのしけむ眞珠色なし澄む瀬戸の海

○　大阪　山崎京子

君よ君よ幸くとばかりあとはたゞせきとめかぬる袖時雨かな

○　芝　新野露枝

花よりも哀れは深し谷かげの其處はつとなくもみぢするころ

折にふれて　周防　八千代

なく蟲の聲もあわれに身にしみてなき父しのぶ科は來にけり

初秋夕　伊豫　渡邊梅子

珞そめし桐の梢に秋の色ほのかにもるゝ三日月の影

したしき友のもとに　信濃　なでしこ

情こもる君の御歌を人しれずそと誦し見ぬ月淸きよに

秋の泊　　靜岡　佐藤みわ子
黄昏れて秋を淋しき旅の宿夕ぐれの鐘に白萩の散る

夜深蟲音繁　　四谷　島田愛子
さらぬだに思出多き秋の夜のねざめにさゆる蟲のこゑ〴〵

逸題　　紀伊　糸川みち
さをしかのなくねはるかにあし引の山川づゝみ萩の花さく

○　　三河　神谷あき江
逝きし子によく似しよ子と呼び入れて花うり少女の物語りきく

萩の花をみて　　和歌　植木梅子
花もよし葉におく露もまたおかし玉ゆらながら手折りてしかな

利根の水　　上野　佐藤露子
菅笠を案山子の袖にそとかけて旅人いこう畦小途かな

折にふれて　　備前　駒井友子
この萩のまつりや如何ににぎはむたるゝ稲穂にみのりしられて

○　　房州　平井靜子
さなきだにものかなしきを秋の夜の旅のねや戸に蟲のこゑ〴〵

題知らず　　岡山　みつ子
待ちわびし吾背かへらず小夜ふけてかたむく軒にひとり月みる

行路萩　　名古屋　みさほ
一枝はかざして行かん萩の花よしや袂は露にぬるゝとも

秋旅　　芝　吉田小萬代
花すゝきみだるゝ風を身にうけて山路越えゆく旅衣かな

○　　陸前　山形さす子
城跡の一もと松に月落ちてみづなき濠に狐しばなく

失題　　下總　戸田たか
露になく蟲の音清き萩月夜なき人戀ふる秋風の家

鹿　　和歌山　植木梅子
野分せし荒野にひとり長き夜を明しかねてや鹿のなくらむ

題しらず　　はる子
よもすがら病む夫をまもる窓やかた小雨そゝぎてきり〴〵すなく

○　　金澤　佐野元子
よし誰を松帆の浦の楫の音も絶へてさびしき秋の夕暮

逸題　　安藝　堂西幸子
今よりは衣うつらんあしのやの浦風寒し秋の夕ぐれ

○　　甲斐　露子
草も木もねむるまよなか月すみて破窓にちかき雁のひとこゑ

○　　大阪　田中はる
しろたへのさてふきかへす秋風のいとゞ身に染むけふの夕ぐれ

○　　山城　古川かつ
朝毎に咲く朝顔の數へりてかきね淋しく秋風ぞふく

深夜月　　堺市　綠子
見る文の林の奥もとめぬまに月ははやくもかたぶきにけり

秋雨　　三重　金子伊登子
雲まよひそことも分かず雁なきて雨にくれゆく川なちの里

故郷　　兵庫　秋山靜子
故郷は散るもみじ葉にうづもれて軒のしのぶに秋風ぞ吹く

○　　駿河　喜代子
月かげにしらべさやけきつま琴の音にあわすらん松蟲のなく

○　　北海道　櫻てる
うつきぬのたへまに通うつま琴はたがつれ〴〵の調なるらん

野邊の秋草　　德島　しげ子
掃くこゝ今を盛りとさきにけりおく露しげき八千草の花

蟲　　前橋　宮内りき子
蟲の音に去年の戰のしのばるゝ滿洲の野の秋の夕ぐれ

月前露　　鳥取　紅　梅
更けわたる月影清み八千草の花とも見ゆる露のしら玉

秋風　　信濃　尾　花
花散りし春も昨日と思ふ間に籬の萩吹く風ぞ身にしむ

周防　長尾ちよ
のも山もたゞ時の間にはせ過る車のたびの面白きかな

夜兄を思ひて　　小樽　門倉優子
風寒ふ秋は來にけり我が兄は今宵いづこに月や見るらん

失題　　麻布　澄　江
村雨のたえまにきゝぬはるかなる雲井をわたる五位さぎの聲

秋　　但馬　白　子
露ふかき萩の野道を分け行けばにほひゆかしき秋萩の花

福井　井田美子
西の空夕雲たちぬ紫の御衣まとし女人の樣に

○　　三重　佐々木らく子
やせ馬に薪負はせて歸り行く人かげ寒し秋のやま道

擬作垣　　丹波　房子
花の野に入らまほしけとえも入らす尾花𠀋の垣をなせれば

豐年　　岩代　菅野和子
むら鳥の足種にあきて鳴子鬼くなりも治まるみ代の豐けき

深夜燈　　丸龜　吉田ます子
さよ更てれやの灯火ほそ〳〵とつみなき子らのねがほ照せり

鹿　　東京　仁　子
峰の尾か嶺の尾山か小夜ふかくなくさをしかの今の一聲

東京　戸狩露子
蟲籠に野菊をそへて姉君と秋の雨夜を歌に更かしぬ

失題　　尾張　井口とよ子
糸萩の花の末吹く秋風にとまりかねてか又てふのとぶ

越前　中西靜枝
澄みわたる池のおもわに二つ三つ家鴨うかびて日は暮れむとす

橫濱　大庭せい子
亡き母と語りし夜半の夢さめて枕邊近うこほろぎのなく

白百合　　水戸　榊　はる子
なき人の魂のゆくへかあけがたの露に眠れる白百合の花

月　　奈良　保田　照
手にむすぶ板井の淸水がげすみて凉しくやどる夏の夜の月

鹿聲幽　　東京　長崎まさ子
峰の尾か嶺の尾山か小夜ふかくなくさをしかの今の一聲

なでしこ　　福井　下里露子
昨日まで蕾みて見えり撫子の今朝白露に咲けるうれしさ

▲前號「小說」の作者　氣賀澄子孃の住所至急御報道あれ

世界女新聞

◎巴里に於ける「茶の湯」

日本茶即ち綠茶の苦いのは、巴里人が常に驚く所ですどうして此んな苦い、丸で藥のやうな者を、日本人が好むので有らうと、巴里人は云つて居ます、併し日本へ行つて來た人の話を聞き、又日本旅行記など讀んだりして、日本に「茶の湯」と云ふ儀式があつて、優美なる日本風俗の一つであると云ふ事は、人の知り居る所です、そして其儀式を見たい者だとは、よく人の云ふ所です、

巴里駐剳前公使本野一郎氏は先般聖ペテルブルグへ轉任を命せられて出立されました、其出立前に、珍らしい此「茶の湯」の儀式を擧行して物好きな巴里人を招待して見せました、參列の一人、ゴオチエー婦人と云ふ方が、そこで「茶の湯」の記と云ふ一文を物して、「フエミオ」記者に與へました。

本野さんの「茶の湯」の儀式は、其の御住ひになつて居た公使館の一室で催ふされましたので、かの三越呉服店で、國賓コンノート殿下が御覽に成つた樣な、正式の茶室に正式の道具を備へた者ではありません、併し椅子に腰かけて茶を立てゝ、起立して客にすゝめるテーブル式「茶の湯」は、また一種の趣きでしたらう。

ゴオチエー夫人の「茶の湯」の記に曰く、本野公使は日本固有の服裝で居られた、公使館武官久松伯爵もまた日本服で、列席の日本婦人の方々も又國風の服裝と化粧とをして居られた、公使代理たる田付書記官は、儀式の始まる以前に、まづ其儀式の由來を説明された「抑も茶の湯の儀式たるや……」など縷々と述べられた説明書朗讀終るや、本野夫人はやをら室の戸を開けて入り來られて、靜肅無言の座中に席を占められて、「今晩は—」と挨拶された、夫人は舊幕時代の大名の奥方のやうに長い美しい髮を兩方に分けて垂れて居られるそして身には柔にして光澤ある長き衣服を、帶なしに

羽織つて居られる、茶の道具を取扱ふに、すべて兩手を以てして、そして自身の體より餘程離して持たれるのです、云々「茶の湯の儀式すむや葡萄酒とシャンパニウとは續いて饗應されて、皆々歡を盡して歸られたのです。

◎西太后と雜誌社の贊助員

パリ發行「ジユ、セ、トウ」雜誌の通信員は先般北京に入つて、前駐佛支那公使（祐庚氏か）の令孃の紹介を以て、西太后陛下に謁見するの榮を得ました。

太后陛下は、文學其他の事に付き種々の御談話が有りまして、通信員の御願によつて、其雜誌の贊助員たる事を、御許可になりました、又御直筆の文字を貰ひました。

太后陛下は通信員に向つて「そなたは幾人の兒どもを持つて居るか」と御問ひになりました時に通信員が有のまゝ「私は獨身者で御坐います」と答へましたら非常に驚かれました。

通信員が歐洲にも米國にも女權擴張主義を持つ人の多い事を申上げました時に、陛下は嘆息して「黄色人種には、未それ程進歩した考へを持つて居る者はない」と云はれました、又陛下は「女權擴張を奬勵する手始めとして、まづ母たる者に、其娘どもの足を小さくする事を禁ずる事にしたと云はれました。

◎支那の女學生

支那女學生について「マダム、エ、ムシウ」雜誌は「此の二年以來支那の女學生は東京の大學を卒業して歸つて來ます、彼等は東京で稽古した所の自轉車を以て市中を乘り廻します、支那女學生の中にはだん／＼之の例に傚ふ者が出來て來ます。」曰く「男學生と同じく、支那女學生の東京から歸つて來た者は、皆改革派に加はつて、文章を以て、又演説を以て、公然政府を攻擊します。」

◎佛國の鳩山夫人

平民社會に於ては、女子が自身にて參政權を得たいと騷ぎ出して、種々の團體を作つて居ます、然るに貴族社會に於ては女子が其夫に參政權を得させたいと運動します、其傾向の異なる所、誠に面白く感ぜられます。

佛國の鳩山夫人レーユ男爵夫人は、夫たる男爵の撰

擧される樣に必死の運動をした方ですが、後の選擧には其令息の爲めに大運動を試みました、此時男爵夫人は選擧人の家々を一々訪問する事の煩はしい事を避けて、新方法を工面しました、それは選擧人の細君たちを會合して貰つて、其場に於て依賴の相談をしたのです。

今一人熱心な選擧運動者はマクマホン侯爵夫人です、夫人は佛國愛國婦人會長です、夫人の主義は王國黨に屬して、今の政府（社會黨政府）とは反對です、そして王國黨の議員、カトリック宗の議員を出すために佛國の南部の都會を夫人は殘らず遊說して來ました、レーユ男爵夫人が鳩山夫人なら、これは差當り佛國の奥村五百子で御坐いませう。

英國のワルウイック伯爵夫人は是は佛國の貴族とは趣を異にして居ますが選擧運動の爲めに奔走して街上演說などする所はやはり似て居ます。

◎英國婦人の運動

婦人參政權運動のため英國婦人數十名總理大臣邸に押寄せて二人警察へ拘引されました。

「フエミナ」雜誌は之の出來事を記して曰「本年三月九日は英國女權主義者の紀念日となりました、其日同主義の代表者總計三十人はダウニング街十番地なる總理大臣バンナアーマン氏の邸前に集り、大臣に面會して女權擴張の請願をしたいと申込んだのです、所で官吏めいた一人が出て來て、「此所では其取扱を致し兼ねるのです」と云つて退散を求めました、諸婦人容易に退散を肯んぜず、のみならず持つて居る傘の柄を以て門の板をトントンつゝき始め、硝子板一枚は打ち毀されました、そこで最前より、若しもの用意で待つて居た警官數人現はれ出て、其中の首領と思はるゝミルラー女史を拘引しました、所が今一人ケンニー孃と名けられたるもの、傍にある車の上に立つて大きな聲を以て悲壯慷慨なる演說をしました、警官は此能辯家をも警察へ連れて行きました、其他ドラムモン婦人と都合三人拘引されましたので、諸婦人は今は叶はじと周章てゝ逃げ去りました、暫くあつて、警察署長と總理大臣と電話で掛合ありまして、總理大臣は告訴を引き下げると云ひまして、三人の運動婦人は警察から放免になりました。

◎歐米の婦人記者

ハシエット氏の調査に依ば近時婦人記者の數は佛國に於て漸次增加して來た、併ら他の米獨英等の諸國には及ばない、獨逸では昨年中に於て四百人から一躍して一千二百人まで殖えた、英國では凡そ六百人、米國では最も多く二千一百九十三人である。

◎女子の帽子問題

女子の帽子を戴いて居るのを正式としてあるは歐米の風である、米國桑港で日本人が天長節の奉祝會を行つた時に一日本婦人は幹事が脱帽してもらひたいと請求したのを拒絶して、遂に中途退出したと云ふ珍談があつた彼の女の脱帽を承知しなかつた理由は「帽子を戴いて居る事は神に對しても不敬ではない」と云ふのであつた。

「エコー、ド、パリ」新聞は芝居見物中の婦人の帽子について廣く投票を募つた、それは、一、從前の通り大きな帽子を冠つて見物して居てもよいか、二、小さな帽子をかぶる事に改めたものか、三、全く芝居の中では帽子を禁ずる事にしやうかと云ふのである、六月二日投票の結果を發表した、大帽說、一六五六、小帽說五一七六七、禁止說五八三一九、禁止說勝利を得た、各劇場は此結果を遵奉して、自今、各婦人方に帽子をぬいでもらふ事にした。

◎シソワト王と一令孃

カンボヂヤ王シソワト陛下(?)は巴里でフアリエール大統領の邸に招かれ食卓に就て、其傍には內閣大臣の令孃が席に着いて居る王之に向つて云はれるやう「令孃よ、拙者は歐風の食卓に始めて着くのです、此の小刀と熊手とはどうして使ひませうか、どうか御面倒乍ら御願申ます、敎へてください、」令孃暫くもぢもぢ、「何、たゞ私のまねをなさいナ」王の手つきが此席の見物であつた。

◎シソワト王妃の踊り

巴里へシソワト王に伴はれた數十人の踊子は宮妓と云ふやうな性質を帶びて居るさうだ、王は巴里へ伴て來るにはと思つてカンボヂヤ國中の美妓を撰み集めたけれども、どうも思ふやうに多く見出されない、止むを得ず最愛の諸妃を數人踊子の中に加へてつれて來たのです。

撰みに撰だ美人、其顏はいづれも銅貨の色して、髮は五分刈か一寸刈か知らぬが散髮あたまで、下に猿袴をはいて居るやうすは實に妙であつた、巴里人の愛嬌のよさ、踊子どもが出發の際には其門口に群集して「左

樣なら、無事で旅を」など口々に呼んで居た、然るに同く側に見て居た日本人なる我等を「ジヤポチー」と呼びすてにするはどう云ふ考かしら。

◎シツワト王の奇書巴里人を驚かす

シツワト王は規則的と云ふ者が大嫌だ、何所へ又は何人を訪問するなど、前に決めてあつても、其出立より一分間前にならねば慥かと云はれない、一分間内にも心が數度變る事があるからだとか。

夜でも夜中でも食たい時には食ふ、それもお茶漬では濟まされず、時としては當節最も品不足なるラングスト蝦などを夜中に命令する事があるので、料理人が辭職を願出た事十數度に及んだ。

巴里で宿泊した區内の女子小學校へ金四十圓寄附、七月十四日の祭日の爲めに花提燈を買ふ費用として同區内若連中へ金四十圓寄附されたり。

◎女王殿下の御店

巴里市サン、ロツシユ通三番地に此程凡二間間口位の小い店を新に開いた者がある店の看板にはオー、ウヴラージユ、カラブレー（カラブル人の製作品販賣）と書いてある外には何も書てない、店の中を窺いて見ると帽子飾、襟飾、編物、縫箔物等婦人及び小供用の裝飾品を並べてある、そして瘦形の品格ある婦人と外に一二人賣子と思はれるが客の來るのを待つて居る、一見した所では何も人の目を引くべき物はないけれども氣をつけて見れば何か譯の有さうな樣子と知つたるカラブルとは伊太利ナポリ地方の小國の名である。

此店の主人即ち瘦形の婦人を何者と尋ぬれば伊太利ナポリ（即ちナープル）國の女王、シシリー島國の女王プレザンス及びパルムの公爵夫人、パヴイエールの大公爵夫人、御名をマリア、ソフイアと申された方であるのです。

今は四五十年の昔となつた、ナポリ國は現伊太利國の爲に合併されて女王殿下はそれ以來長く貶謫の御身になつて今日までに至つたのです、然るに一年前に舊領なるカラブル國は元來有名なるヴエスヴラス火山の近くにある事とて一大震災に遇ひ住民の多くは衣食に

窮する場合に迫つたので伊太利政府は出來るだけ救恤に力を盡したけれども住民の不幸は未だ全く辭せられないのです。

前女王殿下は舊領國住民の困難して居るのを救ふ爲に同地に一の女工場を設立して前記の裝飾品を製造させ、また其製品を賣捌く爲めには巴里市が最も適當である事を御考になつて、さては前記の店を御開きになつて、御自身に店頭に立つて萬事御世話をなされて居るのです。

物ずきな巴里人が此話を聞いてから、此店もだん〳〵客足がふえて來ると云ふ事です。

◎一千萬圓持參の花嫁

驚く勿れ獨逸の大砲王クルップ氏の嬢だもの、されど其一千萬圓の大金と花のやうな美貌を持つベルトクルップ 嬢を貰ふ果報ものは抑も何人であらうか、それは外 交 官だ、獨逸政府からローマ法皇政府へ派遣されて居る書 記 官其名をボーレン、ハルバックと呼ばれる人だ。

未來のボーレンハルバック婦人の妹バーバラ、クルップ嬢も同じく他へ緣付く人に決つて居る、然るにクルップ氏臨 終の時に認めた遺書に依て遺産の殆んど全部が姉 嬢なるベルト嬢に與へられる事になつて居るので、不幸なるバーバラ嬢の其聟君の名さへ世人は之を傳へない。

◎露國の刺客 女學生

女學生スピリトウナ嬢は知事を暗殺したる爲め死刑に處せられる所を各國婦人たちの大運 動によつて特赦されてシベリヤへ島流し

七月五日嬢がモスコー停車場で汽車に乘せられたる時プラットフォームに居た一群の人々は「左樣なら、元氣でおいで」と叫んだ、嬢は「左樣なら皆さん、又すぐに歸つて來ますよ」

◎アルプス登山の先登第一(二米國婦人)

今年のアルプス登山第一はルイサ、マーレー嬢とローダ、ハインドレー嬢と共に英國の若い嫁である、二婦人は凡そ四千二百メートルありリンプシスコール峯を越えた。

◎男女水中競爭

五月十五日、セーヌ川(巴里市中を貫流する)で泳ぎの競爭があつた、其距離十一キロメートル、六百メートル(二里二十九町二十三間)で第一着は三時六分二秒で泳いだブゴアンと云ふ佛人第六着 迄男子であつた、第七着が濠 洲婦人ケルマン嬢が三時五十九分三十秒でついた、第十着が英婦人ハーセーマー嬢四時五十八分間。

◎勇敢なる女教師、十字架に祟らる

佛國ブルタニウ地方の一村落に奉職して居る小學女教師ローラン嬢と云ふは四年間同校に勤務怠りなく、村民の信用も厚くて生徒も八十人以内であつたのが百二十人に增加した教場狹くなつたに就て增築工

事に取かゝつたのであつた。

然るに新しく出來た教員室へ基督の十字架にかけられた額を懸ける事に就て大衝突が村民と孃との間に起つた。村民は例の如く其額を懸ればならぬと主張し孃はそれは文部省令違反であると拒絶しこの衝突が無事に治まらず村民はそれから申合せて一切の食料品を孃に賣らないと決めた孃は家主から少々づゝ分けてもらつて食べて居た間に其家の物置を村民が破壞して家主をおどかした。孃はとても居られずと諦めて辭して此村を去つた。

此事件につき其筋で調査すると、村長が村村民の教唆者であると云ふ事だ。文部省令と云ふは千九百三年の省令に新設の教室等には宗教的裝置をなすべからずとあるうれである。

◎免狀無効の女教師

ベルジユム國で教員免許を受けた女教師、佛人に嫁して佛國人となつて三人の兒を設けた後に不幸其夫がなくなつた、彼女は其身と其三兒とを養ふ爲めに昔執つた教鞭を再び執つて小學校へ勤務したいと云つて佛國内に於ける小學校教員の免狀下附を願出た。

佛國の規則では他國人で教師の免狀を持つて居る者には同等の免狀を認定によつて下附する事になつて居る。然るに彼女はベルジユム國で免狀を得たけれども今日は他國人でなく佛國人である故に法律適用の範圍内でないとて文部省は之を拒絕した。

◎羅馬法王と其姉妹

今日の羅馬法皇は世人の知つて居られる通り、佛人がピオ Pio 十世と呼ぶ所の、ピウス Pius 十世陛下です。もと伊太利のヴエニスの僧正で其名はジウセツプ、サルト Giuseppe Sarto と申しました。千八百三十五年即ち七十二年前に生れ、千九百三年即ち四年前に前法皇レオ十三世の崩御に次いで立たれたのです。

ピオ十世は二人の女兄弟を持て居ます。共に獨身で居ます。兄君が法皇と成つて羅馬に來る事になつたに付て、二人の姉妹も共に羅馬に來ました。今日二姉妹の住んで居られる所は羅馬の市街の場末の小狹い通で他に一人の尼僧と三人で、或る家の二階に世帶(?)を持つて居ます。其料理及び室内の掃除整頓は三人の獨身女の方々が手づから致して、決して人を雇ひません。

マリア、サルト孃曰く「彼(法皇)はスープを大層好みます。そしてスープを取つた肉を好んで食べます。で時々こしらへて食べさせました」。これが即ち法皇の妹とです。

初旅の寢覺かちなる小夜中に
聞くもさびしき新雨の音　　網町　無名女

村雲のかゝるべしとは知りながら
星の位を捨てぬ貴とさ　　絲町　公子

塵世哲學

市の人

△過去は美なり＝都を去つて都戀しく、田舍を去つて田舍の戀しきは人情の自然にて、昔の愛人の忘られ難き原理も這理にあり。

△眞情を寄てる古歌＝「永らへばまた此頃や偲ばれん憂しと見し世ぞ今は戀しき」酸いも甘いも嘗盡したる人ならでは此心意氣は歌はれまじ。

△夢の苦樂＝失戀とは金を拾つた夢の醒めたるものぞかし。

△樂器と時代思潮＝三味線と島田髷、ヷァ井オリンと廂髮、前者は十九世紀を説明し、後者は二十世紀を代表す、過渡時代とは即ち島田娘がヷァ井オリンを彈ずるが如きもの也。

△理想の俗化　娘の聲は花實を呼ぶに適し、下女の聲は豆腐屋を呼ぶに適す。

△愛の世＝愛なき家庭は火のなき暖爐と齊しくそれによつて溫味を求めんとするは寧ろ無理なる注文と謂ふべし。

△人の兩面＝人の家屋にはお座敷もあれば便所もあり、人の心にも亦お座敷と便所との設備なかる可からず。

△近松式の女性＝情はモルヒ子の如く、之を適用すれば人命を救ひ得れど、若し度に過ぐれば却て人を殺すの劑となる、近松の描ける女性の多くは後者に屬せずや。

△單調乎複雜乎＝時計の針は絶えず同一の圓を廻轉し、地球は四期を違へずして太陽系を繞るにすぎざれど、其處に永遠の活動あり其處に無限の精力あり、人生亦た這の單調の間に眞意義存り。

△森嚴なる自覺＝人の最も眞面目なるは「死」の問題に想到したる時にあり。

△推理と直覺と＝科學者が百年頭腦を痛むるも尙ほ解し得ざる難問を詩人は一瞬時にして之を直覺す。

△科學の進歩＝高等動物の腦漿を下等動物に移注して智力を增進せしめ得るは、最近動物學者の發見せしところ也、此理より推せば怜悧者が馬鹿者の犧牲にならればならぬ時代も遠からざるべし。

△無常迅速＝我等如何に靑春の氣を負ふと雖も、五十年の後を豫想すれば亦た舊式のお老爺さんとして排斥せらるゝや必せり。

△石流れ木葉沈む＝善意の惡人あり、惡意の善人あり、前者は牢獄に呻吟し、後者は高樓に横臥す。

△都合よき諺＝「背に腹は換へられぬ」とは女子の貞操を辯護する爲に設けられし言葉なり、然るが故に常盤御前は今でも賢夫人として喝采さるゝ也。

△公開的秘密＝「これは極秘密の事なれど貴下だからお噺します」とは到る處、凡ての人に秘密として噺さるゝ秘密なり。

△家庭の秘密＝秘密の鍵の所有者は警官にあらず、新聞記者にあらず、女結髮なり。



女學生の富士登山（つゞき）

在明石　藤堂梅軒

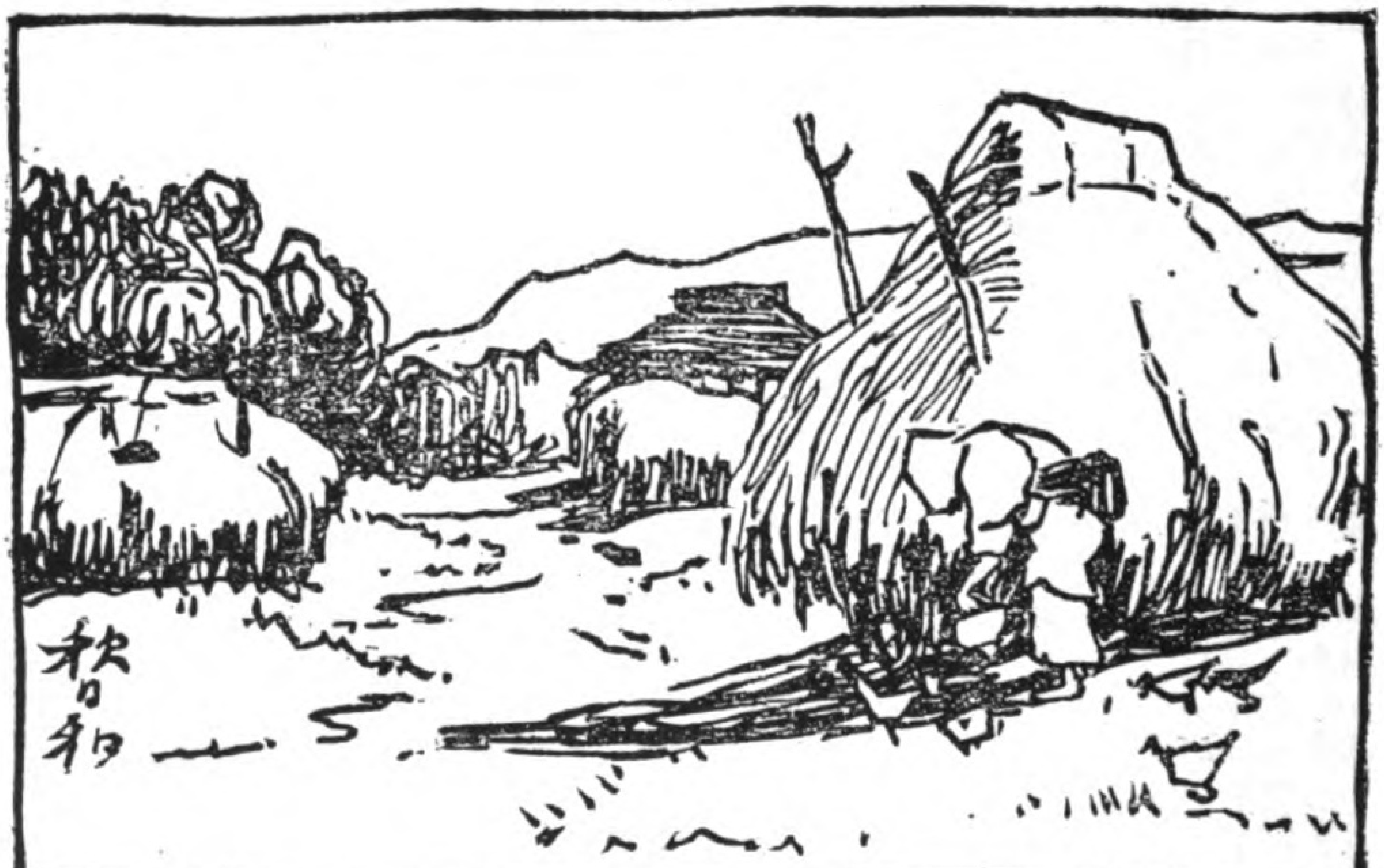
下山第一段

一行が頂上を離るゝときは午前十時半であつた。令を傳へて曰く今夜は日程の通り鈴川驛より夜行列車にて歸西する筈であるから夕方六時半までに大宮に着き馬車の時間に遲れざるを要す。それで下山は殆んど休む必要がないから直進連行唯五合目にて一旦止まり其處にて晝食をなせよと。強力は此の時既に解雇した。實は此は意外であつた。余は嘗て御殿場で經驗した如く大宮口の強力も亦往復共の約定なるべしと思つた規則の賃金壹圓とあるから是は上下の價と思つて居つた。今後の登山者は注意されよ是は片道のみであつたのですよ。御殿場の方は今でも往復でしかも安價であるやうに後に聞いた。しかし此の時は各生三食分の辨當は既に食し殘る一食の麵包あるだけで銘々の荷物は輕くなつた且つ下山は登りの如く落伍する者一名もある筈なしと見て彼等のいふがまゝに暇を與へた。さて下るには余が先頭他の男職員が後殿であつた。胸突八丁に來て急險であるだけそれだけ下る時間も早くなつた。足の健なるものはやゝともすると逸出先行せんとするから余は勉めて其の前頭を壓迫しつゝ下つた。心得べきことは草鞋の用意である。一行

は登山の前夜登りし人に聞けば下から多くの草鞋を仕込んで重い目をするは愚の至りである山上の宿舍々々に幾らもありて其の價は下の大宮町と同じく一足五錢づゝであると。それで一行は各人に二三足づゝを持たせるのである。登るにはそれで充分であつたがさて下山するには中々そうは行かない忽ちにして一足をも無くした。宿舍に入つて乞へば既に賣り盡し居りて一もない。每舍に四五足づゝの用意あるのみだから實に困つてしまつた。止むを得ず道々古草鞋を足にからみ付けて辛うじて下つたのである。今思ふと殘念で人の話も聞きやうがあると感じた。午後一時に五合目に着いた遲れたものも二時までには皆着いた。余は他生徒の下山しつゝある間に自然に山氣の癒ゆるに反して益々發熱頭痛に苦み其の俟つ間にも橫はりて居つた。三時までも俟つたに彼の女職員が生徒一名に助けられたまま未だに着かない。よつて室の內に焚火にあたつて居る三四名の强力に之を迎へ行くべく命じたが極めて冷淡で應ずる者がない更に他の一名が新たに室に入つて來たから直ちに談判したが餘程應じそうで又斷はられた。一方から考へるとこんなこととして時間を空過して居る譯にはゆかない六時半まで大宮に下り着かねばならぬ。加之全員が此處でおくるればそれだけ途中の森林で日が暮れて終ふであらう。全員を救はんか少數を救はんか言ふまでもないことである。しかも殘れる女職員は健脚なり遲るゝも無事には行くべき處まで行く人である。今も亦此の通りであらう。山氣は犯されて途に惱むことありとするも其は下るに從ひ癒えるのである。此處に至れば同職員の此の宿舍に今夜一泊するを希望す。夜間森林を通過するは宜しからず。よりて名刺の上に二人今夜此の五合に假泊して明早朝下り來れ如何にかして下に俟ち受けん云々の旨を認めて之れを舍主に托し且つ舍主よりも懇諭せんことを命じて此處に一行下山の途に就いた。

下山第二段　一行に命ずらく一同は直ちに大宮に至るべからず先づ一合目の下なるカケスパタといふに休息せんと、さて一行は長く休みたる後とて疾風の如

く下り此の時は男職員二名ともに殿をなし生徒は長き一連の隊をなしつゝ下つた。上るときに困難と感ぜし路も今は平氣で續々と下より登り來る人等に向つては既に登山し得たる成功を何となく得意がりて思はれた。一行は渇を覺えること甚だしく全く水のなきは此の山。現に谿谷に沿ふて行くこと數丁の處があつても一滴の水なき空谷であるしかし瞬く間に二合目に着いて此處に始めて冷泉に際會した。實に登山の上下共に冷泉の湧出するは唯此の一ヶ處あるのみである。此の冷泉にラムネの冷したるのが更に何よりも有り難い瞬く間に數十本を盡してしまつ



た、勿論一本五錢つゝではあるが渇を救ふの妙藥ともいはれる一行清新の氣を得て出發したが之よりは最も奥深き森林の中で例の惡路である。しかし雨のなかつた故かそれ程に泥深くはなかつた行くこと一里三十町一合目に達した、一合目は一行の休息すべき所ではない。然るに一行は疲れたる樣を察して兎も角もとて休息した。此の時人員を改めるに健脚な一名の團體は急先鋒となつて既にはやカケスバタ方面へ行つて了つたのである余等一行は暫時の休憩を終へて直に之に追ひ付かんと思つたが時は既に六時半で蒸氣の石炭の盡きたるが如く空腹を訴へて止

まないから先づ食事を命じた。熟々思ふに今夜大宮に行つたところで馬車は既に出まい、到底一泊せざるを得ないそれならば今夜此處に一泊するがよろしからんさすれば彼れ五合目に泊りし二人も明朝こゝで待ち受けることにもならんと一同へ謀つたが誰も異論がないそれでいよ〳〵此に宿泊と決した。實に我々は時間の豫算を誤つたのである。十時半頂上を去れば午後の六時半まで八時間には無論大宮に達し得らるゝならん余は嘗て御殿場口へ降りしに僅々三時間ばかりであつた是は砂走りといふのがあつたからでもあるがたとひ大宮口は此の砂走りのなきものにしても一時間に一里半は無論下り得らるゝものと信じて居つた今やはや豫算がすべて外れてしまつたのである。そこでカケスパタまで强力を雇ひ握飯を持たせて今夜は其處に泊まるべく命じた。さる程に下山したる人よりの消息なりとを聞く所によれば殘る二人は五合目に泊まるに決したりと一同は之に安心して床に就いた。時は約九時頃なりしならん。一同非常に疲れて全く睡入りし頃即ち十時頃突然二人は此の宿舍に入り來たつた。そして土間に向つて睡り居る男職員を起こして語り合へる聲を耳にし余は目を覺まし實に愕いた。しかし無事に此處へ着いたには相異ないから之を祝して又寢に就いた。夜間沛然たる猛雨到りて雨はたゞ漏り我々の蒲團寢衣所々濕らされたが一同前後も知らず熟睡して居つて何の苦も感せなかつた。

下山第三段

翌朝早く男職員をカケスパタへ先行させ一同はまだ緩り眠つて居らせた。實に數日來の睡眠不足を此處で回復するのであるから一同の熟睡といつたら實に牛といはうか、馬といはうか譬へやうがない昨夜二人が着いたをも知らずに居つたものが殆 皆で今朝起きて驚いたのである。それから漸くに起きて面を洗はうとすると僅に一椀の水で口すゝぎ顏洗ひまでせねばならん。しかもその水が實に鼻もちのならぬばかり臭いのであつた。一同の食事がやがて濟むと支度をとゝのへ常宿を立ち出でた。丁度六時半ばかりで未だ朝日が少しも苦熱を浴せかけないから裾野の道行

きは實に心持が善い。それに昨夜は充分に熟睡したものだから一行はすが〳〵しく感じたか頻りに道草を始めた。實に裾野には、千花萬葩様々の愛らしい花がそれ〳〵妍を競うて居る。サヽユリ、ミヅギボシ、アキカラマツ、マツムシサウ、ホタルブクロ、ソバナ、シシウド、チダケサシなど手に手に採集をはじめ。誠に此の小時間だけでも這般登山の成功を感ずるのである恐くは登山者には只々山の嶮望の大なるに心を奪はれて此のやうな閑天地はなからうと思はれる斯くて時間の過ぎ行くも忘れて僅か一里餘なるカケスバタまでを二時間餘を費した。前夜此處に泊りし一團體は今より一時間前男職員に率ゐられて大宮へ先發したとのことであつたから一行は直ちに歩調を速めて猶行くこと二里大宮の淺間神社に着いた。社側には水晶よりも明かなしかも冷い水が滿々と流れて此に淸涼な池を造つて居る。一行はさも愉快氣に足を浸しなどして暫く休みそれより馬車の發着所に往つたが先發の一行が此に俟ちしこと約一時間、更に俟つこと一時間にして馬車發し一行は二臺を連ねて三里餘の道を次第に下り下りて午後一時頃鈴川に着き所定の旅宿に投じた。あゝ之れで登山の課業も大團圓を告げ一行に大したる失敗大したる病人もなく此に歸つた、たとひ山上には少々の病人ありしも途々に癒えて船暈の覺めたるが如く一人として此に不滿足なるものはなかつた。只々少しく遺憾なりしは落伍者の五名が頂上に近く來ながら登るを許されざりしことのみであつた。之れも時間の不足より公衆の犠牲になつたのである。

團圓

かくて一行は無事鈴川驛に歸つて早速に新しき入浴と久振りの食膳とで疲を洗ひ氣を復しそれ〳〵、山頂にて認めかけし書面繪端書などを始末して投函したのもあつた。又荷物の片付をなし汽車に乘るべく萬般の用意を調へた。さる多忙の間にもかねて時事新報社や婦女通信社から依頼されて居つた端書に一々所感を記した生徒の文を檢閲した。それから此で以て一行は軈て四分五散するやうになるからとて分袂の印にとて茶話會を開き。午後五時半といふに名殘を

惜みて切り上げ一同旅店を辭し五十分の汽車に搭じ西へ下つた岡崎で夜十一時一男職員に別れ京都で翌朝七時一女職員に去られ八時大阪で生徒六名に別れ九時神戸で一同解散した。使用したる金剛杖菅笠及び莚は往々紀念のためにとて持ち歸つたものがある。余も亦此の如くして神戸より次の列車で明石へ歸つた。

所感　富士山は生涯一遍は登るべし然し必しも再びするには及ばない。

○大宮口の道を取るは不得策なり東口御殿場の方面が近くて且つ趣味に富んで居る。

○强力社會の人柄の惡いには驚いた。又石室の主人も

○山に一合二合との距離がある。しかし其れは眞の路程ではない只々疲れの度目らしいが、それよりも文明的眞正の里程に改良してほしい。

○下山の際或る男子の一團がいやに我々を嘲弄した、若しやそれが……

（完）

貧に陥りし我家の懺悔

藤葉女史

昔から早起きは三文の德ありと云ひ傳へたるは實に名言と云ふべし、故あるかな自分の家は之れとは正反對で四時前に夜の明けはなれる時節でさへ、朝日が已に照して雨戸の隙間からさし込む頃迄寢そべつて漸く起きて見ればもう七時に垂々として居ると云ふ仕末實に三文の得すらも出來兼ぬると云ふ意氣地の無い有樣でした。

畢竟之れは何から來て居るかと云ふと時間を限つて何處に出勤すると云ふ事もなく勉强すると云ふ目的も無いからである、斯くて漸くの事で朝飯を食べるともう九時、勉强家ならば大丈夫之れ迄には二時間は大丈夫働いて居る筈、即ち二時間の冗をしてしまつて扨それから何をし樣か別に之れと云ふ目的も無ければ新聞を引くりかへし、打かへし讀む程に、見る程に正午は

早く過ぎてしまふのでした。

斯ふ云ふ狀態にある人間の心情は如何であるかと云へば飯は食ひ、暇をつぶす事は知つて居るが只夫れだけで心は眠つて居るも同然で、活動して居る此社會の一員であるからは一歩でも人に後れまじと云ふ健氣の志がなくてはならぬのに一點の勇氣もなければ新しい生き〳〵とした希望もなく又原動力も次第に無くなつて來る。遂には橫になる、橫になれば自然と寢てしまふ、他の人はせつ〳〵と汗水流して而も愉快と希望を以て活動して居るのに。

これ等は單に表面上の事ですがこの外にまだ〳〵貧の原因が



ある即ち瘦我慢の頑固根性で武士は喰はねど高楊子とすまして居た錢の勘定を知らぬを以て上品とし、高尚として悅んで居たのは疾くの昔の事で今は中々一文半錢でさへ空にはならないのを、

馬鹿正直の寄り集まつた我家の人々は十八九世紀時代の志想猶去らずして昔の習慣の猶存するのが之れ貧の大原因である今は手も足も出す事の出來ない有樣處々損じ歪みたる大なる家は徒に昔の榮華を語つて自分達をして時折今の境遇を忘れさして呉れる、昨日迄絹の衣を身に纏ふた身に今日襤褸を重ねる事は實につらい、三度に一度は刺

身をも味うた口に今日の雜水をすゝる事は如何にも情けない、以前自分と對等の交際をして居た人は今や皆時めきて居るのに、

此辛い、情けない、口惜しい感情は先祖代々承けつづいた貧者よりも一層身にこたへるそこで以て勢ひ今日の身に不相應な事が知らず〳〵の内に行はれる樣になる、之れが我家の貧をしていよ〳〵悲慘ならしめたのである。

りちぎ者に子澤山の譬へにもれず我家には男女合せて六人の子供がある、夫れに夫婦、祖母と家は九人の家族を以て組織せられて居る毎日の飯米は二升五六合一斗の米は四日を出ですして空しくなる、一ヶ月の米代だけでも巡査の俸給よりは多くなる仕末。

昔から豆腐粕をこぼさずに食べると長者になれると云ふ事を聞いて居るがさて自分の家で豆腐粕の御馳走に有りついた時、食べたあとの膳の下にはまるで雪の樣にこぼれて居る恐ろしき貧の原因はこゝにも洩れないのである。

更に又よくいへば宵越の錢は持たぬ江戸子氣風と云はうか、惡く云へば遠き慮りなきものと云はうか、恥しい事ながら一家舉つて貯蓄心と云ふものがない。

十錢の小遣にも窮して食ふや食はずに過す事一日又幾日、あはれ飢軍に襲はれて一家悉く枕を並べて打死と覺悟極めたる時しもあれ、漸くに小判幾枚の援軍が來た、其瞬間こそ眞に錢の有難さを感じて今度こそは大切にすると思ひきや、何事ぞ。

或者は魚屋に走り、或者は酒屋に走り、或者は菓子屋に走り昨日に變る大盡暮しをやらかした後に餘す處はや幾干、咽喉元過ぐれば熱さ忘れて又昨日の轍をふむの日遠からずして來るを思はず。

一圓の貴きは流石に知れど一錢一厘の更らに貴きを思はざりし憐れの人々よ一錢や二錢は高くても安くてもどうでもよしと日に幾度となく嚢中よりほり出す、塵も積れば山となると、いろはがるたで百も承知しながらさて實地に於てはちりのちの字も知らず實に机上の學問何の用をかなすべき。

さりながら斯く自家の貧を吹聽するもの丶亦止を得ずして行はざるを得ぬ場合も少なからず、人は安物買いの錢失ひと云へど貧しき者は、彼は丈夫なり長く保つと知りつ丶も、嚢中の乏しきを如何にせむ、損を知りつ丶安物買ふの止を得ぬを如何にせむ、さてこれも皆平日の心掛如何にありて餘裕のなきこそ悲しけれ一事が萬事何事につけても然うなり易く斯くて貧は益々貧を生む、現金買ひの掛買に勝る數等なるを知らざるには有らねど現金のなき悲しさには茄子に胡瓜に南瓜はいりませんかと朝な朝な近在から持つて來る、露の滴りそうで而も比較的安いのを見ながら悲しいかな買ふ事が出來ない。

まだ〳〵其上に目の前に五錢十錢と出て行く怖わさを見なければ、やがて來る晦日の催促は忘れて餘計なもの迄買ふ樣になる。掛買程不經濟なものは無い。

併し之だけではまだ我家の貧を充分に云ひ盡せない肉に死んでも靈に生きるものは無上の幸福であるとの尊きキリストの敎へは我家には見られないのである。

たとへ其日は食に困る程になつても肉體上の苦痛は有つても、せめて精神上に少しでも愉快が有るならば如何に幸福で有るか知れないけれ共家庭的快樂は實に皆無である、一家團欒の樂しみと云ふ事を知らない人達の寄り合いであつた。

朝に晩に麥飯に菜漬けを食べて居ても一家打集ひ、草を刈つて居たもの、土を擔いで居たもの、皆夫れ〳〵に田畑から歸つて來て嫁は姑の肩を揉み、爺は孫を相手に昔語りの、不平も不足もなく暮して居るものは、よしや聖書は讀まずとも千萬金にも換へがたひ福や寶を持つて居るものと云はなければならない。

目に一丁字なき水呑百姓でも家庭的快樂の眞味を味あうて幸福なる其日を送り得て居るのに、なまじ文字を知つて居る我等は事實に於て夫れを表はす事が出來ぬとは何たる意氣地の無い事で有つたらうぞ。

何事も十九世紀時代の習慣をのみ、之れをよしとする姑、二十世紀の事はそんなものでなしと中々負けて居ぬ子供達、更らに若い時分散々にいじめられた嫁が

事毎につけて一々反抗する口答へ、其間に立つて雙方の調和を取らざる可らざる父の苦心、實に我家は騷々然として、錆びた齒車が兩方からきしり合ふ樣な有樣こんな處にどうして愉快が有うか幸福が宿らうか。

抑も此原因は何處にあるかと己れも家族の一人たる身が怪奇ながら批評家の位置に立つて時折は高見から見物して觀察した結果は斯んなもので有つた。

此原因は實に數十年の昔に有るので姑が嫁を嫉むと云ふのはおかしな話で有るが、早く倅に嫁を取つて一家賑かに暮したいと朝夕の願漸くにかなつて、相當の嫁も來て思ひ通りに新夫婦互によく調和して春風のそよ吹くを見るにつけ、姑はそろ〳〵と孤獨の寂しさを感じて來る新夫婦の中睦じきを見るにつけ我昔の樂しかりし時代を連想し、なき人の事を想ひ、今の我身のつまらなきを想ひ終には幸福なる嫁が何となく嫉ましくなつて來る、理に於ては有り得べからざる事では有るが世間には斯う云ふ感情の決して無いと斷言はされぬ

萬事是の感情から割り出して何事につけても嫁に辛くあたる、倅が嫁を庇ふ程猶いま〳〵しくなる、嫁となつた身は知らぬ他人の家に這入つて頼りとなるは只主人のみと云ふ有樣で互の間は益々親密になるばかり、誠に止を得ぬ境遇で有る、少しく考へが足りなかつた主人は我ものであると云ふ意を姑に感じさせ、姑はのけものと思はせたのがやがて己れに報ひて來たので有る。

箸の上げ下しにも、家の出入りにもあれや、これやと嫌味たら〳〵せめさいなまれても一旦嫁したる以上、やがて可愛ゆき子さへ出來れば情にひかされて思ひ切りたる事も出來ず、憂き年月を送る其内、我子は次第に成長して主婦たる位置も次第に確固となるにつけ今迄押へに押へられて居たりし頭は次第〳〵に上つて來る、もはや花嫁時代の樣に負けてのみは居ぬ、昔の怨みもこきませて今度は反對になつて來たのである。

嫁は憎くても孫は可愛いゝのが普通なるに我家に於ては然らず、最愛の倅の子にはあらずして最も憎むべき嫁の子と云ふ感念のみ胸に浮びて坊主が憎くければ

袈裟までのたとへ無心の幼子が頑是なき手を上げてよりすがらんとするをも振り拂ひ／＼嘗て抱き上げたる事も無ければ、優しき笑みの一瞥をさへ呉れた事は無つた。

我に取つての天なり地なる母が姑に對する仕打を見様見眞似に、祖母が我に對する無情を感ずるにつけ幼き身にも何とて愛の心の起るべき、何時とは無しに罵り、厄介者視し邪魔にする樣になつた。

恩あつき母と、愛ふかき妻子の間に立つて何れに團扇を擧ぐべくもあらぬ父の身は更らに不愉快である。

嫉妬、猜忌の惡感情は絕へず



此間にさまよふて、母が一心に儉約を主張すれば祖母は之れを以て己れ一個の利益をはかるものと誤解して妨げむとする、右と云へば左、左と云へば右、何事につけても善きも、惡しきも一々反對する之れが引いて物質上に迄及ぼし不經濟な事も止を得ずしなければならぬ。

家を借るにしてか祖母の室は別として置かねばうるさいと夫れが第一の條件となつて勢ひ一間廣い處を借りねばならぬ、已に室が別なれば燈火も餘計にいる、一つ炬燵に集るは大に快からぬを以て身分不相應な事にも係らず炬燵も二ついる、夫れに從つて炭も餘計にいると云ふ仕

末、實に我家の貧は感情の上からして益々其勢を强めて居る。あはれ我家は物質を養ふ糧も乏しく、精神を養ふ糧は更らになき貧しき有樣となつたのである。

產土日記

福田琴月

△月△日

●小雨降りて涼し。向ふの原には百日紅、野菊ペンペン草など咲けど、わが小庭には擬寶珠のみ誇りがほなり。

●生れて三十日の幼兒、少し熱ある模樣にて、乳をあまし、泣く事頻なり。醫師を迎へて、診を乞へば、膓わるしといふ、蟲の如き小さき人間の、僅の故障も生命に關せずとも限らず。と心配しかけては果しなし。甘汞と淸涼劑とを用ひて、靜かに臥かしおく。

●今日は宮詣りとて、祝の品たまはり家々に重を配る日なり。此程より、餅、お目出糖、赤飯の三種の中、あれか、これか、と考へたれど、矢張赤飯に札は落ちぬ。こんな不消化物貰ふ人も迷惑なるべけれど、持運ぶ人々も中々の御苦勞なり。手を三人に別ち遣はす。三人は文士の卵、一人は奉天にての負傷兵、一人は十四歲の田舍出の下女なり。

●友の母親、產衣を仕立て上げたりとて持ち來る。縮緬の別染なり。今より三十有餘年前、予が初節句の武者祭りに、幔幕としたる大幅縮緬を、紋を拔きて染めたりといへば、少々御座はさめぬれど、これも紀念なりとてなり。われは今昔の感に堪えず。

●兄來る。右手に大いなる包みを下げたり、

「兄さん、それは何です。」と聞けば莞爾として、

「御注文の品です。」と袋開いて、玄關へぶちまく。小さき胡瓜の鼻落散亂す。

「四谷は、芥子が本場ですから、能いのが出來ます。」と兄はいふ。

「例の芥子漬ですの。」

「左樣です。御母樣の秘傳です。」

われは首うなだれぬ。東西に彷徨する十年、いまだ家を爲さざるに先だち逝きたまひし母の秘傳、よしや芥子が利かずとも、われは泣かざるを得ず。

胡瓜及茄子の花落を、山ばかり一升を壺に入れ、それに鹽一合五勺をふり、一夜重さ石を乘せて押し、水あがりたる時、其の水にて、芥子七合五勺、麹半枚、酢一合を溶き壺の上部一ぱいに竹の皮を張り押蓋をなし、輕き重しを乘せて十日程置き、竹の皮の上に露の浮く位の加減にて、上部より順々に出して饗す。

といふが、其方法なり。甘きが中に鹹味を有する其美味さか



ぎりなし。今より後十日が待遠しい、と互に笑ふ。

◉此頃は不漁なり。われの好む、鯛と海老とは、肴屋の荷に見當らず。無據、半精進に暮すこゝに五日、幸に今日は二三尾の小鯛あり。たゞちに命じて割かしむ。

燒かんか、煮んか、それとも汁にせんかと種々惑ふ。結局、八帖味噌の汁とすることゝなる。鯛一尾の中、尤も美味なるは、眼肉なるはいはでもの事なれどこの鯛あまりに小さくして、肉柔かく、眼肉も思ひしだけ旨からず。されど新宿にてかゝる事いふは贅澤の至りなり。膳の上に、靜岡の山葵漬あるが、三度

三度の樂しみなり。

　晝飯すぎて兄は臥し、われも臥す。されど寢られぬまゝに種々の事を考ふ。

◉此間、ある理屈屋に聞けば、子は第二の吾にして、所謂復活なりと、妙な事を聞くものかな。復活とは、一旦死んだものが再び生きたるをいふにてはなきや。第二の吾が生きて居つて、第一の吾も生きて居るが復活なら、某伯の樣に、十八人も子がある人は、復活も復活も大復活、大變なことゝなる。大體第二の吾なら、第一の吾は、もう死んでも差支のない筈、その樣にも思はる。しかし、敎育を施して、一人前の人間にせねば、第一の吾は義務の濟まぬ樣にも思はる。第一の吾愚鈍にして、半人前にも足らぬ人間なるに、第二の吾を一人前に仕立てるが中々難し。憶ふに生兒は鷄卵の如し。孵化して雛となり、長じて鷄となり、東天紅と鳴かすまでが、親鳥の役目なるべし。狐に狙はれ、猫に窺はれ、鼬に追はるゝの難はあらかじめ覺期せねばならず。親鳥の心もまた忙がしいかな。

◉親族の娘來る。先達てより、嫁入口を探しゐたるに、兎角思はしき處なかりしに、此頃漸く話し纏りて、本人大恐悅、先方の事、衣服の事など、とり〴〵妻に語りて笑ひ興ずる樣、流石は明治式の娘樣なり。

◉衣服といふ事につき、ふと妙な考が浮ぶ。一體、身にまとふ衣服なるものは、まづ第一寒暑を凌ぐ實用のものならば足れり。それはその身分相應、まさか、貴きおん方が、紡績織の衣服も着られぬとは知らねど、今の婦人の一張羅は、其品質において、貴賤貧富共に大した相違なき樣なり。そこでわれは、普通の世話女房が、其親里又は親戚へ行く時、けば〳〵しき衣服纏ひて行くは、其心無下に卑しく、其行頗罪ありと思ふ。公會の席などへ出づる時は、それ〴〵の禮儀もあり、又社交上必用の場合もあらんが、私用には、親戚などを訪ふに當り、特に美裝するは、一は其鄕黨に誇らんとする虛榮心、二は美裝を以て人を凌がんとする極めて卑しき心より出づ。格言すれば、先方に嫉妬心を起さしめて、自から快とするなり。かゝる行爲は、

われ人共にたゞ罪を重ぬるのみ人の不快を以てわが快とする罪惡なり。とはいへ、中心人に見られんことを願はずして、たゞわれのみ快として美裝するは幾分か罪輕し、われはこれが身分相應なりと自覺して美裝するは愈罪輕し。わが身分を自覺して、比較的質素にするは。稍婦德を辨へたるものか。もとよりこれは交際場裡に立つて夫を助くる奧樣方に就いていふのではなし。

◉近處廻りにやりし田舍下女、重持ちて歸り來る。おうつりに花簪など入れたるは、上方の人なり。半紙を菱に折りて、壽の字かきて入れたるは昔風の家



なり。ある女學生上りの奧樣の家よりは、梅の實一つ入れたる、これは東京風を心得ある娘樣なりけん。

◉遠方廻りの某歸り來る。

『何と口上を云つたか。』と試みに問へば、

『ハイ、先達ては結構なるお祝を頂きまして有難う存じます。』

『成程、それは宜かつた。それから。』

『今日は坊ちやんの三十一日に當りますから。』

皆々哄と笑ふ。お七夜を初七日と云ひて、暇出されたる下男の例もあれど、男の子の宮參りを三十一日とは、それに違ひはなけれど物もいひ樣なり。今四

日間違へば、三十五日のお供養となる。御幣かつぎは眉を顰むべし。

●某家の妻君より祝の手紙來る。手蹟頗る見事なり。多田親愛翁の薫陶を受けたりと見ゆ。六ケ敷理屈よりいへば書は美術にては無しとの事なれど、金釘流は困つたものなり。殊に婦人にありて、名筆は一段と其人品を高からしむ。ある人嘗て予に向つて、

『字は其人の氣象が出るものだ。活潑でなくてはいけない。書家の字はだめだ。』

と、こんな人にかゝつては、字も糸瓜もあつたものでなし。書を學ぶに眞より入り行に入り、草に至る。其字のくづしかたに、夫々の約束あり、相違あり、習ひもせぬさきから活潑だ、奇抜だ、と無理にのたくらせては、字は上手になれる氣づかひはなし。少々氣障といはれても出來るだけ技巧の修練をなすべし。下手の堅まつたのより、應用の迷つてゐる間の方が見込があるなり。碌樣に、體度もきまらぬ先から、團十郎の腹藝を學んだとて、俳優は名人になれず。字のくづし方も知らぬ内から、徒らに我流を出して、勝手氣儘の字を書くは、嗚呼の限りといふべし。

◉われ年來の胃病、朝に晩に嘔吐を催して、食物更に旨からず。加之、左胸部動悸强くして、夜もおちおち眠られず、心臟病ならずや、との恐怖常に胸に往來して、敢て其身をおろそかにするにあらねど、醫師の門をくゞるは、地獄の門を入る如く思ひて、一日〱其死の宣告の延期を念じて、獨り悶々たること今日に及べり。

姑息なるかな。病重からず、十分手當せざるべからず。豫後不良ならず、死の覺期せざるべからず、輕症ならず、大に安心して、更に十分の攝生を要す。この位の理屈分らぬにあらねど、意志の薄弱なる、只何となく醫師の門を叩く勇氣なし。

幸か、不幸か、午後に至りても、幼兒の泣く事しきりなれば、われは打連れて病院に行きぬ。院長は多納ドクトルなり。

まづ、十年來の胃病なること、常に不安の念の胸に

きざして堪えられざること、少し六ケ敷掛合などすれば、直ちに嘔吐を催すし、机に向ふが、非常の苦痛なること、此間よりバッタリ禁酒したれど、却つて胸ぶくれする樣なること、など一に經過を語りて診を乞ふ。

ドクトル診して笑ひながら。

『胃は末で、神經が基です。藥を飮むより、規律ある生活をするが第一です。』

と、第一の禁は無論神經を痛める事、物書く事、次に長時間の談話なり。運動を專一とし、寢食の時間を定めること、子を抱きて散歩すること、など勸めらる。酒少しづゝ用ふべしとの事なり。



まづ命は助かりたり。されど文を賣つて口を糊するもの、神經をいためず、物かゝずといふわけに行かず。病は治したけれど、食ふに米なく、着るに衣なくては一寸困つたり、しかし、これも苦痛と感せず、道樂として文書き書讀まんには差支なかるべし。初めは道樂なりし文筆が、今は是非なくも拙き藝が身を助けて、さて職業となれば、苦しくなりて病となる。人間は勝手なものなり。まづ其道樂の初期にかへらざるべからず、と思ふ。

◉日は暮れかゝりぬ。カナ〳〵〳〵と白金線を鳴すが如き蜩の聲が、腦にまでしみ入りて涼し

く思はる。前の原には蟲の聲々『スイッチョ』が押し切つた樣に鳴くもをかし。

『ギンチョ〳〵。あつちへ行くと閻魔が食ふぞ、此方へ來ると助けてやるぞ。』

これは近家の小供等の、黐竿を持ちて、蜻蛉追ふ聲なり。閻魔が食ふ、といふ方へ行けば、蜻蛉は助かるなり。助けてやるといふ方へ來れば、蜻蛉は死ぬるなり。少年の中より、知らず〳〵の中に、人は虚僞を敎へられ、掛引を敎へらる。たゞしさういへば、魚釣なども出來ぬことゝなる。向ふの損は自分の得、一波あれば一谷あり。強食弱肉まことに是非もなき事共なり。

●夕飯となる。晝間買置の鯛を酒蒸しにす。これは三枚におろして、一寸酒に漬け、御飯蒸の中に入れて蒸すなり。新らしき鯛なら極めて美味なり。たゞし今日の鯛は少し次なり。魚の中にて、鯛が少し次になりたるほど食べられぬものなし。椀は餡豆腐なり、これは豆腐と餡とを別々に煮て食べる時に、まづ椀へ豆腐を入れ、其上に餡をかける方が美味なり。

●新宿は、本所、根岸に劣らぬ蚊の名所なり。わが家の蚊の製造元は、小庭石の下に埋けたる一つの壺なり。去年までは二三尾の金魚居たれど、雨に流れてや今は居ず。孑孑しきりに浮み沈みにして、夕に到りて蚊と化ける。額手足はさらなり、膳の上を襲ふ事しきりなり。聞けば、人の血を吸ふは雌のみにて、其血は直ちにかれらの蕃殖の基となりて、所謂蚊族の子孫、人の血を吸うて綿々絶ゆる事なしと、われらの痒きを忍ぶは、かれ等の子孫長久の基なるべけれど、かゝる無用の動物のために、生血をすゝらるゝは、たまつたものにあらず。人間同士また此事あり。

●物干竿の浴衣のみ白う染めぬきて、あたりは暗うなりぬ。前の小道に、ワーワッと笑ふ聲す。何ぞと見れば、往來に太き木を横たへて、道行人の氣つかずして或は躓き或は倒るゝを手をうちて子供等の笑ふなりけり。

小供は小供らしきが能けれど、かゝる遊びは斷然つつしむべきものなり。其道行人の迷惑、困難は今更いはず。人の苦を樂とし、人の不快を快とする罪は、か

かる惡戯より敎へられて、其子供等の行末、極めて恐ろしきものあるべし。花火を上げて、巡査に叱られるなどいまだしも無邪氣なり。火光の美を愛し、爆聲の壯を愛して、其の害の人に及ぶを思ふの隙なければなり。然るにかゝる遊びは、其愉快として拍手する凡ての分量が、人が困難する凡ての分量と同じ。人が躓けば、愉快なり、躓いて倒るれば尚愉快ならん。もし誤つて、後人が躓いて倒れて氣絶したら如何。小兒等は初めて騷ぎだすなるべし。要するに、同胞人類を、禽獸蟲魚以下に見なしたる惡戯にて、かゝる惡戯より與へられたる思想が長じて、やがてわれらが想像すべからざる惡人となるにあらずや、とわれは折角の微醉もさめはてゝ、人の子の行末を思ひて止まず。

●幼兒また泣き出す。腹が痛いのなるべし。泣けば直ぐと乳やり、すぐと抱くなどはあしき事なりと知れど、それを守るは中々六ケし。六ケしくても厲行せねばならず。

●蚊帳をつりて寢につく。中々寐入られず。こんな時には、俳句でも考へて居ると寐入られると思ひ、題を萩と定めてあれこれと句を案ず。破寺の小庭の垣根に、ひよろ〳〵と萩のくねりたるなど眼にうかべど句にならず。宮城野、高臺寺、いづれも其名處なれど、却つて句にならず。大體、萩と題を据えたから、句が出なくなる。たゞ萩咲く頃の風物を、とり〳〵腦中に思ひうかめて、と種々もだゆれど甲斐なし。『宮城野の萩更科の蕎麥にいづれ』と蕪村の對句のをかしみなど誦する中に、うと〳〵と眠りぬ。夜半の風荒うして寢覺勝なり。

園藝

菊の培養

田村景福翁談

田村氏は數十年來園藝の熱心家で、前には内苑局に奉仕して專ら青山御所の菊の培養を擔任せられ且つ每年大隈邸の菊づくりに丹誠を凝らされ、菊の培養に就ては深く造詣された方です。夫人も亦斯道に熱心で、良人を助けて每日後園で剪栽に從事せられる今こゝに氏の菊花培養談を一寸御紹介しせう。

▲菊の種類は無限

一體苗分にして作る菊は何時も親菊と同じ花が咲くが、之を實蒔にするときは花は種々に變化するから、菊の種類は實に際限がないです。折々『菊には幾種類あるか』など〻聞かれる人もあるが、之れは餘りに斯の道に暗い話です。現在世間に作られて居るもの〻みでも、幾萬種類あるか數へが切れないです。宮内省などでは昨年は一萬餘種、今年も亦一萬幾千種かの實蒔をしてある筈で、實に莫大な種類ですが、假りに此の爲に出來る新苗を一々保存するとせば、此處ばかりでも年々一萬有餘の新種が增して行く勘定になるのですから、作らうと思へば新種は無數に作り出すとが出來るのです。

併かし恁う澤山實を蒔く中にも、好い花の出來るは甚だ稀で、珍花とも見られるものは百本の中に先づ五六種位しか出來ませぬ。それで珍らしいものが出來ると、之を作つた人が花の色や花瓣の趣などに因で自由に風雅な名稱を附けますから、菊の名といふものも又一定はしては居りませぬ。

▲花の變化——中菊の狂ひ咲

斯くの如く菊の種類には際限はありませんが、其の花瓣の具合に依つて之を大菊、中菊、小菊等に區別するとが出來ます。大菊の花は大輪で多くは一重です。其の花瓣には樣々の態があつて、抱え咲(つかみ咲)、平熨(熨)、つま折れ、匙、平瓣、筒瓣など云ふ名稱を有つて居ます。中菊は大菊や小菊と異つて咲き初めて

から凋む迄に花は色々に變化します。之を「狂ひ咲」と言つて菊見る人の深く注目する所で、眞に菊を愛する人は其の狂ひ方を賞する爲に同じ花を三度も四度も觀に行きます。

中菊の中で最も貴ばれる花は、外側に筒瓣を具へ、其の次に匙瓣を有ち、其の内側に平瓣のあるもので此の三つの花瓣を具へなければ、其の狂ひが如何に好くても之を上花とは申されませぬで、其の中の平瓣だけが狂ふので、筒瓣や匙瓣はちやんと其の儘であり乍ら、平瓣のみは互に纏ひ附いて段々蘂を包藏します。其の狂ひ方には追狂ひ、盛上げ、亂狂ひ、追と亂の折衷等色々



あつて此の道の人は、こゝに最も重きを置くのです。

▲大菊は大輪、中菊は狂ひ方

菊は花の好いのを咲かせるのが主でなければならぬ大菊ならば花瓣を成る丈伸させて花を大きくすると、中菊ならば花を旨好く狂はせると、之れが主眼です。所が之れは材が痩せても不可ぬし、肥り過ぎても不可ぬ。特に中菊は其の加減が困難しいので、其れを適度に育てゝ、花に幾らか力があつてふッくり旨好く抱へるやうな氣味に咲せて具合好く狂はせると云ふとは餘程苦心を要します。それを世間では材や葉の見映を第

一にしてゐますから、花は何うも好く行きませぬ。けれ共一本の菊は八百、九百、或は稀に千以上の花を咲かせることがあるが、それは格別で、其樣云ふ場合は最も伸の好い菊を擇んで遣るので、枝を打たせることが主になるから、迚も花を好くしやうとは望まれませぬ。

▲婦人と菊の世話

菊の世話と云ふ事になると、太い枝を曲げる時などは婦人では些と力が足りませぬが、一體が婦人は事を爲すに緻密で、且つ物に凝る氣味があるから、菊の世話には最も適して居ります。古い事ですが元老院議官で水本成美と云ふ人がありました。維新後の有名な中菊家で、私なども暫時此家に居た爲に自然菊の研究を始めたのです。で此の方は菊を作るのは自分で遣りましたが、花を仕上るのは婦人に限ると言つて何時も婦人に遣らせました。私は恁う云ふ例があるからと云ふ譯でもなかつたが、菊を作るに助手が無くて困つたから、つい家内を引出して手傳はせた。其の結果は却々好かつたのです。最初の間は嫌々ながらでも、遣つて見ると樂みなものですから、追々進んで遣る氣になりまして、此の頃では、自分の家のを世話する外、大隈伯の盆差作は是迄大抵引受けて遣つて居ります。

▲伊勢菊、佐賀菊 魚子

婦人の盆栽家はありませうが菊を作ると云ふ人は滅多にありませぬ。併かしまあ作つて見やうとうならば先づ伊勢菊、佐賀菊、魚子の類が好いでせう。魚子は小菊の一種で、伊勢、佐賀は大中小菊の孰れにも屬かぬ別種の菊です。此の三種は孰れも婦人向で如何にも可愛い花が咲きます、伊勢菊と云ふのは最初は花瓣を細く伸してゐるが、滿開に從つて瓣は次第に綟れ、遂に絹絲のやうになつて下へ垂れる、佐賀菊は是れ亦最初は花瓣は細く伸びて出で、滿開に從つて瓣は次第に綟れるが、之れは綟れると同時に眞直に立つて來る。今一ツの魚子は或る地方では貝咲とも云ひ、輪は極めて小さく花瓣は恰度江島簪の小貝のやうに袋形に可憐な格好をして居ります。

で今婦人方が此の種の菊を培養なさるに當つても、

敢て澤山の種類を集めるには及びませぬ。白、赤、黃等二三種の正色菊さへあれば、其他の褐色、薄色等の間色菊は實蒔に依つて色々新種を作ることが出來ます。



▲菊の採種法

菊は那邊に實を有つかと疑ふ人もあらうが、蘂の下方に宵くふつくり膨れてゐるのが即ち其れである、實を採收するには花壇の必要はありませぬ。材を肥やし、花を好く咲せて、其儘天然に任せて置くのです。併かし伊勢菊や佐賀菊の如きものは、其の細長き花瓣が雨の爲に腐敗して往々實に及ぼす恐あるから、之を防ぐ爲に莟の間より花を倒に返へして置く。或は花を其儘に置いて花瓣を切る人もあるが、矢張り返へした方が好いやうです。

實の熟するは大抵十二月中旬で熟した時は蘂の頭に茶色を帶びる。實が熟したら花首を切り取るも可し、

又蘂を挘り取つても可い。そして其れを好天氣ならば二日間位日光に當てゝ水分を除き、之を解すと珊々になるから其れを袋に入れて軒下などに保存して置くのです。

菊の實の茶色又は黒味がゝつたのは腐敗の證で可いのは何時も青味を帶びて居ります。

▲實蒔と其の培養法

翌年春の彼岸頃に至り、柔かな土を細かに篩ひ、之を板で圍ふて、其の中に右の種子を蒔く。で、菊の實は極めて柔かなもので、雨に逢へば直ぐ腐敗するから、種を下したら蓆か苫のやうなもので雨除を作り、且つ天氣の好い日は葦簾を以て日覆を拵へて遣るのです。するど一週間か十日位を經てそろ／＼芽が生へて來ます。生へて暫くは尙ほ雨除は要るが、日中は葦簾を外づして少しづゝ次第／＼に日光に當てゝ行く。軈て葉が四五葉出て來るのを待つて、之を他へ移して培養するのです。

其樣する中には苗が段々伸びて來るから、伸びた所で芽を摘めば直ぐ又枝を打つ、其れから後も幾度となく芽を摘むが、恁うして枝を多くするとせんのとは各自の適宜です。そして秋になつて花を調べ、良種を擇んで苗を保存すれば、其れで年々其の花が出來ます。

肥料は人糞なども用ゐますが、婦人方なら油糟を五日か一週間程水に浸して、之を少しづゝ注いで遣れば澤山です。濃くては不可ぬから、成る丈稀薄くして度々之を與へるのが好いです。

▲苗分は冬至前後

實蒔でない分は十一月冬至前後に苗分をします。春になつて爲るのは手を拔くやうな譯で、眞に丹精する人は矢張り年内花のある間に根分をして培養します。其れをするには苗床を拵え、是れに十分の下肥を爲し苗を其處へ移して覆蓋を作つて置く、で翌年彼岸頃に其の覆蓋を脫ると、柔かな苗が日光や空氣に觸れて段々勁くなつて來るから、其れを本花壇へ移すので、其の時期は大抵五月八十八夜の交としてあります。之れから後は前に述べたやうな培養法に從へば、秋に至つて立派な花が開きます。其培養法の詳細、蟲害等の事を述ると限が無いから先づ此の位にして置きます。

流行

袷着のいろ〲

靚風子

袷の蟬秋知り顔に喧しく、垣の澁柿日に色着ける今日此頃、着馴にし單衣も、いつが袷と更衣する季節となり、各所の呉服屋では其の賣出しの準備中なるが、特に今年流行の新柄、呉服類を記せば左の如し。

△染色は藍地が流行　之までの衣類の染色には茶褐た色が流行ましたが、今年は染色も頓と變つて、藍地と云ふ工合になつて參り、それも普通の藍とは異なり鼠色が大流行で、三越呉服店でも袷地の染色は、悉皆鼠色を土臺として、少しづゝ他の色を配剤た様です、單に藍地と申しますと賀茶のやうに聞へますが、實際は鼠色で、先づ妙齢のお孃樣向なら紅を鼠せ、細君向には鼠色を配剤し、染色の濃淡は年齢に由て異なるのです、全體鼠色が流行出しましたのは兩三年前よりの事で衣類の裏地に應用しつゝあつたのだが、今年になりましてから日露戰捷紀念と云ふ所から、段々皆様の好に叶ひ裏地が變じて表地の流行色となつたのです、從來のカツ色と申しますのは褐色であつたのですが、昔のカツ色とは全然趣味が違ひますから、鼠色の注文には染絣屋から色本を取寄せ、篤と御覽の上で御用を仰せ付られるが宜しう御座います。

△地質は山繭入縮緬　近年は山繭入の縮緬を婦人間で嗜好するやうになりました、山繭絲を混へて織た縮緬は普通のと違ひ、山繭絲の織出した所の光澤が強いから、染揚て見ると山繭絲の部分の光澤がよくて、小紋織のやうに優美に見え、見た眼の體裁が可い所から需用が多く、昨今の販け工合では在來の縮緬を凌駕するの傾向です、それから衣類の染模様も、段々に改良され上繪師の手になる友禪模様ものは、縫模様と云ふ嗜好です、縫模様の流行出たのは各女學校で、刺繍術を教授した起因となりまして、其製作が豫想より容易に出るのと、婦人社會の美術思想が進んだからだ相です、話は違ひますが女帶に縫模様を用るやうになつた、其の一事でも昨今縫模様が流行出したと云ふ事が解るでしやう。

△縞物の柄　染色や模様物は漸次華美となる傾向ですがそれに反し縞物の柄行きは大層質素となり、袷縞の如きは大柄よりは小柄の呼び聲多く目下織元で製造中の縞柄も、千筋……金通子と云ふ質朴い柄行のみで、一時流行した格子縞類も市松類似の角格子は廢り、俗に障子格子と稱へる竪格子で、極細い格子縞に限られるのですが、地質は絹布では相變ず京お召、次は伊勢崎銘仙……節糸……米澤糸織、結城紬や銘仙類は何時も廢らず流行つて居ります。

△絹布代用織地　絹綿混織と云つたら奈何やら仔細らしく聞えますが、つまり絹絲へ綿絲を混ぜ絹布を模擬したもので、昨今の織地は機業が發達して來た結果、織柄よいものが出來て三越呉服店の新柄陳列會でも、屢ば好評を博したのです、地質の光澤も染色の工合も殆んど絹布に

異ならないから、中流以下の方には向きます殊に紋織お召などの精巧なる事は實物を凌ぐ程です、以上は衣類の側の流行話しですが、之れから附屬品の帶や帶揚、其他半襟類に付て話して見ますと

△帶地に茶色と云た工合　帶地は之まで華美が流行で、西陣繻珍博多織などでも大抵地質の染色はオリブ紫紺などの、呼び聲があつたが、此の流行は何時か廢つて一斑に茶色を好くやうになりました、各地の織元でも目下茶色地と云ふ話しだから、袷着の流行帶は早晩茶色となるに違ひないが、普通の茶色は地味だとか云ふ所から、同じ茶色でも白茶、コビ茶、それから利久鼠と云ふ色合が流行つて居る。

△半襟の模様は　袷着當時は縮緬のボテ〳〵より、絹縮の方が着心が宜いので御用ひになる方が多く、それに模様も友禪染や綾模様は前世紀となり、昨今では絞り類で、其の種類は豆絞り、傘絞り、京極絞り、染色は勝色に紅の勝た物と、茶ッポイ物を好むやうです

△帶揚新流行品　は紋縮緬の浮織を、友禪染とした物で結構は高價ですから、貴婦人や令孃向きは紋友禪、之を意氣向きとしたら絹縮の疋田絞り、染色は半襟と大差はありません、帶留は相變ず、寶石入金具のパチン留、紐の幅は三分と云ふ極く細い物が流行なり。

流行の冬物

▲女物にては縞御召にて柄向は昔の古渡唐棧風の澁味あるもの仕立晴れする樣なり、西京物にては十五圓より十七圓、男物にては西京の公貴織、千歳織十五圓より二十圓、米澤の一樂織・八王子の諸糸及び一樂は八九圓より十五六圓位柄向は澁味勝にて光澤ある品好み多し。

▲次に男女貴賤の別なく常用廣きは秩父銘仙にて本場にて五圓より七圓迄の柄向より年々進歩して女物などは御召風の柄となり瓦斯類の織物などは中々に器用に出來居れり、先づ風通織御召類似の品にては一寸見誤る程に出來居りて上等物七八圓より三四圓迄なり。

▲又近來は羽二重地の流行甚だしく友仙更紗形等には古書畫骨董の類を應用せる者多し男女共羽織裏などには最も用ゐられ居り代價は一反十五圓より十七圓位尺切にて六七十錢。

▲嶄新の織物にて流行し居るは丸帶にては相思　想織五十圓松代織六七十圓文祿織五十圓より六十圓、唐織や厚板織も奇拔の柄あり、唐織にて五十圓より百圓位、厚板織三十圓位にて一寸締めらるゝは五十圓より八十圓位。

▲又金泥織、銀泥織には織模樣のみならず縫模樣を施せし珍物も有り四五十圓位より八十圓、片側物にて十五圓より二十圓迄、男物米澤の好樂織絣は十圓より十二圓、羽織裏地にては琥珀地に縫模樣せし物にて圖は多く墨畫が流行し先づ一枚十六七圓、文祿御召は烏帽子織風になり縞及無地も有り無地は婦人のコート地に適當し一反卅五圓位迄なり。

巴里の流行化粧品

（某夫人の直談）

▲美人の居る所だけあつて、化粧品も佛國が一番のやうですれ、獨逸や、英國のも用いて見ましたが、私が實驗した限りではマア佛國のがよいやうに思はれます。

▲今用いてますのですか、やはり、佛國のですよ、然し佛國のだからつてどれも皆よいとばかりは申されません、中には贋分品の惡しいのもありますからよく見て買はないといけません。

▲媛の顏料ですか、御話申すより現品を御見せ申した方がよく分ります、此の顏料は佛語で「プードル、ド、リ」と申して、日本のお白粉と云つた樣のものです。

▲何んだか西洋化粧品でも使ひますといやにハイカラぶるなんて仰やる方もあるか知れませんが、私はどうしても、日本の御化粧品はいやな氣持がします、それに化粧の工合などがとても西洋品に叶ひません、西洋お白粉になりますと、自然の色を呈して何とも云へぬ高尙い氣持がしまして、晴々〳〵して參ります。

▲此の化粧のしかたですか、それはこれ（磁器入のクリームを持ちつつ）を少し手のひらに垂して水を二滴割りましたのを、お顏に一面塗まして から、化粧ばけで之（即ち「プードル、ド、リ」）を柔かに塗るです、さうしますと、あゝ（令孃の顏を指しつゝ）云ふ色艶になるんですよ。

それ（即ちクリーム）ですか、實に優しい柔かい香氣があつて、使用ツた後で何とも云へぬ爽快がします、夫に夏は日に燃けませんし、若し燃けても此の白粉で除けます、現に孃なども此の夏逗子に參つて潮風に曝されて居ましたが其の割合に燃けませんものれ、また冬など顏面のあれたのを防ぐにも妙です、それには就眠ます少し前にお顏を洗つて、それ（クリーム）を水と半〳〵位に解いて塗るのです。しますと二三日で直ぐになほります。

▲これは「オー、ド、トワレツト」と申して、矢張面部化粧用のものですが、ちよツと嗅いで御覽遊ばせ、よい芳香が致しませう、朝夕お顏を洗ひます時に、盥の中に五六滴たらしまして、それで洗面しますと、それは〳〵美快で氣が爽快して皮膚の色艶も奇麗なりますのれ。

▲齒香水ですか、大變功能のあるものださうですけれども、また使つて見ませんから、確かとは申されません、使ひ方ですれ食前食後に、水一合位へ十四五滴程混交まして含漱するのです、度々しますと齒根が堅固つて動揺なくなることだけは事實です、夫れにこれを綿に浸潤して嵌入しますと、大抵の痛齒は止りますれ。

▲香水ですか、これはエリオトロープ、こツちはエツサンスと申してこの會社製品中の一番良い品ださうです、これ（令孃の持てるハンカチーフを取上げて）なんか、フツてから左樣、今日で五日になりますが、この通りの香でまだ〳〵用られます、並の品ですとあせの臭と交つて何だか變な臭になるが常ですのにこの品ですとそんな事は御座いません。

▲會社の名ですか、佛國「キセロル化粧品製造會社」と申して、なんでも七八年以前に設立たものゝやうです、日本でも日本橋區通三丁目の丸善の化粧品部へでも注文たら必ず取つてくれるでしやう。

▲これを目付けましたのは、宿の知人で永らく佛國里昂の正金銀行支店に在勤して居た方から、わざく送つて下さつたのが抑々の初めで、試みに使つて見ました所が、大變よいものですから、知晉のお方々に押分もすれば御勸めも致し、又お望みにより先方へ注文もして差上げました。

▲外装は、この通り粗末ですか、何も内容さへ宜ければ、外装なンどは、とうでもよいぢやありませんか、それに他會社などの品物に比べますと、お直段は餘り安くないやうです。

▲この「キセロル」の化粧品は、なんでも永く里昂の醫科大學の教授して居られたペローとか仰つしやる薬學士が研究の結果ださうで、此會社の化粧品には、何れも皆殺菌性を持つて居るから、何時用ひて皮膚を害したり毒が含んであつたりする様の事はありません、これが尤も私の安神して用いて居ます理由なんです。

▲はア商標ですか、これですよ(と云ふを見れば、赤十字の中にXEROLと十文字に白く抜けり)

▲石鹸?、あゝ左様でしたれ、この不鹸こそ尤も御勸めいたします、質も極めて緻密に出來て居りまして、香氣がいやに高くなくて、優しい幽しい香がします、これはペロー薬學士が、佛國の萬國博覧會で金牌を享けた品ださうです。

▲賞牌と申して思ひ出しましたが、これは化粧品ではありませぬか、同會社の製品で、「香紙」と云ふものがあります、効用は室内の空氣を清鮮にして高尚な衛生的香氣と浸潤さするのださうですが、病室や寢室、それから長らく空屋になつて居た家、船室などの惡臭ある所には實に好です、これも佛國衛生博覧會で賞牌を得たものなさうです。

▲それから、御同様夏時になりますと、頭髪が惡臭くなてつ困りますが、此「キセロル」の「ローション」と云ふのをつけますと、直ぐ臭みが止つて、ホンノリとした香が殘ります、それにこれを用ると毛髪の抜けるのが止りますし、フケがなくなります、現に宿の知り合の御夫人がお産後、大變毛髪の抜けなさつんそうですが、これを用た爲めに今ではまたもとの様になりましたそうです。

▲日本の發賣品ですが、私今まで直接佛國から取つて居りますので、確と存じませんが、三四ヶ月前の佛國の雜誌に、キセロル會社の化粧品も愈々日本に一手輸入者が出來たと云ふやうな記事があつたやうですから、多分相常の化粧品店にあるでせうと存じます。

▲その外、「キシュドリン」(これは靴を履く人に入用の品で、それに足部の汗止です)とか口中用では「カシュー」(之は「セム」の様なものです)とか色々ありますが、靴墊位は日本の品でもどうやら間に合ひます。

萩　　大阪　森川はる子

うつしうゑし垣根のもとの秋萩は
下葉よりこそ色つきにけれ

月下散策　　播磨　しづえ

塗香に萩の露散る細道や
鈴虫姫へ歌聞きに行く

蕈の話

△菌類の中には壽命の極めて短かくして非常に腐敗し易いものと又た反對に壽命の極めて長く永に腐敗せぬものと二種類ある、萬年茸、猿の腰掛、エブリコなぞは壽命の極めて長い方であるが松茸は最も壽命の短い腐敗し易いものである、全體松茸は土地の濕氣で草や木の根の腐つて居る處へ生へるから松茸にも澤山の不潔な細菌が附着して居る、それが爲め採つてから二三日置くと直ぐに莖の中で蟲が生長する、俗に蟲入と云ふのは食用に供せられない、假令ひ蟲が湧かないでも蟲の卵子や外の細菌は澤山附着して居るから新鮮な松茸を料理するにも必ず先づ消毒法を施さなければならぬ。

△消毒法と云つても素人が臺所で行ふのは別に六ケ敷い事では無い、一つの法は一旦鹽水に漬けて置く事である、第二は強い酢で洗ふ事である、第三は一旦熱湯で茹て其湯を捨てるのである、此の三つの内孰れかを行つて料理しなければ甚だ危險である、殊に蟲入などを平氣で食するのは最も危險である、松茸を鹽漬にしたのは何うかと云ふに新しいものを直ぐ鹽へ漬けたのなら今の消毒法に叶つて居るから久しく貯へても差支が無い。

△理學者の說によれば松茸はテエルローゼが多量で極くの不消化物であるから料理法の何たるに拘らず病人や病後の衰弱者或は消化器の弱いものには嚴禁しなければならん、其學者が松茸を食べた後厠へ上つて大便を精密に檢査すると松茸の纖維が少しも消化せずに其儘出て居る事を發見した、だから大概な人でも多量に食しては其の胃腸が充分に消化し得る事は出來まいと思ふ。

△然し松茸は香味と風味の點に於て吾々の嗜好品であるから外の品物と配合して上手に料理すれば食膳の珍味である、又た滋養分も相應に多いから充分に消化されゝば營養品としての價値もあるけれども充分に消化させるのは健全な胃腸と其料理法の巧拙である。

△菌類の中には毒性の非常に強いものがある俗に蠅取茸或はヘツ茸は、故醫學博士猪子吉人氏が其の中よりアマニチンと云ふ毒物を發見して學術社會の賞讃を博された程であつて人體には大毒だ、其外ベニ茸と云つて色の紅いものは有毒なものがある。一本シメヂ、月夜茸、タマベラ茸、スツポン茸なども皆な有毒性だから注意しなければならん。

選拔留學生とブリンマー女學校

〔星野愛子の事〕

女子英學塾長津田梅子女史の評薦に成る米國婦人有志者の奬學金を得て、九月六日橫濱解纜の加賀丸に搭乘し、米國へ留學の途に上つた星野愛子の事は、當時の新聞紙にも傳へられたが、記者は猶詳しく同女史の性行、經歷、及將に入學せんとするブリンマー女子大學の模樣等を聞かんが爲、孃の次兄なる星野光多氏を訪問して其概略を知り得たから、兎角引込思案なる我邦の婦人に對し一服の興奮劑として紹介いたします。

▲英語女塾の二秀才

愛子の郷里は群馬縣利根郡沼田町で、勿論驚くべき程の秀才ではあるまいが、さりとて普通の凡才でないとは兄妹の五人共悉く社會に頭角を見はして居るのでも知らるゝのである、併し愛子の學歷は頗る單純なもので、十四歲の時郷里の高等小學校を卒業し、後橫濱のフェリス女學校に入り、在學五年にして同校を卒り、三十七年の春、麴町區一番町なる津田女史の英學塾に入るに至つて、初めて其才能の非凡なるを知られたのである、コノ英語女塾の課程は三年であるが愛子は二年で卒業し、而も在學中は天野爲之氏の令孃文子と共に二秀才として囑目せられた程だから、卒業の際も最優等の成績で、同時に靜岡市なる英和女學校の教師として聘せられた。

▲方針は科學研究

然るに間もなく米國ブリンマー女子大學に留學すべき第四回の選拔試驗が行はるゝ事となつたので、愛子は卒先して其募集に應じ、去る七月中競爭者七人中の最高點で首尾よく選拔生の榮冠を荷ふたのである。そこで愛子が渡米後の方針は（文學及び語學を研究すべし、と傳ふる向もあれど）、次兄光多氏の語る處によれば、現今我邦の女子教育に最も缺けたるは科學的智識で其缺點を補ふ爲め此際理科學を修めた方が得策であらうと信ずるから、本人にも此事を勸告してあるが、ブリーマン大學は入校後一年間豫科を修めねばならぬ規定であるから、其一年間に於て何れとも決定する由である。

▲謙遜の德と才學

愛子の最も得意とする學科は何であるかと云へば、勿論英語であるが、其英語も世の所謂才子的語學でなく、殆んど十年一日の如く着々として根本から仕上げて行つた勉學であるから素養は確なもので、就中得意とする處は文典と文章の綴方とで、殊に文典の如きは本邦人の最も困難とするところであるが、孃が文典に精通して居る事は、教師の外國人も一驚を吃してゐるさうな。然し何程學問ばかり出來ても肝腎な性質が傲慢であつたり又其學問を鼻にかけたりする樣では折角の才女も臺

なしになる譯であるが愛子には其缺點がない、穩當で無口で頗る謙遜家との世評である、同窓中でも、感情に趨らず理に偏らず、試驗の成績等は毎でも優等の方であるが、曾て自分の口から之を喋々したことがないのみか、家人にすら告げぬから父兄は後で人から聞いて始めて喜ぶ位であると。

▲米國第一流の女子大學

サテ此謙遜にして才能秀でた婦人を新に迎へんとする、プリンマーカレーヂは如何なる學校であるかと言ふに、これぞ全米の女性が籍を置くだに光榮とする第一流の女子大學である、其位置は費府を距る約十五哩の地にあり、校舍の前面は滿目渺茫たる沃野につゞいて富豪の別墅が見え、後部は千年の老樹茂る深林を控へて眺望絶佳なる自然境に接して校舍の建物の高壯雅麗なるは到底日本などに見ることが出來ぬ位であると、而も汽車あり馬車ありで、都會との交通は極めて頻繁であるから何一つ不自由な事はない。そこで學科の程度は如何かと云ふに、流石に米國第一流と稱さるゝだけに、學術程度の高いのと丗人に尊重せらるゝ點とは他に匹敵するものがなく、此學校を卒業すれば男子の大學敎授ともなれる資格があるので、他の女子大學を卒業した生徒が特に此校に籍をおいて社交的尊敬を博そうとして居るのを見ても如何にプリンマーの信用が世間に重きをなして居るかを知るに足るのである。

▲學科の內容と學費の概算

又修業年限は豫科一年、本科三年で、文科、醫科、科學科の三つに區別されてあるが日本女子と米國女子とは語學の點に於て少々異つた處がある、米國少女の生徒にはグリーキ語と羅甸語とが必須科であるが、日本留學生には此兩科を省く代りに、獨語若くは佛語と、英語とを以て必須科としてある。そこで卒業後はM.A. 即ち文學士、又はP.H.D.哲學博士の稱號を與へられる、現に米國の女子で同校の博士號を有する者も少くないとのこと。又學費は一ヶ月何程要するかと云へば之は標準があつて無い樣なもので、贅澤な米國の女學生の中には一ヶ月二百弗以上五百弗位を濫費するのがあるかと思へば、又五十弗以下で濟まして居る質素な者もある、之等は多く日本の留學生で元來富の程度が違ふのだから、之も亦た止むを得ぬ次第である。

▲選拔委員と卒業生

此學校に留學すべき女學生に就て本邦の選拔試驗委員は、津田梅子、瓜生繁子（中將夫人）島田三郎、元良勇次郎、神田乃武、巖本善治、諸氏の外十數名と定められ、今回の試驗は、神田男爵、元良博士の兩委員が主となりて行はれたさうである、又星野愛子は、本邦留學生として第四回目に選拔されたので、第一回は目下同志社女學校の英語教師たる杉田道子で、次は現今高等女子師範學校に教鞭を執りつゝある河井みち

子、第三回は鈴木歌子と云ふ秀才で、本年同校を卒業して八月下旬に歸朝の途に就いた筈である、又從來の留學生は小使錢に多少の不自由があつて國元より毎月十圓内外の補助を仰いで居つたが、今回からは一切奬學金の中より出支する事となつたさうであるから少しも金錢の懸念はない。記者は刮目して第五回の選拔生に、如何なる秀才の見はるゝかを待ませう。

△日本家庭辭書　（西山悊治著）

今の世に趣味と實益を兼たる家庭辭書に乏しきは出版界の一缺點なるが、辭書といへば概して文字の羅列に止まりて實際的必要に縁遠きを免かれずして、折角の、編纂物も徒らに机上の置物たるに止まるは、遺憾編者の用意の足らざる所なるが、本篇は稍この弊を脱し、專ら實際的修得の意を主としたるは誠に好き着眼にして、目を分つこと凡そ二十五家庭に瀕する一切の實用項目を網羅して洩さず一々簡單なる説明をなしたる其の勞尤も多しとすべし唯難をいへば聊か理論に傾きたるもの多くして趣味を滿足せしむるに缺乏したるの憾なしとせず。（定價一圓三十錢京橋南大工町弘道館發行）

△舊山河　（文淵堂發行）

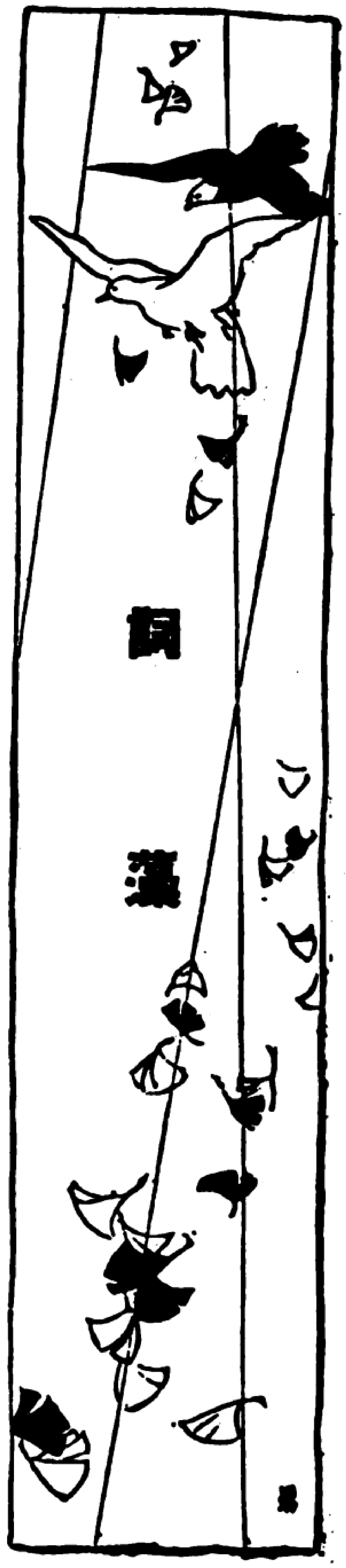
著者大倉桃郎の名は文界に未だ其名を成さすと雖も、其人は名譽ある日露戰役に從事して南山の激戰、旅順の包圍、奉天會戰等十數度の戰鬪に從事したる軍曹にして創を被ぶこと再三、萬死の間に一生を得たる人なりといふを聞きては吾人又懼然として襟を正さゞるを得ず而して本篇の如き其の着眼、文章共に紛々たる俗小説の群を抜き、兎も角も今の小説界中に新らしき趣味を以て讀まれたる好小説なりといふを憚からざるなり、蓋し日露戰爭が與へたる文界産物の一に加ふべきものならんか。文淵堂出版書中近來の好書なり。（定價六十錢）

△生理衛生講和　（早稻田大學出版所糸左近著）

早稻田の通俗講義第四編として發行せり生理といひ、衛生といひ兎角にむつかしき、身體機關の構造を説明しては事理を了解する前にまづ讀者の嫌厭を來するを免かれざるものなり、然るに衛生論に一と見識を持てる糸氏は決して斯る嫌厭すべき難文字を羅列せずして何人のも了解し易き方法を以て、身體全部の構造を説き明かしたれば讀者は恰も人間の腹の中に這入つて芝居でも見るが如くに、血液とか、神經とか、筋肉とか呼吸器とかいふものを、一々會得し得るなり、其講説の妙なる事は快刀を以て亂麻を斷つがごとしとも評すべし附錄には、『口は禍の門』『天授の衣服』『長壽一夜物語』など普通のお醫者樣からは迚も聞く事の出來ぬ妙文字あり。（定價六十錢）

△小兒養育の心得　（長濱宗吉著丸善書店）

著者は大阪府立高等醫學校病院にて兒科の專門家として造詣深き人なり、何人も子を持つて知らざるべからざるは養育の方法にて出産後より學齡時期に至る迄の數年間は生育上尤も大切なる注意を要すべき時期なり、本書は恰も此の期間に於ける小兒一切の衛生的事項を學説上丼びに實際上より說述して洩らす處なく乳の事、乳母の事、子守の事、食物の事、寢具の遊戯の事より、病氣一切の心得を丁寧親切に示したるものなれば、結婚、出産の祝ひ物として至極適當の書物なるべし。（定價八十錢）



（秀）故里の妹へ

羽後　渡邊宮子

なつかしき御方よりの玉章、いと嬉しくいくたびか繰り返しながめ申候。鳥海山の楓も漸やく色違ひてこゝ二三日間が見頃との由聞くに就けても昨秋御身と共に植えにし若楓は乙女の掌にも譬ふべき艶なる紅葉を廣からぬ庭を我は顔に笑み誇り居り候や聞かまほしく存候、最上河畔の女郎花、ゆかりの色の藤袴など變ることなくほころびて春の野邊にも勝るべく候はん。あれやこれや故里をおもほへば西の空うら戀しく思はず涙を催し候に「姉上のましまさば此秋の今一しほうれしからんと、そこには中々に都の秋にゑひ給ひて故里の秋など思ひ浮べ玉ふことだになかるべしと存じ候……」。

など讀みまゐらせし時は今にも飛び出したき心地いたし候、誰も田舍にありては都の事慕はるゝものとて強ちに理なきことゝは申難く候へ共、情の薄き紙よりも甚しき塵の巷に咽び而も知らぬ他人に厭はるゝ今の身、いかで樂しきものに候ふべき、ならば俱に睦しく故里に暮して居たく、たゞ恨めしきは浮世の定よ、父さへ世にまさば年端も行かぬ御身にかゝる苦勞を懸けざりしものを、さはれいとしの妹よ儚きは夕の花に、晨の露、皆浮世のならはしに候へば只なき事もあきらめ玉ひて母上に、あらぬ限りの孝養を此姉に代りて盡くさるゝやう呉れ〴〵も頼み參らせ候。百尋千尋書くとても、いつとてつき申さゞるべければ

又も呼びます主人の聲……いつもの掃除なよとの仰なるべし、いざさらば妹？

（秀）避暑日記

福岡　木下あさの

○八月七日。書窓の外、馬の鈴音ちやら〳〵と、賑かなる笑聲の漏りゆるに、簾をまくりて屋外に坐すれば、屋外山青く白衣の人往來す。

○九日。次の家にあり、枕を驚かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ、見渡せば海に一帆の影なし、唯大鷲が嘴をあげ翼を張れるが如き初音島の巨岩の、獨り大濤をかぶり白煙を飛散らしつゝ、屹として萬波の表に立つあるのみ、ア、海よ、ア、岩よ、爾の姿は偉大なり、爾の威

は偉大なり、古えの大人も曾て背が如く天を仰ぎ永遠を慕ひ、一世を蔽として崇高の歌をつゞけたりき、攻め寄する浪に向ふ湖水の畔を見ずや、人をして當年の相撲太郎を偲ばしむ。

○十二日　驟雨ひて聞きたる、雨はれて黄昏の庭に立てば、蛙聲風に乘りて斷り聞々、三珠原川一筋夕闇を縫ふて仄白し。

○十三日　碧空點雲なく、透明にして且寂然たり、天に向つて石を投ぜば、琅然として空鳴らむかと思ふ。

○十八日　白日山に入り、夜は夕と倶に生ず、外に出づれば川に釣する人あり、談笑の聲あり、笛聲あり、花火を揚ぐる小供あり。

○二十二日　早起野に立てば、冷りとしたる風そよ吹きて、青稻の點滴眞珠の降るに似たり、紅蓮白蓮の香頻りに薫ず、靜かなる朝よ、人を默禱する自然の愛は水の如く身を侵せり、山峰に對して天地の悠久を憶ふ。

○二十五日　墨繪の如き樹影を浴びて獨り中庭の夜に立てば、月を帶ぶる月草ほのかに香りて、花の月と咏く聲も聽くべき心地す、俯して其一枝を折らんとすれば、しとゞ露に濡れたり、折れば月影ほろ／＼とこぼされぬ。

○二十九日　曉色天にあり白露地に滿つ、稻葉、粟葉、蕎花、菫花、すべて露の中にあり、蟲聲水のごとく流る。

○三十一日　夜行きて畑の中に佇む、月は今彼方の大竹藪を離れて、清光落々として上天下地を侵し、身は水中に立つの思あり、星の光何ぞうすき、明神の森も淡くして煙と見ゆめり、靜かに立ちてあれば、吾側なる桑の葉、玉蜀黍の葉は月光を帶びて青光りに光り、綠葉はさや／＼と月に囁く、蟲の滋き野を踏めば、月光爪先きに散り行く、露のこぼるるなり、籔のあたりには、頻りに蟲の聲す、月の明かに彼等も得眠らぬなるべし。

○九月一日　空を望めば晴鈴垂むで笛のごとく、白雲遲々たり、林の梢葉を踏むで後山にのぼる。

（評）筆意洗新、物外の人と語る心地す

（完）須磨の月夜

越前　島　萬壽子

遠くは四國路近くは淡路、紀伊の山々もうす霞に包まれて名にしおふ須磨の浦はいつしか靜かに暮れはてぬ。おだやかになぎたる瀬戸内海の波間に浮べる今宵の月のいかにさやかなるよ。かくばかり心ゆく夜を空しく過さんは口惜しうで濱邊を逍遙せばやと唯獨り磯近くいで立ちぬ。漁歌高くおくれて歸り來る海士の小舟そを磯に立ちて待てる妻、はたさら／＼と砕け散る金波銀波皆これ一幅の活畫なり、魚籠をおもらに提げて家路へ急ぐ二人の影うすうなりつ、あはれその家には父の歸りおそきを待ちわぶ子もあらんなど彼等の樂しげなるさまを想像しつゝ輝くばかりの砂原をふみてそゞろ彼方へと歩をうつしぬ。折柄波の音の絶間に何處よりか優しき箏琴の音聞ゆ、いかなる人のすさびやにやと床しう思はれて夢心地に松林の傍まで辿り來りぬ。見ればほの暗う茂れる木下蔭にあてびとの なりどころやうの住居ありて琴の調べはそこより洩るゝなりき。或は高う或は低く松風の音に合してしらぶる音の何となう心の底までしみわたりぬ。さやけき月床しき琴の音、波の響き、松風の音いかに心ゆく夜ならずや暫しは恍惚として佇みぬ。

ふと琴の音とだえぬと思ふまた人の氣勢して松林を此方へ靜かに歩みくる姿ほの見ゆ。風にもえ堪えぬ細き姿は必ず晝間見し彼の君ならむ近づくまゝに果して彼の君なりき、澄みわたれる月に照らされしそのお

もは青きばかりに白く宛然大理石にきざみし女神の如氣高う見えぬ、さるを年久しく肺てふ病になやみて花ならば眞盛りの頃を寂しう別莊にて病をやしなひ給ふと聞きしが、思へばさきの琴の音もまさしく彼の君のしらべましゝならむ。

と思へば胸いたましう覺えてさやかなりし琴の音もいと哀れに悲しう耳にのこりつゝあはれ若きみ胸にはいかなる思ひやどるらむ夜毎の月にむかひてむやりにと調べます琴もいかに悲しき音して胸にひゞくらむ。ゆかりなき我身さへに思はず涙ぐまるゝものを……

あゝ神よ幸うすき君が行末を守らせ給へ！

仰げば月は雲なき空にいよ〳〵澄みわたりて眞砂に佇むわが姿を照らしつ、音するはたゞ波のひゞきと颯々たる松風の聲のみ！

（秀）故郷の妹の許へ

神戸　むらさき

なつかしき百合ちやんお身と新橋ステーションで露なき袖をしぼりつゝわかれたのももう一月前となりました御地は御兩親樣はじめ皆さん御變もありませんか。

當地はそれは〳〵暑い事それにつけても思ひ出すは故郷の事ばかりよ。

いつも〳〵こんなに暑い時は御身と共に青葉の蔭に詩集繙いたり月の夜には松風や水の音のする南のゑんで琴を合せるとおばあ樣がお月見遊しながら聞てゐらしてあゝいゝ氣持だ極樂とはこんな處だらうなどゝおつしやてほんとに〳〵樂しい事ばかりだつてね。

かうして書てるうちも武ちやんにせかまれて「たゝく手をしるべに出でよこい錦鯉」と唱ひながらふをやつた事だのいろ〳〵の事があとから幻の樣にわいてくるのよ今頃御身も一人琴にむかつて私の事を思ひ出してゐると信じますよ。

一度は誰も浮世の波にこぎ出るとは思ひながらも父母君もなくはらからもなき淋しき我家庭只々ふるさとの人のみこひしくなつかしく

くまもなくてらせる宮の月の面に
うつしてみせよふるさとの庭

折々は都の事どもたより聞かせて頂戴れ

折角御暑さおいとひなさい

當地でも皆々ぶじに暮して居りますから御安心下さいどうぞ御兩親樣おばあ樣によろしく隨分と孝養おつくしなさい

中々名殘は盡ませんがこれでおしき筆とめます。　御きげんよう

（秀）舟遊び

德島　若槻淑

秋とは云へど初秋の風靜かなる好天氣を幸ひ舟遊びせばやと思立ち友を誘ひて柴の戸を出づ細き野道を踏み分け松の並木を過ぎやがて海岸に着す海は一面に凪ぎ渡りて恰も千尋の鏡を敷ける如し父母に命じ給しにや日頃懇意の船頭早くも舟を浮べて我等を迎ふる有り嬉さ直に乘り込み穩なる波上を靜に漕し始む、そよ〳〵と吹く海上の涼風に雲の鬢毛揺らする心地よさちら〳〵見ゆる眞帆片帆無數の小魚漂間を遊泳す愛らしき用意の釣道具取り出し釣るる〳〵遙か向の沖を見渡せば網舟釣舟の多く出て魚を漁る樣目先に見ゆ荒濱の巖に碎けて白き泡を飛ばす邊り群り騷ぐ數多の鷗見付けて追行く漁り舟淡き煙を空に殘し濱を離立て進み行く蒸汽船折柄颯と吹來る一陣の清風につれて聞ゆるボート歌見れば中學の制服を纏ひし少年意氣揚々として二艘のボートを漕ぎ來

しさ砂白き磯邊には、出て貝拾ふ里の乙女等の仇氣なき濱千鳥の群に後れて二羽三羽友を呼びつゝ濱間に漂ふなど是自然の描きし一大畫幅此美を愛せざらん數時間畫中の人となりあまりの面白さに何事も忘れ果しが、いつしか夕暮近くなりしに驚き心は後に殘れども見返り勝に立歸る愉快なりしよ舟遊び。

(秀) 書の樂しみ

但馬　白萩女史

凡そ何事でも面白く樂しむには先づ第一に友達がなくては出來難いものでありますが只讀書だけは一人で樂しむ事が出來ます。

一室の内に潜みて居ても天下を見萬物の理を知り丁度机上に宇宙の森羅萬象を藏る樣でありますし何千年の後に在ても何千年の昔を見今の世に古人にむかひ身が愚かでも聖賢と交り互ひに机を圍んで語る樣に思はれ座を隔てずして教を受けらるゝは此れ皆讀書の樂しみであります。

凡ての事の中讀書にまさる利益はありませんそれにもかゝはらず世の文を好まぬと云ふ人は此の上もない不幸の人だと思ひます反對に此れを好む人は此の上もない天下の樂しみを得た人と云ふべしです。

まして月々發行になる女學世界は妾等！

(秀) 病める友の許に

赤坂　森　英子

渚邊の客も秋風の音づれに、都のしたつてかへるを見るにつけ、都戀しの情に堪えられぬとは美代子樣餘りお心弱いこと貴女もうぢきですよ、それわお淋いでしよう賑やかな人聲が淋い蟲の音にかはり山の端に上る月もさえて參りますから夕暮などは早くお休みなすつて淋しい景をごらんにならぬやうにして今少し御辛棒遊ばせよ、私とて思ひは同じなんですよ都の野は未だ萩かたく露も穗に出ず、女郎花も化粧致さぬ、淋しい一方なんですの、今に千草の花が一時に開けば貴女もたれやらが仰せられし白萩の氣高きみ姿のなよ〳〵と枝もたはゝなる花なればこそ眞けれ、秋風吹きすさむ野末に立ち給ひてもたほれぬ程になつてかへつて下さいね其時は又昔しのぶが原に一日暮しましよう、何本もう一歩のところ故お大切にして下さいましよ。　左様なら

(秀) 幼き友の許に

あきはぎ

はなちやん御機嫌ようございますか。あついので御困りでせう、毎日何して居らつしやるの？あてゝ見ませうか、朝は朝顔に御早うでせう、それからおひるは、そうね、千代紙で姉樣（あねさま）ごと？夕方は跣足（はだし）で水まきね、それからお風呂で、そしてきれいな御浴衣着て唱歌でせう、ねよくあたつたでせう!?私は朝顔に御早うではございませんのいつも鷄にお遲うつて言はれて居ますわ、そう、うちの鷄ほんとに可愛らしいのです、よ二十羽位、はなちやんのお年二つ合せたよりまだ多いのですわねひよっ子がチーチーさはいで面白うございますの。

花ちやんとこの金絲雀丈夫？金魚大きくなつて？歸つたらすぐ見せて頂きませうね。

あのね封じたのは百合の花びら、無邪氣なあなたの日記にはさまれ度いつて云ふのですもの。一つは、あの、清子さんに何本、きよ子さん此頃どうして居らつしやるでせうね、花ちやん！偉いお父樣優しいお母樣を持つて居らつしやるのはどんなに幸か、知れませんよあなたの御役は

その温かな優しい御心で、淋しい清子さんを慰めてお上げなさる事なのですよ。

（秀）　旅行中名古屋より

名古屋　小山かく子

人口三十萬三府に次ての金城下は、どのような大都會か早く見たいと勇んで参りました、然し来て見れば左程でもありません。

御地、札幌に比して勝つた所は全市悉く瓦屋根であるのと、電線が曳かれてあるのと、戸數の多いのと、只こんなものであらうと思ひます。

翌日市中を見物致しまして特別に感じた事を申上て見ませう。

廣小路、傳馬町、本町の一部を除くの外、道路の狭いこと、丸で御地の横町若くは路次に等しい位なので肩につかへる様な気持が致しました。戸〆りが各戸二重三重にされてあるのは盗人の多い證據にて、家屋の一般に低いのは地震のためかと思ひます。

理髪店は、かり込み六錢ひげ四錢と申上ますならば十八錢を拂ふのと比べて雲泥の差とも思はれますが、店の設備から考へれば御地の方が却て安價のようであります、湯錢の一錢五厘　又同様であります。

昨日市中見物の砌、好物の温飩を食る積りにて凡十四五軒覗きましたが、皆腰掛けでやるお客様計り多く御地のよふに、澤山の座敷を備へた家は殆どなく、なれぬ身には、何となくきまり悪く到頭ひもじい思ひをして宿屋まで歸りました。

安いのは野菜物で、札幌ならば十錢にいくつと申すのを、こちらにては一錢にいくつと申して一錢が單價となつております、も一つの眼だつたとは婦人が大抵昔風の髪を結ひ、よくお化粧をすることであります、美人の産地だけあつて。……

別封名古屋明細圖、及び風景繪葉書十二枚一組差上ました。明後日の一番で伊勢に向ひます、會由裏前に言葉や何かの事を申上ます、今日は先づこれきり……。

（秀）　月

名古屋　鈴木あさ子

そらすみわたる秋の夜に　光りもさえて月かげは
高峯の上に出てそめぬ　海原遠き浜のへに
磯山松の葉かくれに　千草にしきの秋野邊に
松の音きよき庭の面に　春のやよひの花のかげ
夏の卯月の垣の外　秋はさかりの萩の色
冬は影なき枯木立　一つ心にてらせども
見る人々の心にて　こゝに笑顔をてらせども
かしこは涙にやどるらん　われのかゝれぬうきよとは
笑ふも泣くも時なれや　花もあらしにちるものを
さえたる月もたのまれず　空ゆくくもに任せては
只吾心ひとつにて　くまなき月のひかりさへ
みる度ごとにかはるなり

（秀）　森かげ

羽後　渡邊宮子

高き森の香に酔うて、　静かに森を逍遥へば、
萼ごと多き凋零の、　胸にも幸の血ゆらぐ。
晶の眞玉と迸しる、　泉の水に口漱ぎ、
冷たき息をそと吹きて、　そゞろに誦する詩の興や。
葉擦やをしき囁きは、　あめなる神のしめごとか、
あゆみを止めて仰向けは　喧界天の思ひかな。

短文

◎印は入賞

◎桔梗徑

美濃　可兒ひさゑ

八雲立つ花の出雲の秋の野にあがさすらひの兄さんは、ひんがしのみ空を故さとゝ垂ちれよわざ妹子よと偲びおはさむ、などそゞろ心の桔梗小みち　日は落ちがての鶺鴒の翅によく似たる薄彩雲のうすれ〳〵て、はては儚なき夢のやう……想ひに星のきらめきそめぬ。

評、無韻の詩、有聲の畫。

◎梭の音

栃木　柴山たけ子

夜の十一時頃機織る音に樂しき夢は破られて、思は故郷の空、母上もやはり妾に送るべく袷を織つてゐるのであらうか、そを錦衣に更へて、母上を喜ばせるのは何時……梭の音はます〳〵冴えて、妾に勉め〳〵といふてゐるようである。

（評）好題目、唐人の詩を讀む心地す、情景ともに可なりとや云はん、

◎妹が出來ました

福井　井田美子

姉さん妾に可愛い妹が出來ましたの。兄さんは弟だと云ッていらッしやいますけれ共、妾は妹が出來たから嬉しうございます。姉さんは如何お思ひなすッて？。名は菊ちやんと云ふの。母さんもお障りはございません。

（評）可憐なる消息文、以て範と爲すに足る、

◎水面の美

愛知　小栗幸子

鏡の樣な水の上に蘆の短いのや長いのが入混つて行儀よく列んで露の玉を帶んで居ます、かはゆらしい小さな浮草が點々と彼處に一群、此處に一群、朝日がうら〳〵と昇つて愛らしい浮草にパッと輝いて、朝風そよ〳〵、金波や銀波きら〳〵、蘆の露は紫水晶の樣、蟲や小さな魚共喜んで幾つも〳〵水の輪を作ります、あゝ水面の美。

（評）造化の小ぎれを縫ひつゞりたる佳文。

◎清水

姫路　濱田貴惠子

丁度牧場の夕暮れ響き渡る小羊の首についてゐる鈴の音のそれの樣、チヨロ〳〵と絶えず妾の家の側の岩の中から清らかな水が湧き出て居る。此暑さに旅人は大抵此清水で喉を濕して行くのであるが、何うかすると木屑や落葉などを投込んで、知らず顔に行く人もある。

（評）餘無き衆生は度し難し

◎秋の夕暮

芝　新野すえ

雲いろ〳〵の夕暮行衛も知らず飛ぶ鳥を眺めつ、言まじ憶ふまじと心に誓ひし過去をさても不甲斐なしや、又しても獨り思ひなやむ樣に肩させ裾させと敎ふ蟲の音も、いと繁く亡き父上が妾の產聲を上げし時植付給ひし桐の葉一落ちぬ。

（評）着想面白し、何となくあはれに物凄し。

◎顔から火

千葉 伊藤壯子

此の夏歸省した芳雄さんは、十年昔、まゝ事遊びの妾が夫で、いつも妾がお酌をして上げたの！先達て里の土橋でばつたり逢つたの、何となく耻かしかつた所へ、眠つて居たと思つた武坊が、突然背中から妾をかあちやんと呼んで了つたの。

（評）滑稽にして情味あり

◎初秋の夜

東京 宮崎ゆき

ホーホーホタルコイ……遠く微かに聞える子供の聲自分は、丁度それに引き付けられた樣に、フラリ家を出た。今はもう立秋の、でも晝は流石に暑い時もあるが、夜は早木立を渡つて來る風も、どこかこう淋しい、田毎にすだく蟲の聲も、眠るがやうな人の心を、呼び醒ますやう、噫秋は來た。きつと秋は夜から、だんだんに色どつて行くのであろう？

（評）秋は夜から彩どつて行く、いかに面白き形容なるよ、あゝ月よ、あゝ蟲よ、皆夜の物ぞかし。

◎わが家

大和 西尾とし子

兄上の作られた蔬菜の調理法を妾は好きな女學世界に教へられて、いつも樂しい晩食の膳をにぎはします、皆んなは舌皷しながら、面白い話の内に食し終れば、一家五人打連れて、裏へ散步に行きます、其處は蟲もなけば、花も咲きます、殊に、月夜などには、長がい葡萄の房が、おのがじし、玉の影を我家の軒に投げて、居ますので、私は常も身を飾る金剛石よりが、家を飾る葡萄の房が、必つと貴といだろうと思ふのです、

（評）しかのたまふ御身の心ばへもまた貴し。

◎夕雲

能登 粟倉一子

女神のしとれとも覺ゆるが如き、紫淡き一連の夕雲は今し彼方にそびえ立つ蓬萊山の松の林を横ぎりつ、靜かに〳〵に南の方に流れ行く。……吁かれ雲の行く處そも詩の神の棲家なるか。

（評）然り詩の神の住家なるべし

◎石狩河畔の夕

石狩 尾崎雪子

靜かな石狩川の河畔!!!帆懸の船はゆらりゆらりと辷つて居る、太陽は西海に沈まんとして眞紅の雲は大空に漂ひ、船の影と夫が一しよに河水に寫つて居る美しさ恰も何時かの雜誌の口繪にあつた畫のよーであつた。

（評）斯文亦た一幅の水彩畫。

◎安心立命

姫路 船戸ゆき子

徒に高遠の哲理を研めんとして不可解を唱ふるの愚を學ぶをやめよ、汝須く品性の修養を勉むべし、而して能く、職務に忠實なれ「仕事は品性の教育者なり」不撓不屈最も職業に忠實なる者は世間的安心立命を得たる者ならざるか。

（評）健全なる思想

◎死の神

兵庫　秋山靜子

水は淀んで色淡き川面を眺め、さも惱めしそうに何をか囁やく一個の美人、髮ばらゝに顏色青褪め、遙かに西天を仰ぎ合掌して祈念の態、あはれこの美人は如何なる秘密の種を抱きしものなるや、つい今迄黯澹たる重雲に包まれて居たもの慘い鎌切形の一痕の月、パッと顯はれしと見る間に彼の美人の姿は、何れにか消へ失せてしまつた。

（評）鬼氣人を襲ふ。

◎鈴蟲

越前　井田ふみ子

妹に傘をさゝせ乍ら淋しう降る雨の中に、優しい鈴蟲のなきがらを埋めるので御座います、姉さんの御病氣の中夕なく〳〵涼しい聲で慰めました此の鈴蟲、あゝ姉さんの位碑に落した涙を姉さんのひと七日の朝妾は又此の鈴蟲のなきがらにそゝいだのです。

（評）ア、同情の涙ある哉。

豊年

下野　齋藤まつ子

「一手づゝ植ゑて千里の青田哉」てふ時節もいつの間にやら過ぎ去つて「世の中は見渡すかぎり稲波哉」とも言ふべき時節となりました、常に座敷の中にて苦い顏をして居る家の翁も此の頃は、毎日裏木戸から出ては稲波と天とを眺めて一人ほゝ笑みながら座敷に歸るのが例です。

好書

愛知　板倉すゑ

木の葉しぼみ軒の風鈴もだまつて居て、寒暖計は九十度をさすと云ふ暑さであるに、唯涼しいのは後ろの床の間にかゝつてある瀧の軸だけである、此の畵を見て居るとほんとに暑さがどこゑやら、見れば見るほど水音が聞へるやうで、飛沫がかゝるやうだ。嗚呼此畵暑の神ではないか、

（評）清風帋上に生ず、

朝顏と白露

羽後　渡邊宮子

朝顏は猶ほ一朝の榮があり、白露は猶ほ暫時でも緑の葉に安樂の夢を結ぶ。けれども妾は一朝の榮もなく、束の間の安逸の夢をさへ結び得られぬとは、何と情ない劣等なものではありますまいか。妾は朝顏や白露が羨ましい。

（評）しかく世をはかなみ玉ひぞ、人は朝顏、白露の如く、はかなきものにてはあらぬぞらかし。

無邪氣

岩代　菅野かく

今年四つになる花ちやん、初めて鏡の前に立つた時鏡に映る己の姿を珍らしさうに見つめて姉さんこれ誰、花ちやんよ、といふと莞爾々々して花ちやんはこゝに居たよ、と己が身を指している可愛花ちやん。

亡き母君

伯耆　竹本はるえ

夕陽は全く沈んで、玲瓏たる夕暮の空に、輝く星の影がキラ〳〵。抱いてる妹のとみ子、可愛い手で星を指さし乍ら「アッコ〳〵に母ちやんが……とみも行くは」つてすかいてもなだめても聞かばこそはては可愛い眼に、楓の樣な手をあてゝ泣き出した、妾もう悲しさが胸一杯になつて覺えずハラ〳〵と涙が溢れた。アゝ懷しい母君?。いとしの妹よ?……

（評）新鮮

小女心

岐阜　酒井登美子

御隣の梅ちやんに、「梅ちやん幾歳御幾歳」と問へば、梅ちやんは得意顔に、まんまるい目を見はつて、いきなり背延して、「姉ちやん私三ちゆ」僅三歳の小女でも背高くは有りたいのかと、思はずほゝ笑まれました。

月夜

姫路　高德愛子

今年五つに成る妹と二人過ぎにし昔を話しあい今しも十三夜の月影は小庭に影をやどしぬ、妾はこれを見るともせざりき、妹はお月様えらいなと歌ひ出しぬ、あゝ姉の子よ汝は母君をしらざるか、四年の昔の今夜母君は、と袖を顔にあてぬ、妹は姉さん何泣くのお月様が笑ろーよあゝ

音樂會

備後　小野吉子

夏祭りにと久々にて古里にかへりぬ折しも田舎にてはたへてきゝし事なき程のもの音何事にやとうち問へば故になく貧しき人を救はんの意に出でし音樂會なりとあゝこの深山の奥にも人のなさけは溢るゝものかなと香れは深き感に打たれぬ。

（評）十室の邑必ず忠信あらん。

述懐

河内　田中八須子

二年前の春の頃霞と共に故郷を立ちて都の學びやに御教うけて行末は業なし終へて故郷へ錦をつけて歸る日を明暮待ちし甲斐もなく今年の春の末つ方物の哀れはめぐりなく身にいたづらの現はれて心ならずも慕ある教の主や情ある親しき友と袖分けて身の行末も白雲の深き山家の詫住居あはれ二八の花の身の色香も今やうせはてゝ世の戀しくも立秋の草葉にしげく置くは身をはかなみて泣くわれの落つる涙の雫なれ。

月

橫濱　杉本芳子

妹の衣早く仕上げて悦ばせうと蚊帳の下に針の手を急いで居りますと折柄椽にさす月の光にふと庭面を眺めると咲き亂れた萩の花かげが地にはつきりと映つて居ります、自分は此氣色に思はず見とれて居りました、……すると垣のあたりにあはたゞしく鳴き出した蟋蟀の聲……私は驚いて又縫ふ手を急ぎだした。

開業醫

河内　田中八須子

この頃開業せられた眼科醫者の玄關先に、いつも澤山な履物が脫である ので餘程よく見られるのと思つて、四五日前雨を冒して診察を請に參りましたが一向に患者らしき人が見えませなんだ。妾は餘りの不思議さに歸りがけ熟と其履物を見ましたら、降雨の日であるに高足や利久が少なくて、引摺が多いのみならず内には雪駄が二足あつたには呆れた。

淋しみ

丹波　なみ子

樂しき休暇早過ぎて、なつかしき姉様は汽笛一聲御機嫌よふの聲をのこして停車場をはなれぬ。あゝ汽車なかりせば、も一二町はお送り申さん

に、されど、いかに別れの、つきざらん、など思ひつゝ家路へ歸る足も力なく蟲の音も淋しき地むぞする初秋の暮。

妹

下野　野尻よし子

今日はお清書の日、お菊はきつと二重まるを頂いて欣喜雀躍の至りでもう學校から……歸て驚いたはお菊の泣き泣き歸宅したのである、早速問へど答せど、……暫しあつて出づる涙を押し拭ひ今迄敎へて下すつた山田あき子先生が今度東京へお出でになるつて今日お別れいたしたのと……自分も思はず同情の涙に……

秋風

麻布　奥居たへ子

今宵月は高々と昇つた。半ば色づいた楓の梢を風と一陣。折しも月なかすめて雁の一聲……電報……電報……驚いて玄關へ受取つた手はブル〱と。然も私の名宛で。思はず封を切つてアット打ちふした。イモトシンダスグコイ……再び楓の梢をそよ〱と。嗚呼たのみ難きは人の運命よ。

（評）風物自ら人に愁し

活ちゃん

芝區　新野壽枝

御稲荷様の御縁日から赤い御提灯を買つて歸つて來た活ちやん背中から飛び降りると其儘黨の青い高い母さんの枕許へ紅葉の様な手を御山にかたどらせ目をくり〱口をとがらせて一つぱい〱母さん何の事やらさつぱり分らず子守に聞けば人が一ぱいで御神樂が見えなかつたとの事。

（評）一ぱい〱、何分可憐なる

失望

牛込　平塚白百合

妹の愛子が嬉しそうなかほしてかけて來て姉様の歌が天賞よとニコニコ申しますの、私も嬉しうございますから日頃あまりよくも出來ないといふことさへ忘れて早速見ますとあゝそれは私の出したあゝそれは私の出したものには似てもつかぬ同じ處同じ姓名なの

ある夏の一夜

赤坂　竹内長子

ひるの暑さも名殘りなう消えて、そよ〱とふく夕風は、かろきたもとはらふ、光り明らけき夜中の月は、清き池に宿り、遣水の邊に飛ぶ螢の、音もせですだくを見れば、啼く蟲よりもいと哀れなりけり。

一ッの梨

東京　鈴木ます子

園ちやん好い子だから一寸行て來ておくれと云ふでせう」
「でもお母さんあたしあそこの家知らないのですもの」
「それではいゝよ今朝の梨は姉さんに上て仕舞ふから」
「あたし行て來るは」と園子は一目散に格子戸の外に行きぬあはれ一ッ梨は園子をして一たん知らぬ處までこばみし家に向て走らしめぬ。されどこは園子のみにあらざるを。

別離

駿河　松本節子

親友のよし子様のお父様がお務の御都合で遠き熊本へ御轉任なさるので御一家共御引うつり遊ばすとの事ある日の夕暮わざ〳〵お暇乞にお出下すつて色々お話の末「ア、もう御一所に同窓會えも行かれないの子ー」と突然妾の手をお取なすつてお目をうるませられたので「ほんとに子ー」と思はず知らず落す一滴。

道を問はれて

栃木　玉野とし子

ある日のことでした、伯父さんや兄さんなどと一所に、稲刈りをして居ましたら、オイオイといふ人聲がしましたので、鎌持つ手を休めて聲する方を見ました處、三十恰好の髯を生した洋服のお方が、頭の帽子も取らず、いとも横柄な言葉で、道を問ふのでございました、伯父さんは頭の冠りを態々取つて、丁寧に教へてあげましたのに、あゝさうかと言つたまゝ、ずん〳〵行つて終ひましたつたが、如何たものでございませう、髯を生したお方の行爲としては、……

當世ものはづくし

◎印は入賞

▲小さくて侮どれぬもの

○地圖をひろげて露助が指す赤色　　宇都宮　井原すき子

◎◎空氣枕に針ほどの穴
、◎細君の手内職
、○大佛屋根の雨の洩り
、○吸い付いた蚊の一念
○◎養子に來てから生れた子
、○洋犬ブルドッグ
、○蟻
、○天龍川堤防の蟻の穴
○名譽の勳章
○◎小兒の耳
○小兒の切手貯金
○少女の富士登山
○九才少女の富士登山
○◎借金の利子
○金の利息
○一休禪師の幼時
、◎見失つた針
○英國に於ける小村大使
、、日光唐辛
、◎石油罐に一點の火
、、中風子の卵
、、一粒の飯
、、ピストルの彈丸
、寶石入の指輪
、價高き寶石

岐阜　酒井登美子
芝　宇敷英子
大阪　吉野ます
鳥取　横山龍子
米澤　江部世津子
廣島　白藤
大阪　好子
遠州　中村たか
近江　照子
飛騨　落栗
京都　掛野うた
大阪　武内すみ子
長門　秀翠女
岩代　浦田光子
大阪　岡崎新子
函館　福岡八重子
安藝　菅松枝
芝　秋野露子
近江　物好女
甲府　村松下枝
岩代　佐藤松子
函館　龜井てふ子
三河　太田みれ子
但馬　細田とよ子
丹波　五十川正子

、寶玉と肺病の蟲
、薔薇の一しづく
、火
、大きなものを引く蟻
、蜜蜂
、恙蟲
、小兒の智惠
、南京蟲
、金のはたらき
、◎無駄に過ぎし一分時
、蟻とさうして蜂
、ちよつと一言
、ペストのバクテリナ
、ペストの黴菌
、流行病の黴菌
、バチルス
、傳染病の黴菌
、外國人の見たる我日本人
、日本と英國
、露兵より見たる日本兵
、世界に於ける日本
、日本國
、同上　近江　玉濤子
北海道　木村うめ子
神奈川　廣守千能子

伊豫　紫野田鶴子
姫路　高徳愛子
大阪　新保和可子
阿波　菊地かをり
神田　つぼみ子
越後　坪井わか
西多摩　小作ちと子
岐阜　安藤ゑい
大阪　竹木花枝
仙臺　山田繁子
名古屋　菅井英子
櫻井　池田ちか子
大阪　靜子
上毛　栗原庫子
同　西村林子
磐城　足立てい
大阪　秋子
麻布　降屋明子
堺　富崎しか
駿州　松木節子
姫路　稻村富美子
横濱　宇庭智雪
松江　白菊子
備後　花園女史
麹町　黒川かほる

神戸　小林竹子
神戸　道子
陸奥　添田逸子
滋賀　きく子
金澤　遠藤さき
越後　しま子
常州　中嶋あき子
奈良　紫菫女史
長野　神津ます子
松山　竹木よし
磐城　松木雪子

◎印は入賞

▲腹のたつもの

、◎わかつた事の隱し立
、○發車前に改札を閉ぢられた時
、◎急用の時の停電
、○急ぎの探し物に燈火の消えた時
、◎急ぎ仕事へ來客
、○急ぎの縫物の絲の切れたる
、○急ぎし時に下駄の緒切れたる
、○釣針のゐもりのかゝれる
○卒業試驗の答案を知りながら書き漏せる
○掏摸にやられた時
○足を踏んだ奴の知らん顔
◎良人を罵られし時
○寢つかれぬ時の蚤
○いたくない腹を探られる
○夫の薄情
○親のこゞと

美濃　杜若會育子
姫路　高徳愛子
神田　松木春子
房州　平井靜子
牛込　清江子
大阪　なか子
京都　故野千女
世田ヶ谷　飯島初枝
周防　あやめ子
芝　芝木なつ
神戸　太田道子
岐阜　青山いく子
滋賀　日下信子
信州　赤羽松
愛知　深井柳子
山口　貞弘やちよ

○長き手紙の書き損じ　大阪　見目子
○二三分の事で汽車に乗り後れし時　長門　西岡靜子
○晴天に洗濯すると雨が降り出す　岡　北村久江
○たま〳〵の日曜の洗濯に盥の底拔ける　對　井岡喜美
○自分の寫眞のまづく撮れたとき　陸前　小松たけよ
○夜更けて歸つた夫の香氣沙汰　長門　大槻ふみ子
○貧困に窮つて女房の逃走　矢名氏
、、大事な衣服を鼠に食はれる　名古屋　安田英子
、、雨中に泥濘へ辷べつて人に笑はれる　大阪　竹本靜枝
、、愛子を人に逃がされたる　矢名氏
、、○物を考へる時側で騒ぐ　吳　岡本幸子
、、電車賃の値上げ　大阪　桂山田鶴子
、讀書中電氣の消えたる　芝　秋野露子
、汽車に乘り後れし時　米澤　若井蔭子
、親友の放蕩　山口　伊藤冬子
、外出せんとする時の雨　本郷　永井靜葉
、湯屋で下駄を取替へられる　麻布　さわ子
、眠むい時に起される　廣島　英子
、豫期せし地方へ旅行の出來ざる　安藝　富草屋鈴香
、散歩中の夕立　和歌山　山本とく子

▲わけのわからぬもの　◎印は入賞

○義太夫の腹内語り　甲斐　松野安子
○電車直上げの趣旨　大阪　中西琴枝
○嫁を誇りて說教を聽聞　芝　田中むら子

○電話の混線　京都　ほとゝぎす
○難字づくめの新體詩　神戸　島屋富子
◎立派な腕がありながらなまけて居る人　麴町　三澤はな子
○頑固で無學で盲目　大阪　重野きく子
○電文の脫字　赤坂　もと子
○字落しの電報　富山　天野いく子
◎口數少なき人の心　本郷　素濤子
○無教育の姑　甲斐　矢野繁代
、、人の身の末　上總　齋藤やえ子
、、三ッ兒のはなし　近江　照子
、、妻有り金無くして遊蕩　大阪　あき子
、、思もよらぬ夢見　福井　池田ちゑ子
、、飛んでもない所から緣談が持上る　島根　紅顏女史
、、電信符號　遠江　宮城うめ
、、死んでからさき　新潟　本多孝子
、、兒島高德の事蹟　高崎　堀越治子
、未來　京都　岩子
、寢語　函館　福岡八重子
○わざ〳〵淺間靜殿へ出掛ける人　網町　無名女
、醉狂者の呂律　宇都　京極文子
、醉人の叱言　小樽　門倉優子
、泥醉漢の談話　越後　橋さだ子
、半可通の英語　京都　奧村ます
、ねむい時の書見　岩代　中島峯子
、すこしく足らない奴の洒落　靜田　松木春子

來月の課題

▲身にしみるもの
▲陽氣なもの
▲赤うなるもの

「身にしみる」といへば例へば「秋の風」「親の意見」といふが如く、「陽氣な」といへば例へば「大鼓の音」「笑聲」といふが如く「赤うなる」といへば例へば「秋の紅葉」「こゞへた指先き」といふが如し、且つ課のアマリ長からぬやう御注意を乞ふ、簡單明瞭がよし

謎々　◎印入賞

「新婚旅行」、「菓」、「論功行賞」とかけて

一等

◎▲論功行賞
戰前の架橋」と解く、心は「工兵(公平)が必要　岡山　矢野靜子

二等

◎▲菓
沸騰散に水」と解く、心は「中へ入れば泡(粟)となる　東京芝　園子

三等

◎▲菓
野合の夫婦」と解く、心は「厭き(秋)から(殻)分れる　岡山　田上はま

▲論……德川時代の切支丹宗」と解く、心は「主君(殊勳)が禁止(金鵄)　岐阜　青山いく子

▲新……糸屋の娘」と解く、心は「藍(愛)が滿ちてる　三田　つなまち女

▲菓……付け髭」と解く、心は「笑むと落ちる　美濃　杜若會育子

▲論……昨今の學生」と解く、心は「近視(金鵄)が多い　大和　中上まさ

▲新……哲學の研究」と解く、心は「智義理(契)を深くす　本所　山田なつ子

▲菓……親の意見」と解く、心は「澁い中に甘味がある　四谷　島田愛子

▲菓……高砂」と解く、心は「三皮(三河)の内から出る　丹波　綾部なみ子

▲新……ガラスの器」と解く、心は「仲(なか)よく見える　甲府　山田鶴子

▲新……借金人」と解く、心は「負債の歪い處者(夫妻の初い旅行)　岐阜　酒井登美子

▲論……昔の警者」と解く、心は「漢法(官報)で見る　名古屋　安田英子

▲論……夏の螢」と解く、心は「身の光を放つ　大阪　中西琴枝

▲菓……新代の文學」と解く、心は「毬(綺畫)より始まる　諏訪　伊藤芳子

▲新……相撲の立會」と解く、心は「始終顏を見合ふ　但馬　細田とよ子

▲論……惡聲」と解く、心は「藻音(勳功)によつて價値が違ふ　美濃　杜若會育子

▲菓……昔の花嫁」と解く、心は「かれ(涅齒)付けて出る　西ケ原　戸岡やす

十月の課題　(當選者の住所姓名を承り度候)

▲艶書　▲薩摩芋　▲西太后　〆切十月十五日

人事活断

天啓堂

△氷見郡の露枝女へ━━愛児を他へ託してまでも出て行ふとの御決心は能く〳〵のことゝ察しますが乳房の葬竪なるはその児を愛するからの心で、女は弱し而も母は強しと云ふは児の為に犠牲となる母の情を道破したものです、今までとさへ十年一日の如く辛抱なされたのですから如何に貧しくて病弱で良人がつれなくとも二子の母として今十年の辛抱の出来ない筈はありません、勇気をお出しなさい。

△泉南郡の無学女へ━━貴女の病気は結婚すれば全癒するのですから案ずるに及びません、今のやうに自ら心を痛めると自然結婚期が遅くれます、来春には良き縁談があるから逃がさない様に準備して待ちなさい。

△美濃瀧すみれ女へ━━貴女の病気は余に案じられて、急いではよくない氣永く保養さへすれば快癒は間違ありません。

△廿五歳の心配女へ━━良人が放蕩で貴女が小心、其處で家庭が面く治まらぬやうに思はれまする、併しその為に消極と積極が甘く調和されて家内の能が取れて行くのです、貴女の病氣は全快し子供も一人や二人は屹度出来ます、何分色慾の杜絶が甚甚り大患ですから、大學病院に就て施術なお受けなさるがよし。

△伯耆富士女へ━━許嫁は全ふせられて将来は多幸、多福、餘り図に乗つては災が来るから、今日のむしろを何時も忘れてはなりません。

△童の会女へ━━お氣の毒ですが母御の病氣は若年のことでもあり全治は先つ六ヶ敷、併し致命症でありませんから氣節々々即ち氣候の替り目に摂養を注意なされたら天壽を全ふせられます、貴女の独身生活はやゝて御覧なさい非常の決心をなさらぬと難を完ふすることが出来ません。

△野ばら女へ━━運命は運命真し、これを善しくするものは貴女の我儘であるから反省なさるべし、又独身生活などゝは貴女はおくびにも云はるゝ資格なし、十三年生れの男子との結婚は不可。

△白露女へ━━良人に嫌はれはせぬかとの心配も子供への情けも生命あつての事、肺病とて未だ極軽症であるから斯る心配氣苦勞をさらりと捨て運命を天に任せて療養なさい、屹度平癒を保證します、併し貴女が留り飽く良人や子供に執着して病勢を募らせなさる限りは天啓堂の知る處でない。

△神奈川十九歳女へ━━貴女が約婚を望んで居ざるは甚だ面白くなし、父御の御許しなきも最です、強て約婚して待つた處が婦三歳不孕の凶となるからお果めなさい。

△横須賀梗子女へ━━神経病と云ひ心臓病と云ひ何れも今齢の自然に囚り易い病氣であるから自然永引くやうになりたがるのです、ソコで余に治せやうとすれば却て手間取るから、學校の後れる位のとは一切氣に掛けないで療養が肝要です、次に開運は中年後で成功は耐忍にあると知るべし

△神戸吉田菊子女へ━━幼少にて父母に別れ養母が邪見で、頼むべき姉が不身持とは能く〳〵御不幸のとです、如何に嫌まなくとも父上のお計らひですから島原拉て養子を迎へて御覧なさい、人生の樂みもその中から出て来ます、決して絶望服藥するには及びません。

△遠州の芳子女へ━━商家は比較的家庭の圓全なるが多し、それに今日では實業家とて地位も決して昔時の町人ではないのですが何故商家をお嫌ひなさるのです、大臣の邸宅へ見習奉公し當時権門の家庭を實見し

呆れなされた貴女には不當儀と感はれる、少し教育でも受けると種々注文が六ヶ敷なつて遂に婚期を失し、落ちが煩悶となるのです、貴女は來春になれば成婚の兆があるから其機を逸せず新らしき生涯にお這入りなされたがよろし。

△矢島花子女へ――此結婚は見合はさるゝがよし。

△牛込青柳女へ――當年三十五歳、三十四歳、三十二歳、二十九歳、二十六歳、廿五歳、二十三歳、二十歳の男を夫とせらるれば吉、職業は農業、商業（油屋、酒屋、銀行、會社）等です、婚期は向ふ一ヶ年の間にあるから、其機を逸せぬやうに注意あるべし。

△大和迷女へ――貴女は眞爽なので餘り正直過ぎて人一倍に心配なさる質で此處は何處までも柔順にお事へなされたら、一旦クヮッといら立つた良人の心も何時しか收りて緣を全ふせらるゝやうになるから御安心なさい。

△筑前煩悶女へ――逃した魚は大いやうなもので、折角の良緣と思つたが行違ひで結ばれなかつたから貴女の失望されるは最もですが、考へて見れば是れも矢張り無つた緣です、そこで都會へ出るの渡米するのと煩悶してる時ではありません、來るべき良緣を歡迎する準備が第一です、近き將來に吉報があるでせうからお樂みなさい。

△笑子女へ――女性ですもの配偶がなくて何とせう、母堂や令兄のお考へ通り緣付なさるが道です、頓て結婚期も熟してるとゆゑ宅に在つて、結婚の時のお支度に與つて狼狽なさらぬ用意をなさい、高等師範入學は失敗に終るでせう、又海軍々人が非常に好きとのこと、軍人の妻女として如何なる修養をなされたか、省みて耻かしくなければお結構です。

△群馬の天願たき子女へ――獨身は女子の身に似合ひたる職業折角精進なされたら多少身體が弱くとも獨立して往かれないとはありません、まて父兄が何と申されても天が打っちやつてはおきませぬから其内に良緣がありませう、くよくよ思はず今日は勉強が第一です。

△越路の嫁女へ――叔母さまの御意見が道理ですから、そのお心積りで今日に來るべき良緣を迎へて身の納りをお付けなさい。

△姫路の心配女へ――落膽なされませうが養子御の病は全治覺束ない、次に貴女に適すべき商業は、細工もの美術品の商ひがよろしいが、手取早く利金が見えて損毛の恐れなきは飲食店などです、下等な煮賣店其他豆腐屋、水菓屋も十分見込があります。

△磐城の叔母へ――貴女は姪御にとつては救世主です、人生希望なければ死より外はありません、さなくも可憐そうに今一刻遲くれると兩親の後を追ふて同じやうな病を引起さるゝ處です、良人に氣兼れがあらふとも伯父に濟まなからふとも達て貴女の手元へ一先づ引取て兎も角將來希望の光明を與へてお上げなさい、結婚問題や修業問題はその後のことです。

△孤島の苦悶女へ――貴女が乙女心の一徹に嫌やと思ひつめられたら左もありませうとお察し申しますが、さて戀の理想のと憧れ自由結婚てふ美名の下に野合した男女が中年立つか立たない内に物別れとなるは珍らしくないのです、貴女が物堅き御兩親に對し恩誼ある親戚人に對しての御決心は近頃見上げ申した御心眞です、その我を捨てなされた清き心を良人の上に移すとは出來ないでせうか、嫌な良人の顏を嬉しくとまでゆかずとも優しき心で見るとは出來ないともありますまい、此處半歳計りもその心掛けで務めて御覧なさい屹度功験があります、是れは尋常人には望まれませんが、賢婦人として貴女を信じたから特にお進め致すのです。

△東京浜子女へ――折角お迎なされた良人が御不緣になつたとは御同

情に堪へません、併し亭主が放蕩で女房も蕩放好き、そこで亭主が蕩放實すれば女房は又併餘實をすると云ふやうでは、一家は眞の暗やみとなるのです、さなくとも義太夫が好きだとて浮瑠璃語を夫に持ちて共にナリ歩き、音樂が好きだとて樂人の嫁となつて共に浮かれ廻はつて居ては一家は立ち行かない、隨て己が好き嫌ひで良人を選擇するはトンダ不幸を招く恐があります、故に此處は理性の命ずる處に從はればならぬ、萬事御兩親のお計ひに任せなさるが萬全。

△日本一桃子女史へ——結婚の成立せないとはありませんが、相性はよくなし將來幸福の方ではありませんから十分お考へなさい。

△田舍娘へ——謙讓の心を以て萬事お運びなされば此緣談纏つて將來は有望です。

△熱心女へ——渡米者への婚嫁は近き將來には先づ配を得がたかるべし。

△心配娘へ——貴女の婚期は未だ良緣を得る時節でない、今より五ヶ月後から順境になつて緣談も進んで來ますから、それまでお待ちなさる外なし。

△深川不幸女へ——獨立して行けますから折角御奮發なさい。

△不安心女へ——外の事と異り女性に取つては結婚期を空過するほど氣のもめたとはありません、よし義理ある中だとて遠慮して居る塲合でありませんから母上から令兄の意を聞いて御貰ひなさい、人から彼是れと話ある内が花です。

△茅淳浦波女へ——學生中は學生らしう他のとを考へず、一心に學科を勉强なさるがよし、緣談は兩親に任せて措きなさい。

△東都の田舍女へ——従兄との結婚は將來無難であるかはりに餘り出世する見込はありません。

△高知縣女へ——此結婚は貴女に餘程の覺悟が備つてあれば格別、常人では利しからぬ緣談であつたから、先方よりの破談は反て幸です、次は年内ならば十一月申込あれば應ぜらるゝを吉とす。

△北海の心配答待女へ——良人の身の上は天當旡妄の上久に當て居るから甚だ氣遣はしい、相手の女將は中々の惡狡であるから良人の身の破滅を來す恐があります、そこで貴女より嫉妬以外の誠を込めて女將の良人一人を情人と守れるに非らざる事實を告げて早く身を引かるゝやう御忠告を試みなさい、貴女の御心配はお察し申しますが事甚だ容易でありませんから充分その覺悟をお持ちなさい。

△福岡縣籏子女へ——良人の心に變りはありません、屹度御宅の力におなりなさるから樂でお待ちなさい、又商業は煙火の音のみ高いやうに利益があるく〵と算盤の上はよろしいが、實際は左樣にもうからないゆゑ其心積りで居なされば間違ひなし。

△風流樂妙女史へ——母親を連れて嫁入するものは世に珍らしい方で、斯る塲合には只さへ小さき女心に氣兼苦勞の絕ゆるとはありません、それに貴女は大恩ある一人の母を遺して自分の出世の爲に他へ行くなどの御考へ近頃呆れ返つたお心ですそれより身分相應の婿を迎へて老先き永からぬ大事の母へ孝養をお盡くしなさるが道です、隨て教師となるも專門の業をなさるも母上の思召をお聞きなさい。

△深川島子女へ——貴女の結婚は吉のやうでありますが、備て愈となれば不調、他方面に養子を求めなさるがよし、

△何女へ——良人に先立たれて貞女二夫へ事へずとの操を完ふなさらうとのお志は、今時珍らしい天晴な賢女です、しかも世智辛き今日折角の志も中途で壞はされる塲合も世間にまゝある實例ですから、敢て婦德を傷ふわけでもありませんゆゑ、相當の良緣もあらば枉て再緣なさるな

宜とす。

△苦心女へ――真人を大事になされたら家庭は永久圓滿で、妹女も二三人は出來ます、又令妹は當時缺のある廿四歳の男子と結婚さるれば吉、

△大阪の操子女へ――折角見込ありし未來の眞人が故障で破談とのを御落膽とは察しますが、これも無かりし縁と果めて他に眞縁を求めなさるがよし、随て殊別貴女より先方へ答なさる要なし。

△深山のえつ子女へ――本年中に成婚の模様見えず、職業は先づ農業、商業共によし、商賣ならば酒類商、薪炭商、煙草商に付てお撰びなさい、

△信州田舎心配女へ――矢張りお百姓は百姓へ嫁縁せられたら此上ない人生の幸福が受けられます、生中儀な學問をした爲め働くことを厭ふて月給取などの女房を望み、苦しい世帯して一生貧窮として果てるものも少くない是等は愚の極です、御熟考なさい。

△西海すみれ女へ――若い男が無職業で居るとツイ遊びに身が入るやうになるもの、何か商業でもお始なされて忙しくなれば自然と止みますから餘り心配なさるには及びません。

△茅淳浦女へ――父母が賛成して貴女が大賛成でありますから必ず成功します、さて社會は廣く競爭者は多し、尋常の勉强では人並に出ることは出來ません、若しするとしたら地理、歴史科などが宜しい、女子大學に高等師範科の設けがありますから就きて試驗の準備をなされたならいゝでせう。

△我家の白百合女へ――柔順を以て聰明に聞くの様で至極適當な婿を得た譯ですから、誠意を以てお事へなされたら將來は多幸です。

△静岡心迷女へ――惟ふに貴女は必ず性急の質で何事にも感じ易くまたさめ易いと云ふ性に相違ない夫故夫の事も種々に考へられて自から煩慮し苦勞をするのです今少し氣を落ち付けて夫を遇するにも温和になさるがよし左らば夫の愛も増し從て滿足な家庭となることが出來ます

結婚四年にして未だ一子を擧ぐる事の出來ざるは多少生理的の關係も御座いませふが先づ夫婦の精神の一致せざるにも原因します、ですから貴女はよく氣を落ち付けて夫の愛を失はぬやうせられたし然らざれば再び破鏡の嘆を見ることないとも限らないのです。

△豐田ふみ子女へ――貴女が想戀の方は成程末頼もしき方で當世浮薄の世に珍らしい人なれども男の心と秋の空變り易きは世のならひなれば餘程用心してかゝられば例令婚約成立しても末睦しく行くものなるや否やか疑問です殊に貴女の目にさえ秀才と認めらる位ですからまして男子の方なればより大なる望みを抱いて居るやも計りがたいのです、ですから此の疑ひさえ充分に解けて參れば雙方の望みは必ず達せられますから安心して時の至るを御まちなさい。

△松枝子女へ――先づ病氣の醫療をなさい、健康が快復すれば子女はさづかります。

△山里の一女子へ――嫁を迎へる前に他へ縁付たいとの御考へは良き思召です、さて職業と嫁するのでないから餘り良人の職業撰擇は得策でありません、汽車あり汽船あり交通至便の今日土地の遠近も大抵にして縁談ならば應じなさるべし。

△兵庫の一下女へ――貴女の主婦思ひは感ずるに堪へたり、併し主婦の授胎は遲い、先づ三十歳後の事ですから今四五年の間は如何にあせつても母となることは六ケ敷、先きを樂みなさるやう慰めてお上げない。

△夢野露子女へ――一番年長の軍人と結婚なされて宜。

△京都の取越苦勞女へ――餘り取越し苦勞が早や過ぎる、やう／＼結婚して半歳になるやならぬに授胎せぬとて煩悶とは沙汰の限りです、何事によらず速成はよくありませんから、先づ兩三年シツクリと連れ添ふた

上でなければ、事毎見は挙げられぬものと合點なされて煩悶するより先づ身の修養が大切です。

△但馬の匿名子女へ――貴女の婚期は正に到來して居ますから、緣談あり次第應ぜらるべし。

△大阪の煩悶女へ――嫁入すると氣兼が多いから養子を望まるゝことは貴女の量見がわからぬ、一人前の女なら萬人のする辛抱が出來ない筈はない、これは全く貴女の我儘ですから、よし養子しても甘く家庭は納らない、御兩親のお心に從ひ相當の處へ嫁付なさるが仕合です。

△沼津人文前後女へ――貴人の目的は堅志にして久しきに耐ゆるれば成功します、併し病氣は餘程攝養なさらんと中途にして方向を變へなさられば ならぬやうに成ることが出來ませう、埼玉又は東京への轉地は時期少く後れませんから急に進まずと暫く時節を見合せらるゝが吉。

△四の冬子女へ――貴女が至孝の一心で御勉強さることだから目的を達せらるゝ日は必ず到來します、中等教員檢定をお受けなさんと思はゞ新撰女子就業案内(本郷妻戀坂便利堂發賣凡二十錢)に一通り記してありますから採て御覽なさい。

△愛知郡澄子女へ――自己の不成功を云はずして離婚を以て偏に貴女あるが爲と猜疑せるは姉婿の誤解であります、併し斯る沒曉漢ほど世に恐るべきはありません從來貴女に對する迫害に徹しても明でありませう、貴女が強て醫師を迎へて成功なされたら如何計り嫉妬の炎を燃やさるゝか解りませんから、此處は貴女のお考へ通り他の職業の方を御撰みなさるが一家のお爲でありませう親御へ篤と御相談なさい。

△長崎の心痛女へ――成程無法な義兄でありますが、併し今日貴家に取ては大切な働人だから、威張られても致方がありません、母上も殘念でせうが此處は一つ逆はないやうになさるがよし、今の處は如何とも致し難き場合ですから時節をお待ちなさるより外なし、夫れも自分への運命だとお呆めなさい。

△下總の不幸女へ――現情よりの御考は最もですが、そこが緣と云ふものです其内又其養子の來てもありますから、御老父の安心なさるやう良緣を待て再婚なさるべし。

△深川三好女へ――令姉の成婚は本年中に良緣なし、貴女の肺病は打遣へて措いてはよくありません、今は輕症で容易に癒りますから、その手當をなさるがよし。

△大阪遠緣女へ――長女に生れて弟妹が澤山ある方は自然と結婚が後れ勝のもので世間によくある例しです、今年内には良緣の見込は先づありませんから心を落着けて來る年に新らしき良緣を迎へる準備をなさるがよし。

△越中のすみれ女へ――貴女も未だ婚期來らず今一二年はお待ちなさられば ならぬ。

△石岡のゆり子女へ――お喜びなさい外交官との婚約は成立します。

△神戸の心配女へ――良人が無氣力なりとて離婚せうとは、縱令養母へ孝養の上からとは云へ苟も教職にある貴女の考へとては全然道に背いて居る、先づ名醫に就て良人の健康診察でも受け攝養の方法を講じなさるが急であります。

△越路露子女へ――許嫁の破談は一時の出來心でせう、親類にて誠實な人物を以て交渉されたら多分元の通り纏るでせう。

△北海道の不運女へ――貴女の希望なさるが道理で女としては斯くあるべき筈で、親御の思はくは間違つて居るのです。故に此處はその道理に從つて無理をせず時節をお待ちなさるがよし、併し相性は餘り善くありませんから注意なさらぬと折角の覆水盆に反りても亦喧嘩別れをなす

るやうになりませう。

△秋の楓子女へ——年内には結婚に望なし、併し十一月中に或は縁談あるも知れずその節には進で交渉なされて吉。

△鳥取縣女へ——都會生活をせうの、獨立自營せうのと云ふとは呆めて居なさるとは尤もよし、併し不品行でも理想に叶つた方へ嫁付たいとのとは甚だよくありません、全體貴女の理想と云ふとが解らぬ、縱令教育學問に不充分でも諸事眞實で品行方正であつたら先づ男らしき男とせねばならない、斯る夫を持つてこそ將來は幸福であります、夢め思ひ違へては不可。

△安藝の涙子女へ——父母の勸告に從ひ再縁なさるが將來のお爲めです、獨身生活は容易の業でなく萬々止むを得ない境遇にあるものゝ萬事休して最後に採るべき策です、再縁は今日決して婦女子の耻辱ではありません。

△涙子女へ——三十二歲の特務曹長と結婚されたら貴嬢、

△山の手心配女へ——生花未開と云ふ處ですから吉兆は含まれてあるが縁はまだ遲い、工業熱心家との結婚は將來餘り有望でありません。

△村雨女へ——駟馬も及ばずとは其處のとです、貴女が輕卒で言葉を愼まれなかつた處より來た悔慎です、併し心配する程のともなくて濟みませう、友人との間柄は口と口との交りで心の友でないゆゑ向後は御注意なさい。

△官吏の妻へ——誠に感すべきよきお心掛けです、手工に係るものを習ひ措かるゝがよし、裁縫は云ふに及ばず、ミシン使用法、編物細工などよし、

△誠に幸女へ——男兒授胎疑ひなし。

△岡山縣片田舍の心配女へ——嫺を取るはよろしくない、酒造家へ縁入らるゝを吉とす、少々遠方で不便だとは、他へ達したものを何時までも家内同樣に思はるゝは親御の我儘と云ふもの、貴女より進で請求なされば此縁成立します。

△天王寺のほとりなる不幸女へ——良人の不身持は今暫く立てば直ります、愛子を大切に姑御へお事へなされてお待ちなさい、餘り姉上が嚴しいので燒香共になつて居るのでせう。

△櫻子女へ——最早や年頃ですから縁談あれば應ぜられて人生の幸福をお受けなさるがよし、來年の入學は先づ無難のやうですが、旣に普通教育もあるとゆゑ、此上出京して醫務學生と同一視されるも將められたとではありますまい。

△柴田久子女へ——女子が寡婦の操を立つるは達見などありて絕體的止むを得ない場合のとです、されば成るべく相當の緣あらば再嫁するを安全とす、若氣の元氣はさることながら、老後の孤獨は實に心細き極であります。

△小倉のなでしこ女へ——先方の愛が何時まで續くか考へものです。

△信州の小蘭女へ——昔は昔、今は今、貧乏するから又金持にもならるるのです、併し女子の獨立などは一生の苦しみ、身分相當の處へ嫁付らるゝが上策です。

△伊勢の女へ——何がイヤですか、一寸判斷に困ります寧ろ滿心の愛を捧げてお上げなさるべきではないか。

△愛する妹を思ふ姉女へ——令妹の求婚は成立する見込あり、故良人存在中の交誼に因み誠意を以て貴女より交渉を試みなさるが吉。

△ちぬの浦女へ——父御の御談通り二三年お待ちなさるが吉、縁あらば先方は學生なり決して遲くなし、成功の上を心待とせば反て學業の勵みともなるべし。

△信濃の拙筆女へ＝貴女は手跡の拙さを非常に苦になされて居ますが、既に差支なく手簡を認めなさるまでに稽古も出來てゐることだから、此上は正しき手本に就きて習ひなさらば必ず上達できます、お奮發なさい

△東京はな子女へ＝夫に隨ふが妻の道、そこで失敗したからとて里方へ泣き付くはよろしくありません、良人は分別盛りなり元氣旺り此上は夫婦共働ぎ一勉强なさい、自ら開拓した運でなければ到底浮む瀬なきものと決心なさるべし。

△山口縣絢子女へ＝良縁あらば令弟令妹もあることゆゑ早く縁付かるるがよし。

△松江君子女へ＝洋行し金もうけするは容易のことでありません、況して女の身であるかなしの學問ではそれは非望と云ふもの、親御や兄弟達の同意を得られない身で斯る野心を持つは此上なき危險であります、心機を轉じて他に道を求めらるべし。

△牛込ゆり子女へ＝美術家、文學者、畫工等、商人ならば呉服商、糸商、陶器商、金物商業等よし、來年桃花天々たる頃多分身の納りが付くでせう、年内は十月十二月に注意して縁談あらば應ぜざるべし、

△武州あやめ女へ＝從兄との結婚は無難です。

△京都春雨女へ＝貴女は餘り理想とやら注文が六ヶ敷いのでありますまいか、も一早い方でないから大抵の處でお取組なされたら近き將來は良縁がありませう、海外へ行く方を夫とせられても差支なし、

△野田きよ女へ＝子供を御貰びなされたは餘り早過ぎたでせう、良人が内を外にする間は子供の愛など浮ぶものでありません、一時親元へお返しなさるが反て子供の爲でせう、又女道樂する男は自分罪惡と思はないものですから一種の精神病者と云つても差支ないのです、御心配はお察し申しますが、今暫らくは氣に掛けないで内を大事にお守りなさるべし。

△秋好女史へ＝實母の死去なされたので御悲傷の結果、氣鬱症に陥りなされたのではありませんか、力めて精神の引立つやうに萬事を成行にまかせて氣苦勞さへなさらなければ、漸次快活に向ひて來ます。

△澎湖島きよ女へ＝裁縫稽古は文勝ち學校へ入らなくとも出來ますから、手近かで便宜を求めて修業なさい、本年中に上京の運命は現はれて居りません。

△越中觀波の女へ＝家庭の複雜なるはお心遣ひでもありませうが、既に結納も濟みしことゆゑ婿取なさるゝが吉、何事も結婚の上良人へ縋りて御相談なされてよし。

△肥前愛讀女へ＝貴女の結婚は將來の結果面白からず、成るべくお考へ通り破談なさるゝが吉。

△周防の文子女へ＝折角の事ですが上京の企てはよろしくなし、父母の元で良縁をお待ちなさるが吉。

△不運の泣女へ＝結婚は面白からず凶。

△懸願女へ＝少し學校の成績がよくて教師より譽められることでもあると、自分は容易に學者になれるやうな考を持つは淺慮な女性の自惚と云ふものです、女子で學者になるなどは尋常のことではありません、母となり妻となることは女子の天職であるから學問のなき婦人でも世に賢母良妻と稱へらるゝ方は少くないのです、以て貴女の方針の何れにあるかを御熟考なさい。

△夏野紫子女へ＝先方の軍人や大學生が貴女を慕ふて居ると云ふから、貴女が何時しか意中の人と獨り極めしてより深く懸想してゐるのでせう、それゆゑに從來出來ない縁談をも故なく破れたものゝ如く感じて煩悶なさるのです、先づ貴女の逆上せた頭腦を冷さなければ、眞正の縁

調は無用。

△靜野村の養子嫁へ――人樣のお嘆し下さる内が花です、今の内に相當の婿を見立てゝお迎へなさるが末吉。

△白のばら女へ――結婚期は最早や熟して居ますから婚縁は一日も早きを貴しとす、此上婚期を晩らして多少學問したところで、良い婿が得らるゝと云ふ限りでありません、貴女の内助次第で下流の男も中流、上流に上せることも出來得ることで、良妻と云ひ賢婦人と云はるゝは此處のことです。

△甲州なでし子女へ――高等女學校卒業後の目的が定らぬと申されますが、その目的は一筋道、結婚して賢母良妻の責任を盡くさるゝことです

△長門の涙好女へ――世に妾ほど悲しい思ひをするものは又となからふと申さるゝが、さて兩親あり弟妹あり一旦養子を迎へたが氣に入らずとて逐出し、再び嫁入して今度は良人から嫌はれて狭れ、而も女ながら差當り獨立して行ゆける丈けの職に就て居ることだから若後は知らず今日に困る譯けでない、云はゞ不幸中にも仕合な方でさ、またく世間に殊偉な方は澤山あります、此上は急がず氣を落付けて良縁を待たれたら三度目には上々吉の運が開けます。

△但馬のおさむ女へ――貴女は獨立生活などは出來ない方です、女子相等の教育ある身分で少し結婚談が煮えきらないとて直ぐ煩悶とは驚き入ります、徐に兩親の計らひに任せて置いたら近い内に良縁が結ばれます。

△井戸の蛙女へ――貴女の夢は貴女の内助の大切なことを警告せられたのである、主人の立身を他人事に考へて居てはならぬ、成るべき丈け内助の功を積みて その責任を分つやうとの天の思召であるから 苟且に見てはなりません。

△山中のMN女へ――結婚に限る。

△やまぶき女へ――近親結婚も毎々重複すると恐るべきは云ふまでもないが、世に從兄妹結婚して幸福を全ふせる例し多し、兩親の御意通りなされても苦にするに足りない。

△心細き妻へ――良人は偕老同穴疑ひなし御心配は無用、運は年と共に次第に開けます、交際が下手なれば下手でお通ほしなさい、即ち愼み深く飾とつくらはぬがよし。

△筑紫女子へ――御老母の希望通り從弟と結婚なされたら家庭は圓滿で末は吉。

△何女へ――貴女も從兄との結婚は吉。

△深山の嫁へ――貴女が從姉へ御同情厚きは感心の至りですが、さて從姉の不幸を救ふは一日も早く結婚させらるゝに在るのです、處で現在の身分相應の婿を擇ばれば昔の家格を云つて居ては到底六ケ敷、縦令親類が彼是れ容喙した處でイザとなれば婚資を拵へて與るゝと云ふでもなく、故障計りでは害あつて益なし、早く身を立て斯る親類共を見返すやうにならればならぬ、それには人物が第一です能く注意なされて世話してお上げなさい。

△親なし女へ――洞水の千谷萬谿を過ぎて漸く大海に達せんとする如き運命ですから將來は良好です、此幸運を粗末になされては不可。

△二十五歳の嫁へ――丙を撰定なさい。

△大陸女へ――廿歳過ぎて都への見習奉公は知す過そ過ぎる、貴女は養子嫁矢張り是まで通り家庭に居て處世の心掛けが第一です、其内良縁がありますから如何に現金なことがあらふとも、それを運命とあきらめて耐忍なさい、辛抱は萬事成功の母です。

！○●結婚道しるべ●○！

▲本誌の結婚紹介は信用確實なり▲申込者は博文館女學世界交信部宛の事▲申込者は住所姓名番地を詳記する事▲本人の寫眞を送らるれば保存して希望者に紹介す▲照會者は双方への通信料として三錢切手三枚を送らるべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送らるべし▲〆切は毎月廿一日限り▲一時に二名以上を紹介せず

行き度き方

▲年十八歲血統正普通敎育あり家は酒造業目下家庭にありて裁縫、琴、生花、茶を稽古す、官衛奉職の人か敎職に從事せるものか、又は相當の實業家の次男にして、二十五歲以上三十五歲迄の人に嫁きたし。（廣島の白雪）

▲明治十一年生再婚者血正にして普通敎育あり家計中等兩親なし身體健全容貌普通、中等の生活を營む軍人又は實業家へ嫁きたし。（大阪のゆき子）

▲明治十七年生高等女學校卒業後補習科をも修了す容姿普通品行方正思想確實身體健全なる士族の係累なき高等敎育ある人或は軍人の許に嫁かせたし。（筑紫の母）

▲明治十八年生府立高等女學校卒業、初婚血統正、身體强健快活にして人にすかるゝ性質、交際申分なし、有望なる三十歲以上の人に世話したし但し容貌中以上二十世紀的の人物あり。（播磨の週旋者）

▲年二十一歲血統正性質温順容貌普通にして普通敎育を有し家には相當の資產あり土地の遠近を問はず前途有望の人なれば無財產の人にてもよし嫁きたし。（廣島のちづ子）

▲年廿歲血統正容貌普通中等敎育ある處女にして兩親健在なり遠近を問はず係累なき軍人若くは會社員に嫁きたし。（大阪のきみ子）

▲年齡二十三歲　初婚者普通敎育修了後家庭にあつて女道一切を究む性質温順にして兩親健在家は商業なり品行方正にして大酒家ならぬ軍人か多少財產ある所に嫁付たし再婚不苦婚後何處へ行くもよし。（熊本の白菊）

▲年廿一歲血正體健温順にして音樂を好む昨春高等女學校卒業後家庭にあつて家事を練習する地方門閥家の處女敎育あり多少の財產ある係累なき前途有望の廿五歲以上の方へ嫁きたし但し商家は不向。（神戸女）

▲年三十性質温順東京にて高等女學校卒業後二ヶ年専修科を修め頗英語の素養あり容貌普通兩親健在、許嫁死亡敎職にありしもの、周圍の事情により志操堅固なる相當の配偶を求む。（よし子）

▲年廿地方高等女學校及補習科卒業にて容貌普通兩親健在家計中等なり血統正しき品性高尙なる實業家若くは海軍將校にして三十歲以上三十七八歲までの人に嫁きたし。（靜岡の華子）

▲年齡十八歲血正體健市内第一流資產家の處女高等女學校卒業後家庭にあつて女子の技藝一切を實習中性質温良なり遠近を問はず將來大望ある人の許に嫁きたし都合によつては養子緣組するもよし。（福島の女）

▲年二十二縣立高等女學校卒業生にして現今家庭にあつて琴の稽古中、家庭極めて嚴肅の家に成長す身元確實なる學士學士、又は銀行會社員東京生活を望む三十一歲以下の人に嫁きたし。（上野の白雪）

▲年廿歲女子師範卒業敎職に從事する士族の娘にして父を失ひ今は母あるのみ財產なし數多の弟妹を育め逆境に處したるもの、同情ある軍人若くはハイカラ氣質なき相當の方と結婚を望む。（寫眞あり）（和歌山靜子）

▲年十九歳家は實業部銀行部の二部に別れ實業か五十萬圓銀行が 参拾萬圓にして親容は普通以上家柄は地方第一等に推され居る家の淑女、將來は洋航してあつぱれ交際場裡に活動せんとの目的なり、故に家の二男位にて大學卒業位の人に嫁きたし。(信州の女)

▲年廿三歳初婚容姿普通 品行血統申分なし 性質温順家計中等小學卒業後某女學校にて 專科卒業裁縫に熟達す 京濱間にて身心健全なる方に嫁きたし。(濱の喜み子)

▲年廿九歳血正の 初婚者教育は廿一まで受け父は十九歳の時死亡す家事に手傳ひし爲め婚期を延はしたり、高等教育ある將來有望の官吏外交官に嫁きたし。(京の花)

▲呼年二十六歳兩親及兄弟を有す 赤十字社看護婦卒業後 東京にて文學を研究し 目下家庭にあつて裁縫外國語其他の 技藝を練習中、 中等以上の教育ある商、工、 醫學者の中にて遠近を問はず行きたし。 (寫眞あり)(九州のうづき)

▲愚妹十九歳廣島高等女學校卒業家庭にあつて音樂、茶道、挿花、家政を實習し、性質温良身體健康にして家庭は嚴貴の家に成長せしめしもの、家にも郡内一二を爭ふべき 實產あり相當教育ある 前途有望の人に嫁かせたし。(廣島の兄)

貰ひ度き方

▲友人年二十五專門學校業 某省官吏目下月收廿五圓 前途有望者實の背年二十歳前後小學卒業以上身元確實なる女子を貰ひたし。(東京杏雲生)

▲年廿九歳中等教育ある 實業家の大男家計中流父健在なるも 母なし結婚後實島港へ別居の答既に 財產も父より譲り受けてあり 普通教育ある中流の家庭に育ちし處女を求む年齢廿四歳を限る。(東播の南狂生)

▲年卅歳血正目下某官廳に 奉職せり月收三十圓係累なし容貌普通十九歳より廿三四歳まで 高等女學校卒業或は 修業中の處女と至急結婚を望む但し當分約婚にても不苦。(横濱の數喜吉)

▲某會社員廿六月收四拾圓別に 係累なし體格容貌普通血統も正し十六歳以上廿歳以下成るべく不幸に育ちし處女を求む。(東京の匿名生)

▲三十三横濱商館員月收百十圓 高等學校出身係累毋一人相當の 家庭に育ち英學及音樂の素養ある容貌美しき年二十三の淑女を求む。(横濱の白鳩生)

▲年二十三前途有爲の美術學校出身の洋畫家性質頗る愛情に富む、數年の後佛國へ自費留學せんとの希望あり 中等教育を 有し容貌秀麗藝術趣味を有する淑女と家庭を作りたし。(東京TY)

▲知人年三十確實の 商業開店二ヶ年目下進運に向ひつゝあり 血統正しく二十六歳以下成る べく逆境に育ちし初婚の女を求む支度の有無は不論。(東京人)

▲血統正年十九現今某社に 奉職中未來の文豪を以て任ず十九歳以下にして高等女學校卒業若くは小學校教員免狀を有する淑女を求む。(高知の愛婦者)

▲呼年廿五某大學卒業官吏にして 年收六百圓外に 財產あり係累なし満廿歳以下の高等女學校卒業若くは修業中の淑女を求む但し三重、愛知、千葉、 東京在住者に限る。(千葉の九華生)

▲今年廿四歳只有るものは 借金と莫大なる抱負のみ他に一の係累なし目下或る官廳に奉職中也右の最劣漢を 補佐して其の希望を遂せしめんとする者あらば結婚したし但し女學校卒業か教員の資格あるもの。(下野寅羊)

時事寸言

玄濱

△良妻の模範

伯爵の妻なる烏丸操子、質素にして貞淑、五人の子女を養育するに曾て乳母下婢を雇ひたる事なく、日夕厨房のことより掃除洗濯の末に至るまで悉く一身に引受けて衰へたる家運の挽復に餘念なしと感ずべき心掛にこそ。

△一ケ月の費用

在京女學生一ケ月の費用は、寄宿舍生活にて十圓以上十二圓迄なり、若し十五圓以上を要する遊學生に至つては既に贅澤の部に屬するものなれば、地方の父兄は切に心して可なり。

△頭髮と腦の關係

島田と丸髷とは後頭部の毛髮を吊る故腦の爲に宜しからず、最も衛生的ならば束髮なりとの說あり。

△兄弟に對する心得

世間の兄弟姉妹が、各々身を定め家を持つに至るや、身分或は財產の相違にて、動もすれば骨肉互に相反目するの觀あり、斯る場合には先づ「親の心になつて御覽」と加藤博士戒む。

△音樂は健康に害あり？

琴は屈む故傴僂を作り、ヴアイオリンは兩脅にて肺を壓する故肺病を誘起し、オルガンは脚氣リウマチスを起すとは某ドクトルの言之も參考の爲め心得置くべき事なり。

△下流社會の音樂家

日本に於て最も優れたる樂器は三味線にて、隨つて上流社會よりも下流社會に多の音樂家あり、とは一外人の評、蓋し彼等は花柳社會を以て然かく不健全なるものとせず又藝娼妓を以て日本美人の標準となすが故ならんか。

△美顏術の流行

近來蒸氣作用とマツサーヂ法とにて自在に顏面皮膚の組織を改め得る新式の美顏術歐米諸國に行はれつゝありと自然を矯むるは宜しからず斯る惡流行はよろしく排すべし。

△女學生服裝問題

女學生の服裝改良問題に付、若し的確の意見を有する人あらば官民を問はず開陳されたし、とは文部省の要求なり、早く適當の服を案出したきものなり。

△日本服と沒威嚴

文明人の服裝は大抵上と下とに別れ身體の中央にて接合する樣に仕立てあれど、野蠻國の服は概れ上から下迄ズラリと續き居るが普通なり

南洋、印度、アイノ等これなり、日本服の如きも残念乍ら此の内に入る故に改頁論者は徒に軽便のみに重きをおかず寧ろ威儀と品格とに留意せざる可からずとは不折畫伯の言。

△女子體操の注意

體操家井口氏曰く。女學生が體操をするに先つて、髪を結上げよ、襟を合せよ、袴の紐を堅く結べと一人毎に私は注意を與へ、殊に姿勢と容儀とを正した後、始めて運動に取懸りますと。

△排斥すべき體操

表情體操とやら如何はしき法式の體操は風紀上に害ありと文部省の白仁局長語るこれは尤の事なり。

△主人は炊立、下婢は冷飯

炊立の飯よりも冷飯の方消化宜多して衛生に佳との新説あれど、單に消化のみ良くとも肝腎な滋養分に乏しければ結局＋－となる。

△好職業を逸する勿れ

地方の女學校にて、和洋料理法を専修したる女教師を十七圓以上二十圓の月給にて募り居れど一人の之に應ずる者なしと、職業難を唱ふる今日割烹教師も又よからずや。

△醫師としての女子

女子として最も收入多き職業は醫師に如く者なく、中にも眼科と歯科は尤も婦人に適すと。

△職業の適不適

女子の求職者は日々に増加を示し、就中多數なるは造花編物等を専修せし婦人にて、學校は卒業したれど郷里へ歸るも面白からず然りとて他に就職の途なきに迷ひ居るもの也とか、彼等は敢て其方針を過り來りしにあらず。只時勢の變遷を考へざりしのみ。

△約に背きし學士

學生時代に約したる婦人の情を蹂躙して、卒業後は全く見向きもせざらんとする薄情學士世に尠なからずと聞く、彼の如き縦情放埓の心して世の大事を成し遂げ得んと思ふが抑もの誤りならずや。

△妙齢女子の犯罪期

若き婦人には感情的犯罪者の多數なると共に、其犯罪期は多く紅潮時中にあり、とは法醫學上の示す處なりと。

△淺草の小養育院

六歳以上十二歳以下の孤兒を收容し、之に教育と職業とを授けて專ら家族的に經營しつゝある小養育院あり、此隱れたる慈善家は淺草森下町に住む森永一氏夫妻にて、孤兒等の之に親しみなづく様は殆んど骨肉も及ばざる程なりと曩に竹貫氏あり今又森永氏あり奇特の事といふべし。

△柔道と外國婦人

外國婦人間に柔道を學ぶ事近時の一流行也、或は是れ戰爭の餘響ならんが、但し日本の戰勝は決して婦人が柔道を知るが故にあらざるなり。

△海老茶袴の冤罪

「日本婦人は是非共海老茶袴を着けざる可からず」と満洲の我軍政署に於て達令す、而も海老茶袴を着する者の十中八九までは大抵醜業婦のみなれば、正業に在る婦人までが之と見誤られ迷惑を受くる場合少なからずと、内地に於ける海老茶袴も亦如上の冤罪に泣者あらん。

△一種の良人觀

某女が「結婚して最も詰らぬは馬鹿と圖拔て偉い男にて、また何方かと云へば偉い男よりも馬鹿を夫に持つ方が幸福なり」と語しが、女子は之を奇矯の言として斥くる前に、先味ふ可き眞理あるを發見するならん

△虚榮心も破鏡

夫は軍人氣質の素朴一片なるに引換へて、妻は華族女學校出身と云ふを鼻に掛、仕度い三昧の贅澤に夫を困らせたる揚句、日頃社交界の花と云はれたるの虚榮心より、遂に二人の兒を棄てゝ離婚を敢てしたる無情の女あり。

△金鵄勳章が離縁の元

妻は其前身に似もやらぬ孝貞兩全の婦なるに拘はらず、其戰友より金鵄勳章まで享けたるものが賣女上りを妻として居るとは帝國軍人の面汚しなりと罵らるゝが心外さに、遂に十年の苦樂を倶にせる糟糠の妻を離縁したる軍人あり、其體面は兎もあれ吾人は毫も罪なき妻を犠牲とすべき由因を認むる能はず。

△寡婦の増加

戰役後に離婚寡婦の増加したるは孰れ軍人の遺族扶助料下賜の紛爭に原因すと識者の一考を煩はしたし。

△容易なる長壽法

其壽法の秘訣は禁酒禁烟及び早起と日光浴に限ると本年百十三歳の老翁語る、一見平易の如くして而も是れ大難事業也。

△女子革命黨員

露國に於て革命黨に投ずる女子の十中八九は虚榮心の爲に婚期を失したる者なりと。

△女子に對する禁句

醜婦に向つて他の德行を賞するは妨げざれど、決して其美を說く勿れとは西哲の金言。

△英國の家政女學校

英國の女子教育は理論よりも實際に重きをおく、家政女學校其の一例也洗濯料といふものなくて、通學生は凡て父母兄弟小供等の衣服を携へ來つて實地に洗濯法を練習する由學校卒業後は、直に市立貧民女學校の教師或は上流社會の下婢に雇はるゝ者多しとか。

家庭小說 災禍は三萬磅（下）

折笠



憐れな父は、馬鹿旦那の調子があつて、牛の肉を混せるのが相應して居ると云ふ、誠に取るに足らぬ者として、娘達に見くびられて仕舞つた、だから客のある時には臺所に退き、又一服やりたいと思ふ時にも、隠れてそつとやるか、外の方へ行てゝも吸ふより外仕方がなかつた、是のみならず、親娘の不和の原因は他の方面にも起つた、それはジョンの事で、姉妹は死んだものと思ひもし、又左樣考へたかつた、けれども、ピーターは堅く、彼は生きて居て何時か歸つて來るだらう、と云ふ事を主張した。

『何故それぢやア手紙をよこさないのです』

とチリーは極めつけた。

『そうさ、手紙は時に寄ると間違つて屆かない事もある、殊にジョンは多分外國へ行つて居るのだもの、歸つて來るだらう、いや必ず歸つて來るよ』

姉妹は是に對して、强いては議論も試みなかつた、只侮蔑の色を以て父を眺めた、が、ピーターが云つた通り、ジョンは手紙をよこした、それは或朝チリーが獨で居る時に來たので、彼は弟の筆蹟と氣が付くや否や、猶豫なく開いた。

『お父樣は知るまい』と彼は考へた、

「若し知れてもよいが」
と獨言しながら讀み下した。
ヂョンは母の死亡廣告を見たらしく、父の宥しを乞ふてある何樣、非常に後悔して居る、書き振りで、今彼は外國へ行て、相應に出世をして居る樣子であるが猶十分の名譽と財産を得るまで、其處に止まつて居る心算であるらしい、そして最後に、姉妹は貴下に親切である樣に、又彼等は猫で、而もチリーハ爪と歯と兩方持つて居る、けれども彼等の爲に私は家出したのではない、父上の幸福を祈ると書き添へてあつた。
チリーは、此手紙を怖ろしいものゝ樣に、慌てゝ火に焼べて仕舞つた、併し手紙が燃へて仕舞つてからそれが眞に心配の種になつて來た、が、やつて仕舞つた事は仕方がないと、是に就ては父にもノラにも語るまいと決心した。
姉妹ともやがて結婚すべき程の年になつた。チリーは一度約束した人があつたが、その戀人はチリーの爪と歯の凄まじいのを知つて、泣きながら逃げ去つた。
これは母が死に、財産を相續し、ジョンが出奔して、チリーが主人となつてから結婚を申込んだ人であつたジエボンと云ふ名で、中年の相場師である。若、其事業が彼の口程ならば實に盛大であらう、チリーは進んで四千磅を彼の資本の内へ差出した位であるもの、ヂエボンは兎も角も五分の利子を、チリーに相違なく拂つて居た、其爲に流石彼の爪も歯も、ヂエボンには少し鈍つて居た樣であつた。
不思議な事に、ヂエボンは來る度にジョンの話を持ち出す、チリーは面白くなく思つて、話を横道に避けるのに、彼は何時も熱心で、色々聞いたり糺したりする、此樣事が幾度かあつた後、嗚呼彼は實に其本性を現はしたのである、或時彼はチリーに向つて斯う云つた。
「如何です、ジョンの金を取らうじやありませんか、公證人に預けてある間に、株が騰つたので、積つた利息と合せれば大丈夫一萬二千磅以上になる貴孃とノラ孃とで分ければ六千磅宛、如何です、やり樣によれば

とれますせ」

「妾も左様思つてるけれども、眞實に取れるかしら」

彼の女の心は動いたのである。

「眞實に如何したら取れませう、あれはジョンのですよ、妾のぢやありませんよ」

「そりやアそうですとも、併し若しジョンが死んだとすれば、相違なく貴孃の所有でしよう、叔父さんの遺言書にある通り」

「夫はそうですけれども、死んだとも死なゝいとも、今ぢや證明する事が出來ないぢやありませんか」

「出來ますまい、私にもむづかしいが、方法があるだらうと思ふんです、只人が失踪した時に、長く便りがなければ、夫を死んだものと認める事は出來ます、此塲合に裁判所は死んだ者として、判決を與へます、如何でしやう、誰か辯護士に相談して見たらば……」

「オルダークル辯護士なら、始終家の事で働いて呉れます、頼むで見ませうか」

發議は承諾されて、ノラにも承諾させて、總勢三人オルダークルの事務所へ行つた、そして、デユポンが姉妹の代りに、色々な事柄を並べ立てゝ、如何したものであらうと相談した。

すると辯護士は、

「請願をなさい、ジョンチャンスは死だ者として、陳述書を添へて、それで若し、裁判所が請願を許可したらば、ジョンチャンスの死は、丁度死亡證書と同じ樣に、證明された結果になるのであります」

と辯護士は言つた。

「貴郎、それで妾達が金が取れる樣になるのですか」

とチリーは尋ねる。

「勿論、ヂヨンチャンスの遺産は、貴孃方のものであります」

「けれども、裁判所は請願を許可するでしようか」

「それは全く裁判官の認定に屬するので、勿論とは答へ兼ねます」

オルダークルは流石に職業柄で、萬一の塲合に對する防禦線を張つたのである」

「まア、やつて見るが好いと思ひますが、私に總ての手續をお任せ被下ますか」
「願つた方か好いでしような」
　とジエボンは云ひながら姉妹を顧みた。姉妹は各々
「左樣願ひましよう」と答へる。
「では」と代言人は姉妹に、二三の問を試みて、それを筆記して、
「よろしう御座ります」と言つたが、再び、明日お呼び申したら、陳述書に調印するお心組でお出でを願ふと、この事を附加へた。
　ピーターが此事を聞いた時には、妻を失つた時よりも一層深く、心を動かしたと見えて、斷然娘等の同宿を斷つた。
「お前達は弟の物を盜まうとするのか、勝手にするが好い、敎會の物を盜む泥棒より惡い奴等だ、恥を知らないか、馬鹿め」
「何ですつて、貴郎に關係はないぢやありませんか、貴郎は貴郎の仕事をしてお居でなさい」
　チリーも負けずに叫ぶ。
「お前の言ふ事は解つたよ、お前は私に、工場へでも行つて仕舞へつて云ふんだらう、よし、行かう、私は何處へ行つたつて、眞逆に此處ほど不親切にも待遇かはれないだらうよ」
「馬鹿をお言ひなさい、お父樣」
　無事に收め樣として、ノラは口を出した。
「ジヨンが死んだとしたら、妾達は弟の物を盜むのではありませんよ、そして若し妾達がそれを取らなければ、それは政府の物になつて、何にもならなくなつて仕舞ふぢやありませんか」
「ジヨンは死にはしない」激して老人は斷言した。
「先ア、何も今それを議論したつて仕方がないぢやありまんか、來月裁判の開かれる時に、裁判官が何て云ふか、それをお聞きなさいまし」
　其後ピーターはオルダークルに逢つて、ジヨンは死んだと假定された事に就て、駁論を試みた、けれども辯護士は、

『そんなら、貴郎を仲裁人として、評議を止めなければならない、而して、貴郎は出來る丈、御子息が生きて居られる事を仰つしやるのですな、私は此場合、貴郎のお言葉がそれ程有力であるかどうかを疑ひます』と冷かに答へた。

　全く左様だ、ピーターの力は評議を止めさせる程の効はない、のみならず、自身すら只信ずるといふ丈で殆ど一も根據はないのである、けれども、彼は希望を以て生きて居る。未だ〳〵ジョンを死んだとは思はない、熱心に探し出さうと考へた、川添の船渠や、波止場に近い處を歩き廻はつては、古い友達や、知り合ひの船乗りに逢ふ度毎に、「息子に逢はなかつたか」と尋ねるのを、せめてもの心遣りとしてゐた。

『丈の高い、岩疊な、鳶色の眼で、灰色の髪で、年は二十六だ』と彼は言ふのである。

　大抵な人は、此説明に該當する若者に出逢つたと云ふが、ジョンチャンスの名を、確に答へた者は誰もない、けれどもまだピーターは絶望しない。

『私は本物を見付ける』と彼は獨言をいつた。丁度其時、娘達が弟の死を假定しての請願は却下されたので新らしく勇氣を増して、ジョンを見付けるあらゆる手段を繰返した、裁判官も、此事の決定を得る爲めに、廣告を幾多の内外國新聞に連載させた、併し何の申出もなくて六箇月を經過すれば、ジョンの死は確められ娘の請願は取り上げられるのである。

　ピーターの腹の中は急に忙しくなつた、六箇月、六箇月、空しく此期間を過したならば、今迄の總ての心配は無益になるのだ、如何か聞き込む事があらうと信じて、毎日〳〵飽きもせず、船渠波止場をうろついた併し彼の穿鑿も又廣告の様に無駄であつた、そして六箇月は夢の如く過ぎ去つた、請願は復活する、裁判官は死んだものとして、ジョンチャンスに判決を與へる事になつた。

　ノラと、何時の間にかジエポン夫人となつたチリーとは、定めの日の正午、證明の爲め辯護士同伴で來たならば、銀行手形で、故ジョンチャンスの遺產、元利

合計一萬一千八百六十磅を受取り得ると云ふ事を言渡された。姉妹は流石に世間體もある事を懸念して父を招いだ、が、彼は憤然として拒むだ、そして今一度波止場へ行つて、身を水際の石に寄せた、此時だけはジヨンの行衛を捜さうとしてゝなく、單に時を過ごして出來るだけ娘と離れ樣として行つたのである。

マリーやジヨンの事、幷びにシメヲンクラプトリーが殘して行た偶然の幸は災禍と變じた事など、頻りに思ひつめて、聞くともなく見るともなく、夢中に徘徊うて居た、すると年寄友達が肩をたゝいて、

「おい、ピーターチヤンス、如何かしたか、いやな顏してるぢやないか」

と愉快らしい聲で高く叫んだ。當人のチヤンスには聞えたか、返事もせぬのに、意外にも

「ピーターチヤンス」と、質朴さうな、日に燒けた、通り掛りの人が小首を傾けて繰返す、

「御免被下、貴郎は眞實にピーターチヤンスと仰有いますか、若しや」

「それは私の名ですよ、貴郎」

「では貴郎は、ノツチングヒルゲートにお住いですか若しくはお住まひの事がありましたか」

「數年來私は住むで居ります」

「ではお子さんがおありですか」

「二人ありました、一人はトムと云つて死にました、も一人はジヨンと云つて外國へ行きました、貴郎はお逢ひではありませんでしたか、丈の高い若い、堅固りした肩巾の廣い」

「いや確かに貴君がピーターさんですね、逢つた處か無論逢ひました、私達の仲間です、私はスミスと云ひます、茲にジヨン君のお手紙、サア御覽被下まし、一度郵便で出したが返事がなかつたので、貴郎にお目にかゝつて手渡しして與れと賴まれたのです」

「ヤ、遂々……有難う御座います……神樣有難う御座います、神樣」

ピーターは手紙を開きながら、半ば小聲で、感謝の言葉と共に、慄へる手先に眼鏡を直した、一目で充分

其以上は見ない、只一寸終りの言「存命の子息ジョン」とあるを見た切り、其以上は見る必要がない、いや餘裕がなかつたのであらう。

「一時間ばかり御都合出來ますまいか、スミスさん、御迷惑でしようが是非……」

彼は烈しい調子で云つた、

「一萬二千磅ばかりの事件で、それを或る人、彼の姉達が、私はお話するのも悲しい、ジョンのを盜まうとして居るので御座います」

「勿論、私は一時間でも、一日でもよろしい、都合しませう」とスミスは頼母しげに云つた。

「有難う御座います、では何卒御一所に……、十一時は今しかた打つたが、まだ大丈夫だらう」

と口の内、辻馬車を呼むで、ホワイトホールまで、出來る丈急げと云つて乘り込むで、掻摘むだ事情をスミスに話した。此手紙と、スミスの證據と助力とによつて、ジョンの金を、チエポン夫人とノラ孃と、此二人の娘に讓る事の出來ない樣に、如何かして仕たいものだと話した。

彼等が裁判所へ着いた時には十二時過ぎて居て、オルダークル辯護士も二人の娘も、二階の一室で早それを計算して居るのである、些の猶豫もない、二人は直にそこへ行つて、禮儀も何もなく飛び込んだ。彼等が總ての手續は最早濟むだらしい、チエポンとオルダークルの立つてる際で、チリーは何かに調印して居る、姉妹一人に一枚宛、二枚の證書は主任書記の前の机の上に置かれて居る。

「ジョンは生きてる、ジョンは生きてる」

ピーターは頭の上で手紙を振り廻して叫ぶ。居合した人々は發狂人かと思ふて、

「此人は誰です」と書記は糺した。

「私はジョンチヤンスの父です」

ピーターは人の言葉も待たずに言ひ出した。

「ジョンは生きてる、私は此通り手紙を受取つた、而して此方、スミスさんは、今迄一所に居た人です、茲に手紙があります、オルダークルさん、私は只一寸見

たばかり、貴郎何卒聲高に讀み上げて被下」

其手紙には、大體左の如き主意の文句が認めてあつた。

小子は機關師としての敎育と經驗を得、今はタスマニアにて最も富める者の一なる、ゴールデンフリース鑛山の、機關長として株主たる位置を作り、望みしより以上の財産も出來候。シメオングラプトリーの遺産の內、小生の分保管人の手に之有と想像仕候を、父上にお讓り申度と存候間、其目的の委任狀を渡し得る、適當なる法律家御差向け被下度候。小子は御面會に拜趨致度候へども、外出を許されず其意を得ず、若し出來得べくば當方へお出掛け御面晤を得ば、世界にて是れ以上の喜び御座なく候若し費用等のお差支へも候はゞ、スミス氏總て相整へ可申、若し彼と御同道ならば、然るべき人をニユージーランド銀行へ遣され、劵面二百磅の爲替劵御受取可被成候。

「これは充分本物らしい」

と讀み了つて辯護士オルダータルが言つた。

「貴女は弟さんの書風を御存知でせうね、ジエポン夫人」と手紙を見せながら、

二人の顏は、假令失望落膽し內心怒つて居たにしても、弟の生きて居たのを、如何にも滿足する樣な風に見えた、又其樣にと勤めて居たのであらう。

「それの樣ですね、それと思ひます、ジヨンのでしよう、ジヨンが生きて居るとすれば、此樣な喜ばしい事はありません」

強いて笑いながら、喜ばしげにチリーは云つて、

「ジヨンが生きて居ると云ふのなら、請願も取り下げて仕舞ひませうね」

と夫ジエポンに囁いた。

「是は慥に計略だ」聲を張り上げてジエポンは、

「私は如何も信じられぬ」

猛り立つて爭はふとする樣子を、チリーは押へ付ける樣に止めた。

「ジヨンチヤンス氏が、疑ひなく生きて居るとすれば

茲で此證書と引更へる事は中止いたします」
と主任の書記は嚴かに云つた。
「勿論、私も出來ない、私は吾々は早引退がる可きであると思ふ、夫人、吾々はそれより仕樣がありますまい」
とオルダークルの言葉に、デエボンも思ひ切つたか出て行つた、ノラも出て行つた。
「左樣なら、お父樣」
デエボン夫人は出て行かうとして、故意とらしく、慇懃に云つた。
「來遇緩りとお出で下さいまし、お待ち申します」
「有難う、御親切は戴きました、が、私は貴女には氣に入らぬ招待を受けて居ります」
「何誰の御招待」
「左樣、ジョンチャンスの、私は直にも出掛け樣と思ひますで、先方に差支へない限り、恐らくは死ぬ迄、彼方に居らうと思ひます、左樣ならチョリー、左樣ならデエボン夫人」
オルダークルは獨言を云つた。
「先々これで惡事も出來ず、結構であつた」（完）
（註）夫は妻の叔父なる人の遺言に依つて遺產を相續するを得ず、娘二人は遺言によりて相應の財產を相續しながら猶弟の所得を橫領せんとせり、其の暴慢眞に人情の賊なり天意測らず正直なるこの父を惠みて娘の橫暴を懲せり。

金簪

上

逃禪

「お國や、あの、勇さんは、太層お歸が遲いぢやないかね。」
年紀の頃は五十五六、鐵無地紬の綿入に、同質く黑の三つ紋附、幅狹な黑繻子の帶で、五番形の丸髷に結つた、昔氣質らしい母親に尋ねられて、國子は「はい」

と言淀んだが……。
『別に何處へ行くとも何とも、言置いては參りませんでしたけれどもね、猶旦御用で、他へ廻つたんでございませうよ。』
母親は物思ふ形。
國子は黒縮緬の羽織の衿を、寒さうに掻合せて、
『ま、可いではありませんか、ゆツくり話して被在いな、ねえ、お母さん、可いでせう、そちこちしてる内には歸りますからさ。今夜は那樣に遲くなるやうな、氣遣もないんですから、ね、お母さん、然うなさひましよ。』
艶澤に結上げた丸髷、操形と云ふ本甲蒔繪の櫛笄、鬼灯形無疵六分珠珊瑚の金簪。色の白い、唇の紅い、目鼻立の判然した、品の好い、仇氣ない、其癖故とらしい奥樣姿。年紀は十九か二十歳ぐらゐ。國子は………女學校を卒業して、此の邸に嫁付いてから、未だおどもないのである。
母親は立懸けて、吸殻を丁と拂き、
『あい、難有う、』と禮を言つたが。
『別にお目に懸らなくてはならないといふ用事もなしそれにね、道が遠いからね夜の更けない内に歸らうと思つて。
何時だらうね、もう、』と聞く。
『七時打つたばかしですよ。』
『然う、ぢやもう少し居やうかね。』
母親は又腰を据えて、玉火屋のヲムプの火影に、恍惚、我が娘ながら美しい、國子の姿に見惚れて居たが弗と丸髷の金簪を見尤め、
『おや、まあ、大層お見事な、まさか黄金ぢやアあるまいね。』
國子は莞爾。
『是ですか。』と拔取つて、得意げに、
『本珊瑚よ。然う見えても。』と母親に渡す。母親は、
『えゝ、』と吃驚。ためつ、すがめつ打眺めつゝ、
『成程是は恐入りました、ほゝほ、お母さんは又、まアよく出來たゴム珠たと、然う思つて見て居たのだよ。

でも此脚は滅金だらうね。」
娘は可怨しげに、母親を見遣りて、
「酷いわ、お母さん、」
「まあ、」と呆れて、
「金かい？」
「金ですとも、」
「本當の？」
「まあ、よく見て下さいよ、お母さん、恁う見えても純金です。」
　母親は今更のやうに、燈火に透かして左見右見。勿體無さうに袖へ乘せて、
「大層なお金子目だらうね。」
「珠ばかしが六十圓ですッて、」
「えゝ?!」とばかり目を瞬る。
「脚だけが三十圓ですッて、」
「では皆で九十圓。」
「否、作料ぐるみ、何でも百圓近くは懸つて居るんですッて。」

「百圓近く……。」
　母親は感じ入つたやうに、
「では金時計より高いのだね。へい……、」
　と言つて、又つくづく。
「よく人が五分珠だの、六分珠だのつて言ふけれど、お母さんは今年の正月、お前さんに連れられてつた時に、淺草の珍世界で見た外、本當の珊瑚珠は見た事がないのだもの。成程是が本珊瑚かね、此のまア色の好さつたらないのね。
　而して、まア、お前さんは、いつ買つてお貰ひだえ」
「昨日買つて頂いたのよ。」
「何、昨日？
　勇さんが買つて下すつたのかい。まア、お父さんに話したら、どんなにかお喜びだらう！
　今度來る時挿して來て、お父さんにお見せでないか。お前は本當に仕合せ者だよ。大事にしてお挿しなさいよ。平常になんぞ恁云ふ物をさして、それこそ罰が當りますよ。」

母親は簪を返して、

『お前が恁云ふ立派な物を、持つて居る事がと思ふと此の私までが肩身が廣いよ、否、全く、』

母親は喜悦の餘、老の目にはや涙さへ浮べて、

『勇さんは感心な方だ。何うして何うして今時のお若い方には稀しい。あれほどの器量を持ちながら、藝妓遊をなさらうではなし、妾狂をなさらうではなしね。

それだからお父さんもね、始終賞めて被在やるのだよ。

『(中尉ではあるが副官だ。旅團長の副官だ、少將の副官だ、副官と云へば昔の近習だ、お側役人も同じ事だ。それだから歩兵でも、馬に乗る事が出來るのだ。あゝ立派な軍人だ。那麼良い婿を有つて、俺も恁麼仕合な事はない。)と、ね。

また〳〵お前其ばかりぢやないよ。林さんね、あの從卒の林さん、那の人の事を言つてね、(女で居ながら黄色い帽子の兵隊さんを、家の食客か何かのやうに、それ水を汲め、庭を掃け、風呂の下を焚き付けておくれと………。否、まさかに那樣用もさせはしまいけれど、でもお使ぐらゐはしてくれませう、それごらんなさい。旦那の靴を磨いた後で、履物の土ぐらゐは、いつでも落して貰はれるといふもの。それが皆今も云ふ、黄色い帽子の兵隊さんだらうぢやないか。豪氣なものだといつも〳〵お父さんとも言つてるのだよ。

家の勇ね、駒込の學校へ通はせて置く、あの子のね成績とやらがよくて、未だに五番と下つた事のないのも、又、此頃は學校の級長とやらをしてますけれど、其も是も皆勇さんのお蔭です。と、然う思つて、私も喜んでゐる事さ。

此間もね、やッぱり學校の先生からお使が來て、あの勇をば生徒たちの摸範にしたひからつて、保證人に來てくれと云ふ事で、お父さんは役所の方が忙しくて行かれないから、女の私なんぞ行つたつて、何うせ解りはしまいけれど、行かない譯にも行かないから勇と一所に行つて見るとね。椅子に掛けろの何のつて、大層深切にして下すつて、而して先生のお聞きなさるに

は、(學校から歸つてから、本の溫習をしますか。)の、(御兩親の有仰る事を、大人しく守りますか。)の、(戶外で遊をなさるか。)の、(同胞喧嘩はしますまいか。)のと、色んな事をお訊ねなすッて、一々有の儘を申上げると、(其では級長に致します。)と然うと言つて下すつたがね。

何でも、其前にも一度當人に、色々な事をお聞きなすつたさうで、(兄弟が在るか。)と有仰つた時に、(はい、姉さんが一人在ります、そして、其の姉さんは、中尉の蘆原勇つて軍人の、お嫁に行つて行るんです。)と大威張に言つたさうだけれど、」

國子は呆れて、

『まア、那樣事を言つたの、可厭な勇さんだ事。』

母親は猶得意げに、

『否、勇ばかりぢやありません、お前が此邸へ嫁付いて、嬉しい事は皆同しです。私始めお父さんまでが、來る人、來る人捕へては、勇さんの話ばかり。

一昨日もお隣のね、那のお轉婆のお品さんが來て、何を言ふかと思つたら、

(今も切通を上らうとして、てら〳〵天鵞絨のやうに毛の光る、アラビヤ馬とか云ふのに乘つて、年紀の若い軍人さんが、お成道の方へ行つたのを見たけれど、私やつく〴〵然う思つたわ、お國さんが可羨しいと。)

(何うして那樣に可羨しいんだね。)と言ふと、私の顏を覗込んで、然も〳〵感心したやうに、(小母さん、軍人は淺ましいね！)、」

『え？』

國子は目を瞠てた。母親は氣が着かず、

『學問のないものつて、爲方のないものぢやアないかね。お品さんは、その軍人を見て、勇ましいと思つたのだらうけれど、然う言ふ事を知らないものだから、淺ましいと言つまつたのだよ。』

國子は思はず『ほゝほゝほゝ。』

母親は嘲るやうに『是ぢや幾ら軍人さんのお嫁に行きたいと思つたつても、貰ひ人がなからうぢやないか那の子も最う些つと小さい内から學問をしてさへ置け

ば、器量は好し、氣立はよし、甚麽立派な處へでも今頃は嫁つて居たらうけれど、可哀さうに、相變らず交換局へ行つてるのだよ。』母親は言畢つて、

『又下らない事を話し込んで、遲くなつて了ひました。私は來ると是だから困る。もう餘程になるだらうね、』

『否、未だ那様ぢやありませんよ。常や、何時だえ。』と勝手を呼ぶ。

『唯今十時でございますよ。』

『何、十時、』と母親は慌てゝ、烟管筒を探しに懸る。

『今夜は泊つていらつしやいな、ねえ、泊つてつて下さいよ、私も寂しいから、よ、お母さん。そして明日の朝早くお歸んなさいな、可けないんですか、』

『然やうさね、』

母親は眞入を差して、良暫時考へて居たが、

『又勇さんのお在なさる時、勵でも引張つて、ゆッくり上る事にしませうよ、餘り遲くなつても惡いから、』

國子は猶殘惜しげに、『お泊んなされば可いのにね、』

『倬を然う言つておくれでないか。』

『はい。』と娘は立上つて、襖を開けて次の間へ、旋て此方に引返すと、

『來る度〳〵お氣の毒だね、旦那樣のお留守に上つて』

『否、何う致しまして、那樣心配は入りませんよ。內へ來たら決して〳〵、遠慮なんぞしない方が可うございます。』

女中の常はがつぴしと、此時倬を呼びに行つた。

母親は暮々も『那の簪は大事にして挿さなくては可けませんよ。

買ひたいと思つた處で、おいそれと買へるものぢやなしね、さうだともね、旦那樣が那の方なればこそ、那麽結構な物を買つて下すつたんですよ。

そりや勇さんの事だから、此先又甚麽事で、甚麽結構な物を買つて下さらないと云ふ限もなからうけれど平常になんぞ那麽物を揷しては、第一罰が當ります。』

紙門が颯と外から開いて、顯れたのはお常である。年紀の頃は十七八、大人しやかな女中である。

『奧樣、あの、お倬が參りましてございます。』

國子は、
「あゝ。」と頷いて「可いから待たせて置いておくれ。」
「はい。」と言つて出やうとする時、母親は歸支度をしながら、
「色々お世話になりましたね、遲くなつて濟みません睡かつたらうにね、御苦勞樣。」
女中の常は何の氣なし、「否、もう、何う致しまして毎晩ですから、些とも。」
と言ふ、母親は聞耳立てゝ、
「何、毎晩ですつて？　遲くなるのが、」
國子が「常！」と氣を着ける。
「否、私は宵つ張の癖が着いて居るものですからね、」
早速の氣轉、言眩める。
始めて安堵したやうに、母親は落着いて、
「あゝ、そんなら可うござんすがね、私は又、旦那樣が、毎晩遲くなるのかと然う思つて、」
「否、那樣事はありません。」國子が安心するやうに言ふ。
「然う、そんなら可うござんすがね……。」
娘の顔を熟と見て、
「隨分大事におしなさいよ、」
「はい、」と娘は少し悄げる。
常が、
「お包は私が持ちませう。」
母親は手渡して、娘に、
送つてなんぞ來なくても可いよ。」
「でも、まア、玄關まで、」と送つて出て、車夫に、
「本郷の西片町だよ、氣を注けて行つて下さい。」

中

國子は母親を送つて歸ると、茶の間の散らかつたのを取形付けて、洋燈の心を稍細うしたが、がつかりしたやうに長火鉢の前に坐つて、
「常、」
「はい、」と敷居の外に、手を支へて畏り、
「何ぞ御用でございますか。」

國子は火箸を手弄りながら「別に用ではないのだがね、」

「はい……、」國子は可怨しげに女中を見遣りて、

「お前、今何だつて、お母さんの前で那麼事を言つたの、」

「……」默つて居る。

「氣を着けてくれなくては、私が困るぢやありませんか。」

女中は何を思出したか、悲しげに涙含んで、

「別に、何も、悪氣があつて、申した譯ぢやありませんけれど……。

恁うやつて、毎晩々々、お一人で恁麼お寂しい處にお留守ばかり遊ばして被在います、奥様のお心の内をお、お察し申し上げますと、然う申しちや失禮ですけれど、私は、何爲、旦那様が、恁麼に遲くまでお歸遊ばさないのかと思つて、く、悔しくて、悔しくて、ならないものでございますからね、」と涙を飲込んで、

「つひ……、那麼、粗忽な事を、申上げるのでございます。私が悪うございました。然ぞお腹も立ちましたでせうけれど、何うぞ御勘忍遊ばして下さいまし。」

と殊勝らしく詫を言ふ。

「そりやア私の心を察して、可哀さうだと思つておくれの、志は嬉しいけれど、何も知らずに那遣つて喜んでお在なさる、お母さんの前なんぞで、那麼事を言つておくれだと、私が困つて了ふからね、」

「御尤でございます。」詫を言はれ　深くは尤めず、

「今度から氣を着けておくれ。」

「はい、」

國子は優しく、親切に、

「そして、もうお寐みよ、今夜も猶旦お歸が遲くなるやうだからね、あゝ、私には構はないで、用があつたら起すから、」

「はい、」

お先へ御免を蒙りますと、女中は其儘引下つた。國子は常を寐かした後で、唯一人ぼつねんと燈火を守つて居る。

然るにても、此の纖弱き夫人に、一人燈火を守らして、夫勇は、何が故に、恁く歸宅が遲いのであらう。公務かと云ふに決して公務ではない。然うかと云つて浮氣らしい沙汰も聞かない。勿論中尉蘆原勇は、交際社會の花とさへ謂はるゝくらゐ、其の容貌と云ひ、風采と云ひ、彼の所謂衣肝に至り、袖腕に至る的似而非豪傑肌の軍人とは、少しく其趣を異にして、譬へば若木の山櫻、渠が其名を白雪となむ呼ぶ月毛の駒に打跨りて、陣所に通ふ道すがらは、心無き往來の男女さへ歩を留めて見送るくらゐ、旭に匂ふの風情が有るので、某の會、何某の宴より歸りて、弗と其のポケットを探りし時に、媚かしき女筆の文の忍び居し事もあつたが……。

渠はいつも恁う言つて居る。

(今日は副監督の大川の宅で、碁を打つて居たもんだからね。)

(今夜は大川副監督の宅で、相談會があつたもんだからね。)

(今夜は大川が是非と云ふので、玉突に行つたものだからね。)

國子は別に疑いもせず、言はるゝ儘に信じて居た。

素より大川軍次と云ふのは、良人勇の同郷人である別懇の間柄である。

赭顏の、金壺眼の、獅子鼻の、髭達摩の、面して軍服の肋骨の紐が彈き切れさうな大兵肥滿の男で、年紀の頃は四十五六、去年細君が貧血で死んで、其でも息子が三人あつて、總領が士官候補生で、二番目のを海軍豫備校に、三男を幼年學校に、皆軍人に仕立るてのださうだけれど、なるほど、丈夫な、好い子だと、良人からも聞かされて居たが。

其の、副監督の大川の宅で、將棋を差し、碁を圍む……。其も一晩二晩なら左に右、毎晩だから可訝しい……。と思つて居る矢先であつた。

彼の神聖なる陸軍省内に、忌はしい疑獄が起つた。

そして、經理局の軍吏とやらが、被服、糧秣、築建：……、其他の、あらゆる御用商人から、收賄をしたと

の嫌疑で。先づ第一番に捕縛されたのが、一等副監督大川軍次！

良人の懇意の、同郷人の、髯達磨の大川軍次然かも彼は醜類の巨魁と天下に目せられた。縛せられたのは其外にも、醜類は強ち經理部員ばかりではない、師團の聯隊にも蔓延つて、知名の少佐がある、大、中、少尉が在る。

皆良人の勤めて居る先。

然かも醜類の巨魁と云ふのは、良人と別懇の間柄である。

捕へられたのは然かも昨日！

恁う考へると心も心ならず——いつになく今宵の一際、良人の歸館の遲いに就け——留守を守る妻の國子は、長火鉢に兩臂突いて、頤を衿に埋めたまゝ、吻とばかりに嘆息吐いた。此時時計が一時を打つ。

何うして恁麼に遲いのであらう？國子は又思返した良人勇は軍人である。少くとも國家の干城である。交際社會の花である。旅團長の副官である。中尉である、俊才である。

豈夫に那樣穢らはしい破廉恥罪を、犯すべき道理がない。

國子は恁う思返すと、今更のやうに何等の科罪もない、然かも清淨潔白な、中尉の、旅團長の副官の、國家の干城の、交際社會の花の良人の勇を疑つたのが、申譯のないやうな氣がして、思はず兩手を犇と合せてあらぬ方を伏拜み、其罪を謝しながら、可懷さに耐へ兼ねてや、はら〳〵と涙を零した。然るにても良人勇は、何うして恁麼に遲いのであらう？

少しも早く無事な顏の見たさに、其の歸を待兼ねて居ると、深として、夜は更け渡つて、時計の秒を刻む外には、物の音も聞えない、遙巷の彼方に當つて、嬉しや、白雪の嘶く聲！

近く蹄の音さへ響く。

良人の姿は目に見ゆるやう！

國子はいそ〳〵立上つて、鬢の後毛を手早く掻上げ羽織の衣紋を取繕ひつゝ、臺ランプを取上げやうとし

て、偶と、目に留つたのが…………金簪。桐の柾の小箱に入つた、ランプの臺に乘つて居るそれで。

國子は一目見ると慄然として、憂愁の色面に溢れた。

下

其翌朝、中尉が出勤をしやうとする時、常は慌てゝ納戸に來たが。

「奥樣、唯今恁云ふお方がお見えになりましてございますが。」

三尺四方もあらうと云ふ、見事な、美しい、金線の姿見の前にすらりと立つて、屈んでズボンを穿いて居る、中尉に上着を着せ懸けて居た國子は、振返つて見て、

「甚麼お方、旦那樣は今御出勤を被成る處なんですからね、お目に懸つては居られますまい。」

「では、其の通り申しませうか、遂ぞお見懸け申した事のない、始めてのお方のやうです。」

「其ではお斷り申しておくれな。」

中尉は立上ると、軍服を着て、「待てよ。」

「常。」

「はい。」と引返す。

「名刺を見せな。」常は恐る〳〵名刺を出す。受取つて見て、

「何、憲兵曹長？」妻は驚いて、

「えゝ？」と言ふ。

中尉は屹となつて、

「此方へ通せ。」國子は眞蒼になつて、

「もし…………。」

中尉は手早くサアベルを着けて、泣伏す妻を引寄せながら。

「お、俺が惡かつた。」と一言。

サアベルの鞘がキラリと光つて、腰に下げたピストルが見えた。

其時憲兵は恭しく一葉の紙片を示した。而して、

「憲兵司令部長の命に依つて、中尉殿を拘引します。」

と嚴肅に言渡した。

（完）

女學世界定期增刊 女智惠袋

燈下親しむべきの好時節を以て發行する本誌の定期增刊は題して『女智惠袋』といふ是れ必ずしも現今家庭に必要なる婦人の智料を悉く此一篇に嚢括したりといふにあらず、されど奇拔なる觀察と趣味ある文字によつて、家庭生活上に多くの學問と便益とを供給すべく十二分の用意を盡したるものと信ず目次左の如し

十月十五日發行
定價廿錢
郵税貳錢

十一月號記事豫告

（十一月五日發行）

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
内（定刊數……十二册　增刊四回…一、四、七、十月價格同一）	
郵税	一册 二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	………	二十圓	割引四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規略

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年十月五日發行　第六卷第拾參號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　本局　三千三百十番　三千三百八番　二千六百二十番　二千二百九十番

紅葉山人　尾崎徳太郎君遺著

紅葉全集

全部六册總紙數五千六百頁全部完成

洋裝大判　總クロース　上製　金文字金模様表紙

正價一册壹圓八拾錢　小包送料一册拾五錢宛

全部六册　正價金拾圓　全部小包料金八拾錢

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し、奇思縱横字々靈快を極めざるなし。嘗て文壇革新の急先鋒となりて硯友社を創め、俊群英を養ふ、藻社の名一世を壓す。山人が明治文學に寄與するの勢天下の齊しく知る所にして、仰いで以て泰斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文壇頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし、則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を營み、凡そ山人が述作に係るものは、其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完璧と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寶の散りて點數せるは綴れて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、其作年の順を追ふて之を收め、謹みて江湖の文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

目次

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の一）

醫學博士井上通泰先生監修

家庭衛生叢書

全部十二冊洋裝菊判美本○正價一冊貳拾錢郵税六錢宛

第壹編

口繪　北里、長與、金杉、土肥の四博士（背像）

- ▲傳染病の話……北里博士
- ▲胃の攝生法……長與博士
- ▲眼科衛生談（第一）井上博士
- ▲血族結婚と聾啞との關係……金杉博士
- ▲淋疾と家庭……土肥博士

雜錄　患者を生じたる時の注意（第一次）

第貳編

口繪　宮本學士、木下博士（背像）

- ▲腸窒扶斯に就て……宮本學士
- ▲婦人の衛生一般……木下博士
- ▲婦人及小兒の眼の衛生……桐淵博士
- ▲眼科衛生談……井上博士

雜錄……七項

第參編

口繪　三輪、井上、緒方、富士川四博士（背像）

- ▲室內空氣に就て……緒方博士
- ▲眼科衛生談……井上博士
- ▲小兒科一般……三輪博士
- ▲小兒の衛生に就て……弘田博士
- ▲遺尿症に就て……朝倉博士

雜錄……六項

第四編

口繪　朝倉博士、井上博士（背像）

- ▲腸胃の話……井上博士
- ▲耳の攝生……岡田博士
- ▲乳兒の衛生に就て……緒方博士
- ▲狐憑とヒステリーとの關係……吳博士
- ▲眼鏡の話……井上博士

雜錄……六項

第五編

口繪　三輪博士、岡村博士（背像）

- ▲創傷の話……三輪博士
- ▲神經の攝生に就て……吳博士
- ▲ヂフテリアの話……宮本學士
- ▲皮膚の衛生に就て……岡村博士

雜錄＝法肺結核豫防……二件

第六編

口繪　大澤博士、三島博士（背像）

- ▲ペストの話……宮本學士
- ▲身心の養生……大澤博士
- ▲家庭にて注意すべき二三の學校衛生……三島博士
- ▲產時の創傷傳染……木下博士

雜錄＝肺結核雜話……十五件

第七編

口繪　遠山博士、筒井學士（背像）

- ▲黴毒に關する家庭の注意……筒井學士
- ▲家庭と黴菌……遠山博士
- ▲姙娠中の攝生……緒方博士
- ▲便秘の話……井上博士

雜錄＝花柳病の雜話……十八件

第八編

口繪　木村博士、緒方博七（背像）

- ▲婦人姙孕力の話……伊庭博士
- ▲肝臟の話……木村博士
- ▲分娩時の攝生……緒方博士
- ▲色盲の話……井上博士
- ▲小兒の身體上の監視井に感
- 胃の話……瀬川博士

雜錄＝（人工滋養品の話）

第九編

口繪　瀬川博士、伊庭博士（背像）

- ▲肺癆の話……井上博士
- ▲婦人姙孕力の話（第二）完……伊庭學士
- ▲小兒の虫及疳の話……瀬川博士
- ▲產後の攝生……緒方博士

雜錄……五項

第十編

口繪　林博士（背像）

- ▲飲酒血族の退化……林博士
- ▲不姙症の話……伊庭博士
- ▲生殖の話……大澤博士
- ▲消毒法の大意……遠山博士

雜錄……三項

東京　博文館　本町

（後付の三）

（後付の四）

醫學博士 瀨川昌耆君序文 千葉勝景君
醫學博士 遠山椿吉君題辭 鹿島櫻巷君 共編

家庭衞生訓

（三版）

全一册

洋裝並製菊半截
紙數三百七拾頁
正價參拾五錢郵稅六錢

米國醫學博士アイ、ピー、デーヴイス氏原著
海軍大軍醫 隱岐敬次郞君譯述

女子衞生學 附結婚論

全壹册洋裝袖珍上製
總クロース金文字入
約三百頁頗美本
正價卅錢郵稅六錢

女子衞生學は米國の大醫アイ、ピー、デーヴイス氏の著にして譯者米國漫遊の砌特に著者の委囑に依て譯述を約せしの珍書なり其說く所世の年少婦人特に妙齡の女學生の爲に懇切叮嚀を極め、片言隻句皆な衞生の原則、人道の眞理ならざるなし、且つ米日素と國俗風習を異にし女尊男卑の淵源たる米人の所說なるにも拘はらず或點までは主張の頗る孔孟主義（實に女大學）に近邇し又た文明の粹華を訓ふるに拘はらず反つて東洋の敎義に則とれるが如きは最も東西折衷主義を能く發揮して毫も餘蘊なしと謂ふべし尙附錄とする結婚論は文學家として有名なる英國のハーディー氏が世の靑年男女の爲めに書かれたる趣味豐多の珍書にして着眼の奇警なる將た觀察の妥當なる讀者をして不覺通讀の妙を得せしむ。

東京 博文館 本町

女學世界衛生顧問　糸左近君編

四季應用　通俗治療法

附　養生秘訣

醫者は病人に取つて命の親なり、救ひの神なり。其の病寃を退治して起死回生の効を奏し、垂死の病人を回復して三千世界に一つしかなき玉の緒を取り止むるものあり、世に神醫仁術の稱ある所以なるべし、さりながら、世間に神醫と稱するものは雨夜の星よりも尠くして難病危病に惱む人は恒河の砂よりも多し、この限りなき病人患者をして限りある神醫の方劑を仰がしめんこと無理の注文といふべし、況んや山間僻地に到つては一度の診察を請ひ、一服の藥を飲むすら容易の事にあらず、病人は手を空ふして病寃の横行するに任すのみ、是に於てか世に醫道の智識を必要とする所以なり著者糸左近氏は仁術に造詣深く、諸病の蘊奧を究めて洩らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して備さに治療の方針を說く、蓋し車輿を要せずして千里の遠きに趣き謝儀を求めずして萬病の適藥を授く其功德の大なる昔への耆婆扁鵲にも譲らずといふべし。

（再版）

全壹冊

洋裝四六判
紙敷四百餘頁
正價金貳拾八錢
郵稅六錢

發兌元　東京本町　博文館

治庖會第四教場主幹　龜井まき子女史著　（三版）

實用　家庭料理法

全一冊菊判美本
紙數二百三十頁
正價金參拾五錢
郵稅八錢

◎口繪極彩色貴婦人料理實習の圖　島崎柳塢君筆

目次概要

（一）料理の準備（二）臺所の經濟（三）調理場の構造（四）器具取扱法（五）魚鳥野菜の切方（六）飲食物の撰擇法（七）材料購入に際する鑑別法（八）主婦の注意（九）鹽梅加減の說明（十）料理の配合（十一）煮出汁の製法（十二）汁物の調理法（十三）煮物類の調理法（十四）燒物の調理法（十五）浸し物の調理法（十六）和へ物の調理法（十七）酢の物調理法（十八）刺身の作方（十九）蒸し物の調理法（廿）油揚物の調理法（廿一）寄せ物の調理法（廿二）きんとん類の調理法

（後付の六）

巖谷小波君著



全一册

四六判裝幀優美紙數約三百頁

正價六拾錢郵稅八錢

再版出來

『笑の國』は、文壇の笑上戶、兼ねて笑はせ上手なる例の小波山人が、輕快の筆と洒落の想とを以て新たに建設する所なり。我と笑はん人々は、疾く來つて笑へかし。夫れ天國は近づけり笑の國は開かれたり矣。

女子師範學校教授 近藤正一君著

佐方鎭子女史序文

女子職業案内

口繪＝女子職業圖（寫眞銅版畫四枚挿入）織田東禹君筆

全一册

洋裝三六判美本

紙數四百七十頁

正價四十五錢

郵稅六錢

目次

▲女子の生活 ▲女子の獨立 ▲女子の職業 ▲小學教員 ▲中學教員

▲家庭教師 ▲保姆 ▲女醫師 ▲女記者 ▲文學家

▲音樂家 ▲畫家 ▲寫眞師 ▲割烹教師 ▲挿花師範

▲茶道教師 ▲看護婦 ▲產婆 ▲通信事務員 ▲銀行事務員

▲電務課員 ▲商店員 ▲速記業 ▲謠曲師範 ▲編物教師

▲裁縫師 ▲繡工 ▲女工諸業 ▲電話交換手 以上

東京 博文館 本町

（後付の七）

（後付の入）

松原廿三階堂著

●女學生の栞

全壹冊大和綴極美本
正價卅五錢郵税六錢

四版

女學世界記者 中村鈴子女史著

極彩色 井筒姫の圖入（石版）

名流百家

家庭の模範

全一冊和裝
正價卅八錢
郵税六錢

權門	名士	武人	事業家
毛利公爵家	兒島惟謙氏	樺山大將	原六郎氏
谷子爵家	片山工學士	伊東大將	小山健三氏
加納子爵家	三宅文學博士	伊集院中將	某實業家
鍋島侯爵家	水野法學博士	黑木大將	片岡直輝氏
岡部子爵家	島田三郎氏	石本中將	佐々熊太郎氏
平田男爵家	山脇玄氏	出羽中將	中橋德五郎氏

方今社會の上中流に通じて其家政一般を見るに表面錦繡を飾りて裏面に糞土を包める如く破倫破德を行ふて醜然愧ざる人多し爲めに一家は惡魔の棲所となり風波絶ゆる時なく和氣靄然の家庭は全く其痕跡を失ふに至れり是れ一家の小にして實は國家の大に及ぼす利害ならずや女學世界記者中村鈴子女史久しく誌上に家庭訪問欄を擔任し數年名家を歴訪して其直話を世に紹介せり今本書に其模範となるべきもの數家を撰摘して一層世に益する所あらしむ權門有力者の家庭學者名士の家庭軍人實業家の家庭等其各家の主人に親接して實賤躬行の直話を寫與し温かき香ばしき家庭を作らんとするの良模範に資するなり諸子一本を備へて美質良風に涵養せらるべし

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館



玉磨かざれば光なし

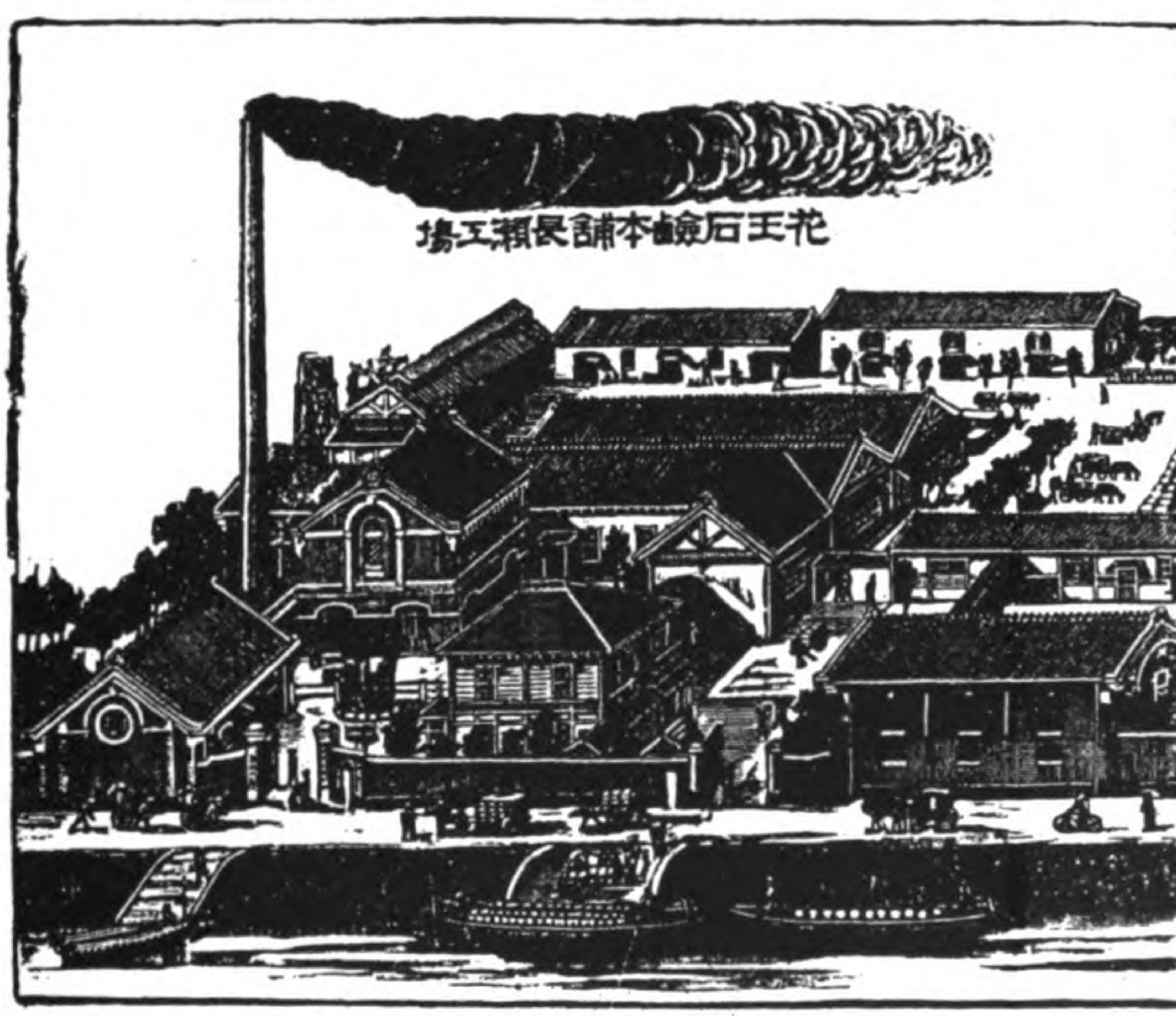
美人たらんと欲せば
有名なる美顔水を用ふべし



色を白くしきめをこまかにつやを出しうつくしくなる。殊に化粧に用ゆる時は、おしろいの毒のきらひにつき、むしろこれならず常に用ゆれば花の顔も雪の肌となり。真に玉を欺く美しき顔となるべし。

賣弘所は全國有名なる小間物化粧品賣薬店にあり

（明治卅九年十月五日發行 毎月一回五日發行）
第六卷第拾參號
（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）



（定價金貳拾錢）